鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　13

平成８年度発掘調査報告
（第２分冊）

平成９年３月

鎌倉市教育委員会

宇都宮辻子幕府跡

同上遺跡上方から若宮大路・鶴岡八幡宮をのぞむ

総　目　次

（第１分冊）

序文……Ⅲ
例言……Ⅳ
平成８年度調査の概観……Ⅸ

1　天神山城（No.384）山崎字宮廻760番地点
第一章　遺跡の概観 ……5
第１節　地理的環境 ……5
第２節　歴史的環境 ……5
第二章　調査概略 ……7
第１節　調査に至る経緯 ……7
第２節　方眼設定方法……7
第３節　調査経緯 ……9
第４節　堆積土層 ……9
第三章　検出遺構と出土遺物 ……13
第１節　近世 ……13
第２節　中世 ……16
第３節　平安時代 ……23
第４節　古墳時代前期 ……26
第５節　その他の出土遺物 ……28
第四章　まとめ ……32
2　若宮大路周辺遺跡群（No.242）御成町788番３外地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……53
第二章　調査の概要 ……56
１．調査の経過 ……56
２．調査方法 ……56
３．測量軸の設定 ……56
第三章　検出遺構と出土遺物 ……59
１．層序と生活面 ……59
２．出土遺物の概要 ……59
３．一面の遺構と遺物 ……60
４．二面の遺構と遺物 ……62
５．三面の遺構と遺物 ……74
第四章　まとめ ……79

3　極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目320番１地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……102
第二章　基本層序 ……102
第三章　検出遺構・遺物 ……104
第四章　まとめ ……111
4　台山遺跡（No.29）台字西ノ台1627番地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……126
第二章　調査の経過と堆積土層 ……128
第三章　検出された遺構と出土遺物 ……130
第四章　まとめ ……133
5　材木座町屋遺跡（No.261）材木座三丁目364番１外地点
第一章　調査地点概観 ……145
１．位置と地勢 ……145
２．歴史的環境 ……147
第二章　調査の概略 ……149
１．調査にいたる経緯 ……149
２．方眼設定方法 ……149
３　調査の概要と経過 ……150
第三章　調査結果 ……151
第１節　概要 ……151
１．層序と遺構面の概略 ……151
２．出土遺物の概要 ……151
第２節　検出遺構と出土遺物 ……151
１．井戸 ……151
２．竪穴建物 ……151
３．礫集中部 ……156
４．方形土壙 ……156
５．土壙 ……156
６．柱穴様小落ち込み ……166
７．包含層その他からの出土遺物 ……168
第四章　まとめ ……184
6　永福寺跡（No.61）二階堂字獅子舞603番１地点
第一章　調査の経過 ……204
第１節　遺跡の位置と歴史的環境 ……204
第２節　調査地の設定 ……206
第３節　層序 ……206
第二章　検出された遺構 ……206
第１面 ……206
第２面 ……207

第３面 ……207
第三章　出土した遺物 ……211
第１面 ……211
第２面 ……211
第３面 ……211
第四章　まとめ ……217

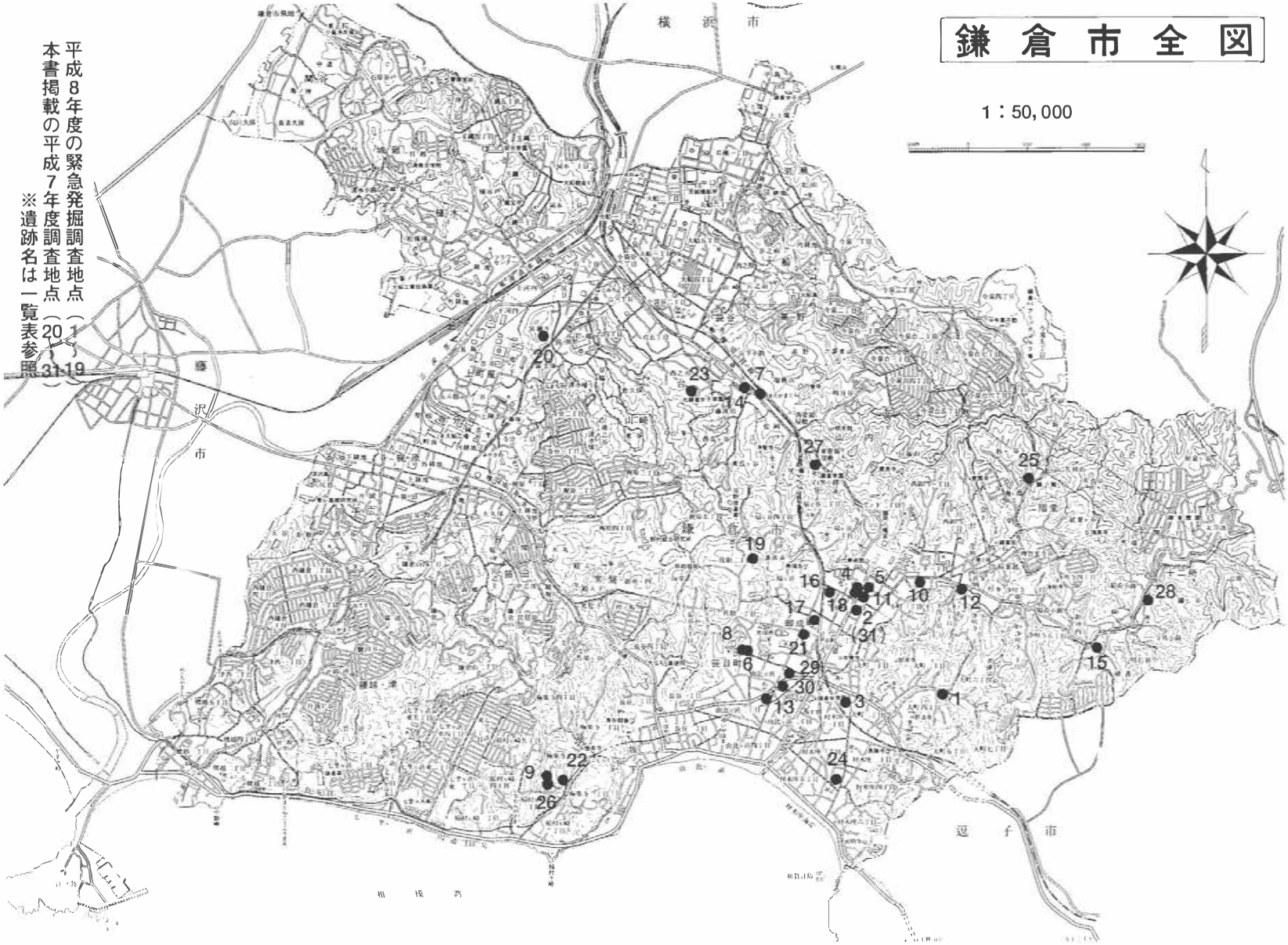
（第２分冊）

7　極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目355番３地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……6
第二章　検出遺構・出土遺物 ……9
第三章　調査所見 ……11
8　建長寺旧境内遺跡（No.397）山ノ内字白黒小路1489番１外地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……22
第二章　調査の経過 ……25
第三章　検出された遺構と遺物 ……26
第１節　試掘出土遺物 ……26
第２節　１．２次掘り下げ時出土遺物 ……26
第３節　１面検出の遺構と出土遺物 ……29
第４節　１面包含層出土遺物 ……33
第５節　２面検出の遺構と出土遺物 ……34
第６節　２面上包含層出土遺物 ……39
第７節　トレンチ調査 ……40
第四章　まとめ ……52
9　十二所稲荷小路遺跡（No.321）十二所字宇佐小路740番２外地点
第一章　地理的・歴史的環境 ……64
第二章　調査の概要 ……65
第三章　検出遺構 ……66
第四章　出土遺物 ……68
第五章　まとめ ……70
10　若宮大路周辺遺跡群（No.242）由比ガ浜一丁目118番７地点
第一章　遺跡の歴史・地理的環境 ……87
第二章　調査の経過と基本層序 ……89
Ⅰ　調査の経過 ……89
Ⅱ　基本層序 ……90
第三章　検出した遺構と出土した遺物 ……92
Ⅰ　方形竪穴建築址 ……92

Ⅱ　大形土壙状遺構 ……97
Ⅲ　土壙 ……101
Ⅳ　井戸址 ……110
Ⅴ　遺物包含層中出土遺物（中世） ……110
Ⅵ　遺物包含層中出土遺物（近・現代） ……113
Ⅶ　中世基盤層直上出土遺物 ……113
Ⅷ　表採遺物 ……113
Ⅸ　自然遺物 ……114
第四章　まとめ ……115
11　下馬周辺遺跡（No.200）由比ガ浜二丁目107番１地点
第一章　環境と立地 ……145
Ⅰ　歴史的環境 ……145
Ⅱ　地理的環境 ……147
第二章　調査の概要 ……149
Ⅰ　調査の経緯と経過 ……149
Ⅱ　調査の方法 ……149
Ⅲ　調査結果の概要 ……150
Ⅳ　堆積土層 ……150
第三章　検出された遺構と遺物 ……152
・１面の遺構と遺物 ……152
・２面の遺構と遺物 ……154
・３面の遺構と遺物 ……158
・土壙40構造部材計測表について ……166
・他遺構外等出土遺物 ……174
第四章　まとめ ……179
附　編　下馬周辺遺跡の花粉化石 ……180
12　宇津宮辻子幕府跡（No.239）小町二丁目361番１地点
第一章　調査地点概観 ……214
位置 ……214
歴史的環境について ……214
宇津宮辻子幕府跡の調査事例 ……215
第二章　調査の概要 ……217
調査経過とグリット設定 ……217
調査概要 ……217
第三章　検出した遺構・遺物 ……224
第四章　まとめ ……237
附　編　宇津宮辻子幕府跡の花粉化石 ……240

鎌倉市全図

1：50,000



平成8年度の緊急発掘調査地点（1～19）
本書掲載の平成7年度調査地点（20～31）
※遺跡名は一覧表参照

極楽寺旧境内遺跡（No. 291）

ごくらくじきゅうけいだいいせき

極楽寺三丁目355番３地点

例　　言

1．本書は、極楽寺旧境内遺跡内の鎌倉市極楽寺三丁目355番３地点に於ける緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、自己用住宅に係る車庫造成範囲30㎡を対象とし、平成７年７月19日～８月２日にかけて鎌倉市教育委員会によって実施された。

3．報告書作成メンバーと担当分野は以下のとおりである。

・原稿執筆：田代郁夫

・資料整理・図版作成：大坪聖子、深尾義子、小西さつき、鈴木真由美、辻由美子、佐藤慈子、笠原さやか、西井末子、山田純子

・遺物写真撮影：上田求実、笠原さやか

・編　集：継　実

5．調査体制は以下のとおりである。

・調査主体：鎌倉市教育委員会

・主任調査員：田代郁夫

・調査員：浜野洋一、遠藤雅一

・調査補助員：上田求実、島尾　幸、武田典子、青木綾子、石井ちづ子、蒲谷由利子、成田サキ

6．出土遺物は、鎌倉市教育委員会が保管している。

凡　　例

・各図面の縮尺は次のとおりである。

遺跡位置図（１）：１／2,500

遺跡位置図（２）：１／250

遺構全図：１／60

遺物実測図：１／３

・各遺構図中のレベル数値はすべて海抜高である。

本　文　目　次

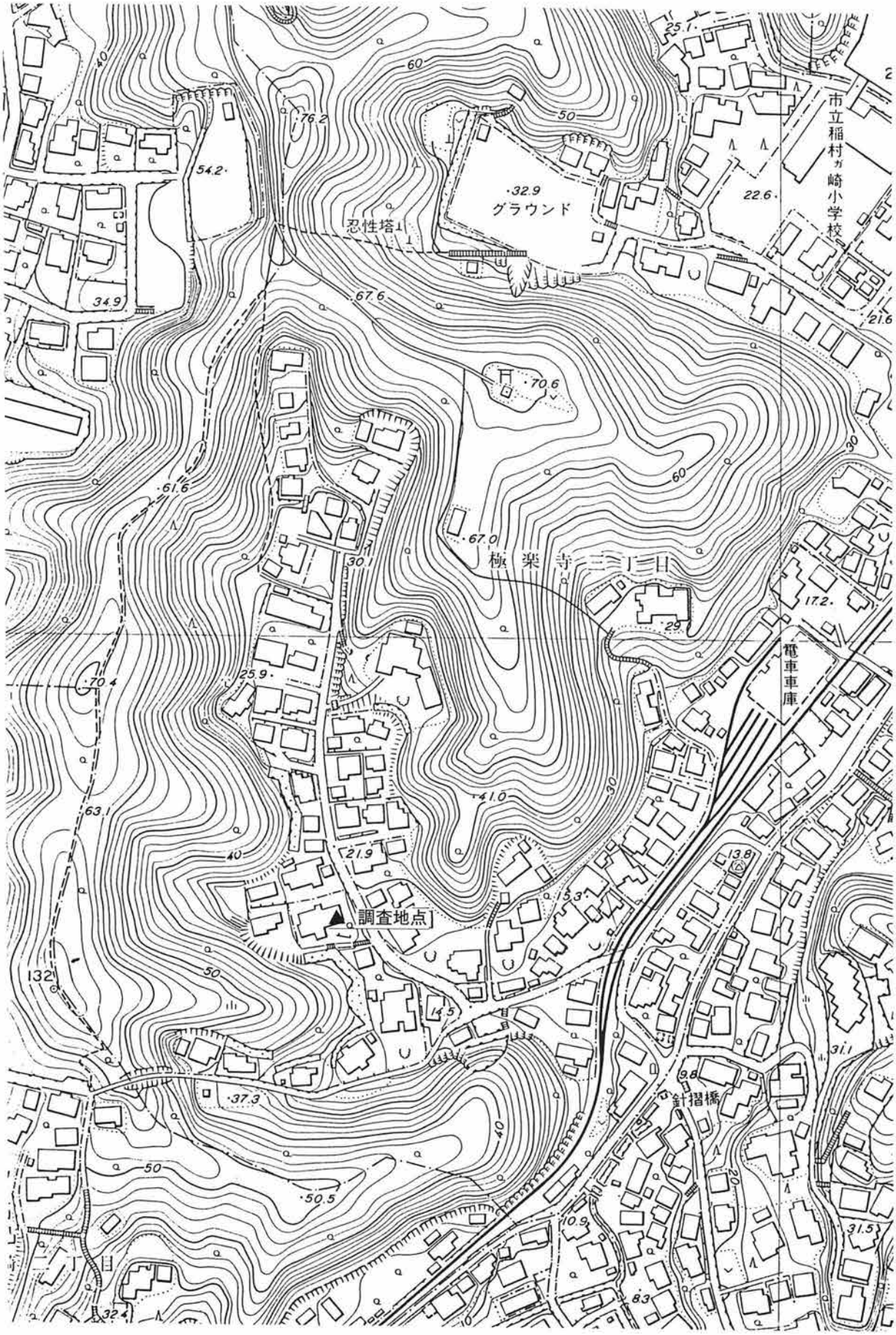
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……6
第二章　検出遺構・出土遺物……9
第三章　調査所見……11

挿　図　目　次

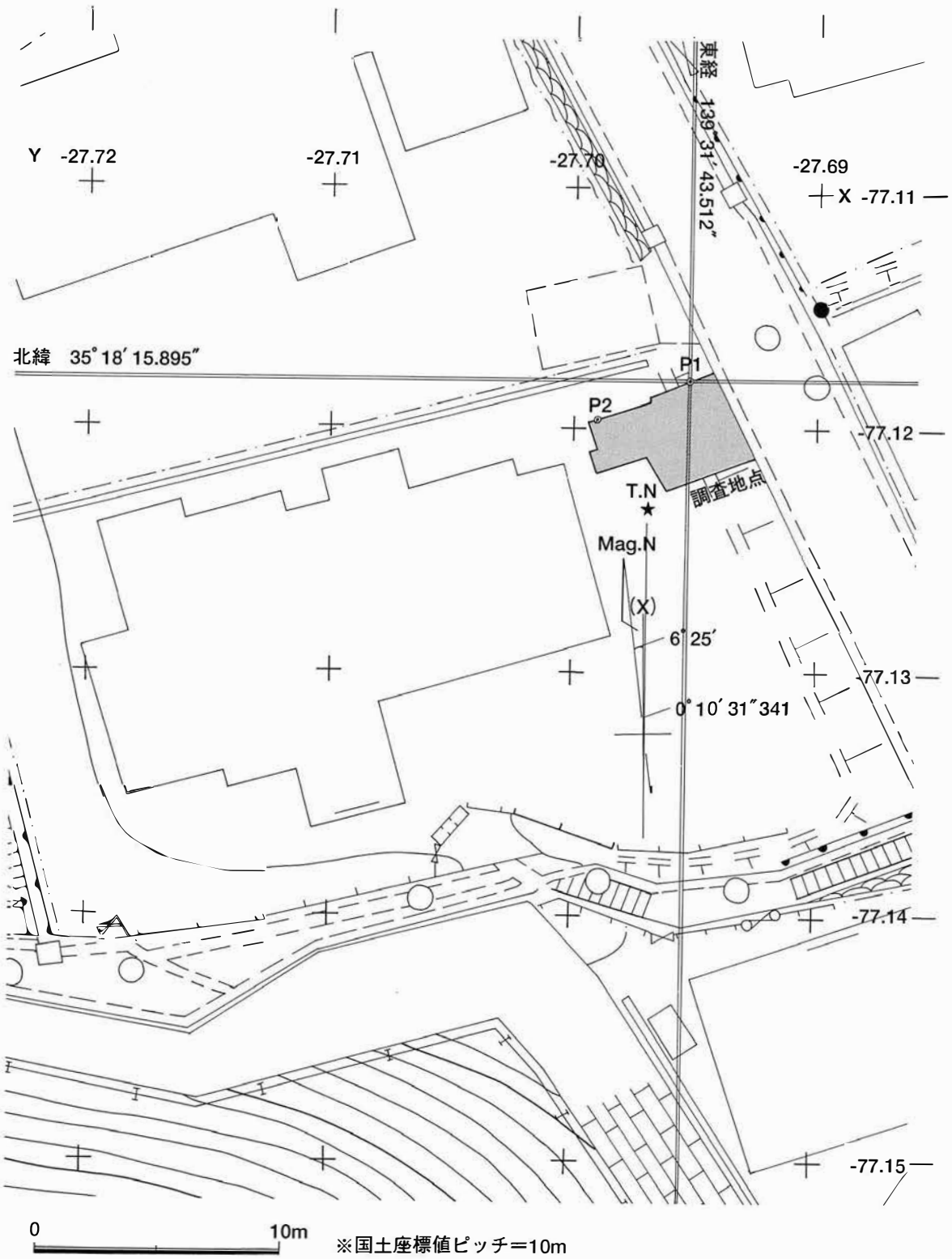
第１図　遺跡位置図（１）……4
第２図　遺跡位置図（２）……5
第３図　極楽寺境内絵図……7
第４図　遺構全図……8
第５図　出土遺物……10

図　版　目　次

図版１　調査地点、調査区全景、地業面検出状況……14
図版２　土層堆積状 況、地業面上に敷かれた常滑片……15
図版３　出土遺物……16



第１図　遺跡位置図（１）



各点の地理的位置一覧表(座標系AREA9)

点名	X座標	Y座標	緯度	経度
P 1	X-77118.466	Y-27695.151	+35°18′15.895″	+139°31′43.512″
P 2	X-77119.941	Y-27699.134	---	---

第２図　遺跡位置図（２）

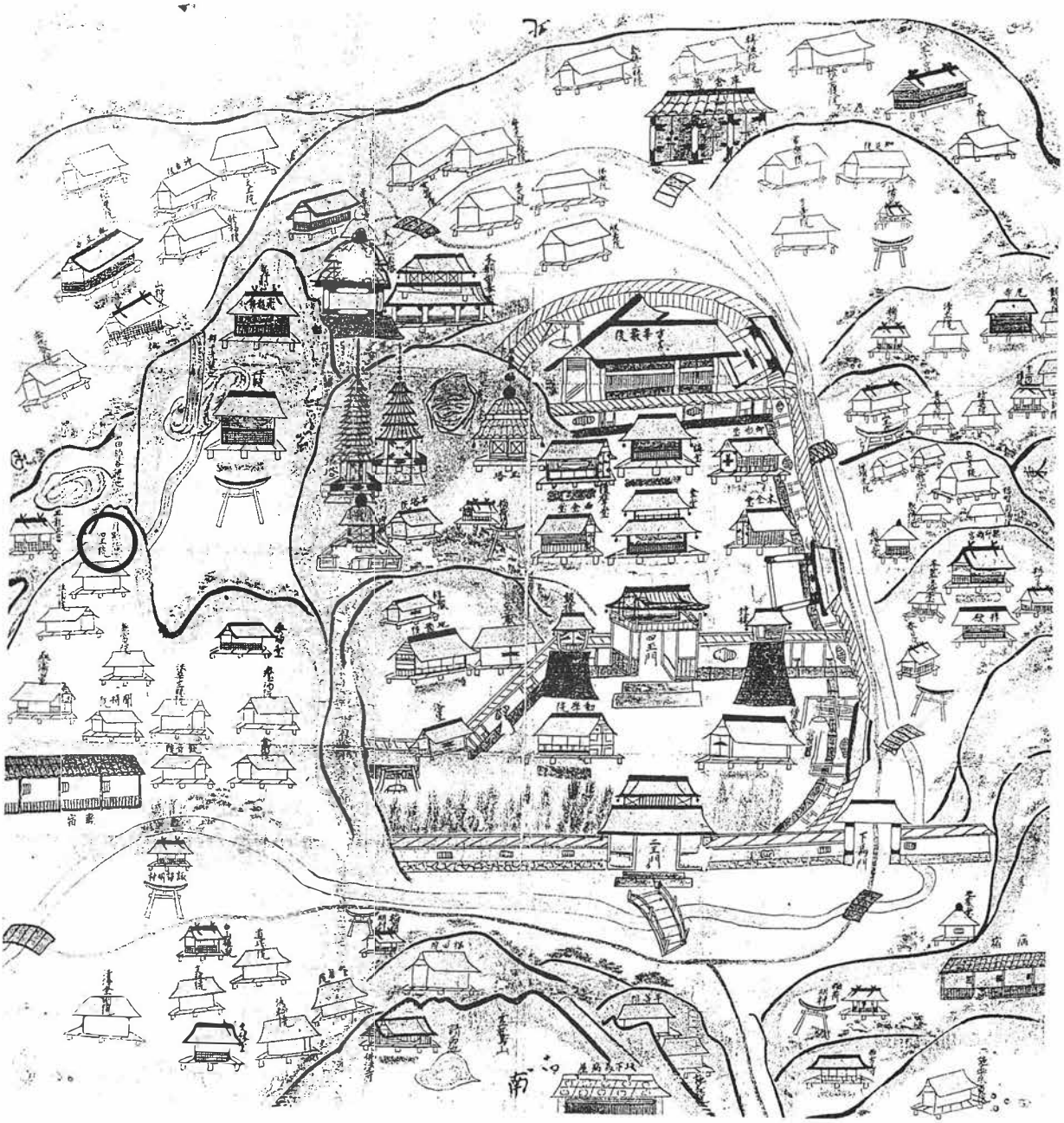
第一章　遺跡の位置と歴史的環境

極楽寺旧境内遺跡は、江ノ島電鉄極楽寺駅から南西方向300mのところに位置する（第1図）。地番は鎌倉市極楽寺3丁目355番3。調査地点は現在の極楽寺の南側丘陵をひとつ隔てた月影ヶ谷と呼ばれる南向きに開口する谷戸内の沖積地上に立地する。谷戸内の崖面にはやぐらの存在が確認されている。

極楽寺は霊鷲山感応院極楽寺と号し、真言律宗奈良西大寺の末寺である。開山は忍性、開基は北条重時である。「極楽寺縁起」によれば、正元元年（1259）、北条重時が良観上人忍性に従来一老僧によって営まれていた極楽寺という小寺を大寺に変えて、律院とするのに相応しい場所について諮ったところ、忍性は当時、地獄谷と呼ばれていた現在の境内地一帯を指したといわれている。「忍性菩薩行状略頌」には忍性は文永四年（1267）八月に極楽寺に入寺したとあり、この年に伽藍が落成したものと思われる。発願者の北条重時は弘長元年（1261）忍性の入寺を見ることなく歿している。文永四年以降、飛躍的な成長を遂げた極楽寺は元弘三年（1333）北条氏の滅亡により有力な後盾を失い、元亀3年（1572）には火災により講堂他3塔頭を残して焼失し、明暦年間には残った講堂を本堂に、仏法寺を方丈として現在地に移した。

ところで、かつての境域には西方寺・仏法寺・真言院・興正寺・蓮華寺・尼寺・福田院・吉祥院・宝幢（塔）院・就学院・勧学院等の支院があったことが、境内古絵図等から推定されている。今回調査を実施した月影ヶ谷は、境内古絵図によれば最奥部に月影地蔵四王院、そしてその前面に法蔵院・無常院・薬湯寮などが建ち並んでいる谷戸である。

また、月影ヶ谷は、阿佛尼が住んだところといわれている。『十六夜日記』月影の谷には「あずまにて住むところは、月影の谷とぞ言ふなる。浦近き山もとにて、風いと荒し。山寺の傍なれば、のどかに、すごくて、浪の音、松の風絶えず。」とある。阿佛尼屋敷云々については、律宗に於ける尼寺の存在形態や歴史的意義との関連で議論されているところである。



第３図　極楽寺境内絵図（極楽寺蔵）

土層説明
*図中、スクリーン部分は土丹ブロック層である。
1～3：暗褐色粘質土。砂をやや多く、土丹粒を少量含む。しまりやや強。土丹粒の混入の多少で分層。
4　：暗褐色粘質土。3層に比べ、土丹粒大型化。
5～7：暗褐色粘質土。上層より色調暗い。しまりやや強。土丹粒の混入の多少で分層。
8．9：暗褐色粘質土。直径5cm程度の土丹ブロックを少量含む。含有量は8層の方がやや多し。しまりやや強
10：暗褐色粘質土。直径10cm程度の土丹ブロックをやや多く含む。しまりやや強。
11：暗褐色粘質土。土丹ブロックを殆ど含まない他は、10層と同じ。
12～17：暗褐色粘質土。地業層である。土丹ブロックを含む。各地業面共にしまりは堅固。
18～20：暗褐色粘質土。砂をやや多く、土丹粒を少量含む。しまりやや強。土丹粒の混入の多少で分層。

第4図　遺構全図

第二章　検出遺構・出土遺物

・検出遺構

現在の月影ヶ谷の入り口から谷奥に向かって走る道路の西側に接して調査区は設けられている。調査区東側は既に工事によって削り取られてしまっていた為、調査区壁で土層を観察するに留まったが、調査区西側はかろうじて残存しており、数枚からなる土丹版築地業層を平面的に検出した。120～130cmの表土層下に３層に分層できる耕作土が堆積し、その直下に土丹による版築地業面が検出された。この地業面は調査区西側では平坦であるが、東側は現在の道路方向に向かって急激な傾斜をもって下がる。地業面の平坦部東側際には、常滑の甕片が敷き詰められていた。この地業面と同様に、更に下層に検出された数枚の地業層は、いずれもこの第１地業層と同じ堆積状況であり、長期にわたって造成が繰り返された事が判明する。各土丹地業層の厚さは、30～40cmである。前記の理由によって、現在の道路境付近の状況は平面的には追及できなかったが、この土丹地業層の堆積状況から一定の空間の東側際にあたることは推測可能であろう。

・出土遺物

出土遺物は小片が多く、諸般の事情により層位的な取り上げもままならぬ状況下で、個々の生活面の年代を明確にすることができなかった。以下に図版に掲載したものについて詳述する。また、遺跡に於ける出土遺物のヴァリエーションと出土比率に関する簡単なグラフも掲示しておく。尚、法量、胎土などについては出土遺物観察表を参照されたい。

第５図－１～５はかわらけである。２は他に比べ時期的にやや降ると思われるが、基本的にはいずれも13世紀末～14世紀前半にかけての所産であろう。

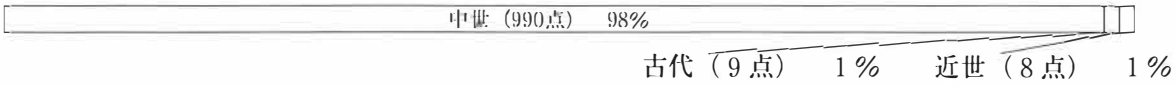
６～９は常滑の甕である。６、７は底部片であり、８、９は口縁部片である。８は中野編年８型式で、1350年～1400年にかけての生産年代が与えられるものである。９は中野編年５型式で、1220年～1250年にかけての生産年代が与えられるものである。

10、11は青磁碗片である。10は龍泉窯系青磁碗Ｉ５ｂ類である。13世紀中葉に出土量が増加する製品である。11は無文の碗である。

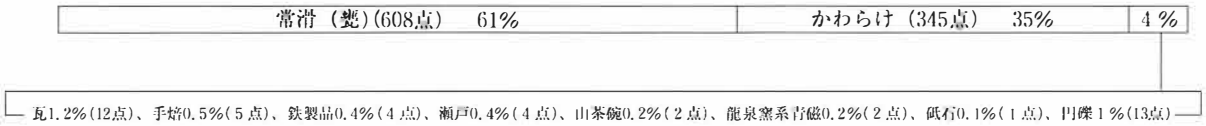
17、18は鉄釘である。19は砥石片。石質は流紋岩質凝灰岩。天草産の中砥である。

12～16は瓦で、12～14は平瓦、15、16は丸瓦である。瓦の胎土はいずれも色調灰白色、粘性の強いもので、小石、長石・石英粒子、砂粒などが多量に混入するもので、極楽寺瓦Ａ類に相当する。

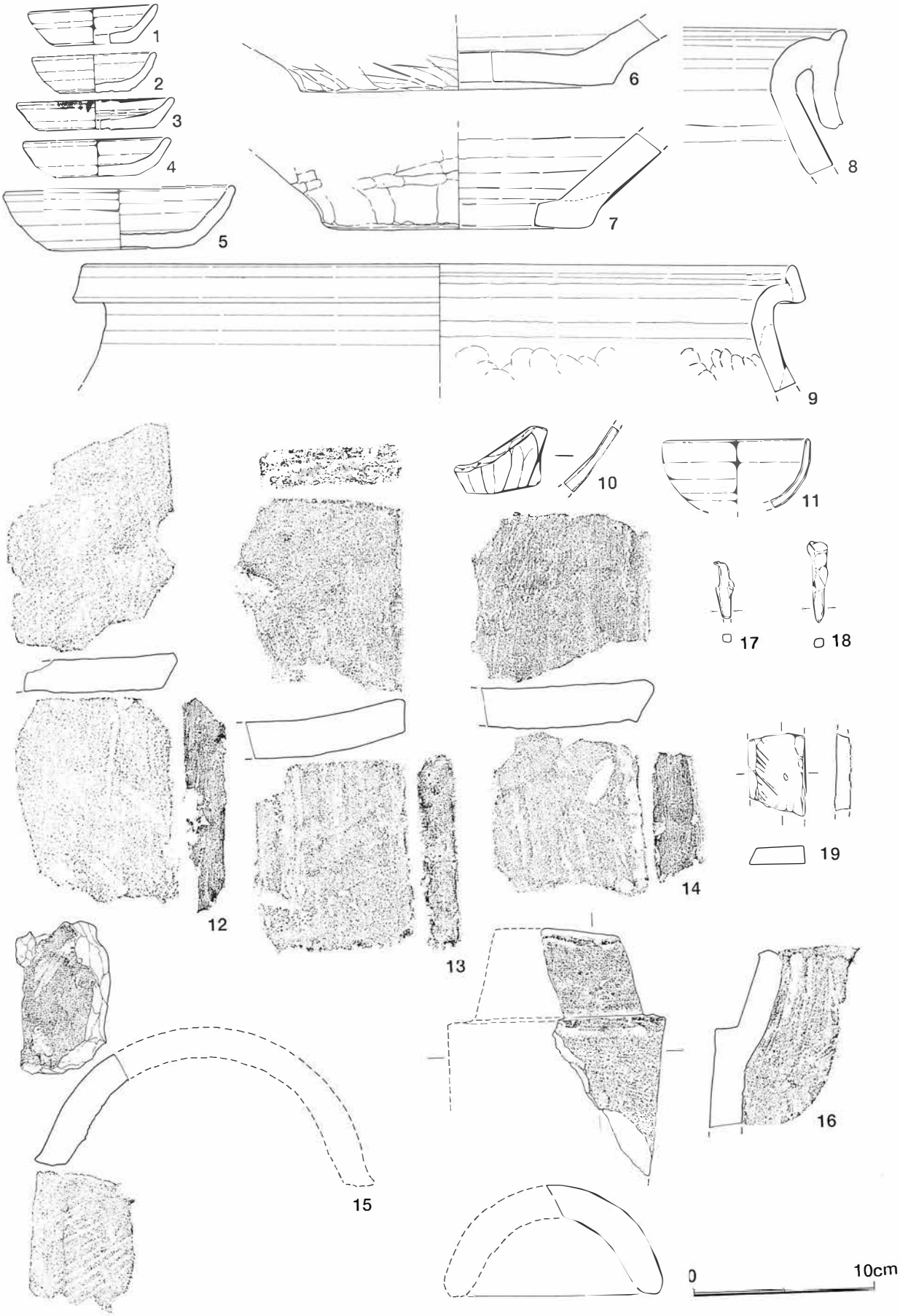
出土遺物時代別割合



中世遺物器種別割合



＊遺物点数の算出にあたっては、完形、破片の区別なく１個１点としてカウントした。



第5図　出土遺物

第三章　調査所見

調査区が狭く、しかも調査区の東側が工事によって既に破壊されていたため、土層の堆積状況の観察にウェイトを置かざるを得なかったが、次の事柄が明らかになったものと考える。

表土下の２・３層と土丹層との関連であるが、土丹層上層に一般的に堆積する中世期の遺物包含層というよりも近世以降の耕作土に近いものであり、第１土丹層直上まで削平された可能性が高い。常滑の甕片が敷き詰められた状態で良好に残存し、検出されているが、上層の土質を観察する限り、偶然、甕片の上でかつての堆積包含層が失われたものと考えたい。事実、常滑片は土丹地業層の平坦面の東側際では良好に残存しているが、調査区東側の前面に敷き詰められているわけではなく、まばらな部分も多く、上からの攪乱を受けているものと考える。

第１土丹面は平坦面の東側際でいったん傾斜し、再び60cmほど下段で平坦面を形成するが、これ以外の更に下層の土丹地業層はほぼ平均的に積み増しされている状況が看て取れる。その結果、東側の土地面積は必然的に減少することになるが、積み増しされた土砂は調査区西側の山裾崖面を造成した際の残土であろうから、結果的にはこれら土丹面上を利用した空間の規模は、さほど変化しなかったのではなかろうか。このことは各土丹地業層の厚さが平均的に30～50cmほどで一定しており、この土地の空間利用の歴史の中で、隔絶した大規模造成のなかったことを示していることからも推測されよう。土丹地業層の堆積状況が、いずれも土地空間の東側限界の様相を示しており、このことは現在の道路のラインが古くからこの土地の東側限界として存在していた可能性を示唆するものである。

遺物は各土丹地業層から都合よく出土してくれなかったが、出土遺物の全体を通観すれば、13世紀の中葉から14世紀の後半にかけての約100年間に亘る時期のものが出土している。

これほど狭い調査区から谷戸の景観を云々するのは、誠に危険この上ないが、今後のこの地域の調査の参考にでもなればと敢えて述べるならば、谷戸のほぼ中央に道路と溝が走り、その東西に土丹による版築地業面によって雛壇状に建物空間が形成されていたものではなかろうか。

出土遺物観察表

図版No.	種　別	法量（cm）　＊カッコ付は復元値	備　考
1	かわらけ	口径(7.2)　底径(4.2)　器高2.0	1 4個体
2	かわらけ	口径(6.8)　底径(4.0)　器高2.0	1 3個体
3	かわらけ	口径(8.6)　底径(6.2)　器高1.6	1 3個体　口唇部に煤付着（灯明皿）
4	かわらけ	口径(8.2)　底径(4.4)　器高2.1	1 3個体
5	かわらけ	口径(14.8)　底径(8.0)　器高3.4	1 4個体
6	常滑　甕	底径(17.6)	底部破片
7	常滑　甕	底径(14.8)	底部破片
8	常滑　甕	不明	口縁部破片　中野８型式
9	常滑　甕	口径(39.0)	口縁部破片　中野５型式
10	青磁　碗	口径(8.0)	体部破片　龍泉窯系蓮弁碗Ⅰ－５－ｂ類
11	青磁　碗	不明	体部破片　無文
12	平瓦	不明	破片　Ａ種　Ⅱ類
13	平瓦	不明	破片　Ａ種　Ⅱ類
14	平瓦	不明	破片　Ａ種　Ⅱ類
15	丸瓦	推定外径約18cm	破片　Ａ種　Ⅰ類
16	丸瓦	推定外径約12cm	破片　Ａ種　Ⅱ類
17	鉄釘	断面方形	先端部欠損
18	鉄釘	断面方形　頭部折り曲げ	先端部欠損
19	砥石	横幅３cm　厚さ0.8cm	破片　石材：流紋岩質凝灰岩　産地：天草

＊青磁碗は森田勉氏による消費地編年（註１）を参考資料として提示した

＊常滑窯製品は中野晴久氏による生産地編年（註２）を参考資料として提示した

＊瓦の分類は、極楽寺旧境内遺跡（註３）に於ける木村美代治氏（鎌倉考古学研究所）による分類に基づく

＊砥石の石材・産地同定は汐見一夫氏（鎌倉考古学研究所）による

（註１）森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集４』1981

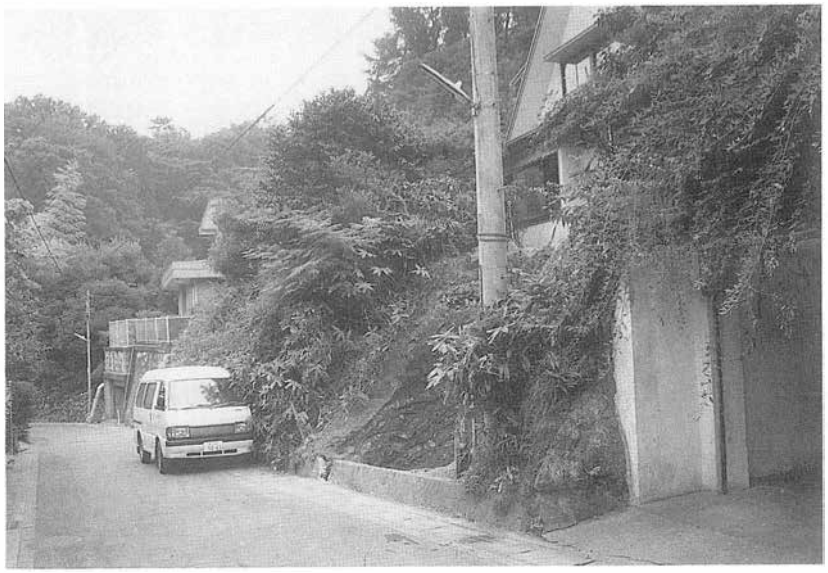
（註２）中野晴久「赤羽・中野「生産地における編年について」」『全国シンポジウム「常滑焼をおって」』発表資料1994

（註３）極楽寺旧境内遺跡　1980　極楽寺旧境内遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会

写　真　図　版

図版1

▶調査地点



▶調査区全景

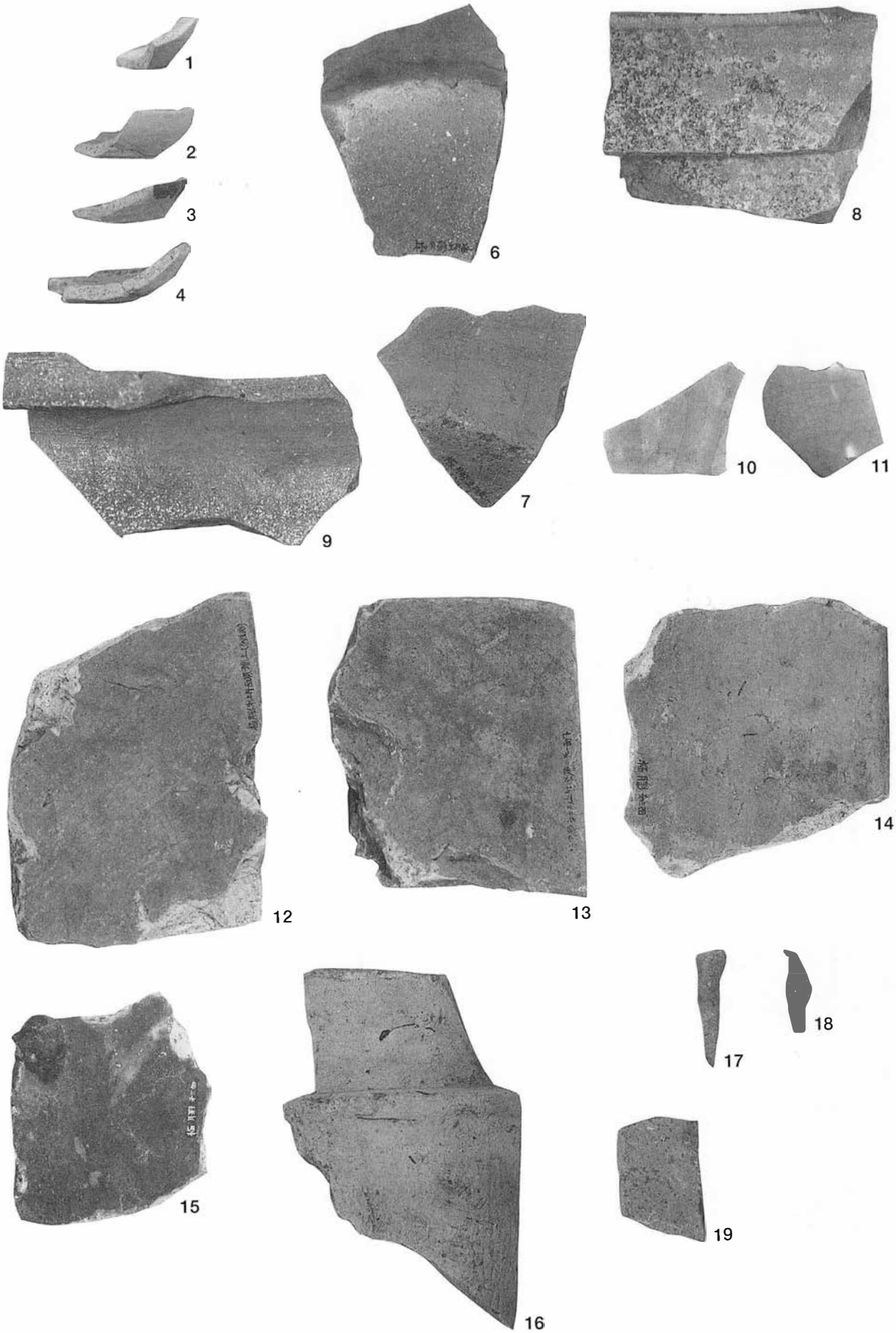
▶地業面検出状況

◀土層堆積状況

◀土層堆積状況

◀地業面上に敷かれた常滑片

図版3



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	継　実
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ごくらくじ きゅうけいだいいせき 極楽寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺三丁目355番3		No.291	35° 18′ 15″	139° 31′ 43″	H.7. 7月19日 ～ 8月2日	30㎡	自己用住宅に係る車庫造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
極楽寺旧境内遺跡	寺院址	奈良・平安 ～ 鎌倉時代	中世地業面	古代・土師・須恵 中世・かわらけ 常滑 瓦	月影ヶ谷内における中世(極楽寺最盛期)地業の検出

建長寺旧境内遺跡（No.397）

けんちょうじきゅうけいだいいせき

山ノ内字白黒小路1489番１外地点

例　　言

1．本報は鎌倉市山ノ内字白黒小路1489番１外地点における住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成７年７月20日から９月13日である。

3．本報の執筆・編集は野本が行った。資料整理作業は調査員、調査補助員と杉山友紀が行った。

4．本報に使用した写真は遺構を手塚・川又・野本が、遺物を野本が撮影した。

5．調査体制

担　当　者　手塚直樹

調　査　員　野本賢二、小柳津シゲ子

調査補助員　川又隆央、山崎理香、真中泰行、田畑衣理

作　業　員　長島三男、簑田孝善、渡辺久夫、田口　豊、田代　昭、池田義春、高井富三

協力機関　㈱鎌倉市シルバー人材センター、㈱斉藤建設

6．本調査で使用した調査グリット設定に際し、汐見一夫、渡辺美佐子の協力を受けた。

7．本遺跡に関する発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境……22
第二章　調査の経過……25
第三章　検出された遺構と遺物……26
第１節　試掘出土遺物……26
第２節　１・２次掘り下げ時出土遺物……26
第３節　１面検出の遺構と出土遺物……29
第４節　１面包含層出土遺物……33
第５節　２面検出の遺構と出土遺物……34
第６節　２面上包含層出土遺物……39
第７節　トレンチ調査……40
第四章　まとめ……52

挿　図　目　次

図１　遺跡の位置と周辺……23
図２　グリット設定図……25
図３　試掘出土遺物……26
図４　１・２次掘り下げ時出土遺物（１）……27
図５　１・２次掘り下げ時出土遺物（２）……28
図６　１面遺構平面図……30
図７　１面遺構断面図……31
図８　１面遺構出土遺物……32
図９　１面かわらけ溜出土遺物……32
図10　１面包含層出土遺物……33
図11　２面遺構平面図……35
図12　２面遺構土層図・断面図……36
図13　２面包含層及び遺構出土遺物……39
図14　トレンチ設定図……40
図15　Ａトレンチ出土遺物……41
図16　Ｂ・Ｃトレンチ出土遺物……42
図17　調査区及びトレンチ壁土層図（１）……43

表　目　次

表１　１面ピット観察表……31
表２　２面ピット観察表……37
表３　出土遺物観察表〈１〉……45
表４　出土遺物観察表〈２〉……46
表５　出土遺物観察表〈３〉……47
表６　出土遺物観察表〈４〉……48
表７　出土遺物観察表〈５〉……49
表８　出土遺物観察表〈６〉……50
表９　出土遺物観察表〈７〉……51

写真図版目次

図版１－１……55
図版１－２……55
図版１－３……55
図版２－１……56
図版２－２……56
図版３　遺物……57

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

鎌倉市山ノ内は平安時代後期、源義家の家人首藤資通（すどうすけみち）の孫、俊通が開発領主とみられる山ノ内荘の一部であった。その後、源頼朝は石橋山合戦時、敵対関係にあった俊通の子、山内経俊から治承４年（1180)、山ノ内荘を召上げている。建保元年（1213）幕府は和田の乱での義盛追討の功から北条義時にこの地を与えた。これにより山ノ内は北条氏の私領となり、“鎌倉”の外であったこの地が実質的に鎌倉の内に組み込まれていった。山ノ内の鎌倉街道（山内道）沿い及びその周辺には多くの寺院（建長寺・円覚寺・浄智寺・東慶寺・明月院・常楽寺他）が現在も存在する。そのほとんどが臨済宗寺院で占められている。往時はこれより多くもの寺院が存在したことが絵図、文献から窺われる。

本調査地点は、鎌倉街道沿い、建長寺門前から約300m北上した西側、山ノ内字白黒（シラクロ）小路1489番１外地点に所在する（白黒の語源は山内資藤氏の家紋が由来という説がある)。延宝６年（1678）作成の「建長寺境内絵図」によると旧境内は現在の境内域および、北西はＪＲ横須賀線・明月院踏切あたりから南東は巨福呂坂新道の北（円応寺）あたりまでである。絵図を見ると、往時には末寺・塔頭が存在していたらしい。この絵図から、本調査地点のあたりは霊光庵跡（四十九院内）と考えられる。

霊光庵に関する記事は唯一『鎌倉五山記』にみえる。記事を抜粋してみると、

「霊光庵　大円禅師、諱覚円。号鏡堂、嗣法環渓、西蜀人也、弘安二年来聴、当山七世、〃寿六十三、徳治元年丙午九月廿六日示寂、辞世曰、甲六十三、無法為（與）人説、任運自去来、天上只一月、洞照客殿　建仁瑞光庵ト同」

とあり、建長寺第七世住持鏡堂覚円（大円禅師）の塔所ということがわかる。

鏡堂覚円は1244年に中国で生まれ、明州天童山の環渓惟一に学んでその法を嗣ぎ、弘安二年（1279）無学祖元とともに来日。禅興寺・浄智寺に住したあと、円覚寺第三世、建長寺第七世の住持となった。正安二年（1300）には京都建仁寺第十六世住持に迎えられ、徳治元年（1306）に建仁寺で亡くなっている。

霊光庵は鏡堂覚円の死後、徳治元年（1306）以降の建立と思われ、廃絶は延宝６年（1678）以前となる。文明２年（1470）の浄書といわれている『巨福山建長興国禅寺年中諷経并前住記』には９月26日の項に「大円禅師忌　霊光庵」とみえ、霊光庵にて経が読まれたことがわかる。

「建長寺境内絵図」には鎌倉街道沿いに所狭しに多くの末寺・塔頭が存在していたことが窺われる。鎌倉街道の西側、寺界西（明月院踏切東）から亀谷坂口までは東宗庵跡・傳衣庵跡・霊光庵跡・正本庵跡・長寿寺。亀谷坂口から寺界南（巨福呂坂新道北）まで大雄庵跡・梅州庵跡・同契庵跡・大智庵跡・大統庵跡・金龍庵跡。鎌倉街道東側には寺界西から寺界南まで正法院・徳泉寺跡・安国寺跡・岱雲庵跡・華蔵院跡・保寧寺・禅興庵跡・龍興院跡・建初庵跡・龍州庵跡、建長寺表門を過ぎて地蔵堂跡、廣厳庵跡がみえる。このうち、保寧寺跡（図１－２）で発掘調査がおこなわれた。遺構（15世紀）からは寺院址を推定することはできなかったが、天目茶碗・瓦質香炉・青磁等の遺物(14世紀後半～15世紀後半)から寺院址を想定することができた。

発掘調査はこのほか現在の境内〔庫裏（４）・西来庵（５）・傳芳庵跡（６)〕と鎌倉学園体育館用地〔玉雲庵跡（３)〕で行われている。

庫裏では建物の床面に切石を斜めに敷く「四半敷」が検出され、元弘元年（1331）に作成された「建長寺指図」の法堂に該当することがわかった。遺構は鎌倉時代後期から近世までの７期にわたる。西来

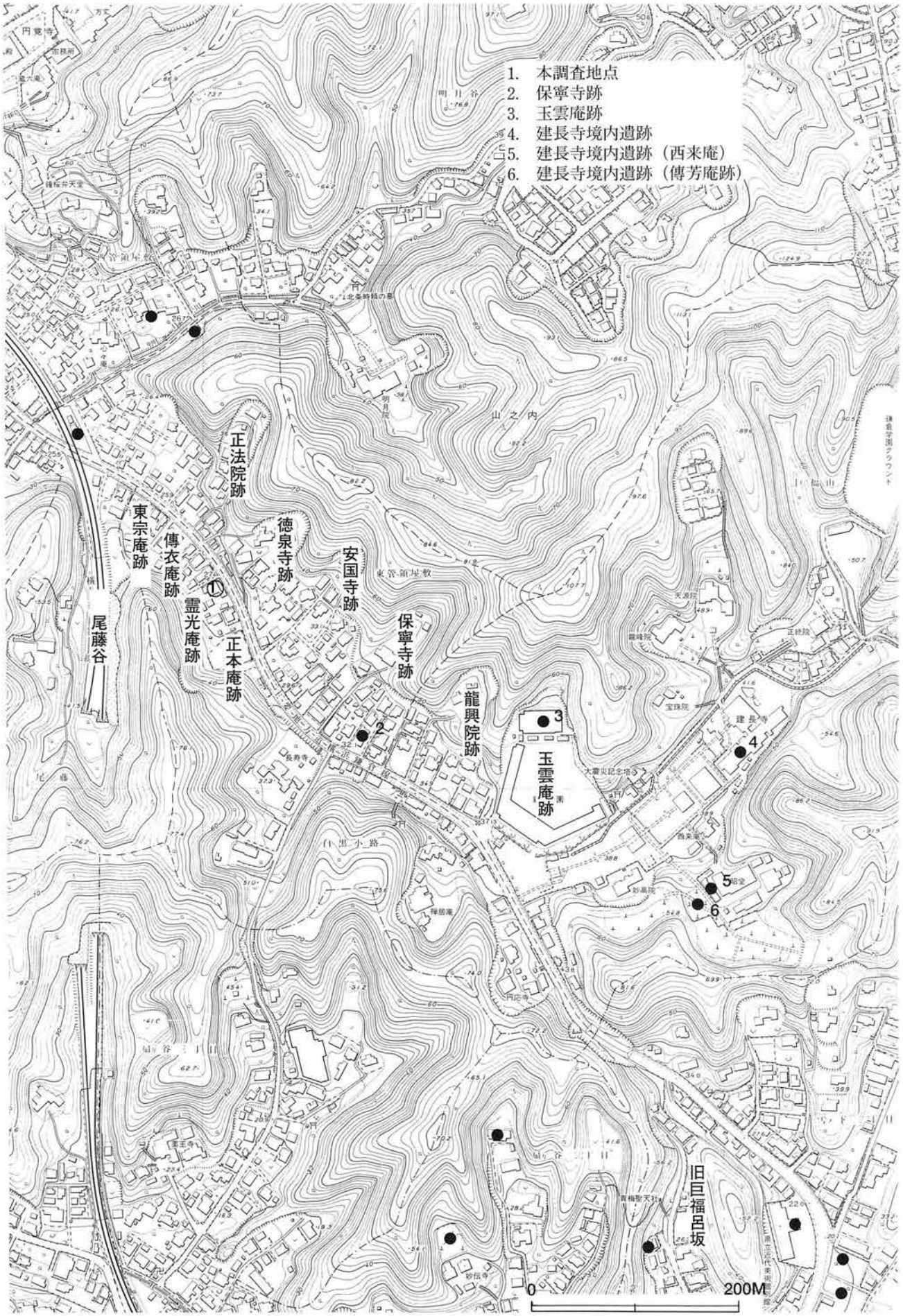


図１　調査地点及び周辺の遺跡

庵では鎌倉時代後期の瓦溜、南北朝時代後期の石垣もしくは築地塀基礎が検出され、傳芳庵跡ではやぐらと岩盤を削りだした基壇を検出している。鎌倉学園体育館用地は一山一寧の塔所玉雲庵跡であり、岩盤面上の建物や地下式壙、やぐら等の遺構と、底裏に「玉雲」と墨書されている天目茶碗、膨大な数の柿経等の遺物が出土している。以上、建長寺旧境内の調査結果を概観してきた。

今回の調査地点は緩やかな坂の途中にあり、現地表面は海抜約27.5mである。

《参考文献》

塙保己一編　1925年　「大圓禪師傳」『続群書類従・第九輯上　傳部』　続群書類従完成会

廬田伊人編　1952年　『新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』　大日本地誌大系21　雄山閣

廬田伊人編　1958年　『新編相模国風土記稿』第4巻　大日本地誌大系22　雄山閣

高柳光寿　1959年　『鎌倉市史』総説編　吉川弘文館

赤星直忠　1959年　『鎌倉市史』考古編　吉川弘文館

貫達人ほか　1959年　『鎌倉市史』社寺編　吉川弘文館

白井永二　1976年　『鎌倉事典』東京堂出版

三浦勝男ほか　1977年　『巨福山　建長寺』　大本山建長寺

田島光男　1980年　「鎌倉の廃寺に関する－史料－保寧寺－」『郷土神奈川』第11号　神奈川県立文化資料館

貫達人・川副武胤　1980年　『鎌倉廃寺事典』　有隣堂

鈴木裳三・鈴木良一　1984年　『神奈川県の地名』日本歴史地名大系14　平凡社

木村彦三郎　1991年　『鎌倉の社寺門前町』鎌倉近代史資料第五集　鎌倉市教育委員会・鎌倉中央図書館

河野真知郎ほか　1991年　『巨福山建長寺旧境内遺跡』建長寺境内遺跡発掘調査団

1991年　『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』神奈川県図書館協会

三浦勝男　1991年　『鎌倉志料』第一巻　鎌倉国宝館

三浦勝男　1992年　『鎌倉の古絵図Ⅰ』　鎌倉国宝館図録第十五集　鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

手塚直樹　1993年　「保寧寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9（第3分冊）』　鎌倉市教育委員会

手塚直樹　1993年　「建長寺境内（伝芳庵跡・西来庵）の調査」『第3回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』　鎌倉考古学研究所・中世都市研究同人会

西田宏子・手塚直樹ほか　1996年　『甦る鎌倉－遺跡発掘の成果と伝世の名品』　根津美術館

第二章　調査の経過

試掘調査（平成６年11月４日鎌倉市教育委員会実施）のデータに基づいて、翌平成７年７月20日から本調査が開始された。調査対象面積は107㎡。調査に先だって、現地表下約30cm下まで重機による表土掘削が行われた。調査深度は当初、現地表下120cm下であったが（試掘調査では岩盤の可能性という結果)、この面に達した時に泥岩による地業面ということがわかった。これを受けて面下の調査に移行するが、敷地内で処理していた廃土の置き場に限界が生じ、調査区内に廃土を置くこととなった。このことから、鎌倉市教育委員会の指示に従い、調査区壁（東・南・北）沿いに３本のトレンチ（図14）を設定した。調査は土層確認のあと終了となった。

調査にあたりグリッド設定の基準には国土座標値を有する鎌倉市４級基準点を使用した。

調査経過

７月20日　機材搬入
　22日　第１次掘り下げ
　28日　第２次掘り下げ
８月１日　第３次掘り下げ
　４日　第４次掘り下げ（１面）
　14日　１面遺構確認・掘り上げ
　16日　１面全景写真撮影
　17日　測量方眼の設定・１面平面実測
　21日　第５次掘り下げ（２面）
　22日　２面遺構確認・掘り上げ
　24日　２面全景写真撮影
　25日　２面平面実測
　29日　トレンチ設定・掘り下げ
９月９日　調査区及びトレンチ壁土層断面実測
　13日　撤収

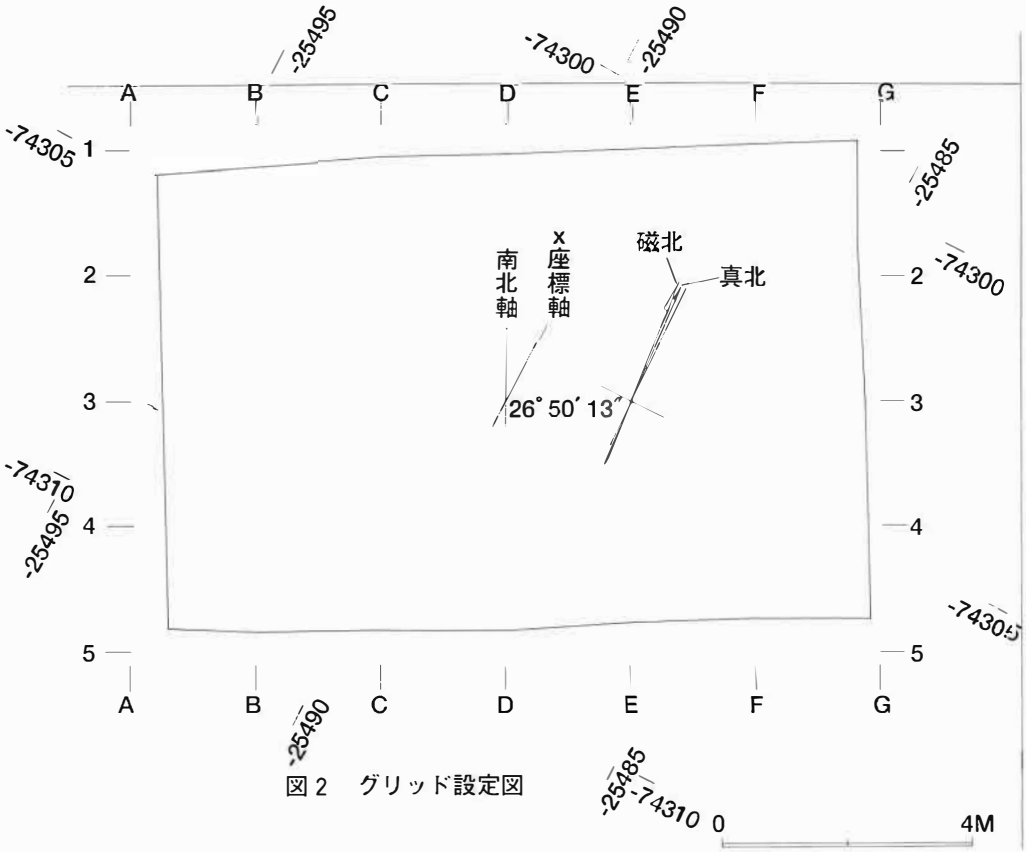


図２　グリッド設定図

第三章　検出された遺構と遺物

第１節　試掘出土遺物（図３）

平成６年11月に行われた試掘調査時の出土遺物である。層位は不明（２面より上）であるが残存率が高いのでここでとりあげる。１～３は瀬戸製品で１は皿、２は灰釉碗、３は盤（折縁）である。４は瓦質火鉢。５は安山岩製の茶臼の下臼残欠である。

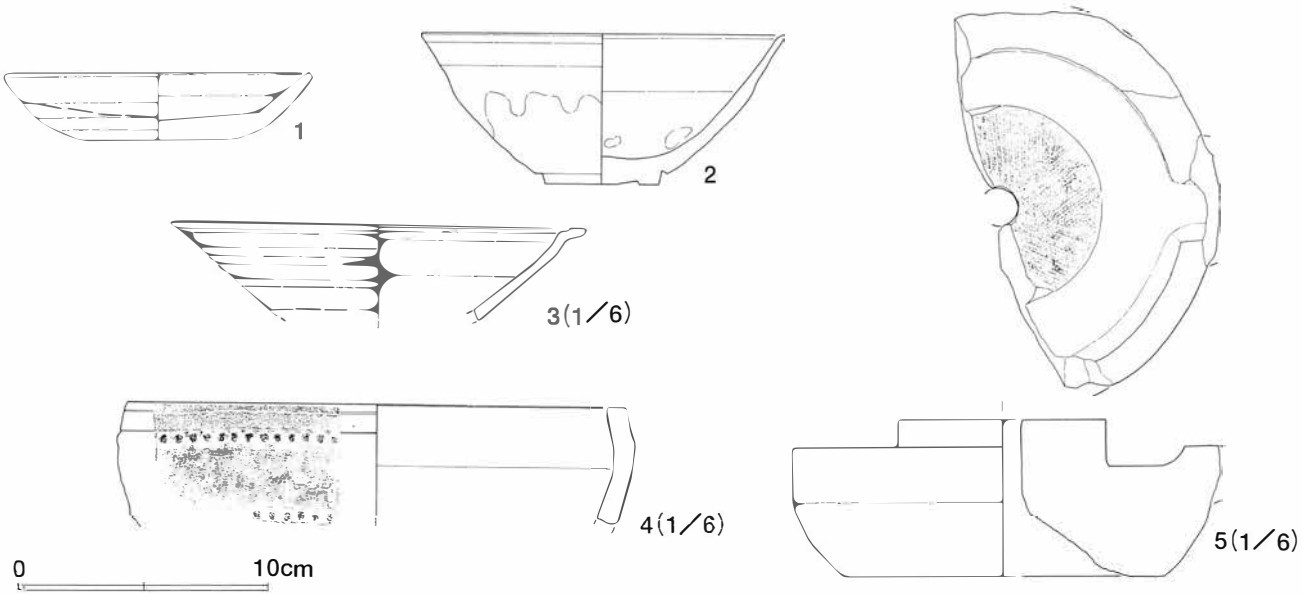


図３　試掘坑出土遺物

第２節　１・２次掘り下げ時出土遺物（図４・５）

調査は第４層から段階的に掘り下げていったが、第７層上の段階で調査区北（グリット１－Ｃ～１－Ｆ）破砕泥岩の地業面的なものが検出された（北壁第７ａ層）。また、調査区中央（グリット２・３－Ｄ・Ｅ）と調査区南西（グリット３・４～Ａ）あたりで薄い炭が若干広がっていた。このためこの高さで精査したが生活面として判断しかねる状態であった。

ここでこの段階までに出土した遺物を一括でとりあげる。６～８は近世期のもので、６は瀬戸美濃系の灯明皿受け皿（17世紀後～18世紀前）、７は瀬戸の徳利（18世紀後～19世紀中）、８は堺の擂鉢。９～20はかわらけ。口縁がわずかに外反するタイプがほとんどである。21はかわらけに２カ所内底から穿孔されている。22は手づくね成形の白かわらけで器厚は0.3cm。23～25は青磁で、23は盤、24は蓮弁文碗、25は鉢で外面の蓮弁は不鮮明である。26は白磁の碗で明代のものである。内底中央に文様（不明）を型押しをしている。27～49は瀬戸窯製品。27は蓋、28～33は縁釉皿、34～38は灰釉平碗。39は天目茶碗で黒釉の上に柿釉をかけている。40・41はおろし皿で、41の片口部は差し込みである。42～44は盤、45は行平鍋、46は小壺、47は袴腰形香炉、48・49は尊式仏花瓶である。50～55は常滑製品。50は広口壺、51～52は甕、53～55はこね鉢。56は備前窯の壺。備前窯製品は本調査地点ではこれと合わせて計３点だけしか出土していない。57は産地不明の瓦質こね鉢で擂り目はない。58・59は瓦質の火鉢。60～63は瓦質

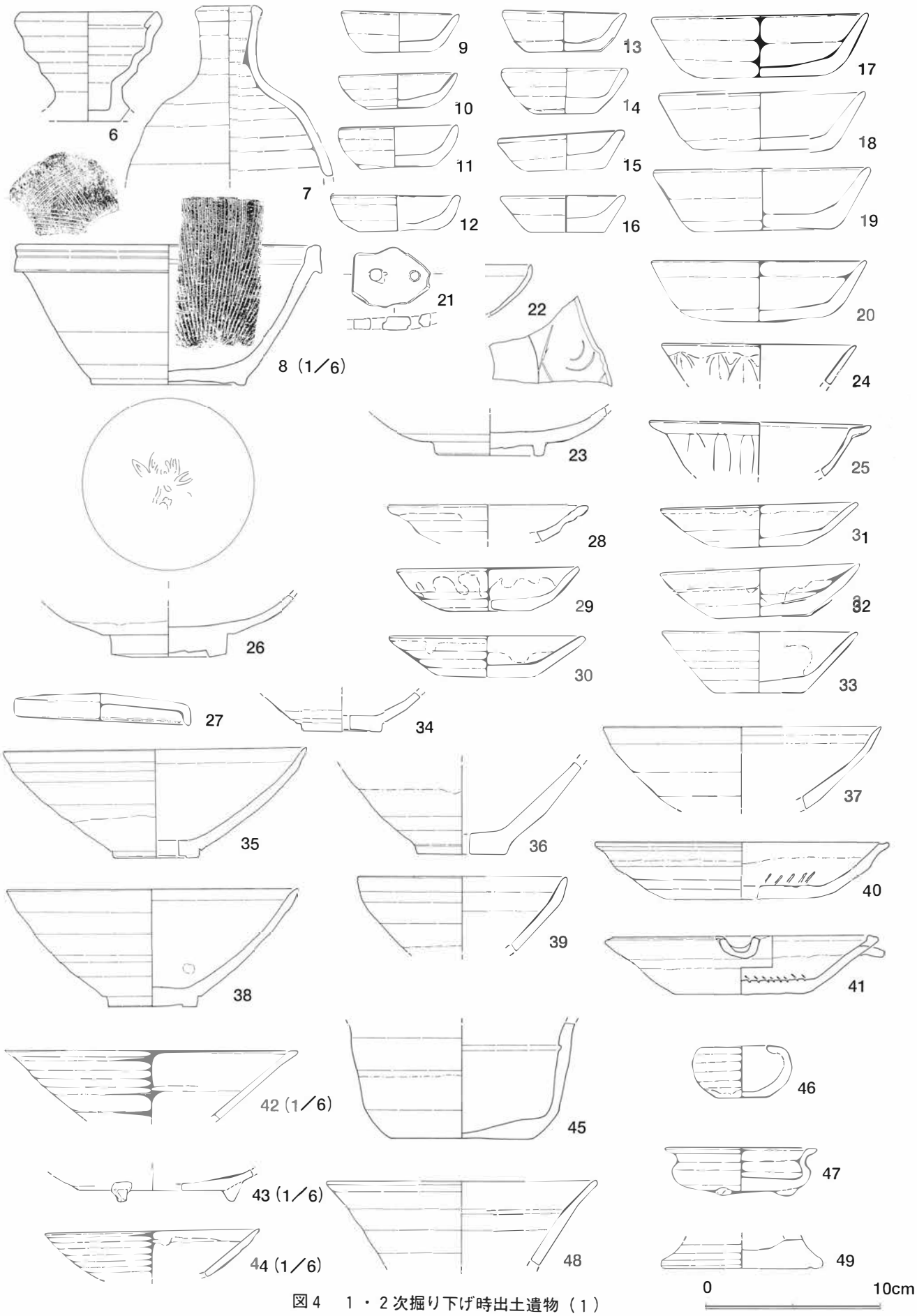


図４　１・２次掘り下げ時出土遺物（１）

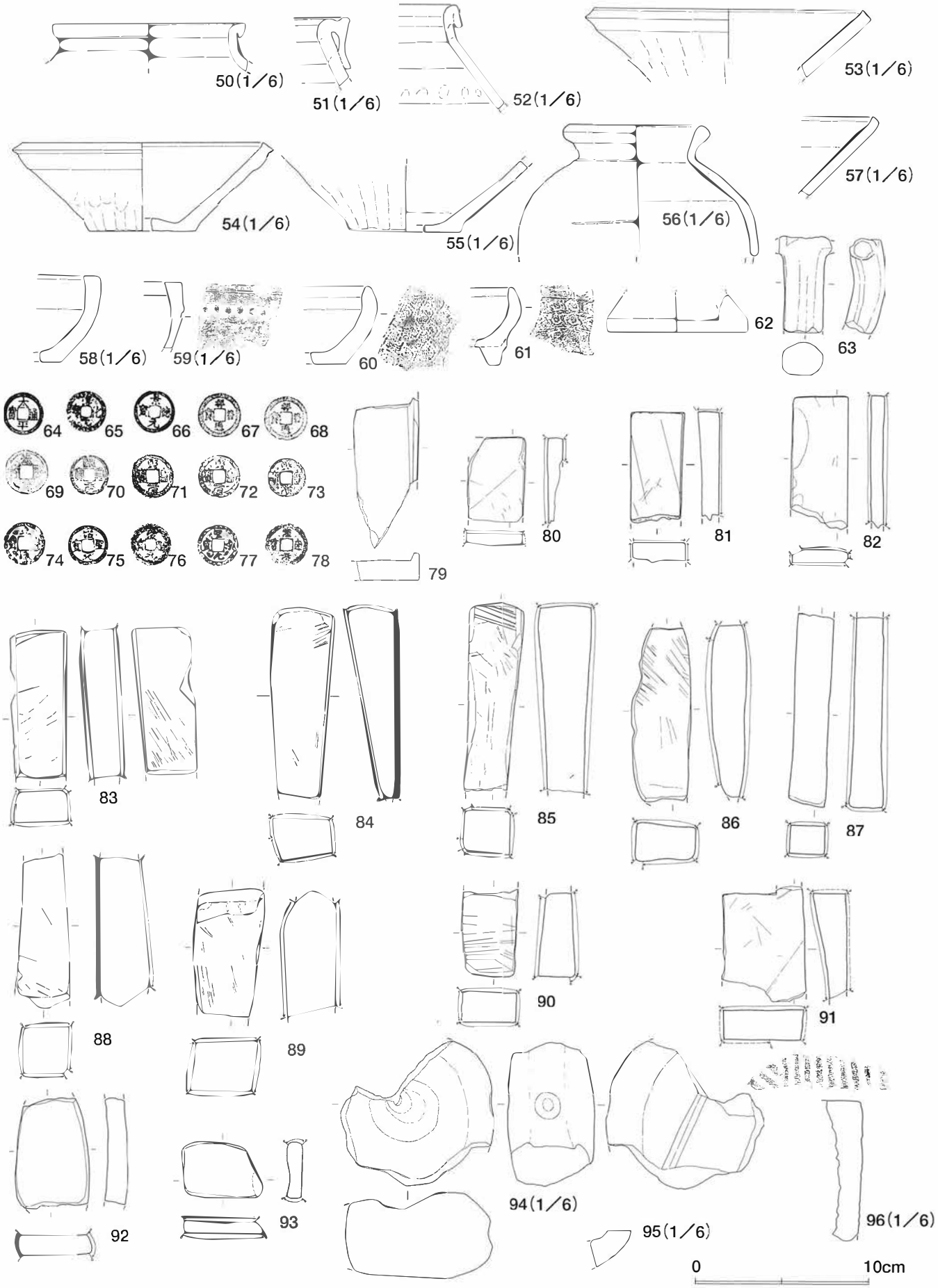


図5　1・2次掘り下げ時出土遺物（2）

製品で、60・61は香炉、62は花瓶、63は不明で全体わずかにに屈曲しT字型を呈する。64～78は銅銭で9種類27点出土している内の16点を掲げた。79は長方の硯で粘板岩製と思われる。80～91は砥石で、80～82は仕上げ砥、83～91は中砥である。92・93は常滑（甕）転用の砥石で92は割れ口、93は割れ口と平（内）面に擦り痕が認められる。94は片面中央と側面にくぼみがあり、もう片面には薬研状の刻みがある。全体に磨滅している。混入品の可能性あり。95は茶臼の下臼で受け皿の部分でる。96は粉挽き臼で上下どちらかは不明である。

第3節　1面検出の遺構と出土遺物（図6～9）

北壁第7層の高さから段階的に掘り下げたが生活面は検出されず調査は困難をきわめた、っこのため遺構確認を主眼におき。地表下約90cm前後のところで中世の遺構を確認することができた。これを便宜的に1面とした。この面で検出された遺構は方形土壙1基・土壙2基・溝状遺構1条・掘立柱建物1棟（柱穴8口）・ピット12口とかわらけ溜である。

方形土壙

調査区のほぼ中央に位置し、溝状遺構と土壙1を切る。東西辺約140cm、南北辺約160cmの方形を呈し、深さは確認面から約30cmである。遺構確認時、20～50cm大の泥岩塊が充填していた。遺構の性格は不明。南北軸線の方位はN－60°－E。

遺物はかわらけ12点、常滑・甕1点、瀬戸製品3点、木片1点が出土している。97・98はかわらけで97は口縁が外反気味に立ち上がり、98はやや内彎気味に立ち上がる。99は瓦質の風呂。100は瀬戸の尊式花瓶、101は瀬戸の灰釉の鉢で内底中央に四重円文を型押しし、高台内に風車状の刻みをいれている。

土壙1

方形土壙の西に位置し、溝状遺構に切られ、方形土壙に切られる。土壙としたがくぼみ状を呈する。長径160cm以上，短径約140cm、確認面からの深さ約23cm。覆土は暗褐色粘土で粘性は強い。性格は不明。

遺物は獣骨1点出土している。

土壙2

調査区北東隅に位置し、溝状を呈し上場北に泥岩塊が集中している。長径170cm以上、短径30cm、確認面からの深さ約20cm。覆土は弱粘質黒褐色土。性格は不明。

遺物はかわらけ72点、フイゴの羽口1点、瓦質火鉢1点、常滑・甕1点、青磁1点、近世陶磁器2点である。

溝状遺構

グリット3－A（南西）から2－E（北東）にかけて東西に流れる。2－Eより東と3－Aあたりより西では確認できなかった。上幅は30～100cm，下幅は46～52cm、確認面からの深さは10～15cm。南北軸線の方位はN－58°－EからN－61°－E。調査敷地前の県道とほぼ直交する。

遺物はかわらけ98点、産地不明土器1点、瓦質製品4点、常滑窯製品5点、瀬戸窯製品5点、石製品2点、漆器1点、木製品14点、獣骨2点、種子1点と木片82点が出土している。102はかわらけ。103は

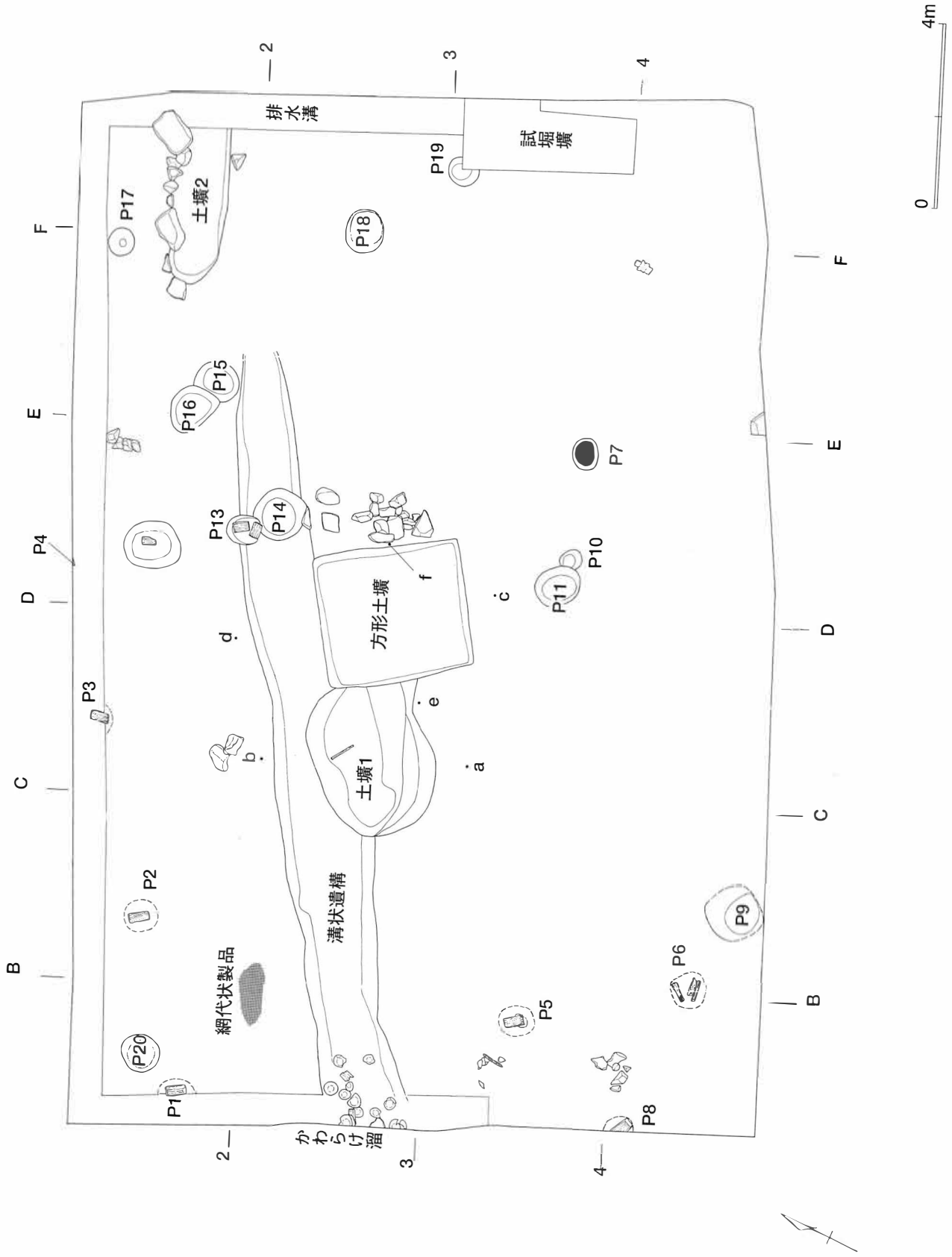

排水溝
試堀壙
土壙2
方形土壙
土壙1
溝状遺構
網代状製品
かわらけ溜
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
a
b
c
d
e
f
2
3
4
B
C
D
E
F
0
4m

図6　1面遺構平面図

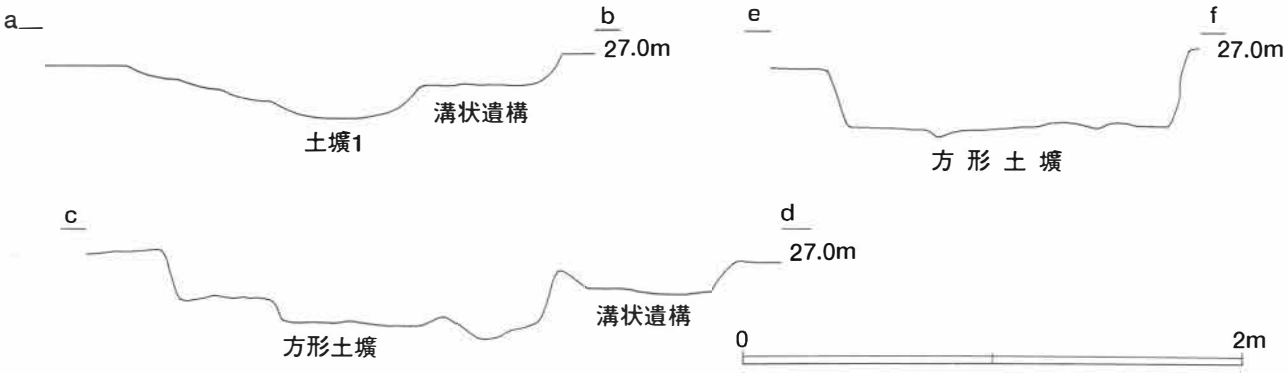


図７　１面遺構断面図

瀬戸の瓶子の底部。104は折敷としたが長さが約10cmと短い。

掘立柱建物（ピット１～７・13）

番号	確認面からの深さ（cm）	柱穴規模（cm）	下場レベル（m）	礎板レベル（m）	出土遺物・特記事項
1			26.9	26.93	かわらけ（２）　掘立柱建物
2			26.85	26.94	掘立柱建物
3			26.9		掘立柱建物
4	29	33×－	26.8	26.85	掘立柱建物
5			26.86	26.92	礎板下に泥岩　掘立柱建物
6			26.9	北 26.93 中央 26.62 南	掘立柱建物
7	9	33×26	26.78		かわらけ（４）　掘立柱建物
8	50	36×－	26.94	26.98	
9	13	64×58	26.76		
10	7	22×24	26.83		
11	16	39×50	26.75		かわらけ（10）、木片（７）
12	10	52×60	26.73	26.78	かわらけ（２）、常滑・甕（１）
13	13	38×32	26.74	26.77·26.81	掘立柱建物
14	8	55×60	26.66		
15	14	46×－	26.7		
16	8	42×52	26.71		かわらけ（図127）、硯
17	18	29×27	26.67		
18	10	47×40	26.72		
19	18	32×32	26.7		かわらけ（２）
20	11	3.9×39	26.8		かわらけ（15）、瓦質製品（１）、獣骨（１）

表１　１面ピット観察表

調査区ほぼ西半を占めている。場所によって確認できなかった柱穴もあったが、１棟の建物として捉えた。確認規模は３間×３間で、柱間は約2.1m。柱穴の覆土は黒褐色粘質土で泥岩粒とかわらけ微片を含む。南北軸線の方位はN－54°－E。ほとんどの柱穴の掘り方を確認できなかったので断面図は掲載しなかった。

ピット

掘立柱建物以外のものをここでとりあげる。ピット８・12は建物の柱穴と思われる。詳細は掘立柱建物のものも合わせ表１にまとめた。105のかわらけはピット14から出土。

かわらけ溜（図10）

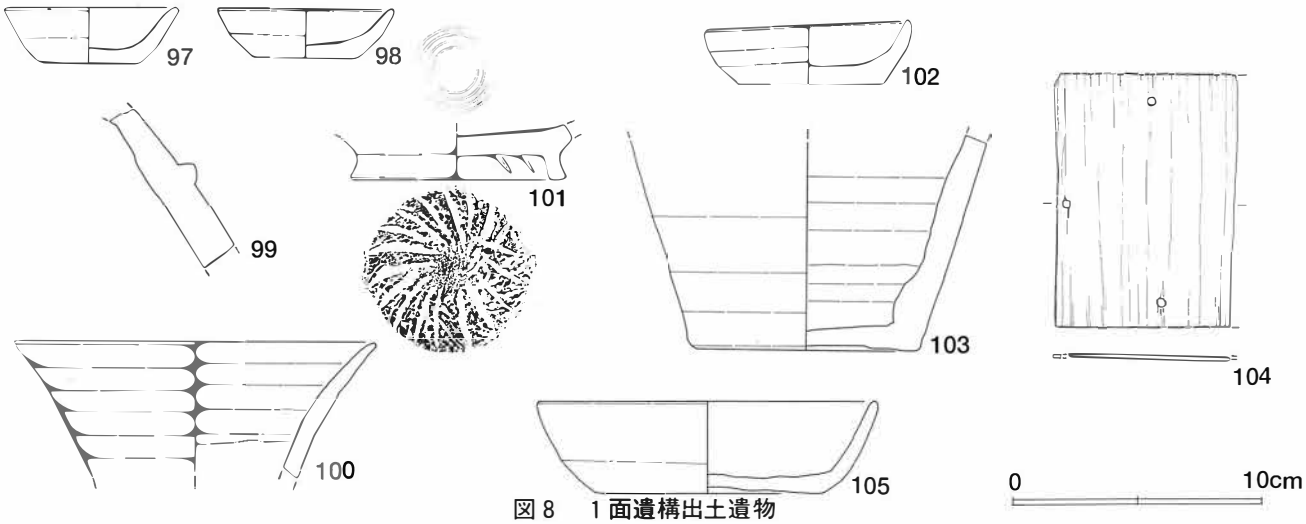


図８　１面遺構出土遺物

２－Aで検出した。溝状遺構にかかるがこれに伴わず、掘り込みプランを持たない。かわらけ31点（小型７点、大型19点、不明５点）と折敷６点、木片10点を出土した。

かわらけは小型では口縁がわずかに外反するタイプ（106～110）、口縁が直行するタイプ（111）、大型では口縁がわずかに外反するタイプ（112・114・115・120・122・123）、口縁が直行するタイプ（113・116～121）である。全体に焼きしまってなく、粉っぽい。

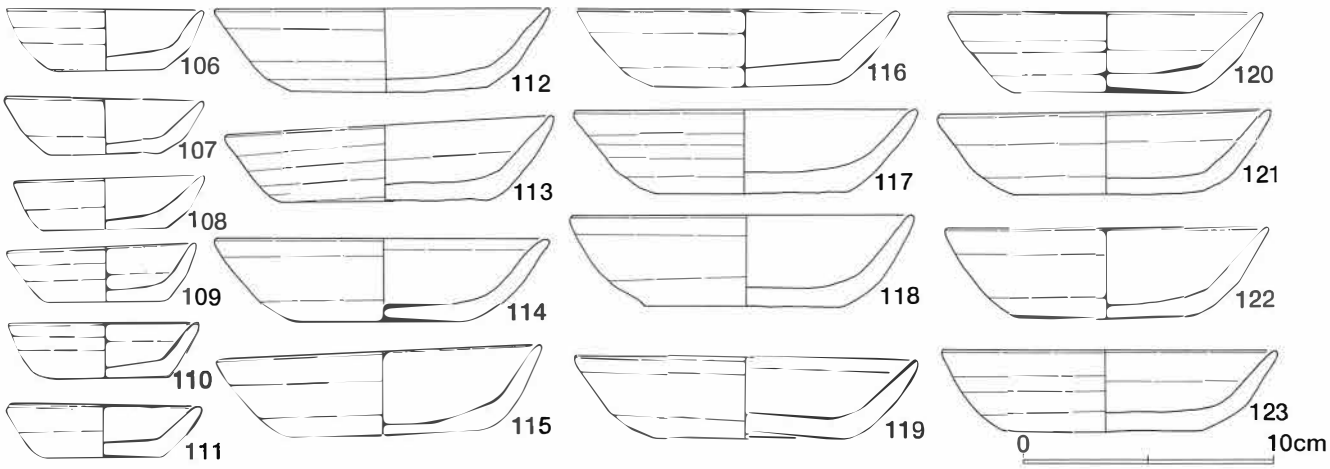


図９　１面かわらけ溜出土遺物

第４節　１面包含層出土遺物（図10）

第７層から遺構確認面（１面）まで出土したものをここでとりあげる。

124～126はかわらけ。口縁はやや外反気味に立ち上がる。124・125は小型で口縁にタールが付着し、126は大型で口縁一部と内面にタールが付着する。127は大型のかわらけの中央を穿孔している。128はかわらけ質製品の脚部で中央を穿孔している。129は鍔付土鍋で火を受けている。130～137は瀬戸窯製品。130は碗。131～135は天目茶碗で、131はミニチュアである。仏器として使われたものであろうか。136は盤。137は鉄釉の花瓶。138・139は常滑・甕。140は常滑・こね鉢。141は東播系のこね鉢で、本調査地点ではこの１点のみの出土である。142・143は瓦質製品で142は風呂、143は香炉と思われる。144・145は銅銭。146は小型の長方硯。147は漆器の椀で体部外面と内底面に亀甲文(円の中に亀甲文３つ？)をスタンプしている。

また、グリット２－Ｂで網代状製品が出土した。

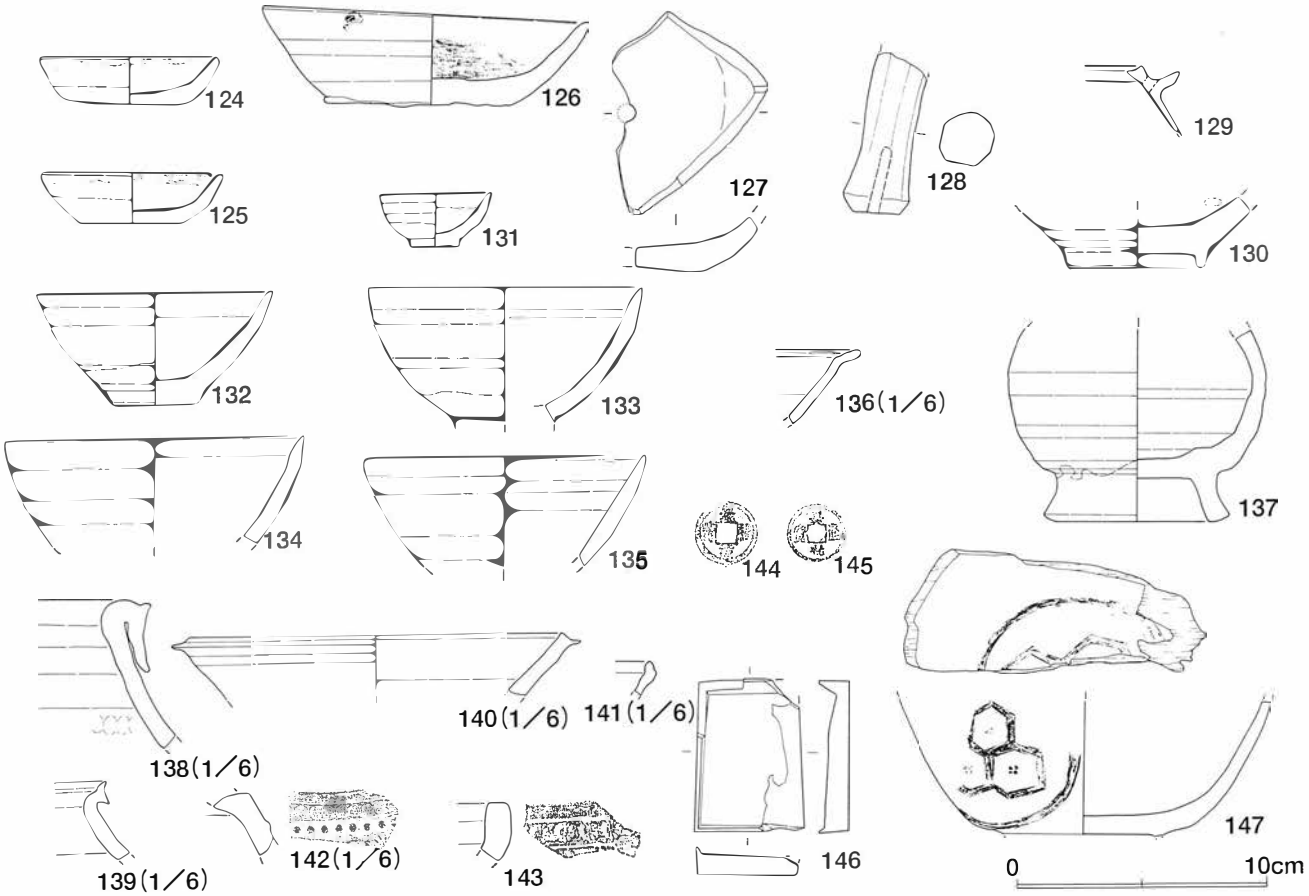


図10　１面包含層出土遺物

第５節　２面検出の遺構と出土遺物（図11・12）

１面（遺構確認面）20cmほど掘り下げると良好な泥岩地業面が検出され、溝状遺構４条、土壙３基、井戸１基、掘立柱建物１棟、柵列１列とピットを検出した。

溝状遺構１

グリット３－ＡからＥラインにかけて位置し南西から北東にのびる。東はＦラインあたりで掘り方が無くなり、西もＢラインより東で一部無くなる。上幅26～66cm、下幅24～50cm、確認面からの深さ６～10cm。南北軸線の方位はＮ－33°－Ｅ～Ｎ－41°－Ｅ。

遺物はかわらけが25点出土しているが図示できるものはない。

溝状遺構２

Ｅラインより東中央に位置し東西に長い。西はＥラインで消える。長さ3.3m以上、上幅60～80cm、下幅42～60cm、確認面からの深さ10cm。南北軸線の方位はＮ－60°－Ｅ。

遺物はかわらけが８点出土しているが図示できるものはない。

溝状遺構３

Ｅラインから東、溝状遺構２の南に平行して位置し東西に長い。長さ４ｍ以上、上幅26～30cm、下幅11～25cm、確認面からの深さ４cm。溝状遺構２と同じく敷地東の県道とほぼ直交する。南北軸線の方位はＮ－56－°Ｅ。

出土遺物はない。

溝状遺構４

調査区南壁際のグリット４－Ｄに位置し南北に長い。長さ80cm以上、上幅36cm、下幅28cm、確認面からの深さ７cm。溝状遺構２・３とほぼ直交する。南北軸線の方位はＮ－54－°Ｗ。

遺物はかわらけ４点が出土しているが図示できるものはない。

土壙１

調査区北グリット１－Ｄに位置し溝状遺構１を切る。長径138cm、短径98cmの不整円形を呈し確認面からの深さは20cmである。覆土は腐食土でウリ科と思われる種子を含んでいた。性格は不明。

遺物はかわらけ５点、箸１点のほか木片99点が出土しているが図示できるものはない。

土壙２

調査区南西のグリット４－Ｅに位置する。長径200cm、短径174cmのほぼ円形で確認面からの深さは17cmである。くぼみ状を呈する。性格は不明。

遺物はかわらけ15点、常滑窯製品１点、貝殻２点、獣骨１点が出土しているが図示できるものはない。

土壙３

調査区北東グリット１－Ｆに位置する。東壁にかかっているため全容は不明だが径120cmの楕円を呈

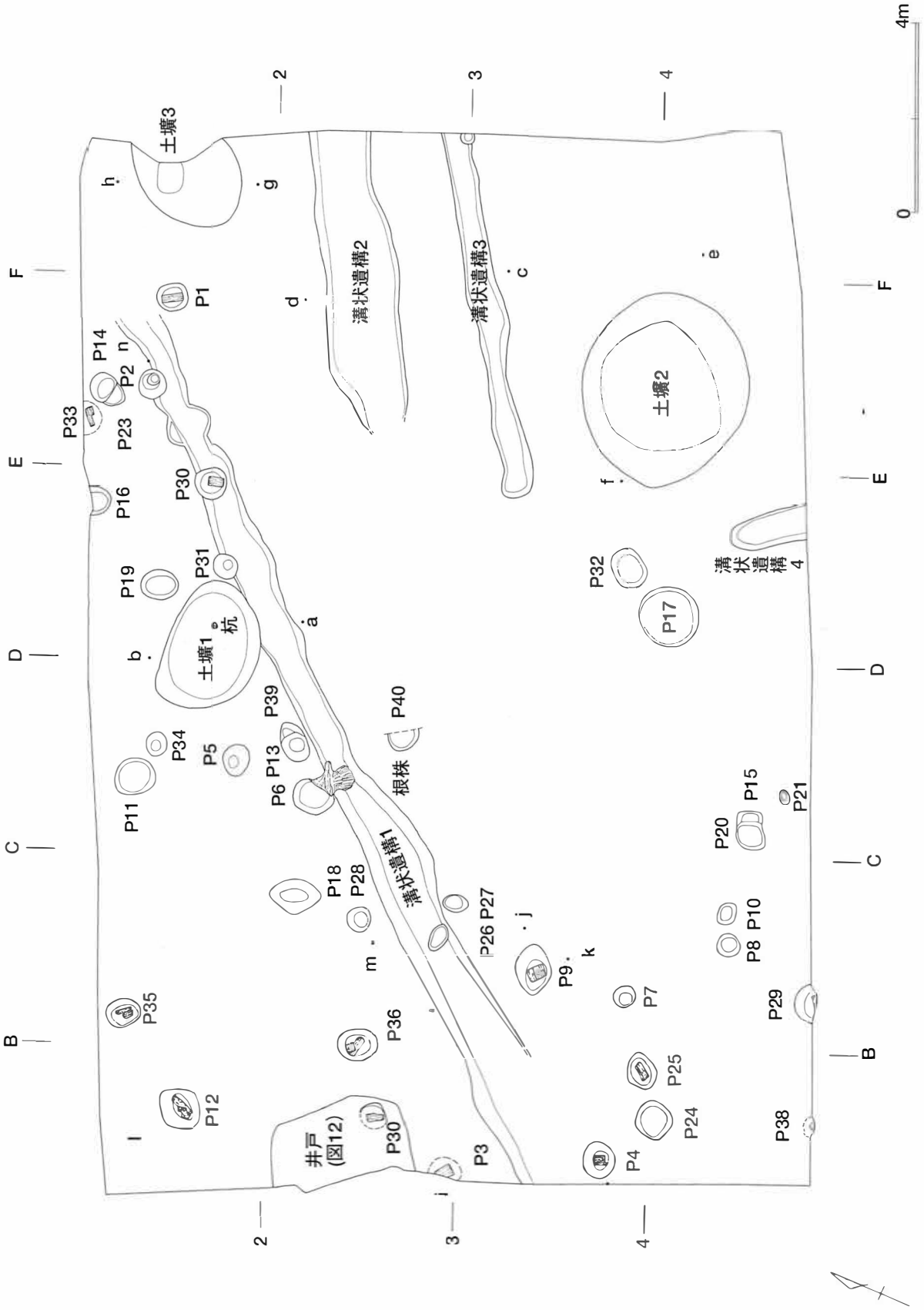

土壙3
土壙2
土壙1
杭
井戸
(図12)
溝状遺構1
溝状遺構2
溝状遺構3
溝状遺構4
根株
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P38
P39
P40
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
2
3
4
B
C
D
E
F
0
4m

図11　2面遺構平面図

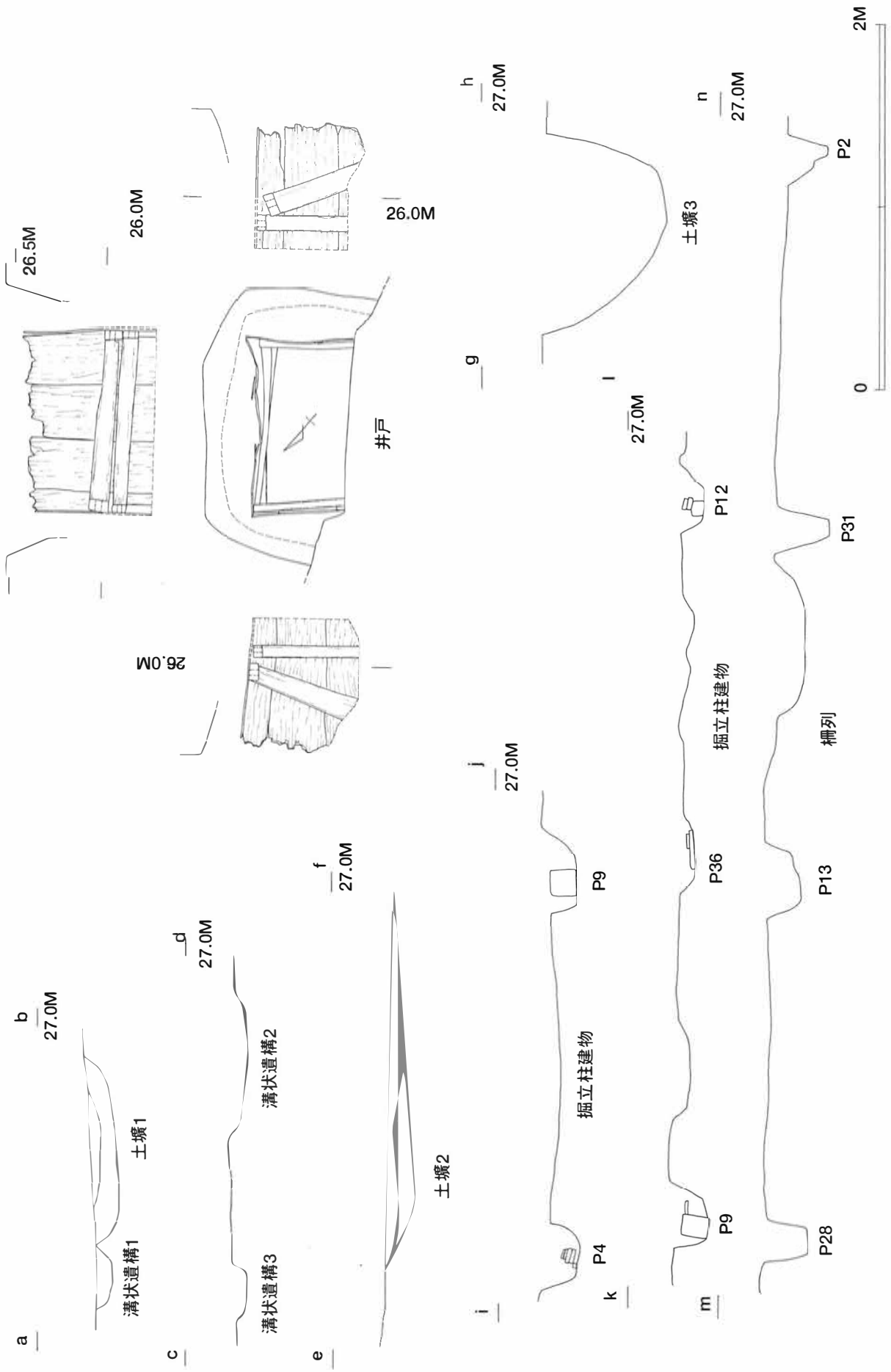


図12　2面遺構土層図断面図

番号	確認面からの深さ（cm）	柱穴規模（cm）	下場レベル（m）	礎板レベル（m）	出土遺物・特記事項
1	31	52×29	26.36	26.45	かわらけ（2）
2	17 26	30×30 11×12	26.51 26.42		かわらけ（1）　柵列
3			26.74	26.76	1面か？
4	16	28×34	26.57	26.66(上)	種子（1）・木片（3）　掘立柱建物
5	12	32×27	26.59		
6	14	40×－	26.56		かわらけ（図160）
7	28	21×22	26.44		
8	6	24×25	26.68		かわらけ(8)
9	15	54×39	26.8	北26.68 南26.71	掘立柱建物
10	12	23×18	26.61		
11	14	37×－	26.52		
12	8	40×41	26.6	26.70(上)	掘立柱建物
13	18	25×29	26.55		柵列
14	13	30×25	26.5		かわらけ（1）
15	5	26×－	26.61		
16	16	30×－	26.5		
17	6	62×62	26.72		かわらけ（6）
18	8	38×54	26.6		かわらけ（4）
19	18	40×32	26.55		獣骨（1）
20	20	24×29	26.53		
21	14	16×9	26.66		
22	29	15×－	26.43		
23	7	24×－	26.6		
24	27	32×30	26.5		
25	13	40×31	26.52	26.53	
26	3	30×18	26.64		
27	3	26×26	26.74		
28	24	24×25	26.51		かわらけ（6）　柵列
29	26	40×－	26.62	26.66	
30	30	33×34	26.38	26.42	
31	28	27×25	26.41		柵列
32	9	42×33	26.69		
33		(39)×－	26.46	26.52	礎板の上に泥岩
34	34	24×21	26.63		
35	12	30×36	26.6	東　26.61 西　26.62	
36	16	33×42	26.64	26.69(上)	掘立柱建物
37	12	(25×28)	26.56	26.58	1面掘立柱建物
38	40	30×－	26.9	26.94	
39	16	20×－	26.59		
40	14	32×－	26.55		

表2　2面ピット観察表

する。確認面からの深さは約70cm。覆土には貝粒子を含む砂（海砂か？）が多く混入していた。性格は不明。出土遺物はない。

井戸

調査区西壁グリット２－Ａに位置する。壁際ということで崩落の危険から完掘することができなかった。掘り方は一辺（南北）約150cmを測り方形を呈すると思われる。木組みは「方形横桟支柱型」で北東と南東の最上段（検出時）の支柱が抜けている状態で検出された。支柱は6.5cm×4.5cm、桟木は長さが若干差があるものの10cm×４cmの角材を用いている。縦板は幅13～30cm、厚さ1.5cm前後。東は縦板を４枚用いている。南北軸線の方位（井戸枠）はＮ－45－°Ｅ。

遺物はかわらけが15点出土している。158は大型で器肉が薄く口縁やや外反気味に立ち上がる。

掘立柱建物（ピット４・９・36・12）

調査区西３分の１（グリット２－Ｃ、３－Ｃ）を占める。確認規模は２間×１間で、柱間は約2.1ｍ。ピット18・５・19・33もこの建物かもしれない。南北軸線の方位はＮ－45－°Ｅ。

ピット４から種子１点・木片４点、ピット９からかわらけ８点が出土している。

柵列（ピット28・13・31・２）

溝状遺構１とほぼ平行重複して南西から北東にのびる。新旧関係は不明。南北軸線の方位はＮ－44－°Ｅ。

ピット28からかわらけが６点出土している。

ピット

掘立柱建物、柵列以外のものをここでとりあげる、ピット１・25・29・30・35は建物の柱穴と思われる。ピット37は１面の掘立柱建物の柱穴と思われる。詳細は掘立柱建物、柵列のものもあわせ表２にまとめた。

157はかわらけは大型で口縁やや外反気味に立ち上がる。ピット６から出土。

以上のほかにグリット２－Ｃ（溝状遺構１の下）に木の根株（樹種不明）があり、その周りに土壙３と同質の砂が集中していた。根株は樹皮をそのまま残し下部はカットされていた。掘り方は確認できなかった。

第6節　2面上包含層出土遺物（図13）

かわらけ1207点、土製品4点、瓦質製品6点、国産陶器32点、舶載磁器1点、石製品4点、獣骨1点、漆器1点、木片33点が出土している。図示しえたのはこのうちわずか8点である。

148～150はかわらけ。150には内外面に煤が付着している。口縁はいづれも内彎気味に立ち上がる。151は瓦質の風呂の口縁部。152は瓦質の鍔付きの火鉢で鍔部上面に菊花文のスタンプを押している。153は瓦質製品で器種は不明。外面はヘラミガキしていて内底中央にリボン形の線刻をしている。154・155は銅銭。156は凝灰質砂岩製の石塔・相輪で非常に脆い。請花は蓮弁をつくりだしていない。

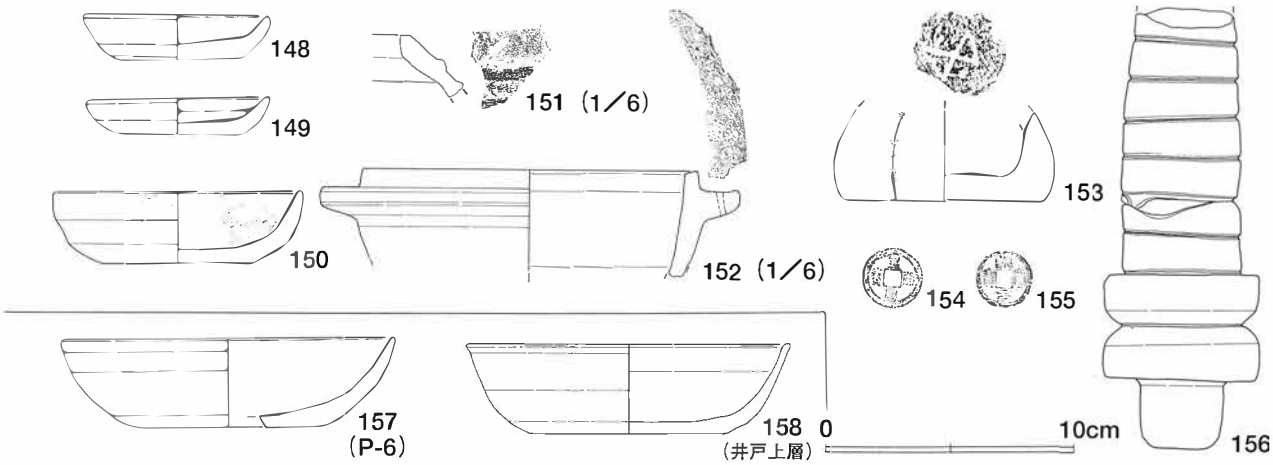


図13　2面包含層及び遺構出土遺物

第７節　トレンチ調査

２面下の状 況を確認するため、事業者の方のご理解を得て、調査区北壁際に約９ｍ×0.8mのＡ（東西）トレンチとＢ（東壁際南北に約５ｍ×0.8m（一部拡張））、Ｃ（南壁際東西に約９ｍ×0.8）のＬ字型トレンを設定した。

掘り下げると地業層（第18層）は20～40cm大の泥岩塊で最長１ｍ隙間なく突き固められていた。遺物はかわらけが数片含まれている。この層を取り除くと、多量の木製品・木片を含む土層（第25層から第34層）が堆積する。その下は砂質土（粗）が堆積し、貝殻、木片を含んでいる。

遺構はＣトレンチ南壁で杭を検出し周りに泥岩を据えていた。トレンチ内の面積が狭いためか、遺構はそれ以外に検出されなかった。

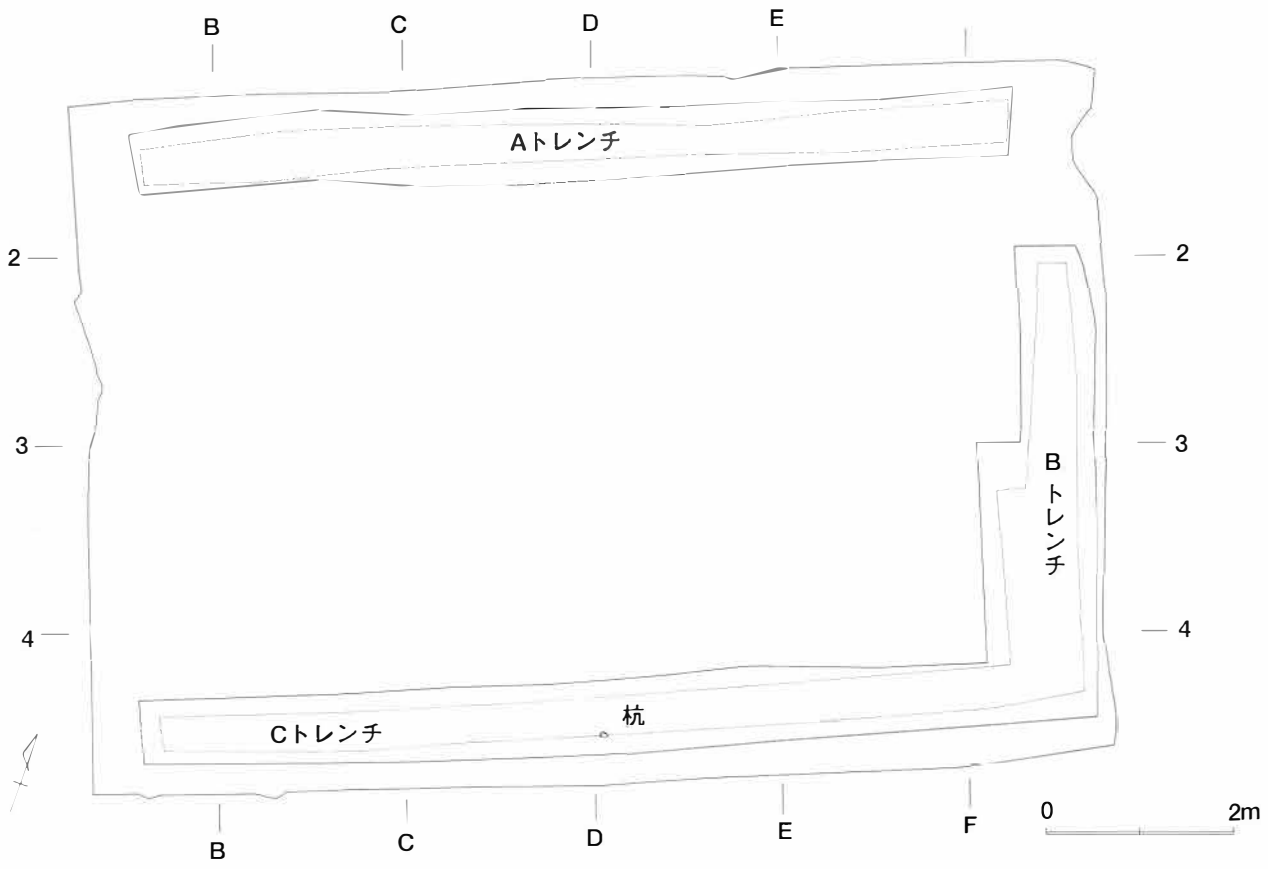


図14　トレンチ設定図

Ａトレンチ出土遺物（図15）

159～161はかわらけ、162～167は木製品で、162は用途不明、163～166は箸、167は草履の芯である。159・162・163は第19～21層中、160・161・164～167は第22～24層中である。

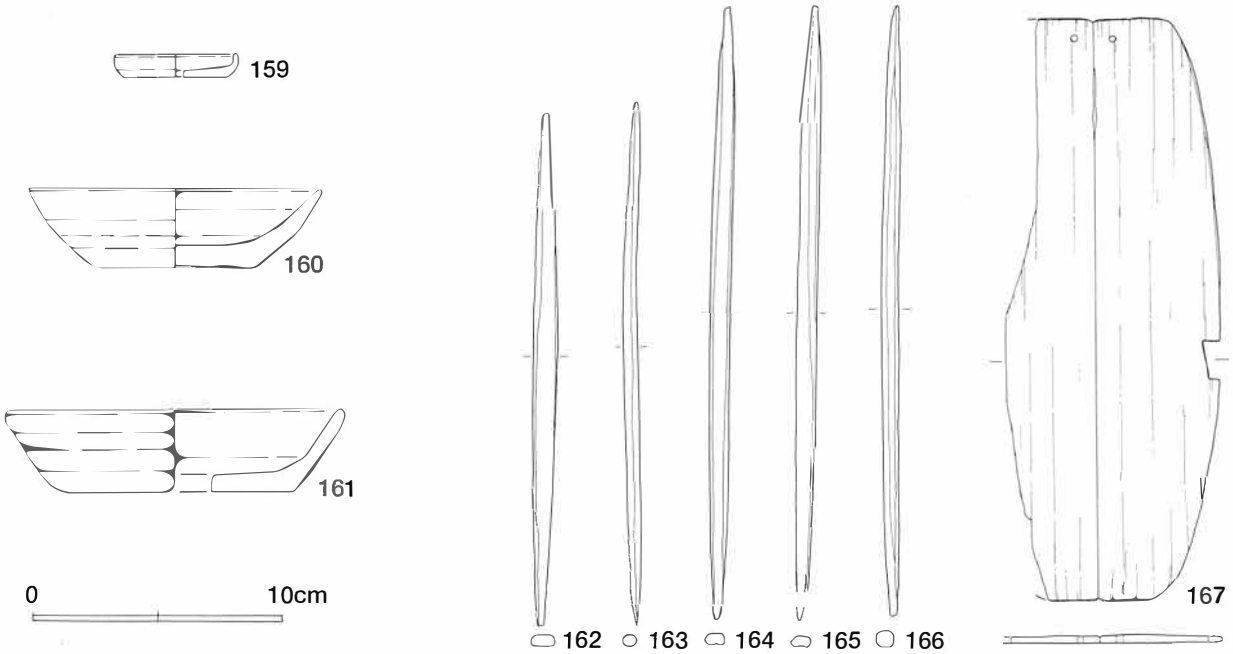


図15　Aトレンチ出土遺物物

B・Cトレンチ出土遺物（図16）

B・Cトレンチの層が対応するため一括とした。168～185はロクロ成形のかわらけ。小型・大型とも概ね口縁が内彎し立ちあがる。186～192は舶載陶磁器で、186は青磁・蓮弁文碗、187は青磁・鉢。186の釉は高台畳付を除いてかけられている。188～191は白磁・口禿皿で口縁が内彎気味に立ち上がるタイプ（188）と口縁が外反するタイプ（190・191）がある。192は緑釉の盤で表面銀化している。193は瀬戸の入子で無釉である。194は不明銅製品。

195～215は木製品。195・196は用途不明で、196は菜箸の可能性。197～202は箸。203は用途不明で、刀子の柄のように成形している。204は格子戸の部材（格子子）と思われる。205は2枚の板を合わせて穿孔し軸木を挿入しているが扇骨とは違うと思われる。206は調度品の部材（雲型）と思われるが不明。207は扇子の骨で、閉じた状態で出土。全10枚揃っている。208は刀子の柄で、一部山型に成形している。目釘孔はなく、刀身を差し込んだのではないかと思われる。漆等の痕跡はない。209は曲物の蓋。210は円板状製品で中央を穿孔している。211は用途不明で、六角形の板に亀甲花菱文が陽刻され、規則的に穿孔されている。212も用途不明で棒状に成形したあと、螺旋状の刻みをいれている。佐助ヶ谷遺跡(税務署）ほか市内の遺跡で同型の製品が数点出土しているが、完形品は未だ出土していない。213～215は部材の端切れの可能性もあるが、同形態のものが計4点（完形）が出土しているので、そのうちの3点をとりあげた。216・217は（梳き）櫛で漆は確認できない。218・219は漆器の皿で、意匠は218が鶴、219が植物（桐と笹か？）。

168～219はすべて第25層～第34層中から出土している。

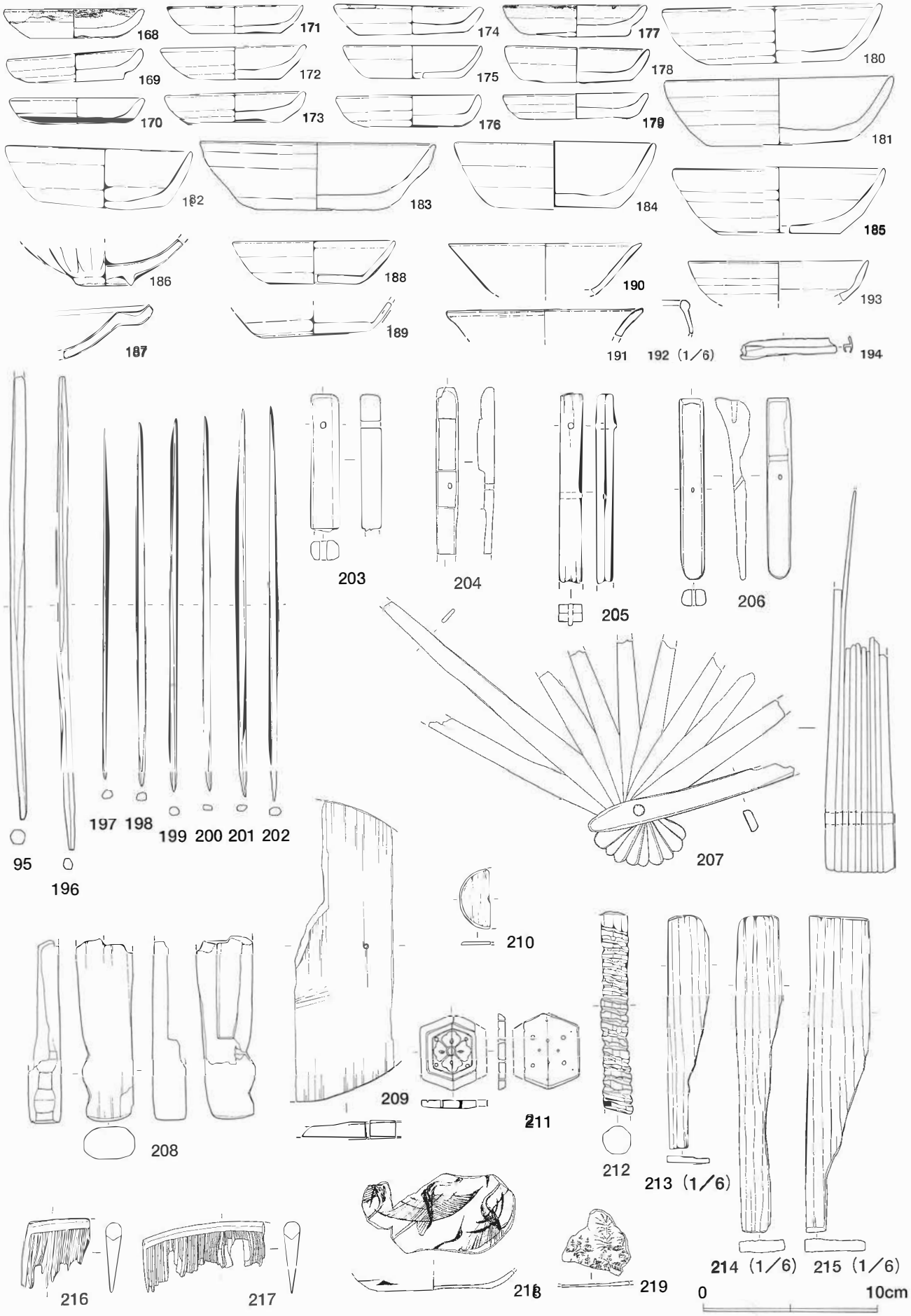


図16　BCトレンチ出土遺物

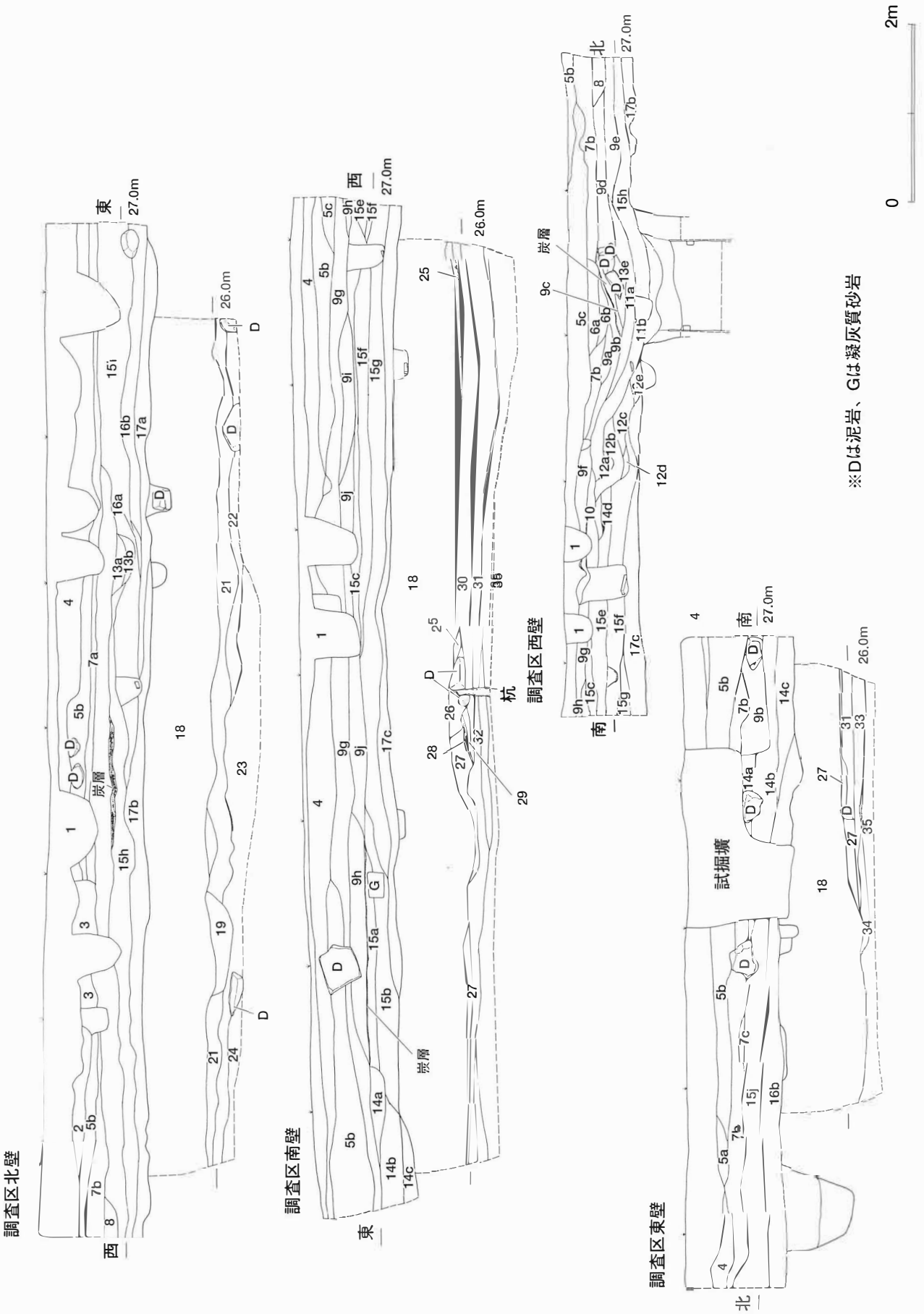


図17　調査区及びトレンチ壁土層図

1　表土
2　明茶褐色土　泥岩粒・炭粒少量含む
3　暗茶灰色土　泥岩粒・炭粒少量含む
4　明茶褐色土　泥岩粒・炭粒少量含む
5 a　茶褐色土　泥岩・炭多量含む
b　茶褐色土　泥岩多く含み、炭粒少量含む
c　茶褐色土　泥岩粒含む
6 a　黒褐色粘質土　炭多量含み、泥岩粒含む
b　茶褐色土　炭粒・泥岩塊含む
7 a　黄茶褐色土　泥岩粒密に含む（地業層？）
b　明茶褐色土　泥岩粒・炭粒含み、かわらけ少量含む
c　暗黄色土　泥岩粒多く含み、かわらけ少量含む
8　茶褐色土　炭粒・かわらけ含む。
9 a　茶褐色粘質土　泥岩粒・炭粒多く含む
b　明茶褐色粘質土　泥岩粒・炭粒多く含む
c　黒褐色粘土　多量の炭粒含む
d　茶褐色土　泥岩（3㎝大）・泥岩粒・かわらけ含む
e　茶褐色土
f　茶褐色土　泥岩・泥岩粒・炭粒・かわらけ含む。粘性あり
g　明茶褐色土　泥岩・泥岩粒含む
h　明茶褐色土　泥岩粒・炭粒少量含む
i　明黄褐色土　泥岩粒少量含む
j　明黄褐色土　泥岩粒・炭粒少量含む
10　暗茶褐色土　多量の泥岩粒・かわらけ含む
11 a　暗褐色粘質土　泥岩粒・木片・種子（ウリ科）含む
b　暗褐色粘質土　泥岩粒・木片含む
12 a　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・かわらけ含む
b　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・かわらけ含む
c　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・かわらけ含む
d　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・かわらけ含む
e　暗黒褐色粘質土　泥岩（5㎝大）含む
13 a　黒褐色粘質土　凝灰・炭含む
b　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・炭含む
14 a　明茶色土　多量の凝灰岩粒含む
b　明茶色土　少量の凝灰岩粒含む
c　暗茶褐色土　泥岩粒・かわらけ含む
15 a　茶褐色土　泥岩粒少量含む
b　暗茶褐色土　泥岩塊・泥岩粒・少量の炭粒含む
c　黒褐色土　多量の炭含む
d　明茶褐色土　泥岩塊含む
e　黒褐色土　泥岩粒含む
f　黒褐色土　多量の泥岩粒含む
g　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・炭粒含む
h　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・炭粒含む
i　茶褐色土　泥岩粒・炭粒含む
16 a　茶褐色土　泥岩粒含む
b　暗茶褐色粘質土　泥岩粒・炭粒含む
17 a　黄茶褐色土　泥岩粒多く含む
b　青灰色土　多量の泥岩粒・炭粒含む
c　暗茶褐色土　泥岩粒含
18　黄茶褐色土（一部青灰色）　地業層
19　黒褐色砂質土　泥岩粒、木片含む
20　暗青灰色砂質土　泥岩粒、多量の木片含む
21　暗青灰色土　泥岩粒、木片、炭含む
22　青灰色砂質土　多量の泥岩粒含む
23　青灰色土　泥岩粒、木片、炭含む
24　青灰色土　多量の泥岩粒、木片、炭含む
25　黒色粘質土　多量の炭・木片・木製品含む
26　青灰色土　泥岩塊含む
27　暗茶褐色粘質土　多量の木片、木製品含む
28　黒色粘質土　多量の木片・木製品含む
29　暗褐色粘質土　多量の泥岩含む
30　暗茶褐色粘質土　多量の木片、木製品含む
31　青灰色粘質土　泥岩含む
32　暗茶褐色粘質土　少量の木片、木製品含む
33　青灰色土　多量の泥岩含む
34　黒色粘質土　多量の木片・木製品含む
35　暗青灰色粘質土　混入物ほとんどなし

番号	種類	計測値　単位cm　（　）は復元	特記事項
1	瀬戸　皿	口径(12.1)　底径(6.3)　器高2.7	胎土　淡灰色　釉　半透明・灰緑色　目痕あり
2	瀬戸　碗	口径(14.6)　底径(4.6)　器高6.0	胎土　淡黄灰色　釉　半透明・淡灰緑色　目痕あり
3	瀬戸　盤	口径（33.4）	胎土　淡灰色　釉　不透明・灰緑色
4	瓦質　火鉢	口径（39.8）	内面ナデ　外面ヘラ磨き　文様　外面上位に二条の沈線の間に連続亀甲花文を押印　その下に連珠文貼り付け　中位に菊花文（大）押印、その下に連珠文貼り付け"
5	茶臼（下臼）	直径(33.6)　総高12.7　上縁幅2.3　上面径16.0　芯孔径3.2	安山岩　灰色　六分画
6	瀬戸美濃系灯明皿受け皿	口径7.8	胎土　淡灰色　釉　不透明・暗茶褐色　外底面糸切り痕
7	瀬戸　徳利	口径4.0	胎土　灰色　釉不透明・暗灰緑色　二次焼成受けている　18C後～19C中？
8	堺　擂鉢	口径35.4　底径19.6　器高16.0	胎土　赤茶褐色　条線　8本
9	かわらけ	口径7.6　底径4.3　器高2.3	胎土　橙色　口縁部にタール付着　完形
10	〃	口径(6.6)　底径3.5　器高1.9	胎土　橙色　口縁部にタール付着
11	〃	口径6.7　底径4.4　器高2.4	胎土　赤橙色　完形
12	〃	口径(7.2)　底径4.4　器高2.2	胎土　橙色　口縁部にタール付着
13	〃	口径7.0　底径4.1　器高2.3	胎土　暗橙色　ほぼ完形
14	〃	口径(6.9)　底径3.6　器高2.6	胎土　淡褐色
15	〃	口径6.9　底径4.5　器高2.1	胎土　橙色　ほぼ完形
16	〃	口径7.0　底径4.3　器高2.2	胎土　明橙色
17	〃	口径12.3　底径7.8　器高3.7	胎土　淡褐色
18	〃	口径11.7　底径7.9　器高3.4	胎土　淡褐色
19	〃	口径(12.2)　底径8.0　器高3.6	胎土　淡褐色
20	〃	口径12.1　底径7.5　器高3.6	胎土　赤橙色
21	かわらけ(穿孔)	厚0.8　孔径0.7、0.45	胎土　淡橙色
22	白かわらけ		手づくね　胎土　灰白色
23	青磁　盤	高台径（6.0）	素地　灰白色　釉　透明・暗灰緑色　内底面に型押し
24	青磁　碗	口径（11.0）	素地　灰白色　釉　不透明・青緑色　体部外面に蓮弁文
25	青磁　鉢	口径（12.8）	素地　灰褐色　釉　不透明・水青色　体部外面に蓮弁文　二次成受けている？
26	白磁（明）　碗	高台径6.6	素地　灰白色　釉　半透明・淡灰緑色・貫入　内底面中央に花文？を型押し
27	瀬戸　蓋	口径10.0　器高1.3	胎土　灰褐色　釉　半透明・灰緑色
28	瀬戸　皿	口径（11.4）	胎土　淡灰色　釉　半透明・灰緑色
29	〃	口径(10.4)　底径(5.0)　器高2.5	胎土　淡灰色　釉　半透明・灰緑色

表3　遺物観察表（1）

30	瀬戸皿	口径(10.8)　底径5.1　器高2.4	胎土　淡灰色　釉　透明・灰緑色
31	〃	口径(11.1)　底径(5.0)　器高2.4	胎土　淡灰色　釉　半透明・灰緑色
32	〃	口径11.4　底径5.8　器高2.8	胎土　灰白色　釉　半透明・灰緑色　内底面磨滅
33	〃	口径(11.0)　底径(5.0)　器高3.5	胎土　淡灰色　釉　半透明・淡灰緑色
34	瀬戸　碗	高台径(4.7)	胎土　淡黄褐色　釉　不透明・乳黄白色　目痕あり
35	〃	口径(17.3) 高台径(5.0) 器高6.2	胎土　淡黄灰色　釉　不透明・淡黄褐色～乳黄白色
36	〃	高台径5.1	胎土　淡褐色　釉　半透明・灰緑色
37	〃	口径(16.0)	胎土　淡茶褐色　釉　不透明・灰緑色
38	〃	口径16.6　高台径6.7　器高5.1	胎土　淡茶褐色　釉　半透明・淡黄褐色　目痕あり
39	瀬戸 天目茶碗	口径(11.8)	胎土　淡灰色　釉　黒褐色～暗茶褐色
40	瀬戸 おろし皿	口径(16.8)　底径(8.7)　器高3.3	胎土　淡黄褐色　釉　不透明・灰緑色～乳白色　焼きむらあり
41	〃	口径(15.8)　底径(9.0)　器高3.3	胎土　淡黄褐色　釉　不透明・淡黄褐色片口部分差し込み
42	瀬戸　盤	口径(32.6)	胎土　淡黄褐色　釉　不透明・灰黄緑色
43	〃	底径(16.7)	胎土　淡灰色　釉　半透明・灰緑色
44	〃	口径(24.6)	胎土　淡黄灰色　釉　半透明・灰緑色
45	瀬戸 行平鍋	底径8.1	胎土　淡黄灰色　釉　半透明・灰緑色　外底面火受けている
46	瀬戸 小壷（茶入れ）	口径2.8　底径2.9　器高3.0	胎土　淡黄褐色　釉　不透明・灰緑色　完形
47	瀬戸　香炉	口径(8.0)　底径4.9　総高2.7	胎土　淡灰色　釉　不透明・灰緑色　脚部貼り付け
48	瀬戸 尊式花瓶	口径(15.4)	胎土　淡灰色　釉　半透明・灰黄緑色
49	〃	底径(9.0)	胎土　淡灰色　釉　不透明・暗灰緑色
50	常滑　壷	口径(22.4)	胎土・器表ともに灰黒色
51	常滑　甕		胎土　灰黒色　器表　茶褐色
52	〃		胎土　灰黒色　器表　暗茶褐色
53	常滑　こね鉢	口径(31.0)	胎土　灰黒色　器表　暗茶褐色
54	〃	口径(28.0) 底径(12.4) 器高10.1	内面全体磨滅　胎土　暗茶褐色　器表　赤茶褐色
55	〃	底径(12.9)	内面全体磨滅　胎土・器表とも橙灰色
56	備前　壷	口径(15.4)　胴部最大径(27.4)	胎土　灰黒色　器表　灰黒色～乳白灰色
57	瓦質こね鉢	厚1.2	胎土・器表とも灰色　口唇部を内側に僅かに折り曲げやや丸みをもつ　外面中位指頭調整　内面横位ナデ
58	瓦質　火鉢	器高10.0	胎土　淡肌色　表面黒色処理　外面及び口縁ヘラミガキ調整

表４　遺物観察表（２）

59	瓦質火鉢		胎土　明赤褐色　表面黒色処理　外面及び口縁ヘラミガキ調整　外面上位に二条の沈線　その間に連続菊花文押印　その下連珠文貼り付け
60	瓦質香炉	器高4.5	胎土・器表とも肌色　外面及び口縁ヘラミガキ　外面上位に沈線一条　その下三段にわたって菱形渦文連続押印
61	瓦質脚付き香炉	総高4.5	胎土・器表内面灰色　外表面黒色処理　外面に沈線二条　そのあいだ四角渦文を二段にわたって連続押印　脚部貼り付け
62	瓦質仏花瓶？	底径（8.0）	胎土　灰白色　外表面黒色処理　外面ヘラミガキ
63	瓦器質製品	最大径2.3	胎土　灰白色　表面黒色処理　凸面ヘラミガキ
64	銅銭(太平通宝)		初鋳　北宋976年　楷書
65	〃（淳化元宝）		初鋳　北宋990年　楷書
66	〃（景徳元宝）		初鋳　北宋1004年　楷書
67	〃（祥符通宝）		初鋳　北宋1009年　楷書
68	〃（　〃　）		〃
69	〃（景祐元宝）		初鋳　北宋1034年　篆書
70	〃（熙寧元宝）		初鋳　北宋1068年　篆書
71	〃　（〃）		〃
72	〃　（〃）		〃
73	〃　（〃）		〃
74	〃（元豊通宝）		初鋳　北宋1078年　行書
75	〃（紹聖元宝）		初鋳　北宋1094年　行書
76	〃　（〃）		初鋳　北宋1094年　篆書
77	〃　（〃）		初鋳　北宋1101年　篆書
78	〃（聖宋元宝）		初鋳　北宋1101年　篆書
79	硯（長方）	厚1.5	粘板岩？（赤紫色）
80	砥石（仕上砥）	残存長 4.8　幅3.2　厚0.9	京都深草産（灰黄色）２面使用　２面切り出し痕
81	〃（〃）	残存長 6.2　幅3.2　厚1.2	京都深草産（明茶褐色）２面使用　２面切り出し痕
82	〃（〃）	残存長 7.5　幅3.3　厚0.7	京都深草産（灰黄色）２面使用　１面切り出し痕
83	砥石（中砥）	残存長 8.4　幅3.2　厚1.8	上野産（淡黄灰色）４面使用
84	〃（〃）	残存長10.8　幅3.5　厚2.5	上野産（淡灰緑色）４面使用
85	〃（〃）	残存長10.7　幅3.0　厚2.5	上野産（淡褐色）４面使用
86	〃（〃）	残存長 9.9　幅3.5　厚2.2	上野産（淡黄灰色）４面使用
87	〃（〃）	残存長10.8　幅2.0　厚1.7	上野産（淡黄灰色）４面使用
88	〃（〃）	残存長 8.8　幅2.7　厚2.7	上野産（淡黄灰色）４面使用
89	〃（〃）	残存長 7.1　幅3.5　厚3.0	上野産（明茶褐色）４面使用
90	〃（〃）	残存長 5.0　幅3.2　厚1.8	上野産（灰白色）　４面使用

表５　遺物観察表（３）

91	砥石（中砥）	残存長6.5　幅4.6　厚1.7	（淡褐色）　1面使用　5面に切り出し痕
92	常滑(甕)転用砥	長6.1×4.3　厚さ1.1	胎土　灰黒色　器表　暗茶褐色　割れ口にすり痕
93	〃	長4.9×3.2　厚0.75	胎土　橙灰色　器表　淡橙色　割れ口と内面にすり痕
94	石製品　不明	残存長17.6　厚10.1	石材不明　（淡灰色）　片面中央と側面にくぼみ 片面に薬研状の刻み　全体的に磨滅
95	茶臼（下臼）	縁幅2.7	安山岩（多孔質　暗灰色）　内面磨滅
96	粉挽臼	残存高16.0	安山岩質（灰色）　溝８条？
97	かわらけ	口径6.8　底径4.0　器高2.2	胎土　橙色　口縁にタール付着
98	〃	口径7.0　底径4.1　器高2.0	胎土　淡褐色
99	瓦質　風呂		胎土　淡赤灰色　器表　淡赤褐色　外面　ヘラミガキ
100	瀬戸　尊式花瓶	口径(16.4)	胎土　灰褐色　釉　半透明・灰緑色
101	瀬戸　鉢	高台径8.4	胎土　灰褐色　釉　灰緑色　内底面中央に四重円文を型押し高台内風車状に刻み
102	かわらけ	口径8.1　底径5.8　器高2.4	胎土　淡褐色
103	瀬戸　瓶子	底径9.2	胎土　淡灰色　釉　半透明・灰緑色
104	折敷？	長10.2　幅7.2　厚0.15　孔径0.3	
105	かわらけ	口径(13.5)　底径9.1　器高3.9	胎土　淡橙褐色
106	〃	口径7.8　底径4.3　器高2.4	胎土　淡褐色
107	〃	口径8.0　底径4.5　器高2.3	胎土　淡褐色
108	〃	口径 7.6　底径5.2　器高2.1	胎土　淡褐色
109	〃	口径 7.6　底径5.0　器高2.2	胎土　明橙色
110	〃	口径 7.6　底径5.2　器高2.2	胎土　淡褐色
111	〃	口径 7.9　底径4.2　器高2.1	胎土　淡褐色
112	〃	口径13.3　底径7.8　器高3.3	胎土　橙色
113	〃	口径13.2　底径8.3　器高3.0	胎土　淡橙色
114	〃	口径13.5　底径7.3　器高3.3	胎土　橙色～淡褐色
115	〃	口径13.0　底径8.0　器高3.4	胎土　淡橙色
116	〃	口径13.0　底径7.0　器高3.1	胎土　橙褐色
117	〃	口径13.7　底径7.7　器高3.5	胎土　橙色
118	〃	口径13.7　底径8.0　器高3.6	胎土　淡橙色
119	〃	口径13.7　底径8.1　器高3.3	胎土　淡橙色
120	〃	口径12.5　底径7.1　器高3.2	胎土　淡橙色
121	〃	口径13.4　底径9.8　器高3.3	胎土　淡褐色
122	〃	口径12.9　底径8.0　器高3.4	胎土　橙色
123	〃	口径13.2　底径8.4　器高3.3	胎土　橙色

表６　遺物観察表（４）

124	かわらけ	口径 7.1　底径4.5　器高1.9	胎土　淡褐色　口縁にタール付着
125	〃	口径 7.1　底径4.2　器高2.0	胎土　淡褐色　口縁にタール付着
126	〃	口径12.9　底径7.4　器高3.6	胎土　淡褐色　口縁一部と内面にタール付着
127	〃（穿孔）	孔径(0.7)	胎土　淡褐色
128	土器（脚部）	径2.1	淡橙色　かわらけ質　表面ヘラケズリ
129	鍔付土鍋	孔径0.4	淡褐色　二次焼成受けている
130	瀬戸　碗	高台径5.1	胎土　淡褐色　釉　不透明・淡黄褐色
131	瀬戸　天目茶碗	口径4.5　底径2.0　器高2.2	胎土　淡灰色　釉　不透明・茶褐色～黒色　ミニチュア完形
132	〃	口径（9.5）　底径3.5　器高4.5	胎土　灰褐色　釉　黒色　二次焼成受けている
133	〃	口径(10.8)	胎土　灰褐色　釉　暗茶褐色～茶褐色
134	〃	口径(11.9)	胎土　灰褐色　釉　黒褐色
135	〃	口径(11.2)	胎土　淡黄褐色　釉　暗茶褐色
136	瀬戸　盤		胎土　淡黄灰色　釉　不透明・淡黄褐色
137	瀬戸　仏花瓶	高台径6.2	胎土　灰褐色　釉　不透明・黒色
138	常滑　甕		胎土・器表ともに暗茶褐色
139	〃		胎土　灰色　器表　（外）灰褐色　（内）茶褐色
140	常滑　こね鉢	口径(33.0)	胎土・器表　暗茶褐色～灰褐色　二次焼成受けている
141	東播系　こね鉢		胎土　灰色
142	瓦質　風呂		胎土　灰色　器表　灰黒色　上位に二条の沈線の間の亀甲花文を連続押印　その下に連珠文貼り付け、菊花文（大）押印　表面黒色処理
143	瓦質　香炉？		胎土　灰色　器表　灰黒色　二条の沈線の間に菊花文を連続押印　表面黒色処理　ヘラミガキ調整
144	銅銭(景祐元宝)		初鋳　北宋1034年　篆書
145	〃（嘉祐通宝）		初鋳　北宋1056年　楷書
146	硯（長方）	長6.1　最大幅3.4　総高1.1	粘板岩？（暗赤褐色）断面逆台形
147	漆器　椀	高台径(6.2)	黒漆地　体部外面と内底面に朱漆で亀甲文をスタンプ
148	かわらけ	口径 7.2　底径 4.6　器高1.9	胎土　淡褐色
149	〃	口径 7.2　底径 5.1　器高1.6	胎土　橙色
150	〃	口径(9.8)　底径(5.8)　器高2.9	胎土　淡褐色　内外面二次焼成受けている
151	瓦質　風呂		胎土　灰白色　外面及び口縁ヘラミガキ　表面黒色処理　二条の突帯の間に菊花文連続押印
152	瓦質　鍔付火鉢	口径(27.0)　鍔部径(36.8)　孔径0.5	胎土　灰色　外面及び口縁ヘラミガキ　表面黒色処理　鍔上面に菊花文押印（三個一グループ？）
153	瓦質　器種不明	底径(8.0)	胎土　灰褐色　器表　淡橙褐色　外面及び外邸面ヘラミガキ　輪花形　内底面中央にリボン状の陰刻
154	銅銭(皇宋通宝)		初鋳　北宋1038年　篆書
155	（熙寧元宝）		初鋳　北宋1068年　篆書

表７　遺物観察表（５）

156	石塔・相輪	輪部(高5.5　径6.6)　残存長35.2	凝灰岩質砂岩　非常に脆い
157	かわらけ	口径(13.1)　底径(7.8)　器高3.6	胎土　淡茶褐色
158	〃	口径(12.8)　底径 8.0　器高3.6	胎土　橙色
159	〃	口径 (4.8)　底径(4.1)　器高0.9	胎土　淡灰色
160	〃	口径(11.5)　底径(6.4)　器高3.2	胎土　淡茶褐色
161	〃	口径(13.3)　底径(9.4)　器高3.3	胎土　暗茶褐色
162	木製品　用途不明	長20.5　最大幅0.9　厚0.5	
163	木製品箸	長21.0　径0.5	
164	〃	長24.5　径0.8	
165	〃	長24.6　径0.9	
166	〃	長24.5　径0.7	
167	木製品　草履・芯	長23.4　厚0.35	
168	かわらけ	口径　7.9　底径 5.0　器高1.7	胎土　淡茶褐色　口縁タール付着
169	〃	口径　7.6　底径 5.6　器高1.6	胎土　淡茶褐色
170	〃	口径 (7.6) 底径(6.1) 器高1.5	胎土　淡茶褐色
171	〃	口径 (7.6) 底径(5.2) 器高1.6	胎土　淡灰色　口縁タール付着
172	〃	口径　8.1　底径 5.0　器高1.9	胎土　淡茶褐色
173	〃	口径　7.8　底径 5.4　器高1.7	胎土　淡茶褐色
174	〃	口径　8.2　底径 6.3　器高1.7	胎土　淡茶褐色　口縁タール付着
175	〃	口径 (7.8) 底径(5.6) 器高1.9	胎土　淡茶褐色
176	〃	口径　8.1　底径 5.4　器高1.8	胎土　橙褐色
177	〃	口径　8.1　底径 5.4　器高1.9	胎土　淡褐色　口縁タール付着
178	〃	口径　8.1　底径 5.9　器高1.5	胎土　橙色
179	〃	口径 (8.1) 底径(6.2) 器高1.5	胎土　橙色
180	〃	口径 12.3　底径 7.8　器高3.3	胎土　淡褐色
181	〃	口径 12.9　底径8.4　器高3.9	胎土　淡茶褐色
182	〃	口径 10.6　底径7.3　器高3.5	胎土　淡橙色
183	〃	口径(14.3)　底径7.0　器高3.9	胎土　暗茶褐色　二次焼成受けている
184	〃	口径(11.4)　底径7.1　器高3.8	胎土　橙色
185	〃	口径(12.0)　底径7.0　器高3.9	胎土　淡茶褐色
186	青磁　碗	高台径(3.3)	胎土　灰白色　釉　不透明・青緑色　蓮弁文
187	青磁　鉢		胎土　灰白色　釉　不透明・草緑色　無文
188	白磁　口禿皿	口径(9.0)　底径(5.2)　器高2.5	胎土　灰白色　釉　不透明・灰白色（やや青み）
189	〃	底径(6.0)	胎土　灰白色　釉　不透明・灰白色

表８　遺物観察表（６）

190	白磁　口禿皿	口径(11.2)	胎土　灰白色　釉　不透明・灰白色（やや青み）
191	〃	口径(11.4)	胎土　灰白色　釉　不透明・灰白色
192	緑釉　盤		胎土　灰色　　釉　不透明・深緑色　表面銀化
193	瀬戸人子	口径(10.3)	胎土　灰色　口唇に自然釉
194	金属製品	残存長5.5　幅0.9　厚0.5	未製品
195	用途不明木製品	残存長26.0　径0.9	
196	〃	残存長26.9　径0.6	菜箸か？
197	木製品　箸	長20.1　径0.6	
198	〃	長20.6　径0.6	
199	〃	長21.2　径0.6	
200	〃	長21.4　径0.5	
201	〃	長22.4　径0.6	
202	〃	長22.5　径0.6	
203	木製品　用途不明	残存長7.8　幅1.6　厚1.2　孔径0.4	
204	木製品 格子部材？	残存長9.5　幅1.3　厚1.0　孔径0.3	格子子か？
205	木製品　用途不明	残存長10.9　幅1.4　厚1.0	二枚の板を合わせ穿孔し、軸木を挿入。側面にも穿孔
206	木製品　用途不明	残存長10.3　幅1.3　孔径0.2	調度品の部材か（雲型）？
207	木製品　扇骨	残存長21.4　基部幅1.4　軸木径0.6　厚(外2枚)0.6　(内8枚)0.3	全10枚
208	木製品　刀子？柄	残存長10.4　幅3.3　厚1.9　茎尾幅0.8	下部、山型呈する
209	木製品 曲物　蓋板？	径(17.2)　厚0.9	
210	木製品　用途不明	径3.4　厚0.2	中央穿孔
211	木製品　用途不明	長4.3　残存幅3.8　厚0.45　孔径(大)0.25　(中)0.15　(小)0.1	平面六角状を呈し、表面に亀甲花菱文を陽刻。大(4)中(4)小(6)の計14の小孔が規則的に穿けられている
212	木製品　用途不明	残存長11.4　径1.6	棒状を呈し、螺旋状に刻んでいる
213	木製品　用途不明	長26.7　最大幅4.9　厚1.0	完形
214	木製品　用途不明	長36.3　最大幅5.4　厚1.5	完形
215	木製品　用途不明	長36.1　最大幅7.1　厚1.5	完形
216	漆製品　櫛	棟幅0.6	
217	〃	棟幅0.5	
218	漆器　皿	底径6.7	黒漆地　内底面・体部外面に朱漆で鶴文　スタンプ？
219	〃		黒漆地　内底面に植物文（桐と笹か？）スタンプ？

表9　遺物観察表（7）

第四章　まとめ

本調査では２面にわたって一定の軸方位をもつ掘立柱建物、溝状遺構等の遺構が検出された。トレンチと合わせて３時期の変遷が考えられる。以下遺構の変遷と年代について述べる。

１期

トレンチからは遺構としては杭が１つ確認されただけであるが、狭い範囲ながら多量の木片・木製品、かわらけ等の遺物が平面的に広がって出土していたことから生活面が推定される。よってこれを１期とした。

年代は鎌倉におけるかわらけの編年案（河野　1986年）から14世紀中葉前後の時期と考えられる。

２Ａ・２Ｂ期

１面とした遺構確認面と２面の泥岩地業面は場所ににによって高低差が20cmしかなく、遺物もかなり混ざり接合するものもある。また、遺構に伴う遺物が少ないことから“２期”と一括して考え２面の泥岩地業面を２Ａ期、１面とした遺構確認面を２Ｂ期とする)。２Ａ期の遺構（２面溝状遺構１・井戸・掘立柱建物・柵列）は南北軸線の方位がＮ－41°（33°）－ＥからＮ－45°－Ｅの間にある。２Ｂ期の遺構（１面溝状遺構・掘立柱建物・方形土壙、２面溝状遺構２～４）は南北軸線の方位がＮ－54°－ＥからＮ－61°－Ｅの間にある（遺構内からの出土遺物が少量、小破片のため何ともいえないが、このことから２面で示した溝状遺構２～４は２Ｂ期に入ると思われる)。以上のことから２Ａ期から２Ｂ期にかけて少なくとも10°近く東にずれていることがわかる。２Ｂ期の遺構は敷地東の現在の道路とほぼ直交もしくは平行している。

２ＡＢ期はかわらけ・国産陶器等から14世紀後葉から15世紀代という年代幅を与えたい。

本調査地点からは遺物は総点数9,936を数える。その内訳はかわらけ8,067点、土器（かわらけ以外）・土製品60点、瓦質製品133点、瓦14点、国産陶器858点、舶載陶磁器50点、金属製品17点、銅銭32点、石製品61点、木製品544点、漆器14点、自然遺物（骨・種子・貝殻）62点、近世陶磁器４点である。全体的には寺院に多い喫茶関係のものがある程度出土している。内訳は瀬戸天目茶碗21点・瀬戸小壺（茶入れ）２点・瓦質風呂６点・茶臼２点である。そのほか瀬戸花瓶（灰釉の尊式がほとんど）15点・瀬戸香炉５点・瓦器質香炉６点等宗教施設の存在を想起させる遺物が多い。出土様相は保寧寺跡調査地点とさほど変わらないと思われる。

第一章で述べたとおり本調査地点周辺は建長寺の旧境内であり、霊光庵という塔頭が存在していたと考えられる。今回の調査では寺院を想起させる遺構は何ら検出されなかった。保寧寺跡の調査でも同様である。寺院は往来が多かったであろう街道沿いにではなく、谷戸内もしくは山裾に建てられていたのであろう。延宝の「建長寺境内絵図」を見ると霊光庵跡及び３つの塔頭跡（正本庵・傳衣庵・東宗庵）が山裾の１段高い平場に書かれているように見える。北西は尾藤谷の谷頭と接するあたりから南東は長寿寺北までが平場の範囲である。山内道から平場への入口は正本庵跡前（山ノ内こども広場の入口辺りか？）に一カ所のみみえる。

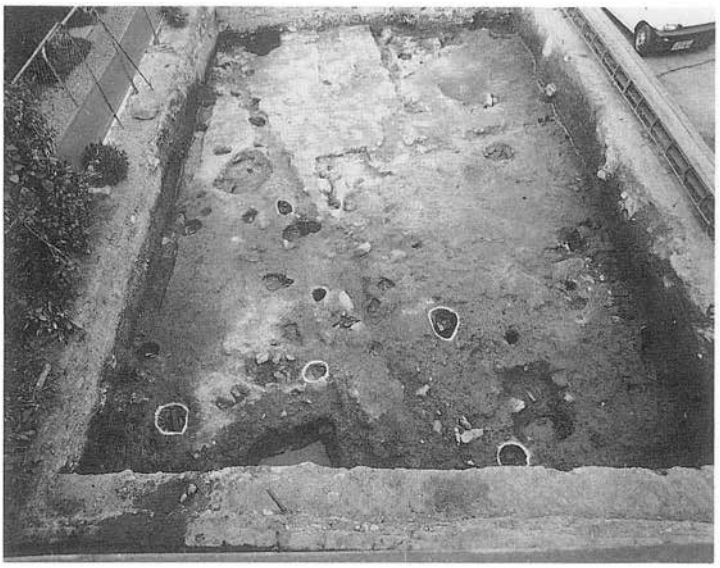
写　真　図　版

1. 調査地点近景

2. 第1面全景（西から）

3. 第1面かわらけ溜（東から）

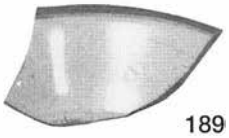
図版2



4.　第2面全景（西から）

5.　第2面　井戸（南から）

186


189

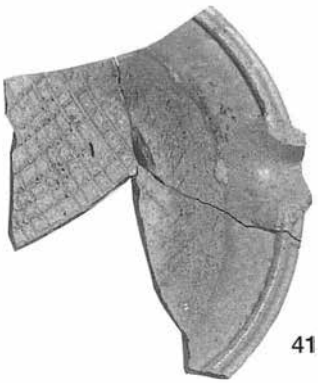
188

131

27

47

101


41

38

153

109

173

180

207

213

156

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
けんちょうじきゅうけいだいいせき 建長寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市山ノ内白黒小路字1489番1外	204	397			950720～950913	107	自己住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
建長寺旧境内遺跡	寺院跡	室町時代	掘立柱建物 井戸 土壙 溝状遺構 柱穴 かわらけ溜	かわらけ 常滑窯製品 瀬戸窯製品 石製品	

十二所稲荷小路遺跡（No.321）

じゅうにそいなりこうじいせき

十二所字宇佐小路740番２外地点

例　　言

1．本報は鎌倉市十二所字宇佐小路740番２外に所在する十二所稲荷小路遺跡の発掘調査報告である。

2．調査は個人専用住宅の造成に先立って実施された。調査面積は54㎡。

3．調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が1995年８月４日から26日まで行った。

4．本報の編集・執筆・写真撮影は、大河内勉・汐見一夫が行った。図版１・２－１は、リモコン式撮影装置により木村美代治が撮影したものを使用した。実測図及び挿図・図版作成には渡辺美佐子・杉山知恵子の協力を得た。

5．調査体制は以下の通り。

調　査　員　大河内勉・汐見一夫
調査補助員　渡辺美佐子・杉山知恵子
作　業　員　長島三男　本瀬正道　吉本脩三
　　照井三喜　芝崎英助　河原龍雄
　　箕田孝善　富岡眞之

6．出土遺物等の調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　地理的・歴史的環境（大河内勉）……64
第二章　調査の概要（汐見一夫）……65
第三章　検出遺構（汐見一夫）……66
第四章　出土遺物（大河内勉）……68
第五章　まとめ（大河内勉・汐見一夫）……70

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡……64
図２　４級基準点位置関係図……65
図３　調査区全測図及び土層堆積図……67
図４　出土遺物……69

図　版　目　次

図版１．　調査地点近景……73
１．鑪ヶ谷方向を望む（南から）
２．　同　上　（南から）
３．西側上部平場（南から）
図版２．　調査区全景……74
１．完掘状 況（南から）
２．　同　上（東から）
３．　同　上（西から）
図版３．　検出遺構（１）……75
１．井戸（東から）
２．石切状 遺構（２）
３．　同　上（上方から）
図版４　検出遺構（２）……76
１．溝２・３、水溜め状遺構（北上方から）
２．小河川流路（西から）
図版５　出土遺物（１）……77
図版６　出土遺物（２）……78

第一章　地理的・歴史的環境（図１）

調査地点は鎌倉市街の東方、滑川上流域の左岸に位置する。図１で周辺の環境を概観したい。

滑川は図の右上から左下に蛇行しながら流れ、ほぼそれに沿うように六浦道が走っていたようである。図の右上からさらに六浦道を進むと朝比奈切通しに至り、六浦に通じている。六浦道は仁治２年(1241)着工。現在に至るまで幹線道路として使われている（切通し区間は戦後に新道が建設された)。

図の右上の滑川（太刀洗川）沿いでは地点２・３で発掘調査が実施されていて、地点３の南東側には数カ所のやぐら群も確認されている。十二所神社は光触寺の鎮守として境内にあったものを、天保９年（1838）に現在地に移したという。十二所の氏神社。

図の中央上に見える谷戸は現在番場ケ谷と呼ばれ、中世期には月輪寺という寺院の存在が知られ、また多くのやぐらが確認されている。地点４のほか２個所でやぐら群の発掘調査が行われている。

光触寺は滑川の左岸、宇佐小路川の流れる谷戸の前部に位置する。時宗。弘安元年（1278）開創と伝えられ、往時には多くの塔頭を擁していたようである。また、裏手にはやぐら群が存在する。境内にある塩嘗地蔵と呼ばれる石仏はかつて、六浦道に面して建てられていて、六浦の塩売りが鎌倉への途中に初穂を供えたと言われている。

光触寺の西方、滑川の右岸には明王院と大慈寺跡が並ぶように存在する。明王院は将軍藤原頼経が嘉禎元年（1235）に大慈寺境内に創建。寺格は高く、別当職は鶴岡八幡宮などと並ぶ地位にあった。真言宗。本尊は五大明王。当院の背後にもやぐら群が形成されている。大慈寺は将軍源実朝が建暦２年（1212）に開創。諸堂宇の整った大寺であったと推測される。衰退した時期は不明だが、江戸時代末期には丈六堂のみが残っていたという。宗旨未詳。

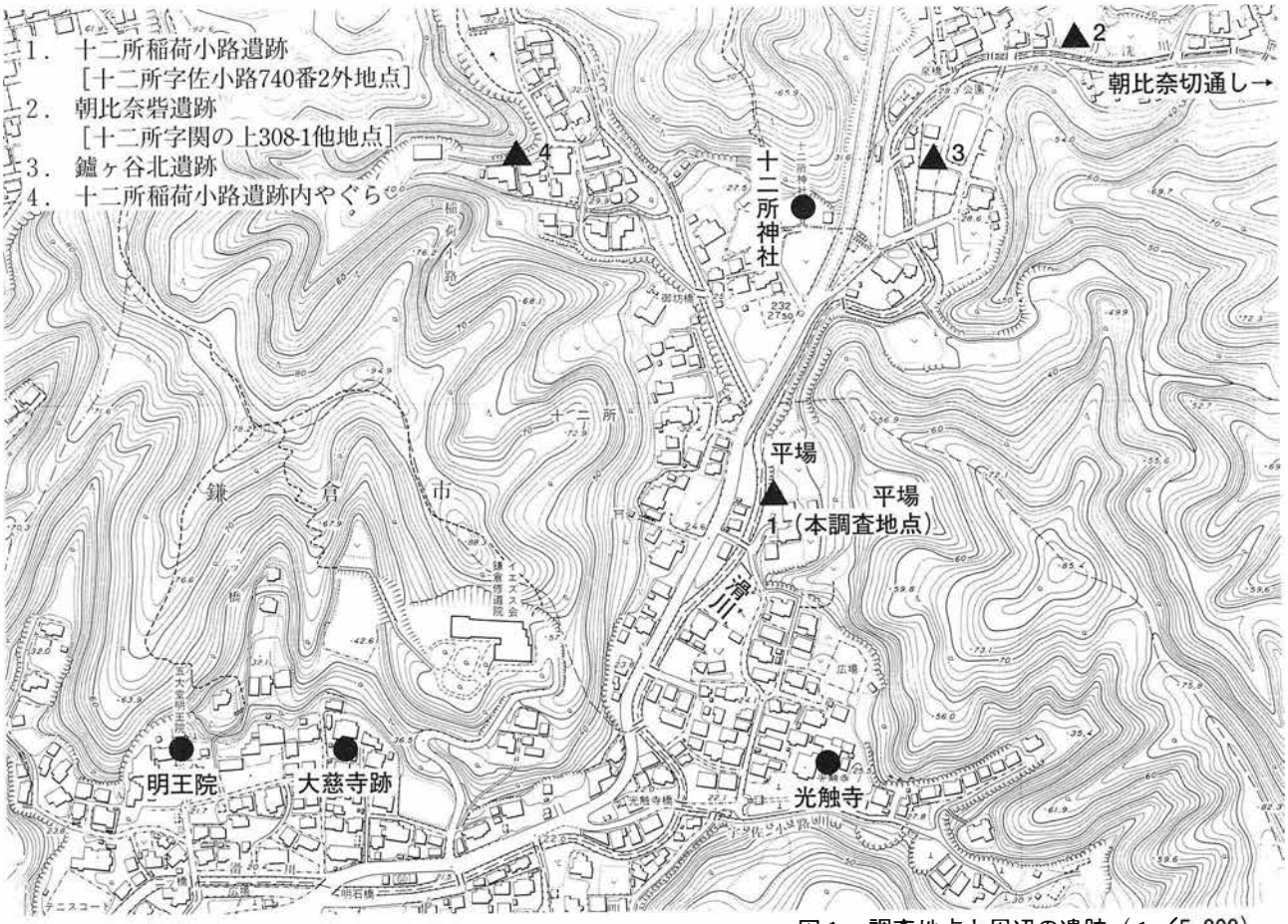


図１　調査地点と周辺の遺跡（１／5,000）

第二章　調査の概要（図２）

調査の開始にあたり、先行して行われた試掘調査の結果を元に重機により表土を掘削した。調査区内北寄りの海抜25.5m付近で岩盤を検出し、概ねこの高さを調査開始面として以下手掘りで調査を進めた。表土掘削の際に、調査範囲内の南東隅一帯は近現代の掘返しや木の根等で撹乱されていることが判断された。施工業者の協力を得て、調査に先行して深掘りをし出土品を採集した後に、残土置場として調査区外と見なした。表土掘削の結果、調査面は現地表面よりかなり低い事等から方眼グリッドを設定することは困難であり、調査区内に任意の軸線を設定し光波測定器にて平面図等の記録を採る事とした。

設定した軸線と４級基準点との関係を図２に示した。付近車道上点Ｂは、現地に於いては４級基準点との表記がされていたが地図上に記載されていない為、三級基準点と点Ａを結ぶラインを基に角度と距離を示した。調査の際には点Ｃを光波測定器の設置位置とし、平面測点及び海抜高を記録した。設定した軸線は磁北より、17°25′30″東に振れている。

調査開始後掘進める内に、調査区北側で検出した岩盤は試掘壙付近で人為的に急激に落込み段差を生じていた。段の下で岩盤は、調査区の直ぐ西側の滑川、及び滑川に向って流れ落ちる自然地形に従って南且つ西への強い傾斜もつ。

堆積土層を観察しつつ掘進めたが、人為的な整地層は認められず岩盤の傾斜に伴う斜面堆積が観察された。各堆積土中に内包される遺物は少なく、段の下部分の上層は鉄分を含む耕作土様の堆積土で、近世遺物が大勢を占めていた。下層に於いても、かわらけ等は出土するものの同層位から近世染付けが出土する等、調査地点は近世に於いてかなり手が加えられていることが窺えた。段の上岩盤上でも、表土掘削後に僅かに残した堆積土からは遺物は殆ど出土せず、結果出土遺物から中世に帰属すると判断される遺構は少ない。堆積土層を観察しつつ酷暑の中岩盤を追いかけて人力で掘り進め、最終的には残土置場を除いた調査区全体で岩盤を検出し、人為的に切崩した段差や、井戸・石切状 遺構・溝５状・水溜め状 遺構等を検出した。

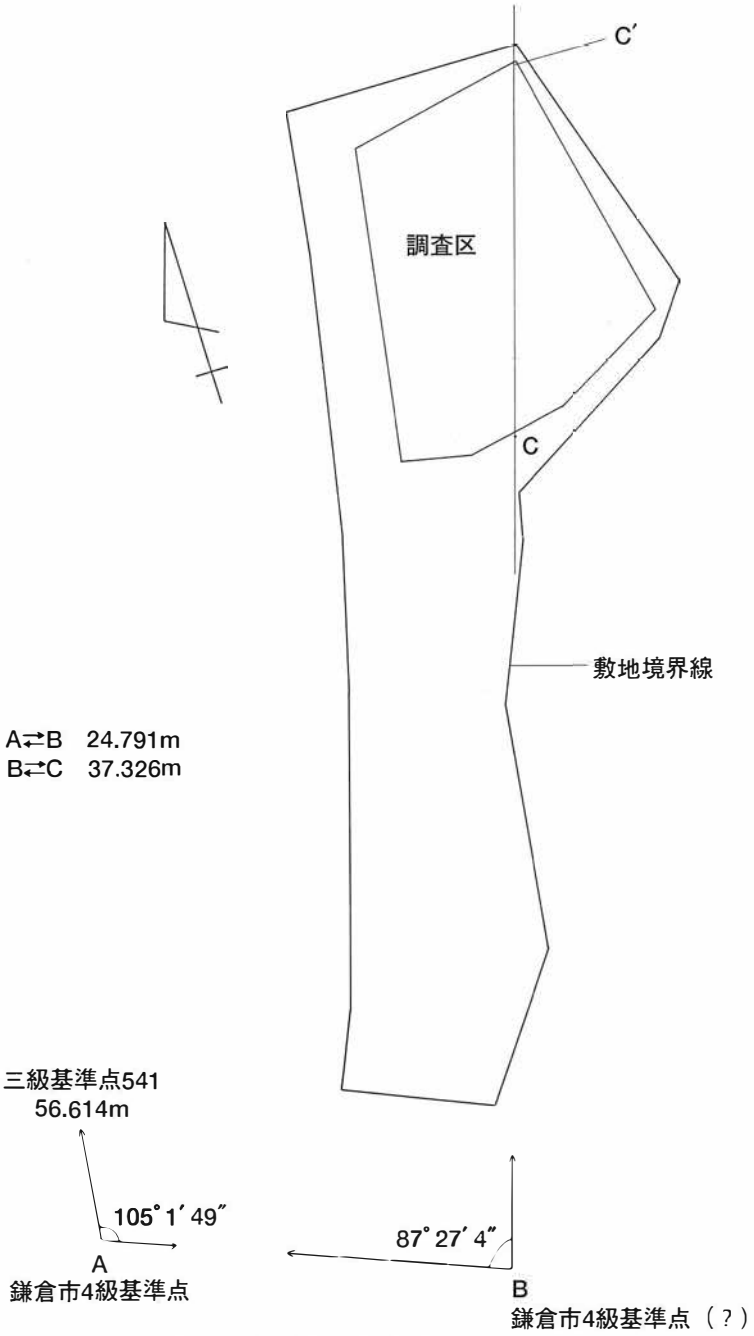


図２　４級基準点位置関係図

第三章　検出遺構（図３）

調査時に於いて、調査区の形状 に合わせて南北方向にセクションベルトを設定し、東西はそのベルトを境に、南北は調査区内基本軸線Ｃ上のＣから５ｍを境に、出土遺物を層位的に採り上げた。又、便宜上人為的に切崩された岩盤の北側を段上、南側を段下とし第四章を含め本報ではこの呼称を用いる。

以下、調査区北東より順次各遺稿について説明を加える。

井戸は岩盤の段差を切って掘られている。確認した範囲内では平面形やや歪んだ方形で、少なくとも段上より掘り込まれ、一段幅狭なテラスが設けられた後に主体部が掘り込まれる。テラス部分の規模は南北1.15m×東西1.10m程で、井戸枠等は確認されなかった。段上から深さ約２ｍの海抜23.4mまで掘り下げたが、井戸底は確認できなかった。

石切状遺構は、段上の岩盤から恐らく方形板状 の石材を採取した様に観察された遺構である。東側はほぼ垂直に切出し、北側は緩斜面状 の部分に不規則な鑿状 の工具痕が観察される。西側及び南側部分の切出し痕は、後世の削平及び井戸に因り不明。

段上は人為的に開削された岩盤面であり、排水の役目を果すと考えられる溝が検出されている。

溝１は東西方向に走行し、溝幅は調査区外の為不明、東西約1.8m確認された。底面は西方に向って傾斜し、段上を排水し溝２に流す様に見受けられる。

溝２は南北方向に走行し、南端段差の際で東にねじれる。溝幅は上場で44cm程、南北方向では1.4m程確認された。底面は東側がより深く掘られ南に向って傾斜し、段下溝４に流れ落ちる。

溝３は南北方向に走行し、東寄りに湾曲する。溝幅は上場で約45cm程、南北方向では約1.1m程確認された。底面は南に向って傾斜し、段下溝４に流れ落ちる。

溝４は段下際を東西方向に走行し、西側の滑川に向って急激に傾斜する。溝４の起点東側は段下の岩盤レベルが調査区内では最も高く、付近の排水の役目を果していたと考えられる。土層断面の観察から、掘り込み層位或は溝５との新旧関係は判然としなかった。

溝５はやや北に振れた東西方向に走行し西に向って走行する。東側の溝の起点ははっきりとした段差が生じているが、西に向うに従い幅やその範囲共に曖昧となる。起点の付近は自然地形の岩盤が南に向って下り始め、或は人為的な遺構ではないかもしれない。

水溜め状遺構としたものは、溝２・３・４が段下で丁度合流することからこのような名称を付したもので、言換えれば、偶然そのような箇所に円形の小土壙が３基、異なるレベル底面で重複しているに過ぎない。調査地点の立地から観ると、東背後に丘陵を抱え眼前に河川控え、六浦道に接しようという環境であり、北東側平場には何か在るのではないかとの多少の可能性を含み置いた。

段下の溝５より南は、いくつかの段差が確認されたが何れも人為的な所作とは感じられない。**図３**には調査時に観察された侭を表現したが、段差や稜線の走行方向共に、それ程明確ではない（断面図Ａ参照）。これらの段差は近世に於いては既に存在していたとされる、滑川へ流れ落ちる自然流路の肩部であろう。東側の丘陵の水を集めて流れていた為であろうか、幾度かその位置が変っているようだが出土遺物からは限定できるものではない。

各遺構は全て岩盤上で確認している為、新旧関係は根拠に乏しいと言わざるを得ないが、段上開削面と溝が相対的には古く、後に石切状遺構が掘られ、井戸は遺構群の中では新しいと考えている。自然流路と思われる調査区南半の諸段差は井戸と同時期若しくはそれ以後であろう。

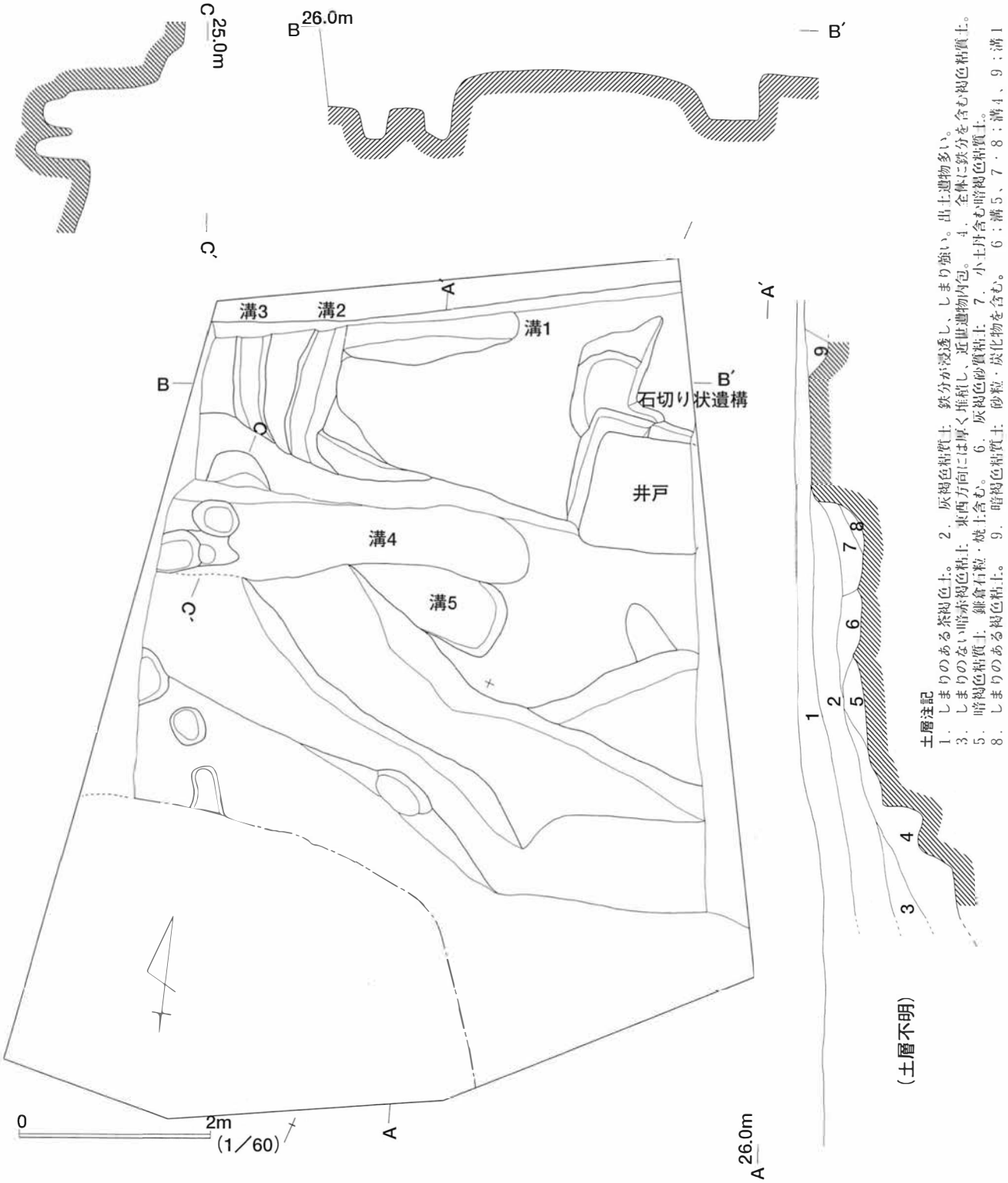


図3　調査区全測図及び土層堆積図

第四章　出土遺物（図４）

遺物は各層位から出土し、テンバコで約２箱得られた。年代的には近世以降の遺物が多く、中世に属するものは少ない。各出土位置・層位は図３の断面図Ａの土層番号と一致する。

１～６はかわらけ（轆轤成形）。１～４が大型、５・６が小型。１は体部が開き気味に内彎して立ち上がる。外面に鉄錆が付着している。２はやや小振りで、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。３は体部が丸みを帯び、口縁部は外反気味。５・６はともに小片を図示したものである。器形や復元径は全く異なるが、胎土などから見ると、同一個体の可能性もあろう。この他に図示しなかったが、灯明皿も見られた。かわらけはすべて中世に帰属すると思われ（図示しなかった分も含め）、後半期のものが比較的多く含まれているようである。出土位置は１・４が段下３層、２・５・６が段下２層、３が段上岩盤開削面上。

７・８は常滑の捏鉢。両者とも口端部が外側に少し張り出す。７は片口部分が見られる。７は段下３層、８は溝３出土。常滑は他に甕の破片も出土しているが、すべて中世と思われる。

９は北部系の山茶碗。高台には細かな圧痕が認められる。中世前期。溝３出土。

10は土器質の手焙り。口端部は内側に張り出す。中世前期。段下２層出土。

11・12は瓦。11は平瓦、12は丸瓦。両者とも凸面は縄目の叩きが行われるが、12は磨り消している。11には凹面に引っ掻いたような痕が多数見られる。12の凹面は布目痕。11は全体的に軽く摩耗している。11は井戸内、12は段下３層出土。ともに中世前期と思われる。瓦では図示したもの以外に、凸面に斜格子の平瓦が見られたほか、近・現代の桟瓦が多量に出土している。

13～15は国産陶器。13は京焼風の碗。釉は淡黄色を呈し、高台付近を除いて施される。高台は削り出している。14・15は灯明皿で、14は油皿、15は受皿と思われる。ともに鉄釉が施される。13・15は段下２層、14は段下３層出土。

16～25は国産磁器（染付）。16・17は小皿。16は体部内面に花唐草文、内底面中央付近に印版による五弁花文が施される。内底面の外周部は蛇の目状に釉剥ぎされる。17は口縁部は輪花状を呈し、鉄銹が施されている。内底面には山水文が見られる。18～25は碗。18は体部外面に二重の網目が描かれる。19～22は口縁がわずかに外反する。体部外面には花卉文・草花文・扇形文などが描かれ、内底面にも認められる。23・24はやや小振りで、口縁部はわずかに外反する。体部外面には草花文が見られる。23は口縁部に鉄銹が施されている。25は広東碗。体部外面にわずかに文様が観察される。16・18・19・21～23・25は段下３層、17は段下２層、24は段下２層出土。国産の陶磁器は図示しなかったものも多いが、全体的に年代は近世後半以降に属するものが目立つ。

26は北宋銭の「熙寧元宝」（1068年初鋳）。

27～29は砥石。27はもともと厚さ３cm前後の方柱状を呈していたようであるが、変則的な使い方をしている。上面と両側面が砥面となっているほか、斜め方向にも研いで砥面が形成される。上面の一部と下面は未使用で、擦り切り痕も見られる。28は上・下面と両側面が使われている。29は上・下面と側面の一部が使われている。上・下面はともに中央付近に稜が生じていて、砥面が２分割されている。両側面・両端面には擦り切り痕が顕著に残っている。３点とも段下２層から出土。年代は不明。

以上の他に、自然遺物では骨なども若干出土している。

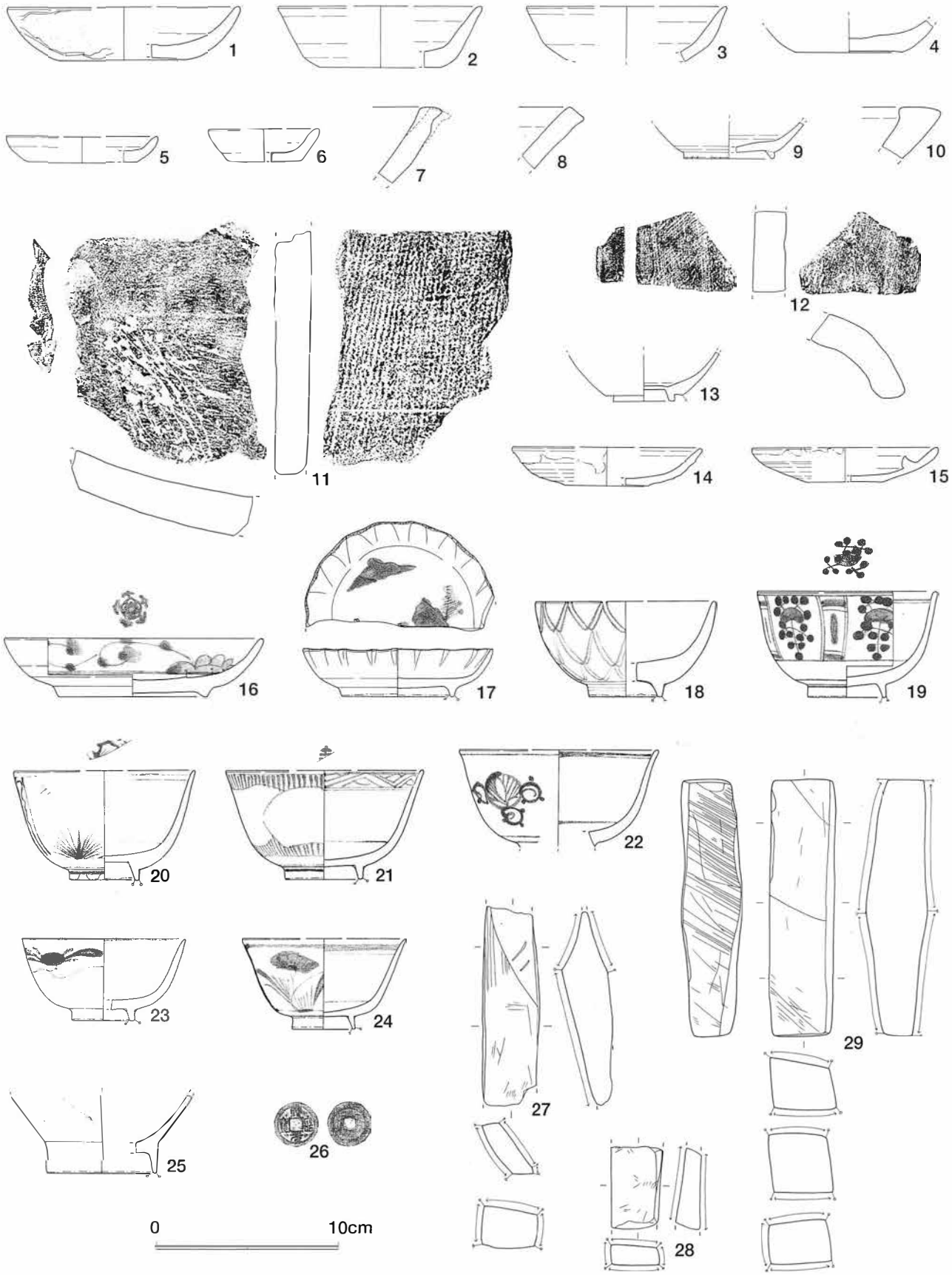

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

図 4　出土遺物

第五章　まとめ

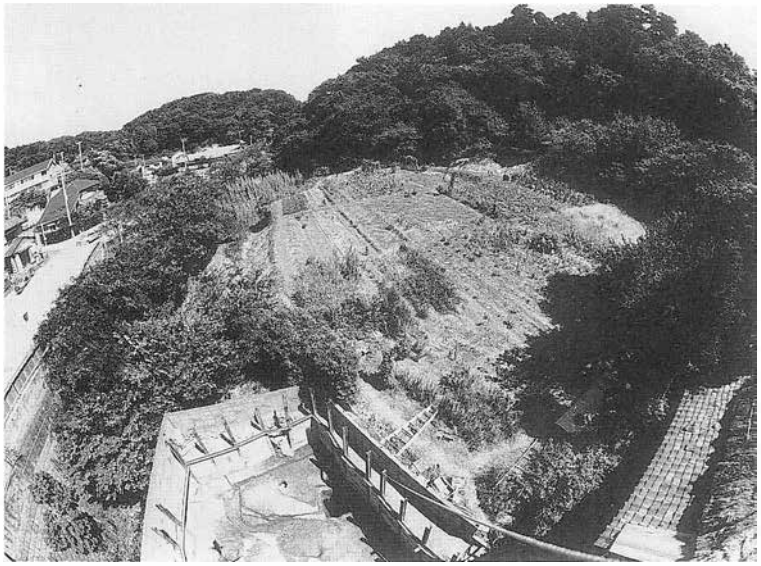
調査地点は滑川のすぐ東岸にあたり、近辺は現在宅地や畑地となっている。周辺には大小の谷戸が形成されているが、本地点は北側の鑪ケ谷の谷戸と南側の光触寺の谷戸に挟まれた、小さな谷戸内に位置する（図１参照)。この谷戸は全体で奥行き110m、幅100m（最大）ほどで、上下に２面の平場が存在するが、造成された時期は分からない。上部の平場は東側の丘陵寄りにあって、広さは一辺が30～40m程度、下部の平場は西側の滑川寄りにあって、広さは40×110m程度だが内部には段差がいくつか見られさらに分割される。調査地点はこの下部の平場の最前部で、滑川の護岸際である。平場の内部でもレベルが最も低く、調査区の南端にはかつては小川が流れていて滑川に注いでいたようである（現在はコンクリート管が埋設されている)。調査地点は滑川の川底よりかなり高く（現地表より)、調査区の西側にはすぐ滑川のコンクリート護岸が造られていて、ほぼ垂直に近く落ちている。調査で検出された岩盤よりも川底は低い位置にあることから、護岸部分で岩盤も急激に落ち込んでいると思われ、以前の川岸は上流部と同じように、岩盤が露呈した状態であったのであろう。六浦道は本地点付近では、滑川の西側を平行に走る現在の県道金沢鎌倉線と同じ位置に通っていたと考えられるが、調査地点は六浦道から折れて滑川に架かる橋を渡り、少し北に進んだ所に位置する。また、橋からは南側に伸びる小道があって、光触寺前を経由しており、古くから存在していた道の可能性もあろう。

本調査地点で検出された各遺構の年代は、調査時出土遺物と重複の新旧で観ると、段差と溝群が調査区内では古い時期と考えられる。溝２・３の覆土は上層近世耕作土とは異なり、出土遺物にも近世以降のものは混在しない。岩盤上に平場を開削し、排水用に溝を掘ったとすれば多少の前後はあれ、一連のものと考えられる。これらは中世に属する可能性はあるが、ある遺構群の端部と考えられその性格や明確な時期は不明といわざるを得ない。その後、どれくらいの時期差かは分らないが石切が行われ、更にその後井戸が掘られた頃には近世になっていると想われる。

遺物は堆積土中から土器・陶磁器を中心に出土したが、総量は多くはない。時期は中世前期から現代まで及んでいる。中世前期の都市鎌倉期の遺物としては、かわらけ・常滑・瓦などが見られたが量はごく少なく、この地での生活の痕跡は明確ではない。さらに中世後期から近世前半頃にかけても遺物は目立ったものはなく、同様の傾向が伺える。この地で遺跡として捉えられるのは近世の後半期以降で、遺物も染付等の国産陶磁器類が廃棄された形で比較的まとまって得られた。陶磁器は雑器類が中心で、この時期には農村のような景観も想定される。

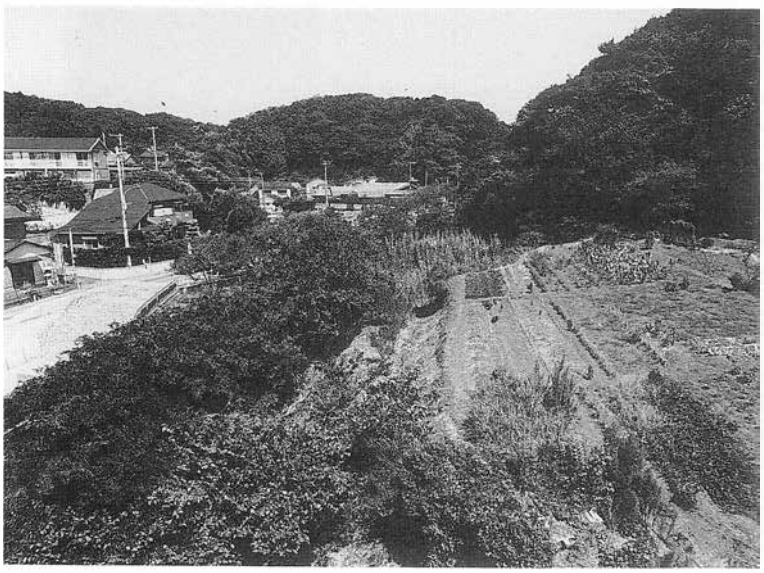
写　真　図　版

図版1　調査地点近景



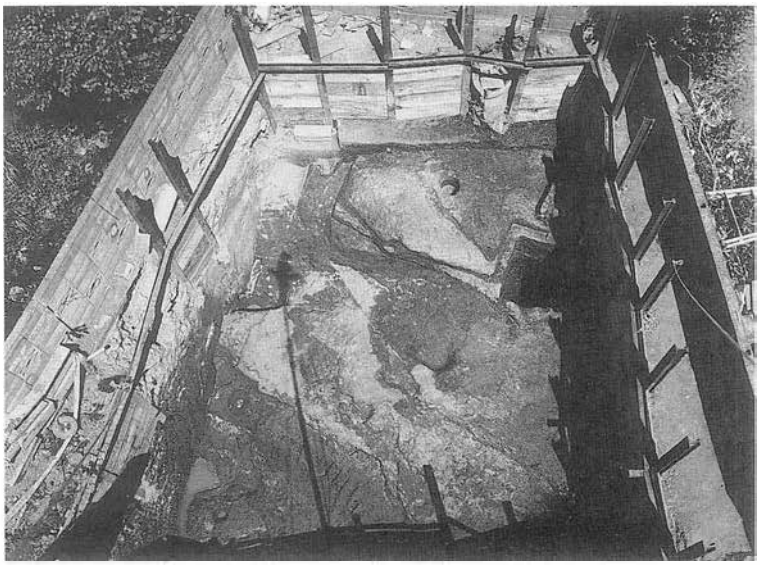
1.　鑪ヶ谷方向を望む
（南から：魚眼レンズ使用）

2.　同　上
（南から：魚眼レンズ使用）



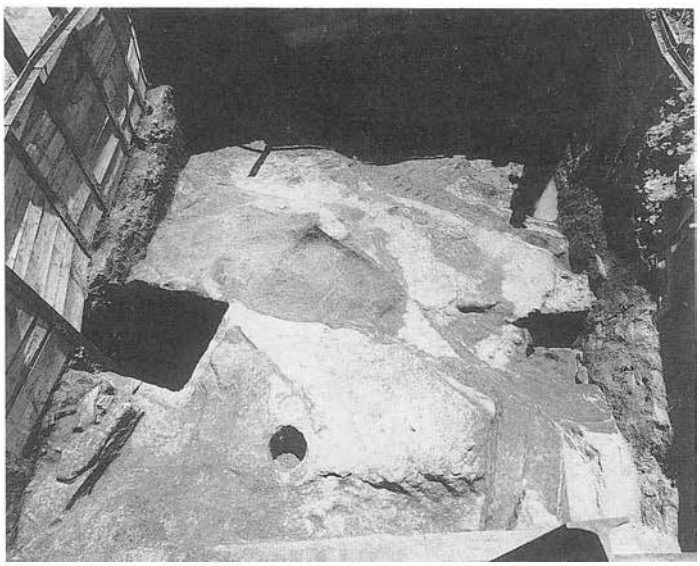
3.　西側上部平場
（南から）

図版2　調査区全景

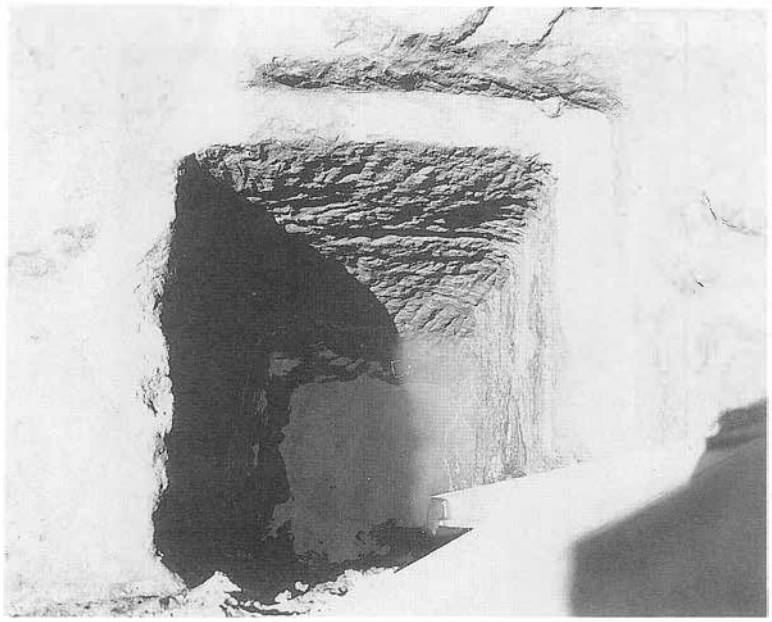


1.　完掘状況（南から）

2.　同上（東から）



3.　同上（西から）



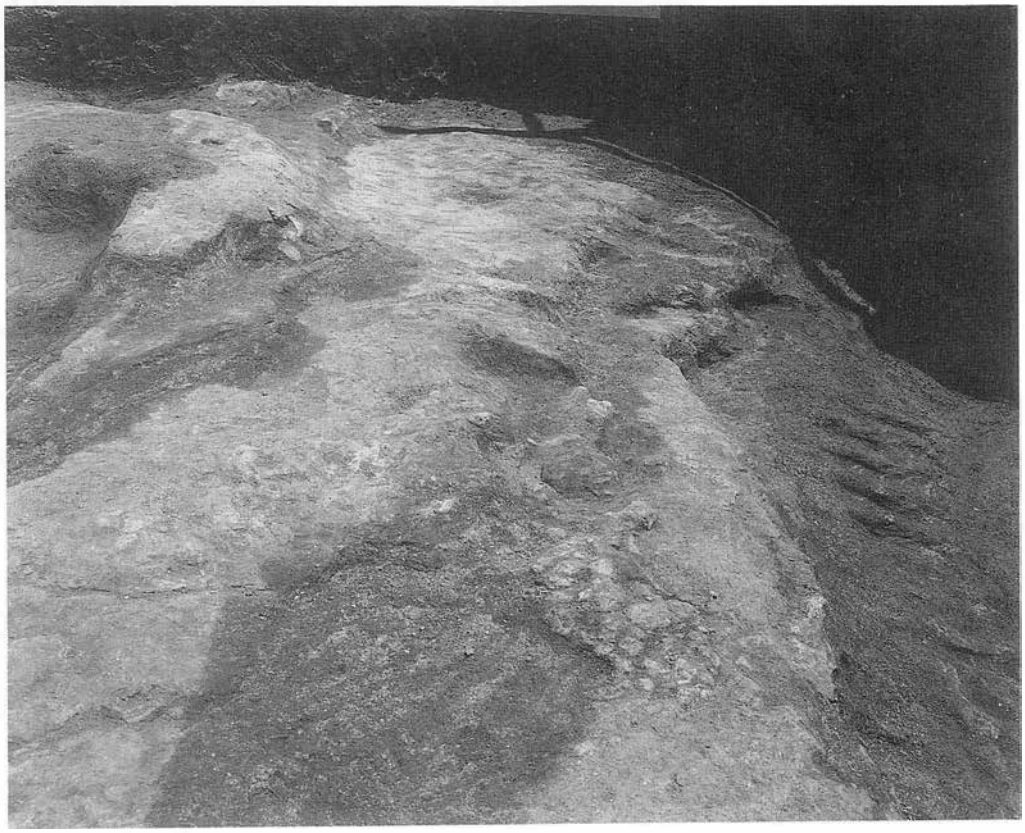
1.　井戸（東から）

2.　石切り状遺構（西から）

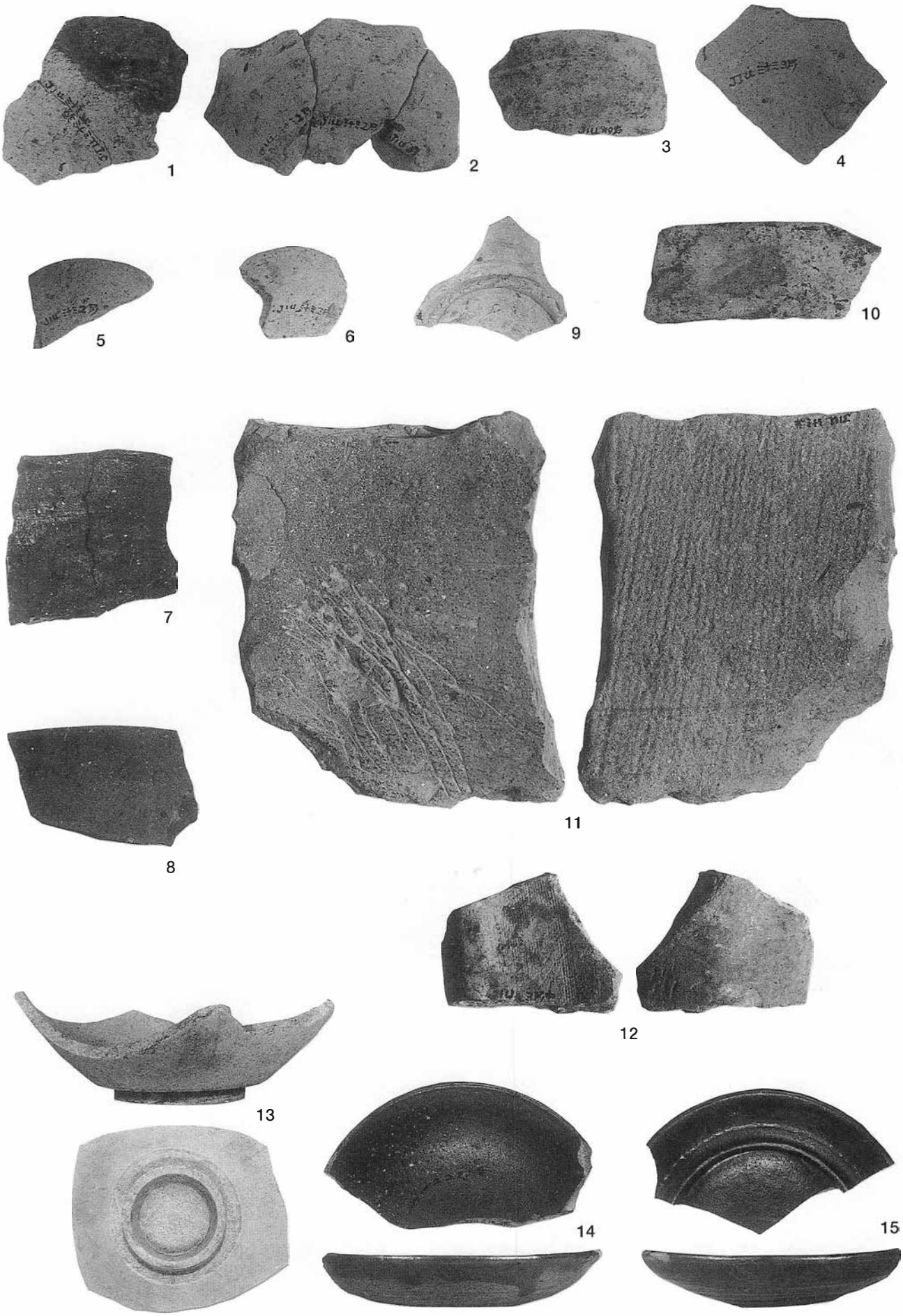
3.　石切り状遺構（上方から）

図版4　検出遺構（2）

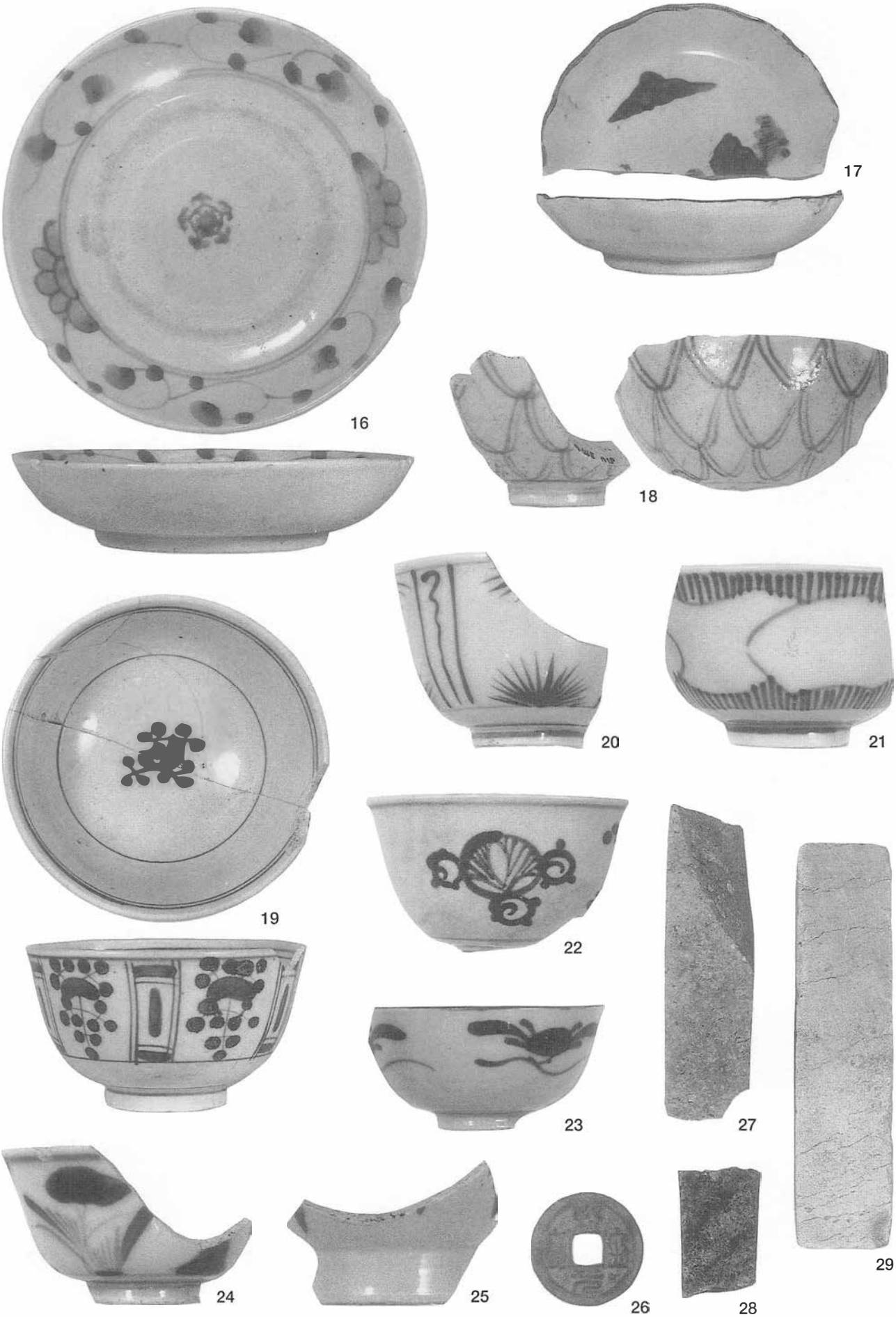
1.　溝2・3、水留め状遺構（北上方から）



2.　小河川流路（西から）


1
2
3
4
5
6
9
10
7
11
8
12
13
14
15

図版6　出土遺物（2）



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	第2分冊
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	大河内勉・汐見一夫
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248　神奈川県鎌倉市御成町18番10　TEL　0467－23－3000
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
じゅうにそ いなりこうじ 十二所稲荷小路	かながわけんかまくらしじゅうにそ 神奈川県鎌倉市十二所字宇佐小路740番外2	14204	321			19950804 ～ 19950826	54	個人専用住宅造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
十二所稲荷小路	都市	中世～現代	井戸、溝、石切り状遺構、水溜状遺構	かわらけ、常滑、瓦、国産陶器、国産磁器 砥石 テンバコ2箱	

わかみやおおじしゅうへんいせきぐん
若宮大路周辺遺跡群（No.242）

由比ガ浜一丁目118番７地点

例　　言

1．本報は、鎌倉市由比ガ浜一丁目118番７に所在する住宅建築に伴う発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成７年12月18日から平成７年12月29日にかけて実施した。

3．本報の執筆は遠藤雅一が行い、これを田代郁夫・継　実が編集した。また、資料整理及び図版作成には大坪聖子・佐藤慈子・深尾義子・小西さつき・鈴木真由美・辻由美子・笠原さやからがあたった。

4．本報に使用した写真は、遺構を上田求実が、遺物を笠原さやかが撮影した。

5．調査体制は以下のとおりである。

調 査 主 任　田代　郁夫

調　査　員　継　実・浜野洋一・土屋浩美・松山敬一郎・大坪聖子

調査補助員　渡辺王夫・高橋健一郎・遠藤雅一・岩崎卓治・町井俊逸・橋本勝正・安田信夫・上田求実・根本 公・森かお里

6．遺跡に於いて出土した石製品、礫の石材の産地同定は神奈川県立旭高校の上本進二氏よりご教示、ご協力を賜った。記して深く感謝致します。

7．遺跡に於いて出土した貝類、鳥、獣、魚骨、骨製品の同定にあたっては、慶応義塾大学の桜井準也氏よりご教示、ご協力を賜った。記して深く感謝致します。

8．発掘調査及び本書作成に際し、下記の方々よりご協力、ご教示を賜った。記して深く感謝致します。（敬称略・順不同）

中田 英（神奈川県教育委員会）松尾宣方・玉林美男・永井正憲・福田誠・菊川秀政（鎌倉市教育委員会）馬淵和夫・大三輪龍彦・手塚直樹・河野真知郎・斎木秀雄・宗臺秀明・大河内 勉・宮田真・木村美代治・原 廣志・宗臺富貴子・瀬田哲雄・清水菜穂・菊川 泉・汐見一夫（鎌倉考古学研究所）佐藤仁彦（逗子市教育委員会）㈲湘和総合開発

本　文　目　次

第一章　遺跡の歴史・地理的環境……87
第二章　調査の経過と基本層序……89
Ⅰ　調査の経過……89
Ⅱ　基本層序……90
第三章　検出した遺構と出土した遺物……92
Ⅰ　方形竪穴建築址……92
Ⅱ　大型土壙状 遺構……97
Ⅲ　土壙 ……101
Ⅳ　井戸址 ……110
Ⅴ　遺物包含層中出土遺物（中世）……110
Ⅵ　遺物包含層中出土遺物（近・現代）……113
Ⅶ　中世基盤層直上出土遺物 ……113
Ⅷ　表採遺物 ……113
Ⅸ　自然遺物 ……114
第四章　まとめ ……115

挿　図　目　次

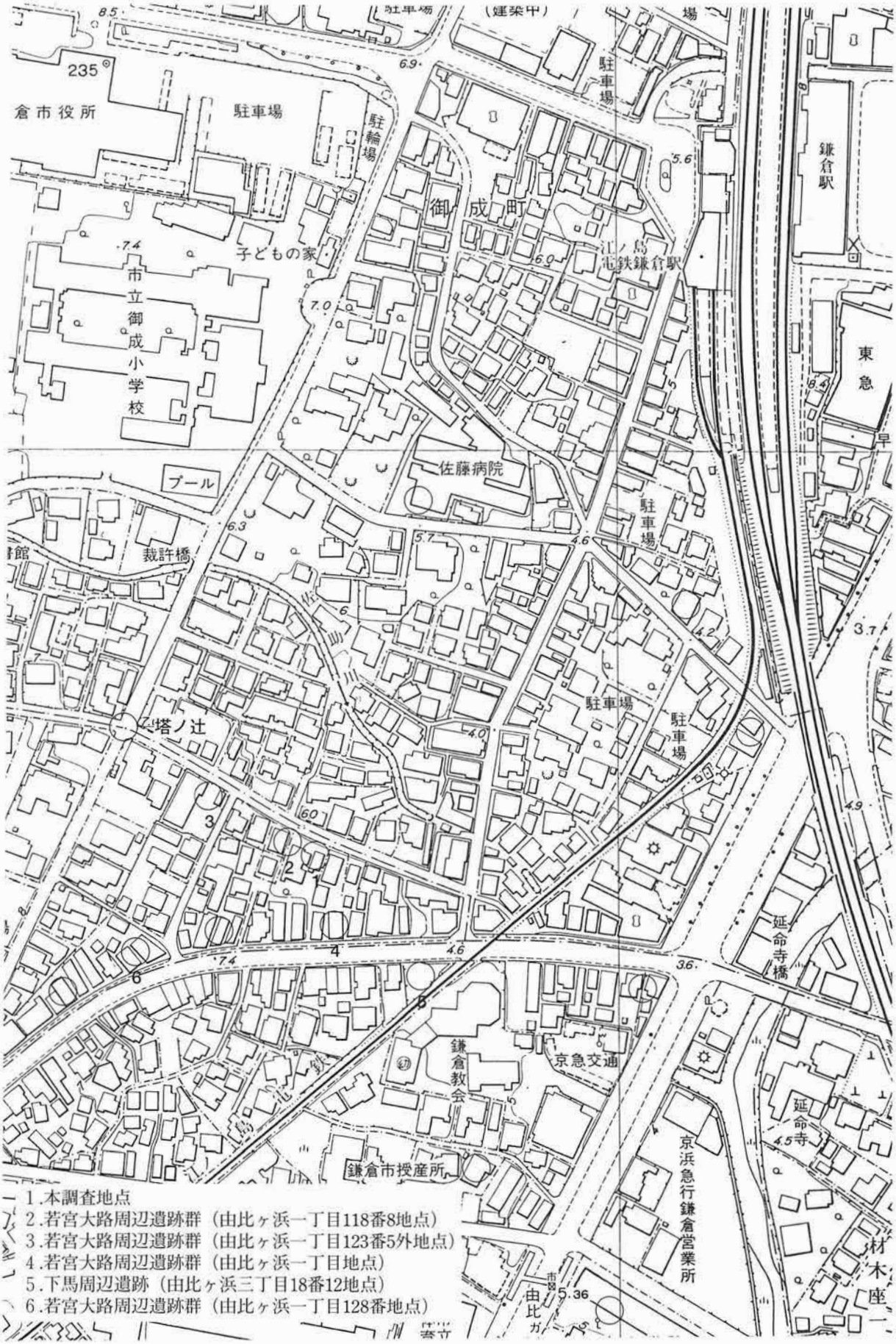
第 1図　遺跡位置図……86
第 2図　堆積土層図……90
第 3図　調査区全体図……91
第 4図　遺構全図……93
第 5図　方形竪穴建築址遺構図……94
第 6図　方形竪穴建築址出土遺物……96
第 7図　大型土壙状 遺構遺構図……98
第 8図　大型土壙状 遺構出土遺物……99
第 9図　土壙 1 ……101
第10図　土壙 2 ……102
第11図　土壙 3 ・ 4 ……103
第12図　土壙 5 ……104
第13図　土壙 6 ……105
第14図　土壙 7 ……106
第15図　土壙 8 ……107
第16図　土壙 9 ……108
第17図　土壙11 ……108
第18図　土壙10・12・13・14・16 ……109
第19図　土壙15 ……109
第20図　井戸址 ……110
第21図　遺物包含層中出土遺物（中世）……112
第22図　遺物包含層中出土遺物（近・現代）…113
第23図　中世基盤層直上出土遺物 ……113

表　目　次

第1表　出土遺物観察表 ……116
第2表　出土遺物点数表　かわらけ ……122
第3表　出土遺物点数表　国産・舶載品 ……123
第4表　出土遺物点数表　礫 ……124
第5表　出土遺物点数表　貝類 ……126

写真図版目次

図版 1　調査区全景写真 ……129
図版 2　方形竪穴建築址 ……130
図版 3　大型土壙状遺構 ……131
図版 4　土壙1・2・3・4 ……132
図版 5　土壙5・6 ……133
図版 6　土壙7・8・井戸址 ……134
図版 7　方形竪穴建築址出土遺物 ……135
図版 8　大型土壙状遺構出土遺物 ……136
図版 9　土壙1～6出土遺物 ……137
図版10　土壙7・8・9・11・15・遺物包含層中出土遺物（近・現代）・中世基盤層直上出土遺物 …138
図版11　遺物包含層中出土遺物（中世）……139



第１図　遺跡位置図（調査地点近辺の主な発掘調査地点）

第一章　遺跡の歴史・地理的環境

由比ガ浜一丁目118番７地点は「若宮大路周辺遺跡群」(神奈川県遺跡台帳№242) 南西隅にあり第１図で見る様に市立中央図書館の南側の道路が今小路と交叉し御成通りへと抜けるほぼ中間、道路の南側に面している。現地表の海抜数値は約6･7ｍで周辺は商店街と接した住宅地になっている。

本調査地点の南側には海抜10ｍ前後を測る自然砂丘が西は甘縄神明社南から、東は一ノ鳥居周辺まで続いている事が掴めている。これは現在の海岸線に平行し、弥生時代後期には形成されていたと思われる。砂丘の内側である北側部分では長く湿地帯が広がっていたが、古代末～鎌倉時代初頭には、飛砂の堆積によって湿地は埋まり乾燥した砂地となるようである。

本調査地点はこの飛砂によって形成された砂丘後背部の砂地の上にあり、市街地でも低位な場所に立地している。又、調査地点北側では道路に接して一段低くなっている所があって旧佐助川の南岸と考えられている。

近年、砂丘地域での発掘調査の増加に伴い、この地域の性格、都市における位置付け等、次第に明らかになりつつあるが、前述した道路のうち今小路と交叉する所から東側、御成通りへと抜ける地域については、発掘調査例は希少であり、1987年に調査の実施された由比ヶ浜一丁目118番地点、1994年に実施された由比ヶ浜一丁目123番５外地点、そして本調査地点の３ヶ所のみである。

本調査地点の北側の道路については馬淵和夫氏が由比ヶ浜一丁目123番５外地点の報告書中で、これを大町大路とし文中、「大町大路は西の佐助山山裾にある現在の御成中学校門前から、東の名越山山裾にいたる。東半分は東端近くを除いてほぼ奈良時代の東海道（現在の国道134号線旧道）を踏襲するが、西半分は鎌倉時代に新たに敷設されたものだろう。」と記している。又、道路の性格、今小路と交叉する地点（地域）については『鎌倉市内を南北に通じる幹線道路は３本ある。若宮大路を中心として、東側に小町大路、西に今小路（大路？）である。これに直交するのが、鶴岡八幡宮社頭を通る横大路と、下馬四つ角で若宮大路と交差する大町大路である。ごく簡単に言って、中世期の鎌倉では、若宮大路以外のこれら４本の道路に囲まれた長方形区画の内側が都市の中核部であったと考えられる。そしてこの区画の東北と西南の角には、大三輪龍彦が指摘するように（大三輪1989)、おそらく結界の標識としての塔が立っていた。西南の角付近に今も残る「塔ノ辻」の地名はそのことを語る。』と記している。

由比ヶ浜一丁目118地点（調査面積100㎡）では方形竪穴建築址４基、井戸址１基、土壙12基、溝状遺構１条、かわらけ溜り等の遺構が検出している。このうち井戸址については「大町大路とも竪穴建物とも異なる軸線の方形井戸址枠を持つ。」と記している。まとめの項では「13世紀前半代までに属する遺物は１点もなく、明らかにそれ以後に街区形成年代の主体がある。また、今の大町大路まで、調査区からはほんの５ｍほどしかなく、そのような場所ですでに竪穴建物が密集する状況が確認できた。大町大路の北側には御成小学校校庭の砂丘地帯を除き竪穴建物などは検出されない。つまり本資料は大町大路を境にして街区の様子が画然と異なることを示す例である。」と記している。(註１)

由比ヶ浜一丁目123番５外地点（調査面積40㎡）では方形竪穴建築址４基、土壙７基、その他落込み６基（土壙のうちの１基については、井戸の底部である可能性がある。）の遺構が検出されている。各遺構の年代は13世紀後半に属しているとしている。まとめの項では検出した遺構の位置を、「…大体横並びになっており、そこより北に突出するものはない。おそらく大町大路による規制が、働いているが、大路までの距離は不明である。」と記している。(註２)

砂丘地域は歴史的には古墳時代後期、下向原古墳群と呼ばれる円墳群が造られ、和田塚周辺にあったとされる采女塚からは女性人物埴輪が出土している。

鎌倉時代後半には方形竪穴建築址とともに多くの土壙墓が造られ、葬地としての性格を持つようである。

この間、奈良時代には鎌倉市立御成小学校校庭内から8世紀前半から中頃、8世紀中葉から9世紀後半まで存続する2時期にわたる官衙址と見られる大型建物群が検出され、天平5年の紀年をもつ木簡の発見と併せて、相模国鎌倉郡の政事の中心地になっていた可能性を高くしている。又、近接する千葉地東遺跡等からは比較的低地である所から竪穴住居址が検出され北側千葉ヶ谷内は古代瓦の散布地で寺院の存在が考えられている。

前述した様に鎌倉時代後半に入ると砂丘地域の特徴として特に滑川西岸では土壙墓と方形竪穴建築址の併存する地域となる。方形竪穴建築址については、主に地理的環境、建物構造から倉庫説が有力である。又、出土する遺物のなかには鋳物師関係の遺物の他、栗形等の骨製品をはじめ、牛馬等の解体を生業とする屠者の存在を示す多量の獣骨が出土している。これら遺物と土壙墓群とを合わせて考えて見ると、鎌倉時代後半の砂丘地域は穢れの忌まれない、主に殺生を生業とする職能民が活動する“場”となっていたのではないだろうかと考えられる。

砂丘地域の区画となる遺構として近年、道路状遺構と溝状土壙遺構の発見がある。浜地の街区形成の区画線であるとされている上記の遺構の検出の増加によって、よりはっきりした形で鎌倉時代の海岸砂丘地帯の姿が浮かんで来ると思われるが、これは今後の課題であろう。

（参考文献）

（註1）馬淵和夫「由比ヶ浜一丁目118番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』 鎌倉市教育委員会（平成7年）

（註2）馬淵和夫「由比ヶ浜一丁目123番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』 鎌倉市教育委員会（平成7年）

松尾宣方「中世の海岸線と浜」『よみがえる中世3』 平凡社（1989）

斎木秀雄「地理的・歴史的環境」『御成町228番－2他地点遺跡』 千葉地東遺跡発掘調査団（1987）

大平　聡「古代の地方行政制度」『神奈川地域史研究』第9号　神奈川地域史研究編（1990）

玉林美男「鎌倉の葬制」『仏教芸術164号　特集鎌倉の発掘』 毎日新聞社（1986）

斎木秀雄『由比ヶ浜一丁目4－6－9地点発掘調査報告書』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団（1994年）

『鎌倉市史－考古編－』 吉川弘文館

第二章　調査の経過と基本層序

Ⅰ・調査の経過

平成７年12月18日　重機掘削、遺構検出作業開始
　　12月28日　全景写真撮影
　　12月29日　調査終了
平成８年 1月 6日　器材撤収

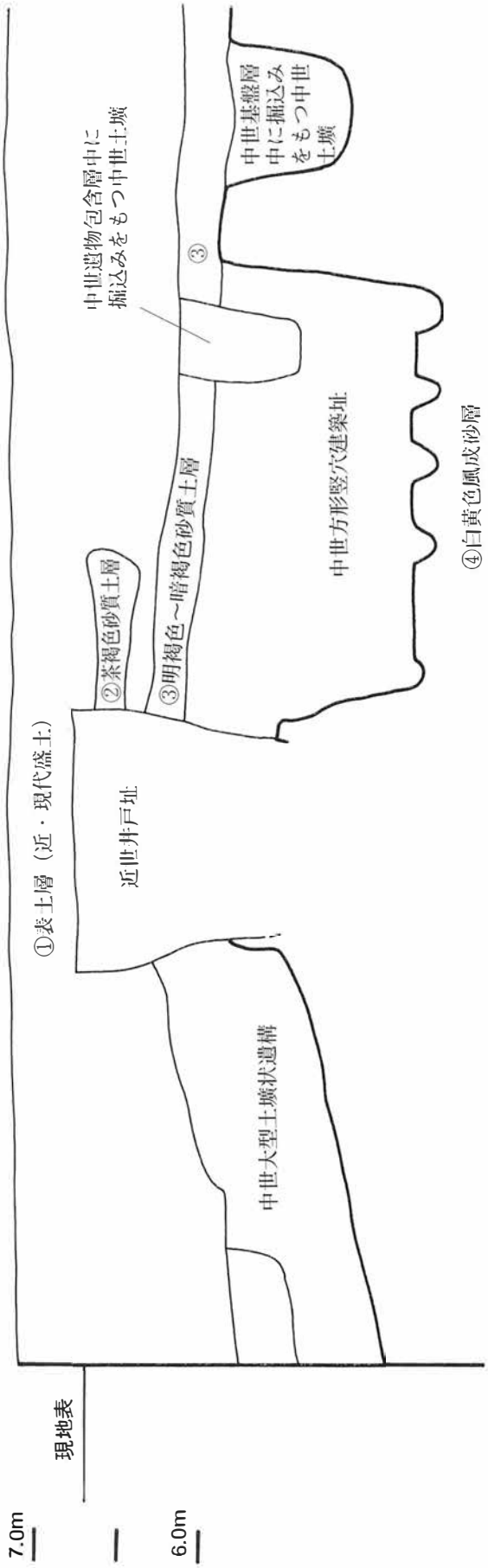
既調査地点の成果から、本調査地点周辺では近・現代の造成土等の客土を除けば、土層の堆積は海成砂もしくは間潮帯の砂分を中心とする土層と飛砂層である事が掴めている。

調査は地表下70cm程堆積する近・現代の盛り土を重機により除去した後、検出した30cm程の堆積を持つ中世の遺物を包含する明褐色～暗褐色砂質土面上から人力で当時の生活面を検出する作業を行なったが、層の遺存が近・現代の削平、攪乱を受けて、良好でなく薄層であった為、層の細分はできず顕著な地業版築面は検出できなかった。為に、中世基盤層である白黄色風成砂面上で一括した形で、遺構の検出を行なった。

遺構は方形竪穴建築址１基、性格不明の大型土壙状遺構１基、井戸址１基、柱穴様の小土壙を含む土壙16基を検出している。前述した様な遺構の検出の仕方なので、各々の遺構に伴うであろう生活面は不明と言うしかないが、遺構の切り合い、遺構覆土の違いから、後述する近世まで降ると思われる井戸址も含めて、生活痕は３時期程度に分けられそうである。

中世基盤層である白黄色風成砂面は海抜数値約６ｍ程で検出した。北側に向かって緩やかに傾斜している。

中世以前、古代については本調査地点南側周辺…砂丘後背湿地部に位置する既調査地点…からは、奈良・平安時代を中心とする遺物を包含する暗茶褐色もしくは、黒褐色の腐植粘質砂質土層が中世基盤層下から検出されているが、本調査地点では、検出した方形竪穴建築址東側掘方壁面などでの観察では前述した腐植粘質砂質土の堆積は見られず、砂層は細粗の互層水平堆積であり、層の乱れ、遺物の混入等見られなかった為、古代の遺構は無いものと判断し、中世基盤層よりの掘下げは行なわなかった。



第２図　堆積土層図

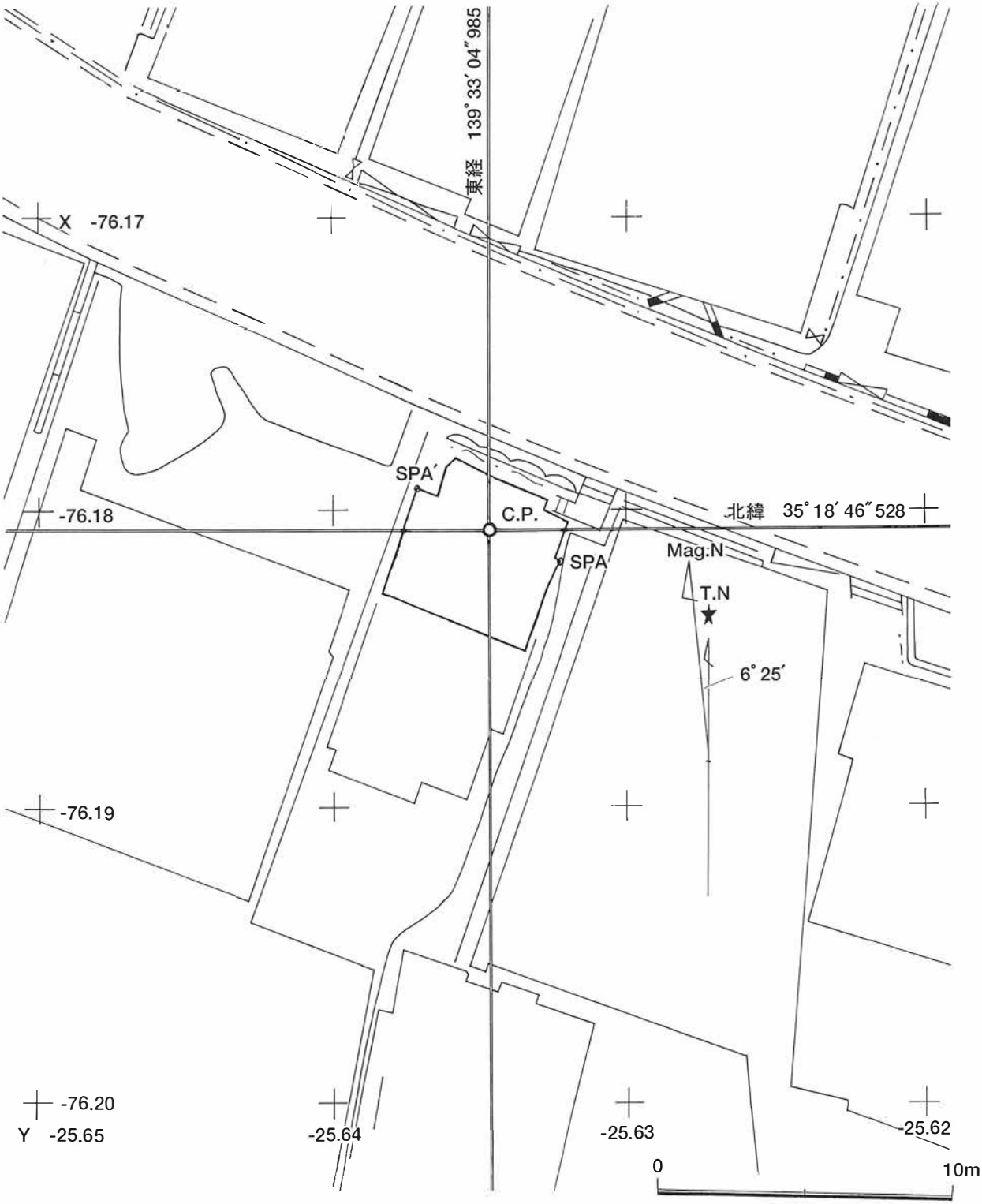
Ⅱ・基本層序（第２図）

第１層　暗灰色～暗褐色砂質土層…近・現代の盛土（客土層）で海抜数値約6·7mで検出。南側で約40cm、北側に向かってやや厚く約50～70cmの厚さをもって堆積する。

第２層　茶褐色砂質土層…近世の耕作土である。第１層による攪乱の為、調査区東壁付近でのみ確認された。海抜数値約6·8mで検出。20～30cmの厚さをもって堆積する。

第３層　明褐色～暗褐色砂質土層…中世遺物包含層である。海抜数値約6·3mで検出。本来、中世遺構の掘り込み面と思われるが上層による攪乱で確認は不可能であった。

第４層　白黄色風成砂層…中世基盤層、海抜数値約６mで検出。遺構検出面である。北側、佐助川に向かって緩やかな傾斜を持つ。



地理学的位置データー覧

点　名	国土座標値（ARBA9）	緯　度	経　度
SPA	X -76181.731　Y -25632.178		
SPA′	X -76179.619　Y -25637.056		
C.P.	X -76181.675　Y -25634.617	+35°18′46″528	+139°33′04″985

国土座標値ピッチ＝10m

※C.P.センターポイントとはSPA、SPA′を結ぶ直線上の中点を任意呼称したものである

第3図　調査区全体図

第三章　検出した遺構と出土した遺物

「調査の経過」で述べた様に遺構は中世基盤層である白黄色風成砂面上で一括した形で検出している。発見した遺構は方形竪穴建築址１基、性格不明の大型土壙状 遺構 1基、井戸址１基、柱穴様の小土壙を含む土壙16基であり、以下に詳述する。尚、出土遺物のうち、かわらけのみ、1/4個体以上のものを無作為に抽出して掲載した。又、出土遺物の法量、胎土については出土遺物観察表を参照されたい。

Ⅰ・方形竪穴建築址（第５図、図版２）

調査区中央西壁際で東壁部分を検出した。遺構の大部分が調査区外へ延びるため明確ではないが、平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸方形と思われる。軸方位はＮ－35°－Ｅで調査区北側の道路とはほぼ直交する。規模は南北方向284cm。東西方向は130cm以上である。底面の深さは確認面から南側で118cm、北側で83cm。ほぼ平坦な底面からは茶褐色腐植砂質土を覆土とする柱穴とも思われる小ピットを東壁直下から６穴、北壁直下から２穴検出している。いずれもプランは円形で、規模は直径約20cm、深さ約16cmである。柱間距離は芯々で南側から４穴は約50cmの間隔で、これに対し北東隅に集まる４穴は柱間約30cmと間隔を狭くしている。

覆土は上層は明褐色砂質土層から暗褐色砂質土層、中層は褐色砂質土層、下層は黄灰色砂質土層から灰褐色砂質土層、下層から底面直上迄は灰褐色砂質土層から灰色砂質土層で、17層に分層した。中層以下は、いわゆる緩やかなレンズ状 の堆積を見せるが、上層は廃棄された石材等が混入し、堆積も水平で、遺構が最後には人為的に埋められた様子を呈している。

建築址の構造は汐見氏の方形竪穴建築址型式分類Ｃ類に含まれる柱穴建ての方形竪穴建築址（註１）と思われる。

出土遺物（第６図－１～30・図版７）

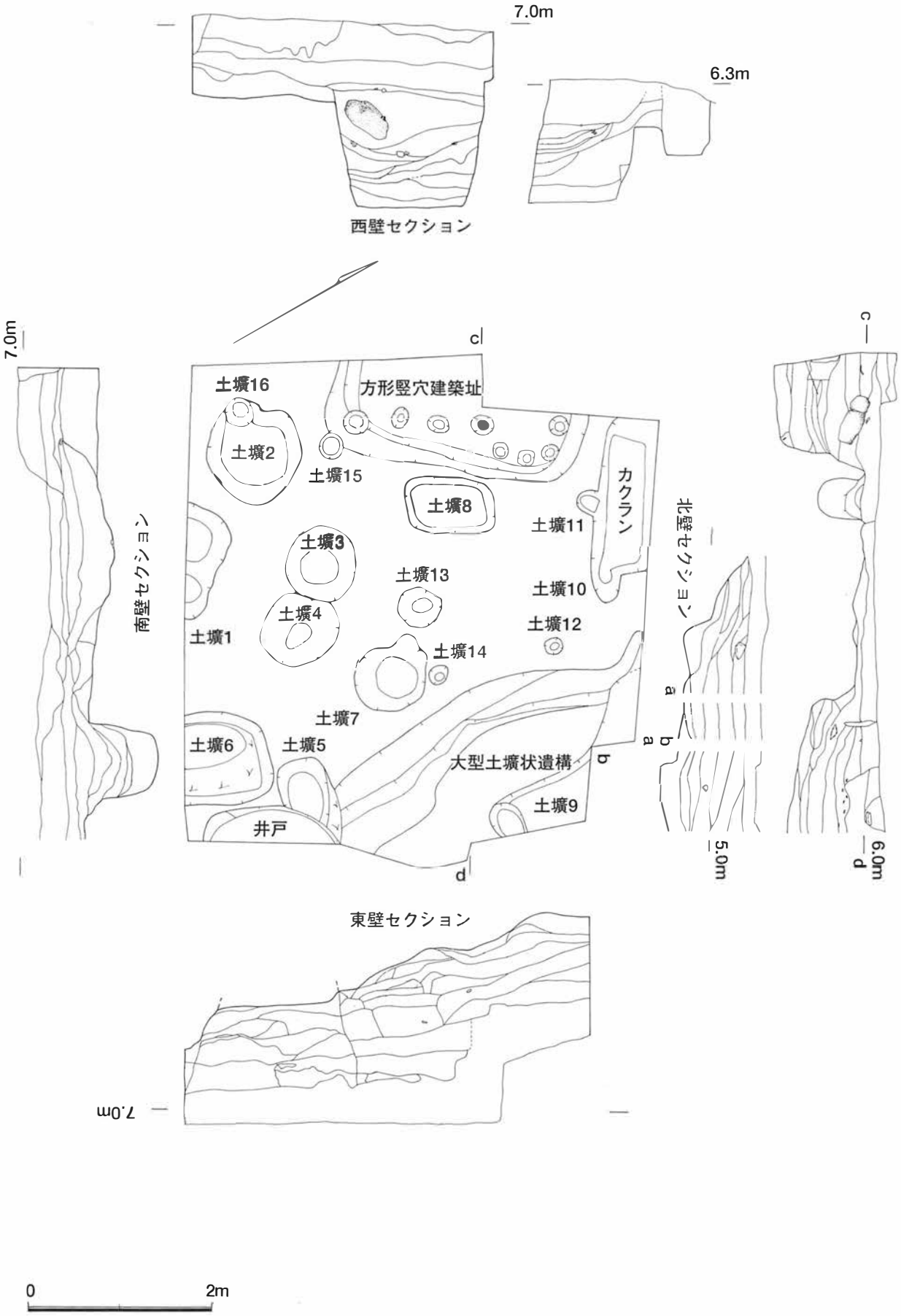
30点が図示できた。

１～９はロクロ成形のかわらけ。極小品（１）、小型品（２～６）、大型品（７～９）がある。

１は極小品で体部は直立している。中層出土。２は体部の立ち上がる角度が急で、口縁部は若干肥厚して端部は丸い。下層出土。３から６は底部からゆるやかに内彎する。３は体部外面の下位に、６は外面口縁部下に弱い稜が巡っている。７は体部器壁は比較的薄く内彎しながら立ち上がり、外面口縁部下には口縁部ヨコナデによる弱い稜が生じる。３は下層から底面出土。４は中層出土。５、６は上層出土。８は底部から緩やかに内彎しながら立ち上がり、口唇部もそのまま丸められる。下層出土。９は体部外面にはロクロ水挽きで生じた２条の稜が明瞭に巡っている。上層出土。

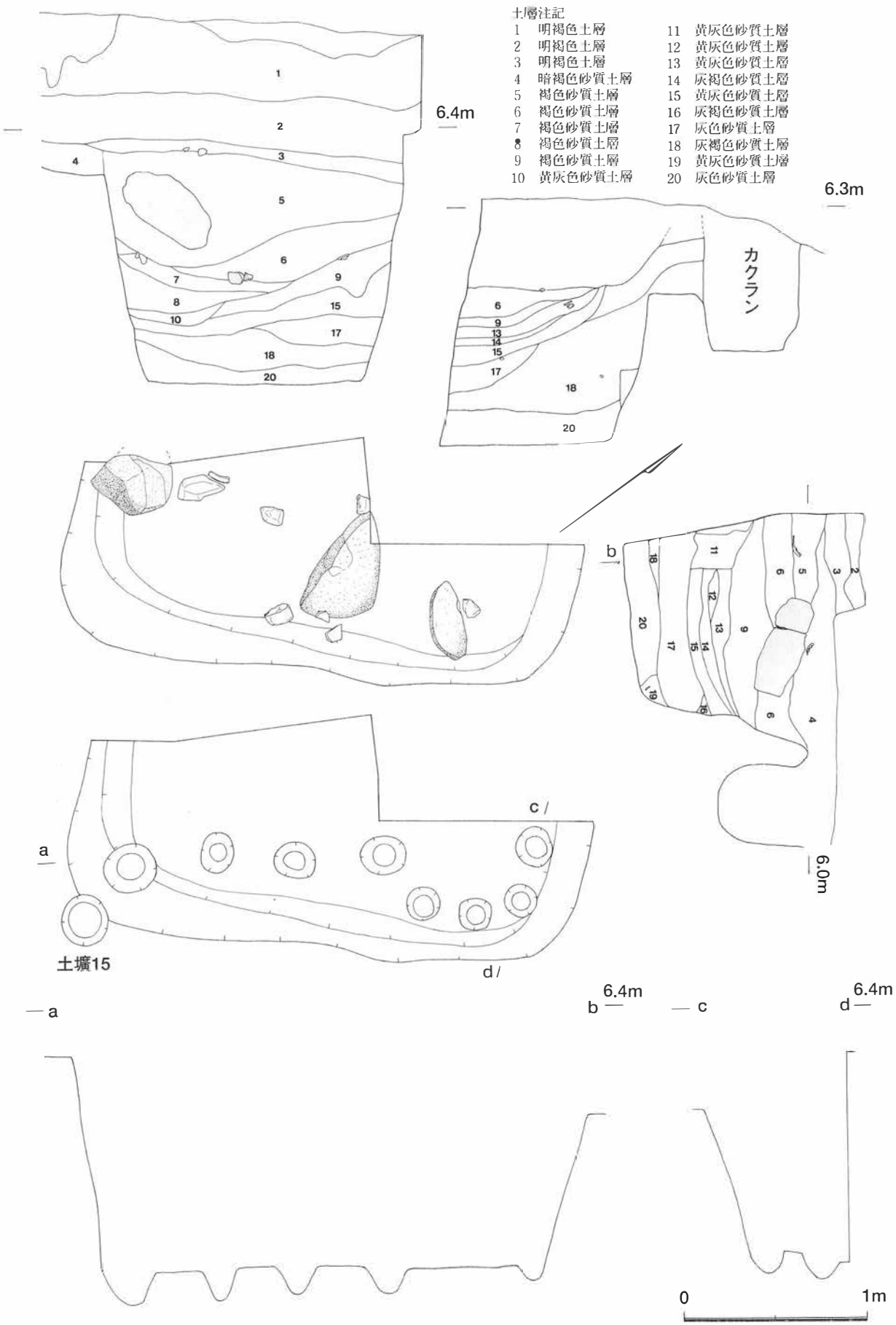
図示し得なかった小片、細片も含めて見ると、小型品は上層出土のものでは、底部締まるが器高の低い皿形のものが主体的で、側面観碗形になるものはものは見られない。中層出土のものは薄手、底部締まり器高高い側面観碗形が見られる。他には口径・底径比率小さく器高低い皿形のものが多い。下層から底面直上で出土のものでは、底部しまり胴部下側に腰を持ちやや器高高くなる皿形。他は口径・底径比率小さい皿形である。一括出土中のものでは薄手の精良胎土の製品、側面観碗形なるものが見られる。

大型品から中型品は、上層出土のものでは、薄手の精良胎土の製品、内彎気味に立ち上がり器高高く見える皿形、やや厚みのある底部は締まり内彎気味に立ち上がり器高高く見える皿形、口径・底径比率小さい皿形が出土している。中層出土のものは全体に厚手品が主体で、器高低い皿形である。下層出土


7.0m
6.3m
西壁セクション
c
c
7.0m
土壙16
方形竪穴建築址
土壙2
土壙15
土壙8
カクラン
土壙11
土壙3
土壙13
土壙10
土壙4
土壙12
土壙1
土壙14
土壙7
土壙6
土壙5
大型土壙状遺構
土壙9
井戸
南壁セクション
北壁セクション
a
b
a
b
d
d
5.0m
6.0m
東壁セクション
7.0m

0 2m

第4図　遺構全図



第5図　方形竪穴建築址遺構図

のものは薄手精製品、底部締まり内彎気味に立ち上がり器高高く見える皿形と口径・底径比率小さく器高低い皿形が混在している。

10から13は常滑窯系製品。

10は片口鉢。直線的に外傾した胴部、肩部の張りは強く、口縁部は大きく内側へ折り曲げられ口唇端部はやや肥厚して丸く納まる。側壁は薄く丁寧な作りだが底部と胴部の圧接の際、外側へはみ出た粘土はそのまま残っている。砂底で、内側底部は胴部圧接痕明瞭である。器表胴部はヨコナデ、内側口縁部下の胴部には指頭痕が列状に見られる。内側胴部から底部にかけては摩滅しなめらかである。外面は褐色から暗橙色。内面は暗灰褐色。胎土は明灰色、粘性弱く極小の白色微粒子が密に均一に入る他は夾雑物は見られない。上層出土。

11は壺の頸部から口縁部にかけての小片。頸部から口縁部にかけて外反りし、端部を折り曲げているが頸部には接続していない。外面は赤褐色、内面は淡褐色で頸部部分には成形痕が明瞭に残る。

12は甕の縁帯部から頸部にかけての小片。長い頸部が外反りしながら立ち上がり、口縁端部に縁帯を貼り付けている。縁帯は上側に小さく下側に大きく拡張するが頸部には接続しない。器表には全体に自然降灰が見られる。内側は輪積痕が明瞭、ヨコナデ整形している。中層出土。

13は捏ね鉢の口縁部小片。角張った口唇端部は平らで小さな面を持ち、外側をやや張りだす。口縁部の一部は指頭により片口状に押し出されている。

14は山茶碗窯系製品の捏ね鉢口縁部小片。口縁部の一部を指頭で押し出し片口を作っている。内側は良く使い込まれていて摩滅しなめらか。胎土は灰色から灰褐色で、砂粒を含むが他に夾雑物見られない精良土である。上層出土。

15、16は舶載品。

15は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の口縁部から体部にかけての小片。薄い器壁で口縁端部が僅かに外反りする。体部外面には幅広の蓮弁文を持つ。釉は澄んだオリーブ色。16は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の口縁部細片。釉は澄んだ空色、南宋窯系の製品と思われる。蓮弁の先端は鋭く、稜線を明瞭に残している。裏込中出土。

17は硯のコーナー部分の細片。丘部か海部分なのかは不明。材質は粘板岩質で産地は不明である。

18はいわゆる磨常滑。常滑窯系製品の甕胴部片を転用している。割れ口である側縁部が使われていて、よく磨耗している。上層出土。

19はフイゴの羽口の先端部小片。胎土は粗い粘土。先端部には溶物が付着している。

20～29は鉄製品。和釘状製品（20～22、24～29）と掛け金状に端部を丸く曲げて環状にしている製品（23）がある。

30は瑪瑙を使った火打ち石。上層出土。

以下、図示し得なかった小片、細片の遺物について記す。

瀬戸窯製品では、洗、卸皿、入子、折縁皿がある。入子は無釉の製品だが他の製品では施釉している。

山茶碗窯系製品は精良な胎土の美濃窯系と粗い胎土の渥美窯系製品とに分ける事ができる。美濃窯系製品は胎土が灰色から灰褐色で、砂粒を含むが他に夾雑物見られない精良土である。上層出土の甕頸部小片は外反りしながら立ち上がる長い頸部。中層から出土した甕胴部小片には器表に簾状の平行叩き目が見られる。

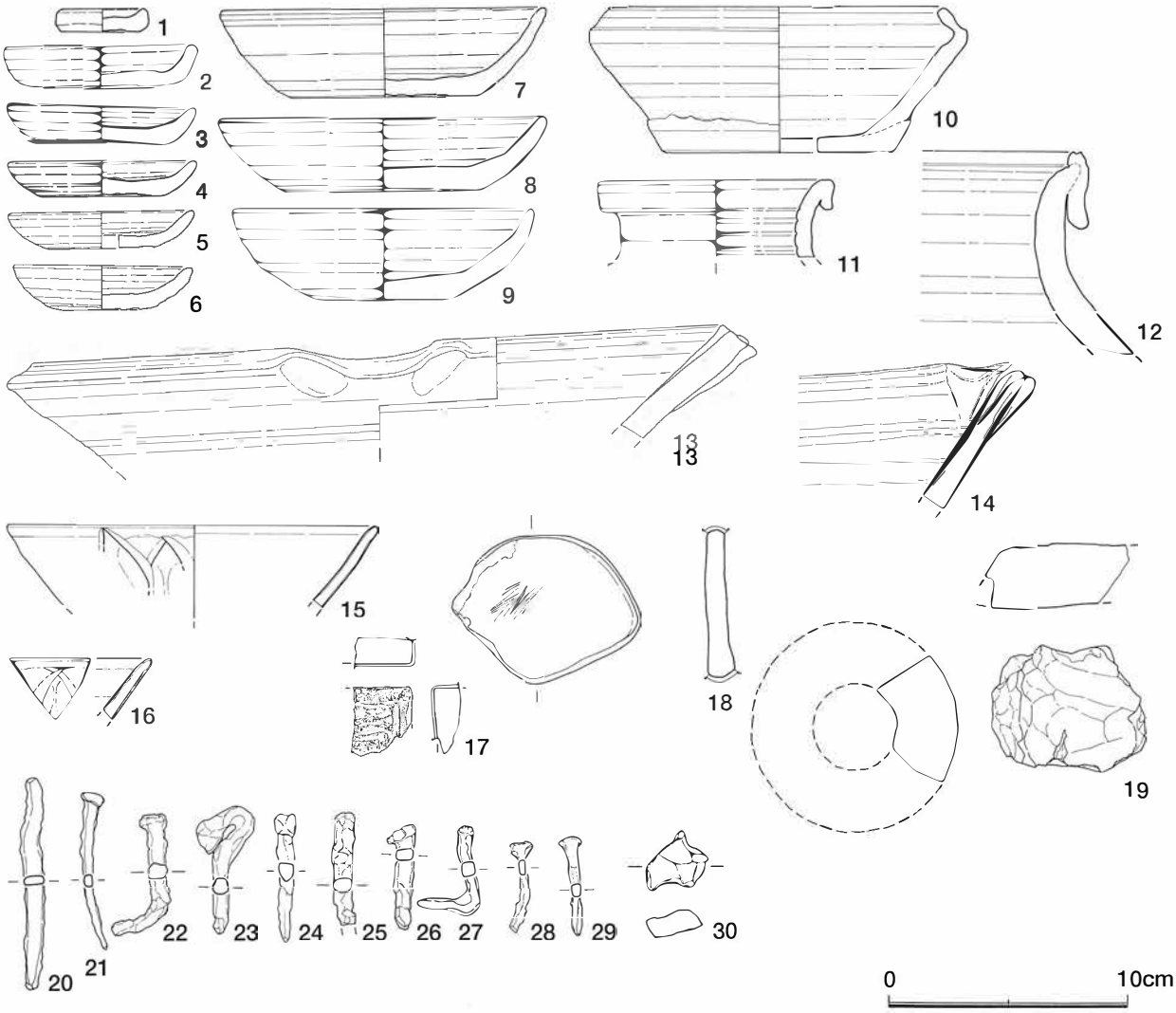
舶載品は前述の他、白青磁梅瓶胴部片、白磁口兀皿口縁部片、底部片、白磁碗胴部片が出土している。

砥石は斑レイ岩質、産地丹沢のものが下層から、産地不明の流文岩質・凝灰岩質の仕上げ砥が上層・

中層から出土している。

手焙りは、瓦質鉢型手焙り底部片が中層から出土している。胎土は淡粘土色で粘性があり夾雑物は見られない。鉢型で手焙りの形態としては古手のものである。この他、瓦質輪花手焙り口縁部細片が中層から。瓦質輪花手焙り胴部小片が下層から底面で出土している。器表は橙色で菊花文スタンプは径2.5cm大の花文を並べている。花文の数不明、花弁端部は丸。胎土は暗橙色、白色粒等が見られる夾雑物を含む粗い土である。

（註1）　汐見一夫　1993　「方形竪穴建築址再考」『第1回中世都市研究会・討論会』発表要旨



第6図　方形竪穴建築址出土遺物

Ⅱ・大型土壙状遺構（第７図・図版３）

調査時に於いては方形竪穴建築址としていた遺構である。調査区東壁中央から北壁中央の区域で検出している。南側は井戸址に壊され北側、東側は調査区外へ延びる。規模、平面形は全く掴めず底面は平坦ではなく北側、東側に向かって緩やかに傾斜してゆく。南北軸線の方位はＮ－３°－Ｗを測り、調査区北側道路の軸線方向に対し約55°のズレを見せている。規模は南北方向350cm以上、東西方向は154cm以上である。底面の深さは確認面から西側で50cm、東側で80cmを測る。

覆土は上層は暗褐色砂質土層～黒褐色砂質土層。下層は黒褐色砂質土層～暗褐色砂質土層。底面近くで白色砂質土と暗褐色砂質土の混合（互層）層となる。６層に分層した。各土層は帯状 に20cm程厚みをもち、西壁面近くでは緩やかなレンズ状 の堆積、東側に向かって水平堆積となる。

堆積の仕方として人為的に短期間のうちに埋め戻されたのではなく遺構廃絶後にゴミ穴として徐々に埋没していった状 態が考えられる。調査区北東隅周辺では検出面から底面にかけてハマグリを主体とする食物残滓集中部（貝殻集中部）を検出している。

出土遺物（第８図－１～36・図版８）

36点が図示できた。

１～３は手捏ね成形のかわらけ。小型品（１、２）、大型品（３）がある。

１は体部はやや開き気味に立ち上がり、外面上半のナデと下半の指頭痕を残す部分との境界にやや強い稜が巡っている。口唇部は丸くおさめている。下層出土。２は体部はやや直線的に斜め上方に立ち上がっている。底部は平底風に平坦になっている。口唇部は丸くおさめている。上層出土。３は口縁部の断面形が四角を呈している。体部外面上半のナデと下半の指頭痕を残す部分との境界にやや強い稜が巡っている。貝殻集中部出土。

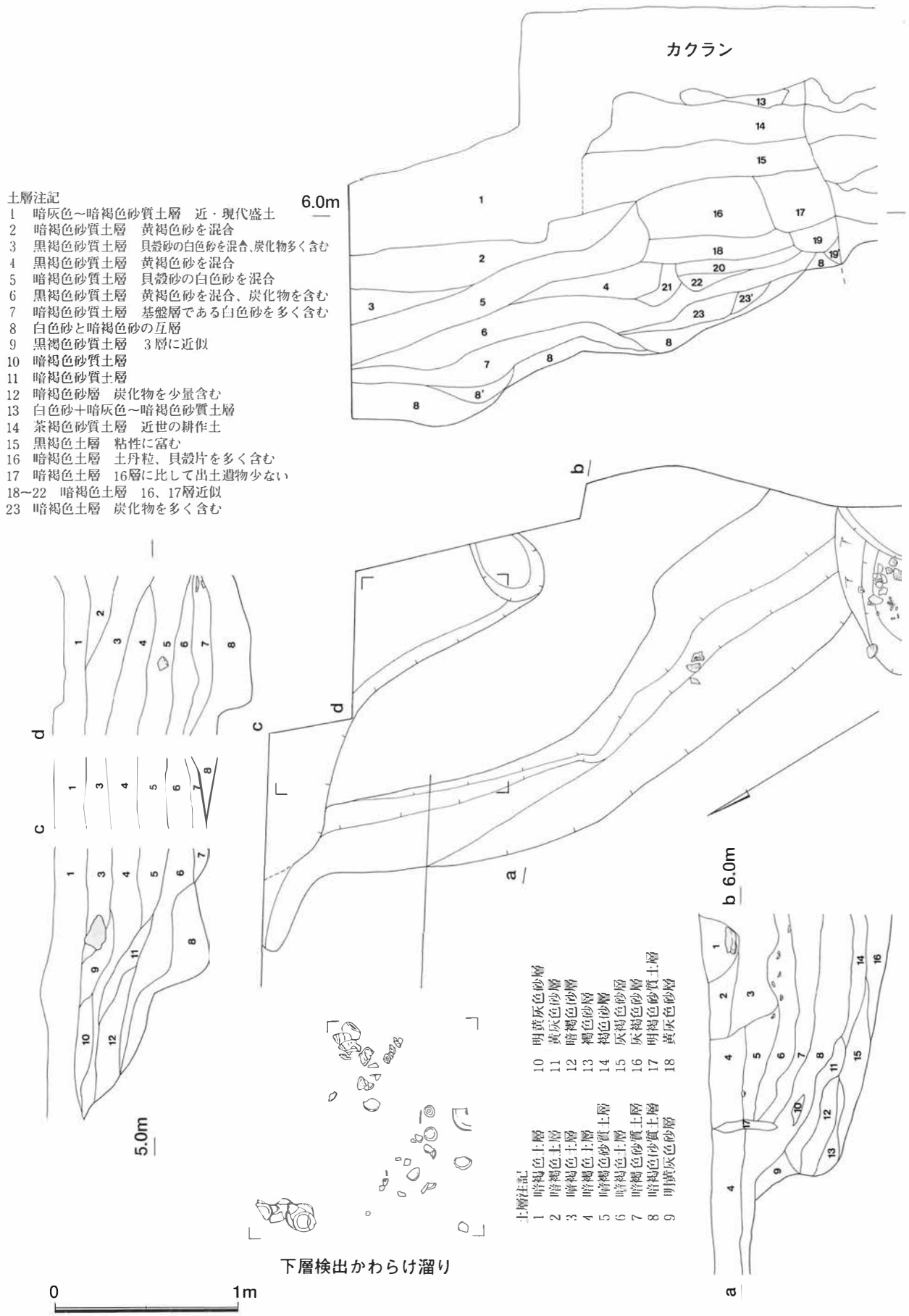
４～15はロクロ成形かわらけ。小型品（４～９）、大型品（10～15）がある。

４は体部が比較的外に開く。口縁部下にはやや強めの稜が巡る。貝殻集中部出土。５は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。底部は糸切り位置が低いため、浅い総高台状を呈する。貝殻集中部出土。６は体部が直線的に開いている。貝殻集中部出土。７、８は底部はゆがみのためか上げ底風になっている。７は上層出土。９は体部が比較的外に開き、外面下位に弱い稜が巡っている。貝殻集中部出土。10は体部が比較的外に開き、口縁部下にはやや強めの稜が巡る。貝殻集中部出土。11は体部が緩やかに内彎しながら立ち上がり、外面下位に弱い稜が巡っている。貝殻集中部出土。12、13は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面には明瞭な稜はなくなめらかである。12の器壁は薄い。ともに貝殻集中部出土。14は器高が高く、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部でやや外反りする。貝殻集中部出土。15は器壁は薄く体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁部下にはヨコナデによって生じたやや強めの稜が巡る。又、底部は糸切り位置が低いため、浅い総高台状を呈する。上層出土。

図示し得なかった小片、細片も含めて見ると、出土かわらけの主体はロクロ成形品である。

大型品は上層出土のものは胎土精良、薄手で器厚が一定する、底部締まりやや器高の高い皿形と、口径・底径比率小さい皿形が見られる。貝殻集中部出土のものは法量がほぼ同じ皿形である。法量は約口径13cm、底径７cm、器高2.7cmでまとまっている。下層から底面直上から出土したものには、胎土精良の薄手精製品、底部締まり、やや器高の高い、側面観碗形を呈している。

中型品～小型品は上層出土のものは器高低く口径・底径比率小さい皿形。貝殻集中部から出土したものは、胎土精良な薄手精製品が見られる。下層出土のものは口径・底径比率小さく器高の低い皿形が主



第７図　大型土壙状遺構図

体。中型品には薄手で底部締まり器高高い、側面観碗形になるものが見られる。

手捏ね成形品では口唇端部丸味をもつもの、口唇端部に向かい側壁が薄くなるものが見られる。

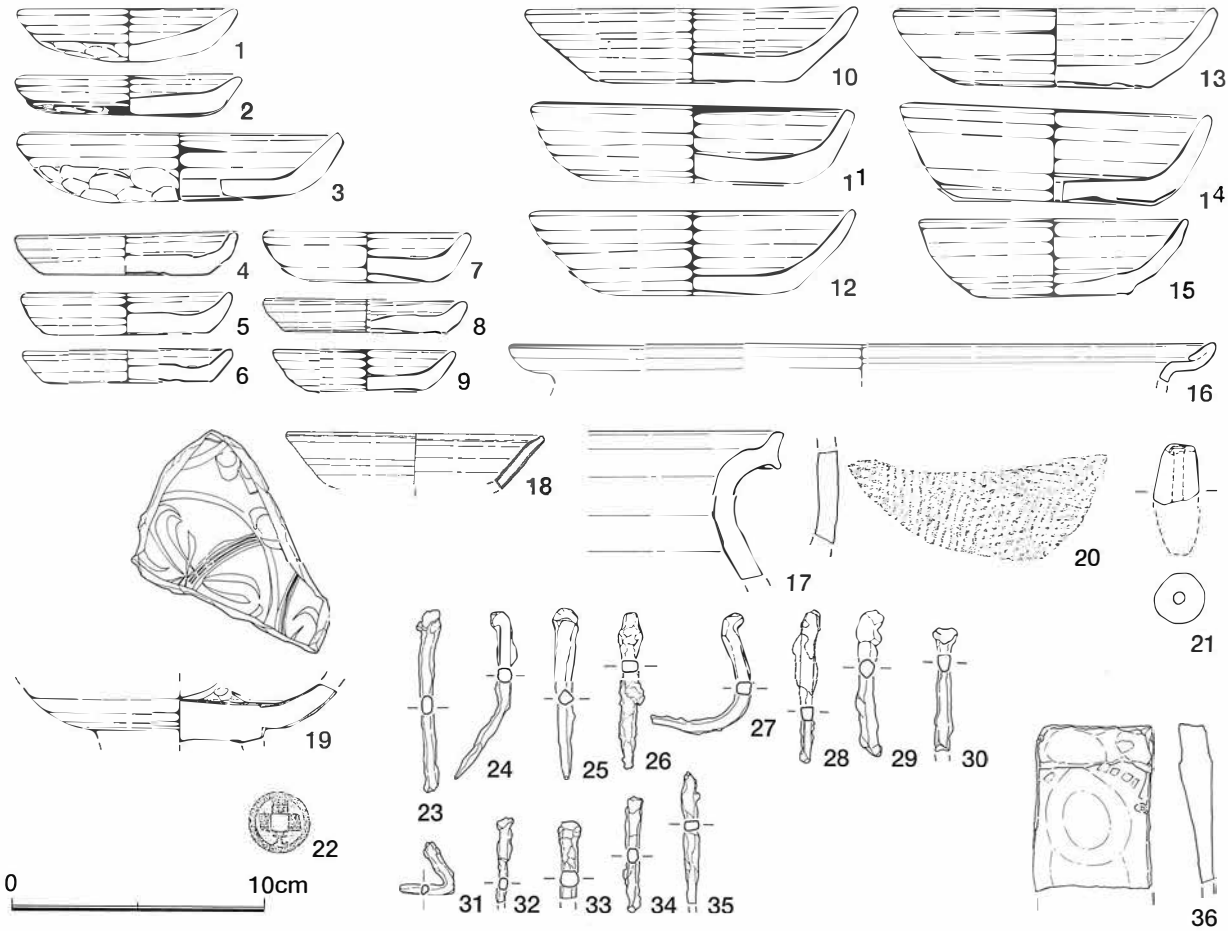
16は伊勢系土鍋。細片での出土で総数21点、口縁部は4点確認している。覆土層位に関係なく出土していて包含層中からも1点出土している。感覚的には同一個体のものと思われるが接合率は悪く口縁部片2点が接合したのみであった。胎土は淡い粘土色で、胎芯は淡黒色、薄手で粘性弱く砂と小石粒を若干含む以外、夾雑物は見られない。器表は淡橙色、全体に加熱を受け煤の付着により黒ずんでいる。口縁部は内側へ折り返されている。

17は常滑窯系製品の甕（小型品）の口縁部から頸部にかけての小片。器厚は薄く直立する長い頸部を外反りさせている。口縁端部は内側からの強いヨコナデによって上下に拡げ縁帯を作っている。胎土はキメ細かく粘性強い淡粘土色、器表色は赤褐色を呈し、内側の色は暗褐色である。

18、19は舶載品。

18は白磁口兀皿の口縁部から胴部にかけての小片。器壁は若干厚めで口縁部はわずかに外反りしている。釉は青味灰白色で失透。中層出土。

19は龍泉窯系青磁劃花文碗の底部片。内面・内底面に片切彫りの蓮華文の施されたもの。釉は貫入が見られ淡暗緑色透明、素地は灰色で粘性強く堅緻。高台部は剥離しているが畳付けから外底面は露胎である。北宋窯系の製品。下層出土。



第8図　大型土壙状遺構出土遺物

20は叩き甕の胴部小片。帰属年代、産地は不明。胎土は若干粒子状 の夾雑物含まれるが良精な土でよく焼きしまっている。表側に格子目状 の叩き目、器色は暗淡橙色、内側は暗灰色。亀山系とは異なるものである。上層出土。

21は土錘。約1/2残存している。俵型で、丸棒に粘土を巻き付けた後、指頭による整形を行なっている。胎土はかわらけと共通。

22は銅銭。銭種は開元通宝。初鋳年は621年（唐代）である。

23～35は鉄製の和釘状 製品。

36は砥石。渥美窯系製品の胴部小片を砥石に転用している。平面部を利用、頻繁な使用による磨耗が激しい。大きさは6.5以上×4.5cm。貝殻集中部出土。

以下、図示し得なかった小片、細片の遺物について記す。

常滑窯系製品は胴部小片、細片が多く大破片は見られなかった。器種としては、甕・壺・捏ね鉢が見られる。

壺は上層出土の肩部～頸部片では、器厚は肩部に向かって厚みを増し頸部に向かって薄くなる。器表色は淡赤褐色で、肩部に一本沈線が巡っている。内側の色は暗橙色、指頭痕が明瞭で列状に見られる。胎土は淡暗橙色で精良な素地、混入物の見られない割れ口のすっきりとしたものである。また同じく上層出土の肩部片は、器表は赤褐色を呈し、三本の沈線巡っている。内側の色は暗赤褐色、黒くムラが見られる。胎土は暗灰色、やや粘性を欠き夾雑物が見られる。

捏ね鉢は口縁部片が上層で出土している。口縁部の形は角張った口唇端部は平らで小さな面を持ち、外側を摘みあげやや張り出させている。他に、胴部小片中に内面に使用痕の見られるもが数点あった。

山茶碗窯系製品は美濃窯系に比べて粗胎胎土の渥美窯系製品のものが多く出土している。器種は全て捏ね鉢で口縁部の形は渥美窯系製品では口縁部で肥厚する端部を内側へ折り返し丸く納めているもの。口縁部で肥厚し口唇端部を角張らしているもの。口縁部で肥厚し外面ヨコナデによって丸く納めた端部を外へ反らしているものがある。美濃窯系製品では、肥厚した端部を丸く納めたものと、さらに外側ヨコナデによって端部を外に反らせ沈線を巡らさせているものがある。

砥石は産地不明であるが流文岩質凝灰岩の仕上げ砥が２点、安山岩質で産地箱根のものが１点出土している。

瀬戸窯製品は折縁皿口縁部片、卸皿底部片、平碗口縁部片が出土している。全て灰釉施釉製品である。折縁皿は口縁部を外側へ折り返して玉縁状 にしている。卸皿の卸目は比較的丁寧な作り。平碗口縁部は、直口し端部を丸く納めて口縁部内外面を比較的厚く施釉し、胴部上部は拭き取られ露胎となっているものと、外側からの強いヨコナデによって口縁部は弱いくの字形に外反りしていて、口縁部近くを雑に施釉しているものがある。

銅銭は前述の他２枚出土しているが腐食著しい為、銭種は不明である。

手焙り製品は全て瓦質製品で器表灰色、黒色処理されていないが内外面良く研磨されている製品、輪花型で口縁部四角く張るもの。鉢型底部片は底部に比べ胴部の器厚が厚い為底部は上げ底気味になっているもの等が出土している。

Ⅲ・土壙

16基の土壙或いは柱穴様の小土壙を検出している。このうち土壙９は大型土壙状遺構覆土中に掘方を持ち、土壙10、土壙11は包含層中に掘方を持つ、やや時期の降る遺構である。他の土壙は全て中世基盤層である白黄色風成砂面上で検出している。

個々の土壙からは多種多様な遺物が出土している。多分にゴミ穴的要素の強い遺構であるが、このうち土壙１、３、４、７、13は南北方向に約120cm間隔で列をなす。土壙の平面形・深さには規格性がある様に見える。土壙列の南北軸はＮ－43°－Ｅを測り、これは調査区北側にある道路、西側方形竪穴建築址にほぼ直交、平行するものである。

土壙１（第９図・図版４）

調査区中央南壁際での部分検出であり、遺構の北側部分のみ検出、南側は調査区外へ延びる。平面形は、不整方形を呈する。断面形は皿形で東西方向119cm、南北方向は55cm以上である。底部の深さは確認面から15cmを測る。

覆土は２層に大別できほぼ水平堆積、土壙の埋戻しは人為的に一挙に行なわれている様相を呈している。上層では径0.5～４cm大の土丹粒、玉石の混入の見られる褐色砂質土、下層は基本的に上層と同じだが、より砂質性が強まり炭化物が均一にはいっている褐色砂質土である。

出土遺物（第９図－１～４・図版９）

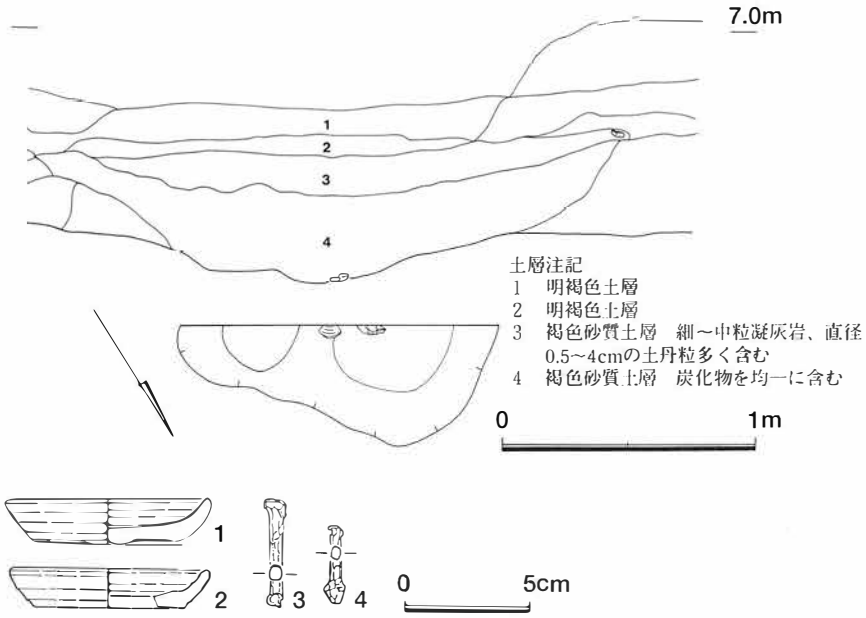
４点が図示できた。

１、２はロクロ成形のかわらけの小型品。

１は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部下にはヨコナデによって生じたやや弱い稜が巡る。２は体部が直線的に開き、口縁部下にはやや強めの稜が巡る。

３、４は鉄製の和釘状 製品。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、穿孔かわらけ、常滑窯系製品、鉄製の和釘状製品、貝殻、獣骨、魚骨がある。かわらけは全てロクロ成形のもので、手捏ね成形のものは出土していない。法量は大小に分けられ、大型品は底部しまり内湾気味に立ち上がる器高やや高い皿形。小型品は口径・底径比率小さく器高の低い皿形が見られる。かわらけ穿孔品の孔は径１cmと大きい。



第９図　土壙１

土壙２（第10図・図版４）

調査区南西隅で検出している。平面形はほぼ円形で、断面形は浅い皿形を呈する。土壙16とは切り合いを持つが新旧関係は掴めていない。土壙の規模は東西方向112cm、南北方向は105cmである。底部の深さは確認面から20cmを測る。

覆土は締まりの弱い炭化物を少量含

む暗褐色砂質土で占められる。

出土遺物（第10図－１～４・図版９）

４点が図示できた。

１、２はロクロ成形のかわらけの大型品。

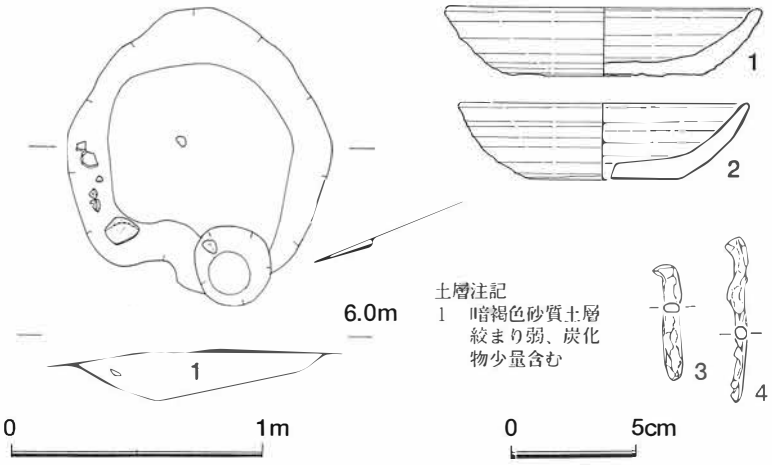
１は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面には明瞭な稜はなくなめらかである。２は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。外面中位には弱い稜が巡っている。底部は締まり口径と比較して器高は高い。

３・４は鉄製の和釘状製品。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、常滑窯系製品、鉄製の和釘状製品、スラグ、獣骨、魚骨、胎土が伊勢系土鍋のものと近似する産地不明の土器片、貝殻、礫がある。

土壙３（第11図・図版４）

調査区中央やや南寄りの所で検出している。西側土壙４とは切り合いを見せ、土壙３が土壙４の西壁を壊している。平面形は円形、断面形は底部中央に直径30cm、深さ８cm程の柱痕様の小穴の見られる、不整形の浅い皿形を呈している。土壙の規模は東西80方向cm、南北方向も80cmである。底部の深さは確認面から24cmを測る。



第10図　土壙２

覆土は炭化物を少量含みやや締まりのある黒色砂質土で占められている。

出土遺物（第11図－１～６・図版９）

６点が図示できた。

１から３はロクロ成形のかわらけ。小型品（１）、大型品（２、３）がある。

１は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部下にはやや強めの稜が巡る。２は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面下位に弱い稜が巡っている。３は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。

図示し得なかった小片、細片も含めて見ると、全てロクロ成形のもので、手捏ね成形のものは見られない。法量は大小に分けられる。大、小型品ともに底部締まり、器高低めの皿形で側面観碗形になるものは見られない。

４は銅銭。銭種は開元通宝と思われる。初鋳年は621年（唐代）である。

５、６は鉄製の和釘状製品。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、常滑窯系製品、フイゴの羽口片、スラグ、瓦質手焙り、貝殻、獣骨、魚骨、礫がある。

鉄製の和釘状製品は合計13点出土している。覆土中には炭化物が見られフイゴの羽口、スラグも数点ずつだが出土している。鋳造に関係する土壙とも思われるが、特に土壙の壁面、底部が赤化している様子は見られなかった。鋳造関係品も含めたゴミ穴なのだろう。

土壙４（第11図・図版４）

調査区中央やや南寄り、土壙３の東側で検出している。土壙３に西壁の一部を破壊され、北側の一部は近・現代の攪乱を受けている。平面形は円形、断面形は深めの皿形を呈する。土壙の規模は東西方向89cm、南北方向は80cmである。底部の深さは確認面から40cmを測る。

覆土は２層に大別でき、ほぼ水平堆積している。上層は灰褐色から暗褐色、炭化物少量含む黄褐色砂質土層、下層は暗灰黄褐色砂質土層で上層に比べて厚く堆積している。

土壙が、ゴミ穴として使用された後、堀込み面と同じ白色系の砂質土で半ば迄、人為的に一挙に埋め戻されて浅い凹地と変わる。この凹地も以降のゴミの投棄・流入、風成砂の堆積によって次第に埋没して行った状 態が考えられる。

出土遺物（第11図－１～４・図版９）

４点が図示できた。

１、２はロクロ成形のかわらけ。

１は小型品。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、外面下位に弱い稜が巡っている。２は大型品。体部が緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面には明瞭な稜はなくなめらかである。

図示し得なかった小片、細片も含めてみると、かわらけは全てロクロ成形のもので、手捏ね成形のものは見られない。大小の法量に分けられ、ともに粉質胎土の薄手精製品が見られるが、底部は締まるものの、器高は側面観碗形に為る程迄には高くない皿形である。又、大型品の口縁部から側面部迄を打ち欠き、底部を円盤状に加工したものが出土している。

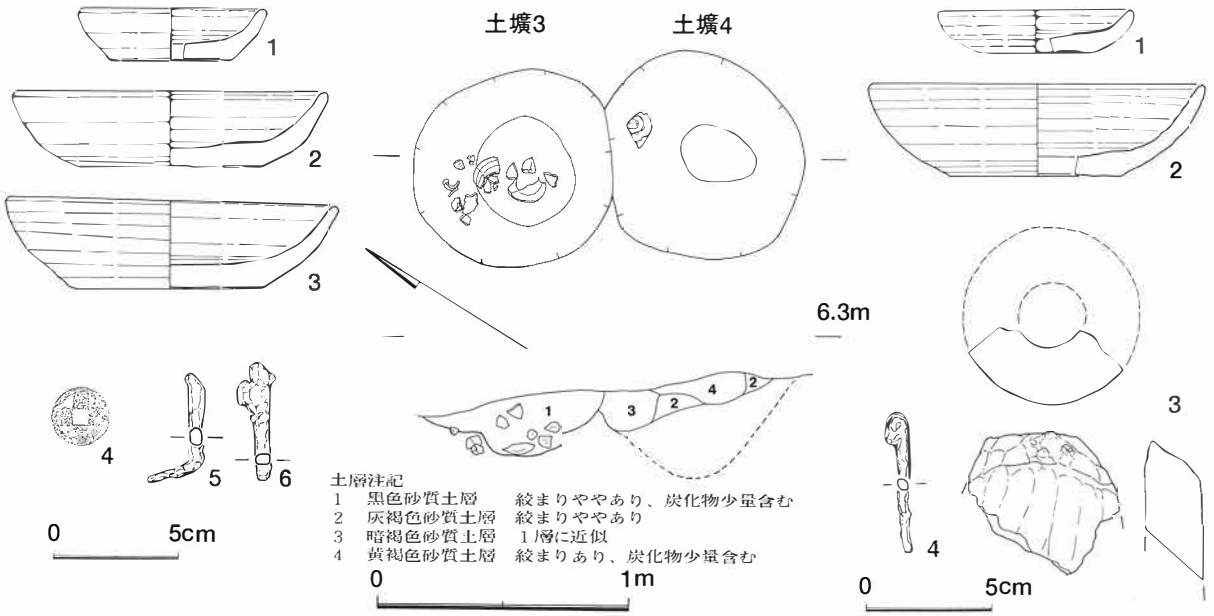
３はフイゴの羽口の先端部小片。先端部は溶物が付着している。

４は鉄製の和釘状 製品。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、常滑窯系製品、スラグ、山茶碗窯系製品、獣骨、魚骨、貝殻、礫がある。

土壙５（第12図・図版５）

調査区東壁際中央付近で検出している。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。東側の一部は時代の降る井戸址に壊され、北側ではこの土壙が大型土壙状遺構の西壁を切っている。土壙の規模は東西方



第11図　土壙３、土壙４

向60cm以上、南北方向は52cmである。底部の深さは確認面から25cmを測る。

覆土は2層に大別できほぼ水平堆積している。土壙検出面面上及び上層の暗褐色砂質土層中からは遺物が集中的に出土し、これに対して下層からの出土は極小量で、かわらけ細片が数点出土したのみであった。下層は暗灰黄褐色砂質土層、基盤層と近似する砂質土である。遺物の出土の仕方、土層断面の観察からゴミ穴とは違う性格の土壙かも知れない。土壙が本来の機能を失い、半ば埋まり浅い凹地となった後、ハマグリ、キサゴ等の貝殻、かわらけを主体とした食物残滓が投棄されたと思われる。

出土遺物（第12図－1～9・図版9）

9点が図示できた。

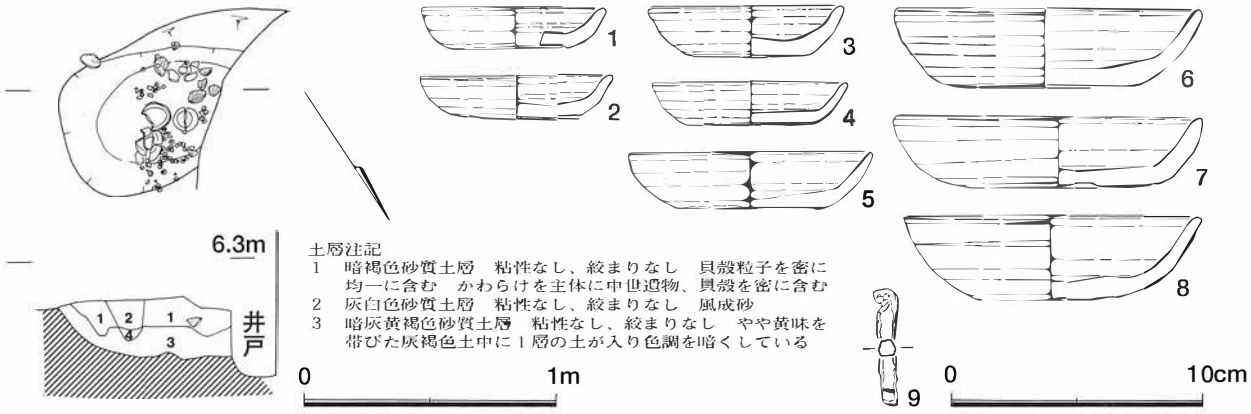
1～8はロクロ成形のかわらけ。小型品（1～4）、中型品（5）、大型品（6～8）がある。

1は体部は比較的外に開き、外面中位にやや強い稜が巡っている。2は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反る。外面中位には弱い稜が巡っている。3はやや器壁が厚い。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり口縁部下にはやや強めの稜が巡る。底部は糸切り位置が低いため、浅い総高台状 を呈する。4は器壁は薄い。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面には明瞭な稜はなくなめらかである。5は器壁は薄い。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部下に弱めの稜が巡る。6、7は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面には明瞭な稜はなくなめらかである。8は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり口縁部でやや外反る。底部は締まり口径と比較して器高は高い。

図示し得なかった小片、細片も含めて見ると、かわらけは全てロクロ成形のもので、手捏ね成形のものは出土していない。法量は大中小に分けられ、側面観碗形にまで器高高くはならないが薄手精製品も見られる。

9は鉄製の和釘状 製品。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、常滑窯系製品、鉄製の和釘状 製品、礫、貝殻がある。



第12図　土壙5

土壙6（第13図・図版5）

調査区南東隅で検出している。北側部分のみの検出で、南側は調査区外へ延びる。平面形は方形を呈すると思われ断面形はU字形。底部には、一段窪む、据痕様の楕円形の浅い掘込が見られる。土壙の規模は東西方向102cm、南北方向は94cm以上。据痕様の掘込の大きさは東西48cm、南北65cm以上である。

底部の深さは確認面から63cmを測り、さらに6cm程下に据痕様の掘込の底部がある。軸方位はN－33°－Eを測る。この軸線は調査区北側の道路、西側の南北土壙列・方形竪穴建築址にほぼ直交、平行する。

覆土はレンズ状に緩やかな堆積をしている。堆積の仕方は、下層に黒色砂質土層、中層に基盤層に近似する灰褐色砂質土層から黄褐色砂質土層、土壙がほぼ埋没し浅い凹地となった後に、有機質に富む腐植黒色砂質土層が堆積する。腐植黒色砂質土層は東側、白色砂質土層を削平し延びている。

出土遺物（第13図－1～10・図版9）

10点図示できた。

1～4はロクロ成形のかわらけ。小型品（1）、大型品（2～4）がある。

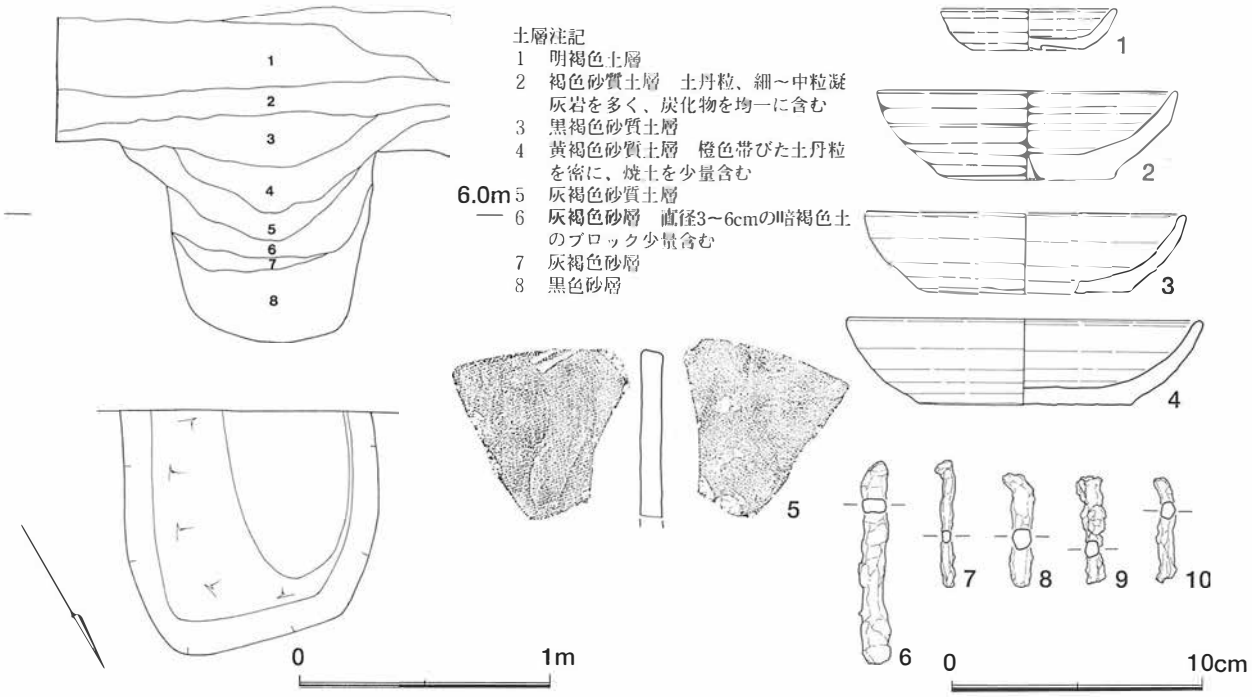
1は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。底部はゆがみのためか上げ底風になっている。2は体部が比較的外に開き、口縁部下にはやや強めの稜が巡る。底部は糸切り位置が低いため、浅い総高台状を呈する。3体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反る。4は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部下にはやや強めの稜が巡る。

図示し得なかった小片、細片も含めて見ると、手捏ね成形のものが1点、細片であるが出土している。他は全てロクロ成形のものである。法量は大小に分けられる様で小型品のものには薄手精製品で器高高いものが見られる。全体に薄手精製品が目立つが破片の接合率は悪かった。

5はいわゆる磨常滑。渥美窯系製品の甕胴部片を転用している。割れ口である側縁部が使われていて、使用断面は丸味をもつ。

6～10は鉄製の和釘状製品。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、鉄製の和釘状製品、スラグ、常滑窯系製品、山茶碗窯系製品、瀬戸窯製品、瓦質手焙り、礫、貝殻、獣骨、魚骨がある。



第13図　土壙6

土壙７（第14図・図版６）

調査区中央、土壙11の西側で検出している。平面形は不整円形、断面形はＵ字形を呈する。土壙の規模は東西方向90cm、南北方向は80cmである。底部の深さは確認面から47cmを測る。

覆土は３層に大別でき、砂質に富み基盤層に近似する黄褐色から黄灰白色の砂質土がほぼ水平に堆積している。底部近く、厚く堆積した黄灰白色砂質土層中からは、平瓦片、常滑窯系製品の甕頸部片・胴部片、かわらけ、ハマグリ・アカニシ等の貝殻が、一括廃棄されたかたちで出土している。ゴミ穴として使用され、埋め戻しの際は人為的に一挙に行なわれた様相を呈している。

出土遺物（第14図－１～７・図版10）

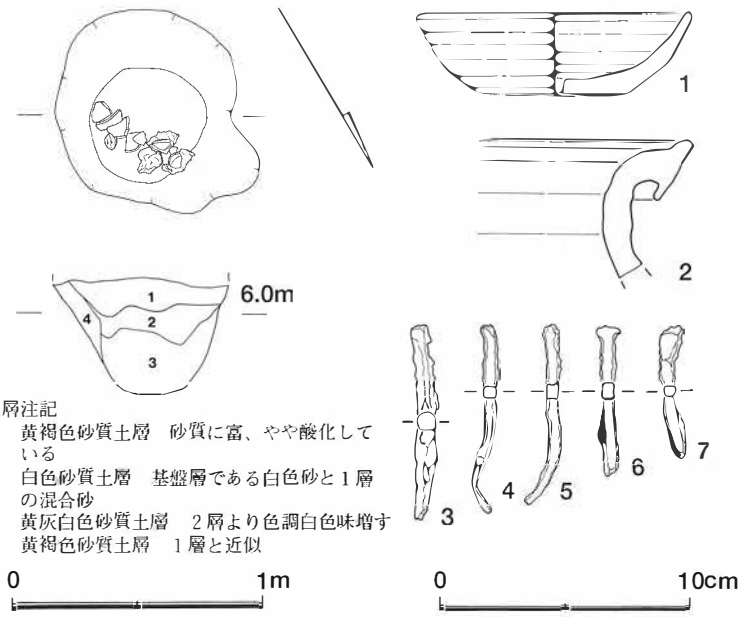
７点図示できた。

１はロクロ成形のかわらけの大型品。体部は緩やかに立ち上がり、底部は締まる。口径と比較して器高は高い。

２は常滑窯系製品の甕の口縁部から頸部にかけての小片。水平近くまで外反りした口縁部は上下に延ばしたやや広い縁帯を持つ。

３～７は鉄製の和釘状 製品。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、常滑窯系製品、瀬戸窯製品、平瓦、切断痕の認められる獣骨、魚骨、鉄製の和釘状 製品、貝殻、礫がある。このうち瀬戸窯製品の卸皿は胎土がキメのやや粗い黄白色で、口縁部をヨコナデにより内側へ折り曲げ受け口状にし、口端部に沈線を巡らせている。平瓦は広端部・狭端部を欠損、側面は斜めにヘラ削りし、凹面側の角をナデに依って丸く仕上げている。凸面凹面共に離れ砂の付着が見られるが、叩き目痕等は認められない。厚みは1.5cm、胎土は淡暗橙色・胎芯淡灰色、軟質であるが石粒等の混入の見られない精土である。この地には瓦葺きの建物は無かったと思われるので、何らかの目的で他所から持ってきたものを、後に他の遺物と共にこの土壙に廃棄したのだろう。



第14図　土壙７

かわらけは全てロクロ成形のもので、手捏ね成形のものは見られない。法量は大中小に分けられる。直径10cm程の中型品では、底部が締まり側面観碗形に近いものが見られる。全体的には薄手精製品に近付くものと、これよりはやや古手となるものが混在して出土している。

土壙８（第15図・図版６）

方形竪穴建築址の東側に近接して検出している。平面形は隅丸方形、断面形はＵ字形を呈する。土壙の規模は東西方向60cm、南北方向は97cmである。底部の深さは確認面から50cmを測る。軸方位はＮ－33°－Ｅで、調査区北側の東道路、西側方形竪穴建築址にほぼ直交、平行する。

土壙の位置から、方形竪穴建築址に伴うゴミ穴的性格の遺構と思われる。

覆土は３層に大別できる。上層は灰褐色砂質土層から黄灰色砂質土層、中層は明茶褐色砂質土層から

黄灰色砂質土層で、この２層は土壙が半ば埋まり浅い凹地となった上にレンズ状に薄く堆積したもので、かわらけ等、出土した遺物も細片ばかりであった。下層は暗灰黄褐色砂質土が厚く堆積していて、主に北側の底部近くからは、かわらけが一括廃棄された状況で出土している。

出土遺物（第15図－１～11・図版10）

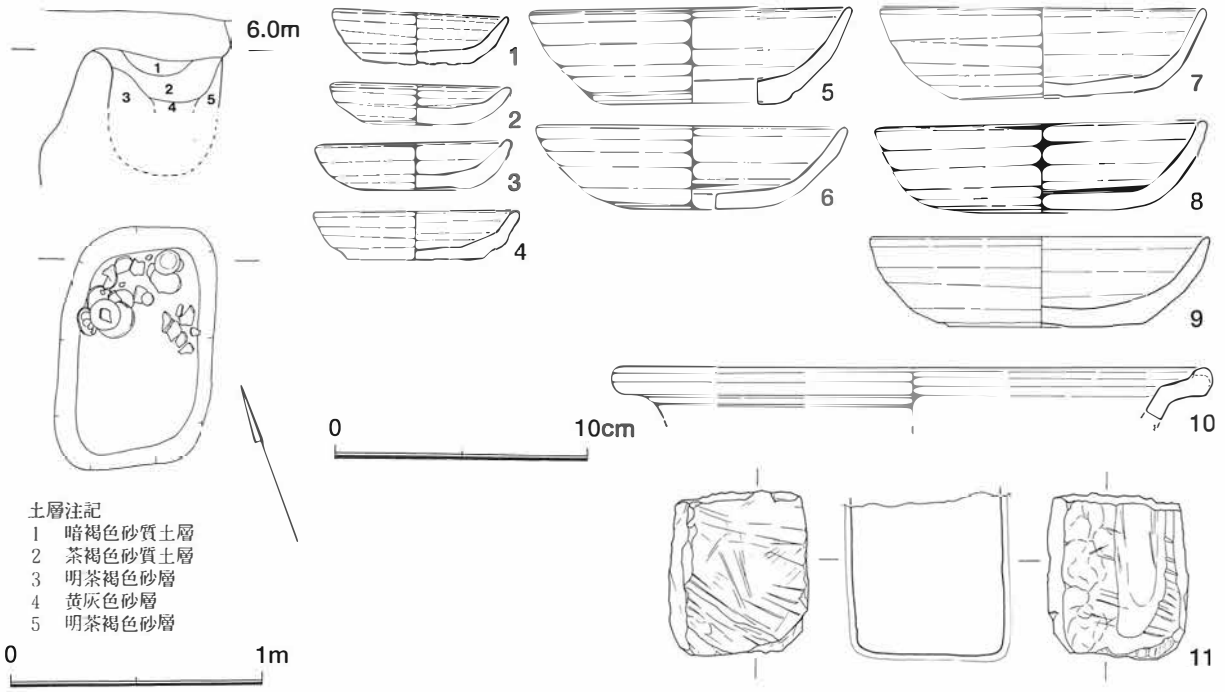
11点が図示できた。

１から９はロクロ成形のかわらけ。小型品（１～４）、大型品（５～９）がある。全て下層からの出土である。

１は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。外面には明瞭な稜はなくなめらかである。２は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁部下には弱い稜が巡る。３は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部下と外面中位にはやや弱い稜が巡っている。４は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、外面中位には強い稜が巡っている。５は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。底部は糸切り位置が低いため、浅い総高台状を呈する。６は器壁は薄い。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり口縁部でやや肥厚する。７、８は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面には明瞭な稜はなくなめらかである。７の器壁は薄い。９は体部が比較的外に開き、口縁部下にはやや強めの稜が巡る。

図示し得なかった小片、細片も含めて見ると、上・中・下層とも全てロクロ成形のもので、手捏ね成形のものは出土していない。上・中層では細片ばかりで接合できるものも無かったが、内折りの極小品細片が１点出土している。下層は大小の法量に分けられ、粉質・精製胎土の薄手精製品を一括出土の形で取り上げる事が出来た。大型品は、口径12.5～13.5cm、小型品は口径７～８cmの法量で、共に底部の締まる器高のやや高い皿形になるものが多い。

10は瀬戸窯製品の折縁鉢の口縁部片。口縁部を水平近く迄大きく外側に折り、端部を曲げて丸く納めている。為に、受け口状の口縁部となる。上層出土。



第15図　土壙８

11は砥石。産地箱根で安山岩質。方柱状で２面を使用している。

図示し得なかった小片、細片の遺物には上・中層からは、かわらけ、常滑窯系製品、手焙り、下層からは、かわらけ、常滑窯系製品、スラグ、フイゴの羽口片、手焙りと美濃系山茶碗窯製品の捏ね鉢口縁部片が出土している。捏ね鉢口縁部片は胎土は精緻で滑らかな灰色を呈し、端部を丸く納めている。この他に礫、貝殻、獣骨、魚骨がある。

土壙９（第16図）

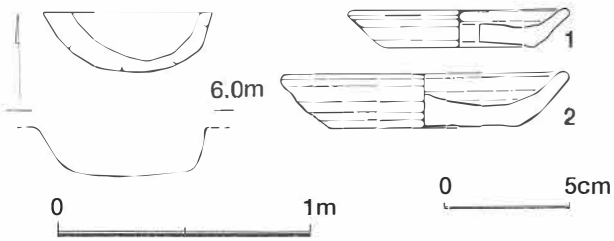
調査区東側で検出している。大型土壙状遺構覆土中に掘方が見られ、白黄色風成砂面上で検出した遺構群よりは、やや時期の降る遺構と思われる。土壙上面部は近・現代の攪乱により削平されている。土壙の平面形は円形と思われる。断面形は皿形、土壙の規模は東西方向68cm、南北方向は24cm以上である。底部の深さは確認面から17cmを測る。

覆土は大型土壙状遺構上層覆土とほぼ同じ暗褐色砂質土である。

出土遺物（第16図－１～２・図版10）

２点図示できた。

１、２はロクロ成形のかわらけ。



第16図　土壙９

１は小型品。体部は比較的外に開き、口縁部でわずかに外反する。２は大型品。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。底部は底上げ風になっている。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、常滑窯系製品、伊勢系土鍋、山茶碗窯系製品、獣骨、魚骨、礫、貝殻がある。

土壙10（第18図）

調査区北側中央で検出している。中世遺物包含層である暗褐色砂質土層中に掘方が見られ、白黄色風成砂面上で検出した遺構群よりはやや時期の降る遺構と思われる。柱穴様の小土壙で平面形は不整円形、断面形はＵ字形を呈する。土壙の規模は東西方向35cm、南北方向は28cmである。底部の深さは確認面から38cmを測る。

覆土は中世遺物包含層とほぼ同じ暗褐色砂質土である。

出土遺物

かわらけ、常滑窯系製品、礫、貝殻が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

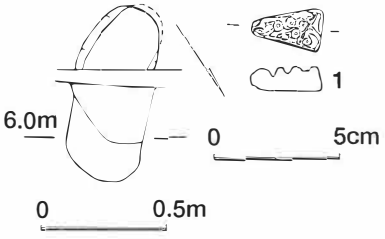
土壙11（第17図）

調査区北側のやや西寄りで検出している。中世遺物包含層である暗褐色砂質土層中に掘方が見られ、白黄色風成砂面上で検出した遺構群よりはやや時期の降る遺構と思われる。柱穴様の小土壙で平面形は楕円形、断面形はＵ字形を呈する。土壙の規模は東西方向30cm、南北方向は27cmである。底部の深さは確認面から40cmを測る。

覆土は中世遺物包含層とほぼ同じ暗褐色砂質土で、２層に大別でき下層に比べて上層は締まりが弱い。

出土遺物（第17図－１・図版10）

１点図示できた。



第17図　土壙11

1は滑石製品。形状は三角形、厚みは1㎝を測る。面上には未貫通の円形の彫り込みが6ヶ所みられる。

図示し得なかった小片、細片の遺物には、かわらけ、鉄製の和釘状 製品、滑石細片、常滑窯系製品、礫、貝殻がある。

土壙12（第18図）

調査区北側ほぼ中央で検出している。柱穴様の小土壙で平面形は円形、断面形は浅い皿形を呈する。土壙の規模は東西方向20㎝、南北方向も20㎝である。底部の深さは確認面から7㎝を測る。

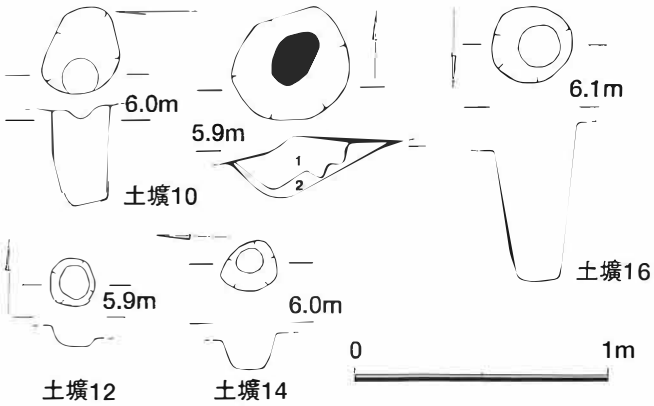
出土遺物

かわらけ、山茶碗窯系製品、鉄製の和釘状製品、スラグ、礫等が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

土壙13（第18図）

調査区ほぼ中央で検出している。平面形は円形、断面形はやや不整形な皿形を呈する。土壙の規模は東西方向60㎝、南北方向は50㎝である。底部の深さは確認面から25㎝を測る。

覆土は2層に大別でき、上層は暗褐色砂質土、下層は白色砂質土層である。



第18図　土壙10、12、13、14、16

出土遺物

かわらけ、山茶碗窯系製品、貝殻、礫が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

土壙14（第18図）

調査区中央、やや東寄りの所で検出している。柱穴様の小土壙で平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。土壙の規模は東西方向22㎝、南北方向は23㎝である。底部の深さは確認面から11㎝を測る。

出土遺物

貝殻が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

土壙15（第19図）

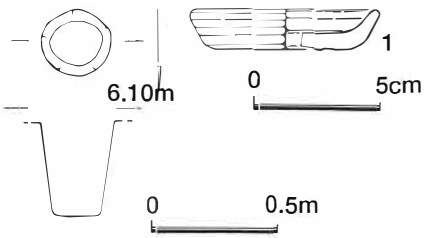
調査区西側、方形竪穴建築址南東隅で検出している。柱穴様の小土壙で方形竪穴建築址と切り合いを持つが新旧関係は不明。平面形は円形、断面形は深いU字形を呈する。土壙の規模は東西方向28㎝、南北方向は27㎝である。底部の深さは確認面から36㎝を測る。

出土遺物（第19図－1・図版10）

1点が図示できた。

1はロクロ成形のかわらけの小型品。器壁は比較的厚く底部から緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面はなだらかで稜はもたない。

図示し得なかった小片、細片の遺物にはかわらけ、貝殻、礫がある。



第19図　土壙15

土壙16（第18図）

調査区南西隅で検出している。柱穴様の小土壙で土壙２と切り合いを持つが、新旧関係は不明。平面形は円形、断面形は深いＵ字形を呈する。土壙の規模は東西方向33cm、南北方向は31cmである。底部の深さは確認面から58cmを測る。

出土遺物

かわらけ、貝殻が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

Ⅳ・井戸址（第20図・図版６）

調査区南寄り東壁際で一部を検出した。掘り方の西側部分の検出で井戸主体部は調査区外にある。限られた部分の調査であった為、掘り方規模、井戸枠の有無等は確認出来なかった。平面形は円形、又は不整方形と思われる。遺構の規模は東西方向150cm以上、南北方向は40cm以上である。調査は崩落危険防止の為、確認面より約45cm、海抜数値5·6mの深さで打切り、終了している。依って完掘はしていない。

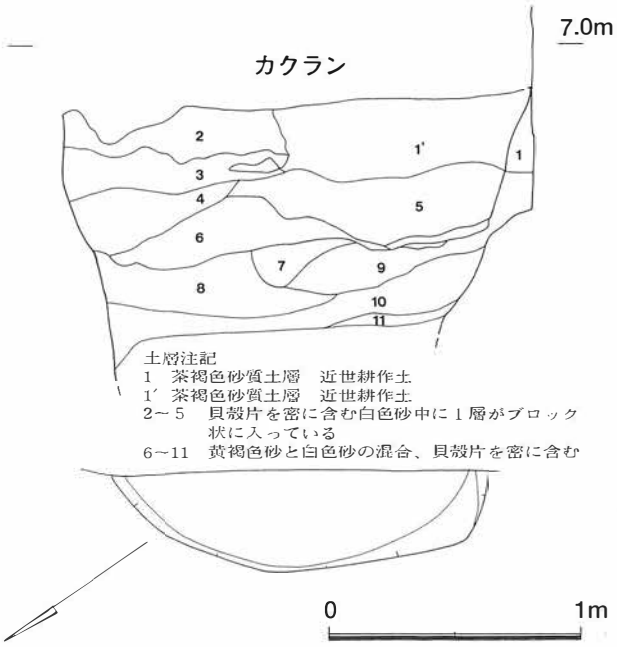
調査区東壁の土層観察では、海抜数値約6·8mの高さで井戸址は近・現代の盛土に削平されている。これより検出した部分迄の深さは120cmを測る。

覆土は２層に大別できほぼ水平堆積をしていて、上層は江戸時代耕作土である茶褐色砂質土と、これをブロック状に含む白色貝殻砂質土層、下層は貝殻片を多量に含む黄褐色砂と白色砂の混ざり合った砂質土である。

井戸址東側の掘方、覆土中に江戸時代耕作土の堆積が確認出来るので、近世まで降る遺構とも思われるが、わずかに出土した遺物は中世のものである。

出土遺物

かわらけ、常滑窯系製品、スラグ、礫が若干出土しているが、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。



第20図　井戸址

Ⅴ・遺物包含層中出土遺物（中世）（第21図－１～29・図版11）

明褐色から暗褐色の砂質土層で近・現代の削平を受けていた為、層自体の厚さは20～30cm程度と薄層であったが、層中からはかわらけを主体に多くの遺物が出土している。

29点が図示できた。

１・７・９は手捏ね成形のかわらけ。大型品（１）、中型品（９）、小型品（７）がある。

１は体部はやや開き気味に立ち上がり口唇部がつまみ上げているため端部は若干三角形状を呈する。７は体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、底部は平底風に平坦になっている。口唇部は丸くおさめている。９は器壁が厚く見込み部分がヘソ皿状に盛り上がっている。

２～６・８・10・11はロクロ成形のかわらけ。小型品（２～６・８）と大型品（10・11）がある。

２は器壁は薄く、体部の立ち上がる角度は急。口径は小さくそれと比較して器高は高い。３・５は短

い体部が緩やかに内彎しながら立ち上がる。口径と比較して器高は低い。４・６は体部が比較的外に開く。口縁部下にはやや強めの稜が巡る。８は体部が直線的に開いている。10は器壁は薄く、体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。底部は糸切り位置が低いため、浅い総高台状を呈する。口径と比較して底径は小さく締まって作られている。11は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁部下にはヨコナデによって生じたやや強めの稜が巡る。

12～15は常滑窯系製品。

12・13は捏ね鉢の口縁部小片。

12は体部外面には板ナデ痕を残す。又、角張った口唇端部を口縁部外面の強いヨコナデによって外側へ張りだしている。13は体部内外面とも指頭によるナデ痕を残している。又、角張った口唇端部を口縁部外面のヨコナデに依って、凹状にへこませている。

14・15は壺。

14は口縁部小片。やや外反りしながら立ち上がる頸部から強いヨコナデによって水平近くまで折り曲げ口縁端部を上方へ延ばしている。縁帯部はヨコナデによって凹んでいる。胎土は灰色、夾雑物の殆ど見られない良精土である。15は口縁部から肩部にかけての小片。口縁部を折り曲げ頸部に接続させている。張りのある肩部の内面は指頭痕が明瞭に残っている。器表は灰色、胎土は暗灰色、器色橙色夾雑物の殆ど見られない良精土。

16～18は瀬戸窯製品。

16は卸し皿の底部片。器表面露胎、内側面は薄く灰釉で施釉している。底部は糸切り痕明瞭に残るが、卸目は粗雑な作り、ヘラ状工具で斜め方向に鋭く切り込んでいる。胎土は灰色、堅緻である。

17・18は鉢口縁部小片。

17は体部外面はロクロ成形痕明瞭。口縁端部は丸く納めている。器表面・内側面共ににやや厚く灰釉で施釉している。胎土は灰色で精良土。18は体部をやや厚く灰釉で施釉している。器表は口縁部を強いヨコナデによって端部を水平方向へ折り曲げ、内側には尖帯を形成している。外面はロクロ成形痕明瞭。胎土は灰色、精良土である。

19～21は舶載品。

19は白磁口兀皿の口縁部小片。口縁部にかけて大きく外傾する。釉は灰白色失透。

20は花生の胴部下位から底部にかけての小片。澄んだ明淡緑色の釉が畳付の部分を除いて厚く施されている。

21は同安窯系青磁櫛掻文碗の体部細片、器壁は薄く、内外両面に櫛歯状の工具によって浅い条線が彫られている。釉は淡灰緑色失透。

22は瓦質研磨手焙りの口縁部小片。口縁部が内方に張りだす形で、口縁上端はほぼ水平に整形されている。器表は横位によく磨かれている。

23は鍔釜の口縁部から体部にかけての破片。薄い壁の胴部から内傾し口縁端部は肥厚せずに丸く納めている。鍔部は断面楔状の貼り付け。体部内外側面共に、加熱痕剥離等は見られない。器表は茶色から焦茶色、内側は褐色である。胎土は明るい粘土色で軟質、夾雑物見られない精良土である。

24・25は銅銭。

24は銭種政和通宝で、初鋳年は1111年（北宋代）である。25は銭種開元通宝で、初鋳年は621（唐代）である。

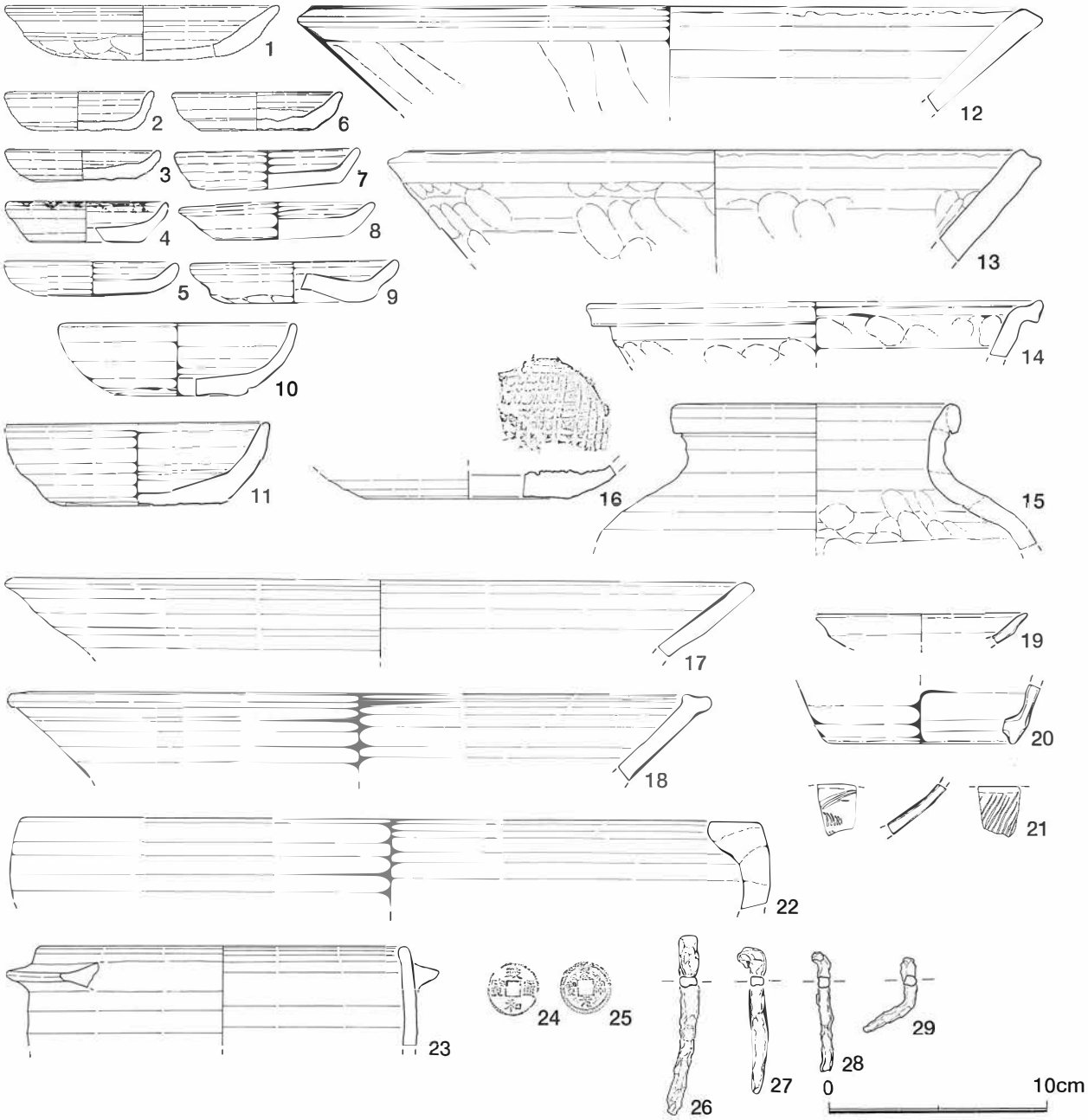
26～29は鉄製の和釘状製品。

以下、図示し得なかった小片、細片の遺物について記す。

常滑窯系製品の甕の口縁部から頸部にかけての小片はやや外反りしながら立ち上がる長い頸部から強いヨコナデによって水平方向に外反りさせた口縁端部に、上方へ垂直に立つ縁帯を貼りつけている。縁帯幅2.7cm。胎土は灰色、粘性強い粗土である。

瀬戸窯製品は洗または折縁皿と思われる底部から胴部にかけての小片は、器表はロクロ成形痕明瞭で底部から底部近くの胴部は露胎である。底部は糸切り。内側には灰釉を施釉している。胎土は暗黄灰色で堅緻。入子は無釉の製品で底部糸切り痕の残るロクロ成形のものである。この他、灰釉仏華瓶の胴部細片が出土している。

瓦質製品は捏ね鉢の口縁部片が出土している。この製品は器表に二次焼成の痕が見られ、口縁部は肥厚し端部を丸く納めている。胎土は白灰色、軟質で小石粒見られるが精良な土である。輪花浅鉢形手焙りの脚部は板状というより方柱に近い逆台形を呈す貼りつけのものである。胎土は灰色で粗胎。



第21図　包含層出土遺物（中世）

山茶碗窯系製品は全て胎土粗胎の渥美窯系製品である。口縁部はヨコナデによって肥厚させた口縁端部を玉縁状に丸く納めているもの、端部丸く納めているもの、口縁部をヨコナデし端部を肥厚させ凹線を巡らせているものが見られる。

砥石は砂岩質で産地玉川のものと流文岩質凝灰岩で産地丹沢のものが1点ずつ出土している。

硯はコーナー部分の細片で丘部か海部分なのかは不明。材質は粘板岩質で産地は不明である。

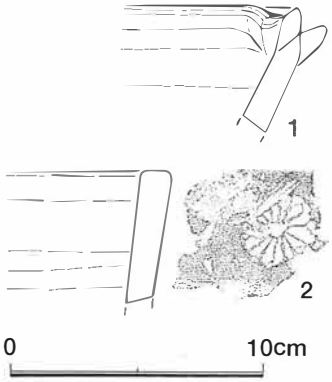
Ⅵ・遺物包含層中出土遺物（近・現代）（第22図－1～2・図版10）

重機による表土掘削後、中世遺物包含層検出時に出土したもの。

2点が図示できた。

1は常滑窯系製品の捏ね鉢の口縁部小片。口縁部はヨコナデが強く、口唇端部は三角形に尖っている。片口は指頭により外へ押し出して作られているが、作りは雑。胎土は暗灰色、粘性強く径0·1cm大の夾雑物が見られる。

2は瓦質手焙りの口縁部片。輪積成形後にヨコナデ整形、口縁部は角張り外面には、菊花押印文が配されている。器表、内側共に暗橙色を呈している。内外面共に加熱痕は見られない。器厚は1.2cm、胎土は淡橙色で小石等夾雑物の見られる粗い土である。



第22図　包含層中出土遺物（近・現代）

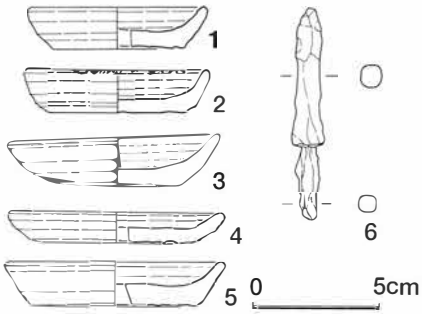
Ⅶ・中世基盤層直上出土遺物（第23図－1～6・図版10）

中世基盤層である白黄色風成砂層面上で遺構検出作業を行なった時に出土したもの。

6点が図示できた。

1～5はロクロ成形のかわらけの小型品。

1は体部は比較的外に開き、底部は糸切り位置が低いため、浅い総高台状を呈する。2は体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、外面下位には弱い稜が巡っている。3は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反りする。外面中位にはやや強い稜が巡っている。4は体部が短く、比較的外に開く。口縁部下にはやや強めの稜が巡る。5は体部が直線的に開いている。



第23図　中世基盤層直上出土遺物

6は鉄鏃。

図示し得なかった小片、細片の遺物には常滑窯系製品、瀬戸窯製品、山茶碗窯系製品、鉄製の和釘状製品、スラグがある。

Ⅷ・表採遺物

かわらけ、常滑窯系製品、瀬戸窯製品の小片、細片を採集しているが、図示できるものはなかった。

この内、瀬戸窯製品で碗（皿）の口縁部片は、口縁部付近で肥厚し端部を丸く納めている。口縁部には淡緑色の灰釉を施釉しているが、胴部より下は露胎である。胎土は白灰色で良精土。

常滑窯系製品の壺の口縁部片は、口縁部を折り曲げ頸部に接続させている。器表はやや暗い灰色。胎土は暗灰色で夾雑物の見られない良精土である。

Ⅸ・自然遺物

本調査地点から出土した自然遺物は貝類、鳥、獣、魚骨である。植物種子は調査地点の堆積土層が砂を主体としている為、遺物として遺存しにくい条件にあり、確認・採集する事は出来なかった。

貝類

貝類の出土は中世遺物包含層、検出した各遺構覆土中からであるが、柱穴様の小土壙を含む土壙のものが一括廃棄様であるのに対し、大型土壙状遺構のものは覆土の堆積等の観察から、連続的な廃棄の傾向が見られた。

30種程確認の出来た貝類遺体の多くは食用に供したものと考えられ、出土した貝類の組成の主体はハマグリ、アカニシ、キサゴである。尚、千葉地遺跡等から出土している螺鈿細工の原料として奄美諸島以南からもたらされたヤコウガイ、漆加工の際の容器として用いられたと考えられる、ハマグリ等の貝殻の内側に漆の付着したものは本調査地点からは出土しなかった。ハマグリは殻長が、7cmと5cmに大別でき、貝の大きさはほぼ整っている。採集に際して選択が行なわれたのだろう。チョウセンハマグリは多くが殻破片として出土している。殻長が10cmを越えるものであり食用の際、殻ごと漆器等の容器に盛るには少々大き過ぎると思われるので、アカニシ同様、殻を打ち割り肉を取り出した後、調理・加工が施されたのではないだろうか。

鳥、獣、魚骨

鳥骨ではガン・カモ、獣骨ではイヌ・ウサギ・シカ・タヌキ・ネズミ、魚骨ではカツオ・クロダイ・コチ・サメ・タイ・ブリ・マグロ・マダイ等の骨が出土している。切断、削痕のある獣骨も見られるが少量で、出土した骨の大部分は加工品というより食用の残滓と考えられる。

第四章　まとめ

今回の調査で得られた資料をまとめてみると、出土遺物の主体はロクロ成形のかわらけであり、常滑窯系製品の甕・捏ね鉢、山茶碗窯系製品の捏ね鉢等の什器類がこれに続く。舶載品の出土は極少量で細片が多い。その他には、フイゴの羽口・スラグ等の鋳造関係遺物、鉄製の和釘状製品の出土が見られた。遺物は全体的に小片から細片で占められ、このことから考えて出土遺物の大半は地業土に混入して遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。

鉄製の和釘状 製品は調査区全体から合わせて93本程出土している。和釘の断面形は全て四角いものだが、用途不明のものには断面が扁平四角なものも見られる。和釘の頭部はそのまま折り曲げたもの、叩き潰して平たく伸ばした後に折り曲げたもの等があるが、本調査地点では後者のものが多い。長さは出土した和釘の全てが先端部を欠損しているので正確な数値は出せないが、２寸（66mm）から３寸（99mm）の間に納まるものと思われる。中には長さが１寸以下（25mm以下）の和釘も見られ、用途事の使い分けが考えられそうである。和釘以外には掛金状 の製品、扁平な棒状の製品等が見られる。

検出した遺構のうち方形竪穴建築址と南北方向に展開する土壙列（土壙１・３・４・７・13）については遺跡の北側に面する道路に対しほぼ直交する軸方位をとつており、道路そのものが道路そのもの、あるいは何らかの区画として中世まで遡る可能性が高い。尚、由比ヶ浜一丁目118番地点、由比ヶ浜一丁目123番５外地点で検出した遺構もこの道路とほぼ平行・直交する。

方形竪穴建築址の所産時期については、方形竪穴建築址に伴う遺構と考えられる東側に近接する土壙８の覆土下層から出土したかわらけから14世紀前半頃と思われる。

大型土壙状 遺構は部分的な検出であり、遺構としての性格や大きさは把握し得なかったが調査区北側の遺構断面の観察では、北側の道路まで延びる様な規模である。南北軸線の方位はＮ－３°－Ｅを測り、北側道路の軸線に対し約55°の傾きを見せている。このような軸方位をもつ遺構は由比ヶ浜一丁目118番地点、由比ヶ浜一丁目123番５外地点からは検出されていない。

遺構覆土中出土の遺物はロクロ成形のかわらけが主体的だが手捏ね成形のかわらけや、龍泉窯系青磁画花文碗の小片等も少量出土している。又、伊勢系土鍋の様に鎌倉時代後半に搬入される遺物も混ざって出土している。年代的には13世紀後半から14世紀前半・中頃であろうか。方形竪穴建築址よりは古い遺構である。

上記の遺構は他の土壙も含め中世基盤層である白黄色風成砂面上、又は基盤層の上の白色砂から掘込まれている遺構であるが、次にはこれらの遺構を埋める形で、地業が行なわれる。この面の上には方形竪穴建築址の様な白黄色風成砂層迄達する建物は作られなかった様で遺構の検出は柱穴様の小土壙２基のみであった。

中世後期から近世以降、本調査地点は耕作地となる様で、調査区東側の土層中には耕作土と思われる茶褐色砂質土の堆積が見られた。この頃に調査区東側に井戸が造られた様だが、上部は近・現代の攪乱によって失われている。

（参考文献）馬淵和夫「由比ヶ浜一丁目118番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』　鎌倉市教育委員会（平成７年）

馬淵和夫「由比ヶ浜一丁目123番５外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』　鎌倉市教育委員会（平成７年）

第１表　出土遺物観察表

方形竪穴建築址出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径（3.3）　底径(3.4)　器高 0.9	1/4　中層出土　極小品　器色橙色・胎土粉質
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径（7.8）　底径(6.2)　器高 1.7	1/3　下層出土　器色淡粘土色・胎土砂微量に含む
3	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径（8.0）　底径(5.9)　器高 1.6	1/2弱　下層～底面出土　器色淡粘土色・胎土砂微量含む
4	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径（8.0）　底径(5.8)　器高 1.5	1/3　中層出土　器色淡粘土色・胎土粉質
5	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径（7.9）　底径(4.9)　器高 1.5	1/4　上層出土　器色淡粘土色・胎土砂微量に含む
6	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　7.5　底径 4.7　器高 1.85	2/3　上層出土　器色淡粘土色・胎土やや粗い粉質
7	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 14.4　底径 8.2　器高 3.7	1/2　覆土中　器色淡橙色・胎土やや粗い粉質
8	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(13.9)　底径(8.5)　器高 3.1	1/4　下層出土　器色淡粘土色・やや粗い粉質
9	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(12.8)　底径(5.8)　器高 3.85	1/4　上層出土　淡橙色・やや粗い粉質
10	常滑窯系製品　片口鉢	口径 14.1　底径 9.8　器高 6.1	1/4　上層出土　内面磨耗　捏鉢として使用
11	常滑窯系製品　壷	口径(9.85)　折り返し巾1.3	口縁部小片下層出土
12	常滑窯系製品　甕	不明　縁帯巾　3.3	口縁部～頸部小片　中層出土　中野８型式
13	常滑窯系製品　捏ね鉢	口径(31.5)	口縁部小片　中層＋下層出土
14	山茶碗窯系製品　捏ね鉢	不明	口縁部小片　上層出土　美濃系　胎土淡暗灰色良精土
15	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	口径(15.45)	口縁部～胴部小片　上層出土　釉は澄んだオリーブ色
16	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	不明	口縁部細片　裏込中出土　釉は澄んだ空色
17	硯	残存長2.85	コーナー部細片　粘板岩質産地不明
18	常滑窯系転用品　磨りトコナメ	大きさ8.0×6.25　器厚0.8	胴部小片　下層出土　側縁部全周使用
19	フイゴ羽口	復元径8.8　中央に径3.55の孔　厚さ2.55	先端部は鉱物が溶着している
20	鉄製和釘状製品	残存長8.9　断面長方形 0.4 ×0.8	下層出土
21	鉄製和釘状製品	残存長6.53　断面方形　0.45×0.32	上層出土
22	鉄製和釘状製品	残存長5.0　断面方形　0.65×0.75	下層～底面出土
23	鉄製和釘状製品	残存長5.35　断面円形　0.65×0.65	中層出土　掛金状に端部を丸く曲げて環状にしている
24	鉄製和釘状製品	残存長5.35　断面三角　?0.75×0.6	上層出土
25	鉄製和釘状製品	残存長4.7　断面方形　0.8 ×0.65	覆土中
26	鉄製和釘状製品	残存長3.45　断面方形　0.5 ×0.7	中層出土
27	鉄製和釘状製品	残存長3.75　断面方形　0.6 ×0.5	裏込め中出土
28	鉄製和釘状製品	残存長3.8　断面長方形 0.6 ×0.25	上層出土
29	鉄製和釘状製品	残存長4.1　断面方形　0.5 ×0.35	下層出土
30	火打ち石（瑪瑙）	大きさ1.15×2.5	上層出土

大型土壙状遺構出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	手捏ね成形かわらけ	口径 (8.8)　底径　　器高 2.15	1/4　下層出土　器色粘土色・胎土粉質　焼成良好
2	手捏ね成形かわらけ	口径 9.1　底径 7.6　器高 1.6	1/2　上層出土　器色橙色・胎土やや粗い粉質焼成良好
3	手捏ね成形かわらけ	口径(13.0)　底径　　器高 2.8	1/3　貝殻集中部出土　器色淡粘土色・胎土粉質
4	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 8.85　底径 6.7　器高 1.55	3/4　貝殻集中部出土　器色粘土色・胎土粉質
5	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 (8.4)　底径(6.6)　器高 1.65	2/3弱　貝殻集中部出土　器色橙色・胎土やや粗い粉質
6	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 8.2　底径 6.6　器高 1.35	3/4　貝殻集中部出土　器色粘土色・胎土やや粗い粉質
7	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 (8.4)　底径 5.8　器高 2.0	1/3強　上層出土　底部静止糸切り？　胎芯淡黒色良精土
8	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 8.2　底径 6.4　器高 1.3	1/2強　内底面未調整ロクロ成形痕残　器色粘土色粉質
9	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 7.45　底径 4.7　器高 1.7	完形品　貝殻集中部出土　器色灰肌色・胎土砂微量に含む
10	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(13.5)　底径 8.3　器高 3.05	1/3　貝殻集中部出土　器色粘土色・胎土やや粗い粉質
11	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 13.0　底径 8.6　器高 3.1	略完形品　貝殻集中部出土　器色橙色・胎土やや粗い粉質
12	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 13.2　底径 7.1　器高 3.4	3/4　貝殻集中部出土器色明淡色・薄手胎土粉質精製品
13	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 12.8　底径 7.8　器高 3.1	3/4　貝殻集中部出土　器色粘土色・胎土やや粗い粉質
14	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(12.4)　底径(8.1)　器高 3.7	1/2弱　貝殻集中部出土　器色橙色・胎土やや粗い粉質
15	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(10.9)　底径(6.4)　器高 3.15	3/4　上層出土　器色橙色・胎土砂微量に含む
16	伊勢系土鍋	口径(28.4)	上層8点下層4点他覆土中4点、土坑9包含層各1点出土
17	常滑窯系製品　甕（小型）	縁帯巾1.5　器厚0.8	口縁部～頸部小片　中野6a～6b型式
18	白磁　口兀皿（碗）	口径(10.4)	口縁部～胴部小片　中層出土　釉色青味灰白色失透
19	龍泉窯系青磁劃花文碗	高台部欠損　底径6.75	下層出土底部片内底面に蓮華文片切彫り釉は淡暗緑色透明
20	帰属年代・産地不明叩甕	大きさ(10.2×3.4)　器厚0.75	胴部小片　上層出土　焼成良好
21	土錘	残存長2.45　中央に径0.4の孔	1/2　丸棒に粘土巻付け指頭整形　淡橙色・胎土粉質
22	銅銭	銭種　開元通宝　初鋳621年　時代　唐	上層出土
23	鉄製和釘状製品	残存長7.25　断面長方形　0.7 ×0.45	上層出土
24	鉄製和釘状製品	残存長6.95　断面方形　0.55×0.5	下層出土
25	鉄製和釘状製品	残存長6.8　断面方形　0.6 ×0.6	上層出土
26	鉄製和釘状製品	残存長6.2　断面方形　0.4 ×0.65	下層～底面出土
27	鉄製和釘状製品	残存長4.75　断面方形　0.45×0.55	上層出土
28	鉄製和釘状製品	残存長6.0　断面方形　0.5 ×0.45	上層出土
29	鉄製和釘状製品	残存長5.85　断面方形　0.7 ×0.55	上層出土
30	鉄製和釘状製品	残存長4.85　断面方形　0.65×0.45	上層出土
31	鉄製和釘状製品	残存長2.3　断面方形　0.3 ×0.35	上層出土
32	鉄製和釘状製品	残存長3.4　断面方形　0.4 ×0.3	上層出土
33	鉄製和釘状製品	残存長3.1　断面方形　0.65×0.65	上層出土
34	鉄製和釘状製品	残存長4.6　断面方形　0.5 ×0.4	上層出土
35	鉄製和釘状製品	残存長5.25　断面方形　0.4 ×0.55	下層出土
36	渥美窯系転用品	残存長6.6×4.5　器厚(最大厚)1.25	胴部小片砥石転用　貝殻集中部出土　両面使用側面未使用

土壙1出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 8.3　底径 6.1　器高1.7	略完形品　器色淡粘土色・胎土粉質
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(8.0)　底径(6.1)　器高1.55	3/4　底部中央径3．15cmの穿孔　粘土色・粉質
3	鉄製和釘状製品	残存長4.3　断面方形　0.5×0.5	(焼成後穿孔)
4	鉄製和釘状製品	残存長3.1　断面方形　0.5×0.4	

土壙2出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(12.8)　底径(7.3)　器高2.8	1/2弱　器色橙色・　胎土やや粗い粉質
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(11.6)　底径(6.2)　器高3.1	1/3強　器色淡粘土色・胎土粗い粉質
3	鉄製和釘状製品	残存長4.65　断面長方形 0.35×0.6	
4	鉄製和釘状製品	残存長6.6　断面円形　0.45×0.4	

土壙3出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 (7.4)　底径(5.0)　器高2.1	1/2　器色淡粘土色・胎土粗い粉質部分的赤褐色に変色
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(12.6)　底径(8.2)　器高3.05	1/2　器色明粘土色・やや粗い粉質砂微量に含む
3	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 13.2　底径 7.4　器高3.55	略完形品　器色淡橙色・胎土砂微量に含む
4	銅銭	銭種　開元通宝？　初鋳621年　時代　唐	
5	鉄製和釘状製品	残存長4.45　断面方形　0.6×0.5	
6	鉄製和釘状製品	残存長4.7　断面方形　0.4×0.55	

土壙4出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 (7.9)　底径(4.8)　器高1.7	1/3弱　器色淡粘土色・胎土粉質
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(13.4)　底径 6.9　器高3.7	1/4強　器色橙色・胎土やや粗い粉質
3	フイゴの羽口	復元径7.0　中央に径(2.7)の孔	先端部に溶物付着
4	鉄製和釘状製品	残存長5.6　断面方形　0.4×0.4	

土壙5出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 7.5　底径5.2　器高1.7	1/2　器色淡粘土色・粉質
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 7.8　底径5.4　器高1.7	2/3弱　器色淡粘土色・胎土粉質
3	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 7.9　底径5.0　器高2.0	1/2　器色暗赤褐色・胎土やや粗い粉質　焼成良好
4	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 8.9　底径5.0　器高1.8	3/4　全体に薄く煤付着　薄手胎土精製品
5	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 9.8　底径6.0　器高2.3	略完形品　器色淡粘土色・胎土粉質
6	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径12.3　底径7.4　器高3.2	3/4　器色橙色・胎土やや粗い粉質
7	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径12.4　底径8.1　器高2.8	略完形品　器色褐色・胎土砂微量に含む
8	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径12.0　底径6.2　器高3.4	略完形品　器色橙色・胎土砂微量に含む
9	鉄製和釘状製品	残存長4.6　断面方形　0.6×0.65	

土壙6出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 (7.0)　底径(4.3)　器高1.55	1 3　器色橙色・薄手胎土精製品
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(12.1)　底径(7.0)　器高3.6	1 3強　器色淡橙色・胎土粉質
3	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(12.8)　底径(8.5)　器高3.2	1 4　器色明橙色・薄手胎土精製品
4	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(14.0)　底径(8.3)　器高3.45	1 2弱　器色明橙色・薄手胎土精製品
5	渥美窯系製品	大きさ(6.7)×5.5　器厚0.8	胴部小片転用　側縁部2ケ所に使用痕
6	鉄製和釘状製品	残存長8.15　断面長方形 0.5 ×0.95	
7	鉄製和釘状製品	残存長5.1　断面方形　0.45×0.35	
8	鉄製和釘状製品	残存長4.5　断面方形　0.8 ×0.75	
9	鉄製和釘状製品	残存長4.2　断面方形　0.7 ×0.55	
10	鉄製和釘状製品	残存長4.15　断面方形　0.6 ×0.5	

土壙7出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(11.0)　底径(6.0)　器高3.3	1 3 器色橙色・　胎土やや粗い粉質
2	常滑窯系製品　甕	残存長5.5　縁帯巾2.7	口縁部～頸部小片
3	鉄製和釘状製品	残存長7.65　断面方形　0.7 ×0.7	
4	鉄製和釘状製品	残存長7.5　断面方形　0.45×0.5	
5	鉄製和釘状製品	残存長7.2　断面方形　0.6 ×0.5	
6	鉄製和釘状製品	残存長6.0　断面方形　0.7 ×0.5	
7	鉄製和釘状製品	残存長6.25　断面方形　0.5 ×0.45	

土壙8出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　7.1　底径 4.2　器高2.1	略完形品　下層出土　器色明橙色・薄手胎土精製品
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　7.2　底径 4.65　器高1.6	完形品　下層出土　器色淡粘土色・胎土粉質
3	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　7.9　底径 4.75　器高1.9	3 4　下層出土　器色淡粘土色・胎土砂微量に含む
4	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　8.2　底径 6.4　器高2.0	完形品　下層出土　器色橙色・胎土砂微量に含む
5	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(13.0)　底径(7.9)　器高3.8	1 4　下層出土　器色淡橙色・胎土粉質
6	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(12.55)　底径(5.9)　器高3.3	1 4　下層出土　器色淡橙色・薄手胎土精製品
7	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 13.1　底径 7.3　器高3.55	3 4　下層出土　器色淡橙色・薄手胎土精製品
8	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 13.35　底径 8.0　器高3.5	略完形品　下層出土　器色淡粘土色・胎土粉質
9	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 13.6　底径 8.2　器高3.6	3 4　下層出土　器色淡橙色・胎土粉質
10	瀬戸窯製品　折縁鉢	口径(24.2)	口縁部小片上層出土
11	砥石	大きさ5.6×(6.3)	方柱状　上層出土　箱根産　安山岩質　2面使用

土壙9出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 (8.9)　底径(5.9)　器高1.55	1 4　器色淡粘土色・胎土粉質
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(11.5)　底径(7.5)　器高2.2	1 4　器色淡粘土色・胎土粉質

土壙11出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	滑石（製品？）	大きさ2.8×1.7×1.2　厚み1.0	形状三角形　面上に未貫通の円形の孔が6ヶ所見られる

土壙15出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(7.6)　底径(6.35)　器高1.6	1/4強　器色淡粘土色・胎土砂微量に含む

中世遺物包含層中出土遺物観察表

	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	手捏ね成形かわらけ	口径(12.8)　底径　器高	1/4　器色橙色・胎土粉質
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　6.9　底径　5.3　器高1.8	3/4強　器色橙色・胎土粉質
3	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　7.15　底径　4.9　器高1.4	3/4強　器色淡粘土色・胎土粉質
4	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径（7.3）　底径（5.3）　器高1.9	1/4強　口縁部周辺タール付着粘土色粉質焼成良好
5	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径（8.0）　底径（5.3）　器高1.6	1/2弱　器色淡粘土色・胎土砂微量に含む
6	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　7.9　底径　5.2　器高1.75	1/2　器色淡粘土色・胎土粉質
7	手捏ね成形かわらけ	口径　8.7　底径　7.0　器高1.7	2/3　ヘラ・指頭による調整器色淡橙色・胎土粉質
8	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径　9.1　底径　6.25　器高1.75	3/4　器色橙色・胎土粉質
9	手捏ね成形かわらけ	口径（9.4）　底径（7.8）　器高1.9	1/2弱　ヘソ皿状に中央盛上る器色橙色・胎土粉質
10	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(11.0)　底径（6.1）　器高3.4	1/3弱　器色淡橙色・胎土粉質
11	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 12.3　底径　8.2　器高3.8	2/3　器色淡粘土色・胎土やや粗い粉質
12	常滑窯系製品　捏ね鉢	口径(32.6)	口縁部小片
13	常滑窯系製品　捏ね鉢	口径(30.3)	口縁部小片
14	常滑窯系製品　甕	口径(21.1)　縁帯巾1.05	口縁部小片
15	常滑窯系製品　壷	口径(13.4)　折返巾1.3	口縁部～肩部小片　口縁部を折曲げ玉縁状にしている
16	瀬戸窯製品　卸し皿	底径　9.4	底部片卸目は粗雑な作り器表露胎・内側薄く灰釉施釉
17	瀬戸窯製品　鉢	口径(34.8)	口縁部小片　灰釉施釉　口縁部玉縁
18	瀬戸窯製品　鉢	口径(32.4)	口縁部小片　灰釉施釉　口縁部受け口状
19	白磁　口兀皿	口径（9.8）	口縁部小片　釉は灰白色失透
20	龍泉窯系青磁　花生	高台径(8.6)	体部下半～底部小片釉は澄んだ明淡緑色　畳付部露胎
21	同安窯系櫛掻文碗		体部細片　釉は淡灰緑失透
22	瓦質研磨手焙り	口径(32.4)	口縁部小片　口縁部水平に内側へ大きく折り曲ている
23	鍔釜	口径(17.2)	口縁部～体部片　千葉地遺跡編年15世紀代
24	銅銭	銭種　政和通宝　初鋳1111年　時代　北宋	
25	銅銭	銭種　開元通宝　初鋳621年　時代　唐	
26	鉄製和釘状製品	残存長8.4　断面長方形　0.4×0.8	
27	鉄製和釘状製品	残存長6.75　断面方形　0.4×0.6	
28	鉄製和釘状製品	残存長5.5　断面方形　0.5×0.5	
29	鉄製和釘状製品	残存長3.4　断面方形　0.4×0.55	

近・現代盛土中出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	常滑窯系製品　捏ね鉢	器厚0.95	口縁部小片　片口は指頭押し出しで雑な作り
2	瓦質手焙り	口縁部下に径2.75cm程の菊花文スタンプ 器厚1.2	口縁部小片　開気味器壁立上底部に三方の脚が付くタイプ

中世基盤層直上出土遺物観察表

No.	生産窯・器種	法量(単位cm)＊カッコは復元径	残存値・出土部位・出土位置・胎土・調整・加飾など
1	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(7.2)　底径(5.1)　器高1.45	1 2弱　器色淡粘土色・胎土砂微量に含む
2	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(7.6)　底径(5.6)　器高1.7	1 2弱　タール付着　器色暗淡橙色・胎土砂微量に含む
3	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径 8.7　底径 4.8　器高1.95	略完形品　器色淡橙色・胎土粉質
4	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(8.6)　底径(6.1)　器高1.3	1 2　穿孔品　内底面中央に径0.75の孔
5	ロクロ成形底部糸切りかわらけ	口径(8.6)　底径(6.5)　器高1.65	1 2弱　器色淡粘土色・胎土粉質
6	鉄鏃	残存長8.4　茎部(3.0)　身先～身根(5.4)	

第２表　出土遺物点数表　かわらけ

数値は接合作業を行い、遺物の復元を試みた後のものである。完形品の１点も細片の１点も同じ１点として計算している。個体数の算出方法については「第４回貿易陶磁研究集会　その成果と課題」『貿易陶磁研究』No.４貿易陶磁研究会（小野正敏1984）、「食器計量の意義と方法」『国立歴史民族博物館研究報告』第40集国立歴史民族博物館（宇野隆夫1992）、「長谷小路周辺遺跡（No.236）由比ヶ浜三丁目1175番２外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』鎌倉市教育委員会（馬淵和雄1994）、「かわらけの個体数計算の試み」『鎌倉考古』No.24鎌倉考古学研究所（斎木秀雄1992）に詳細に書かれているので、そちらを参照されたい。

検　出　遺　構	①	②	③	④	⑤	●
包含層中(近･現代)						
包含層中(中世)	2108	2108	464	8	8	6
中世基盤層直上	143	143	41	2	2	
井戸址	2	2				
土壙 1	50	50	13			
土壙 2	237	237	46			
土壙 3	111	111	16			
土壙 4	235	235	32			
土壙 5	119	119	48			
土壙 6	302	302	47	1	1	
土壙 7	553	553	79			
土壙 8	539	539	70			
土壙 9	19	19	6			
土壙10	14	14	2			
土壙11	30	30	1			
土壙12	21	21	1			
土壙13	30	30	2			
土壙14						
土壙15	15	15	2			
土壙16	6	6	1			

検　出　遺　構	①	②	③	④	⑤	⑥
方形竪穴建築址						
上層	834	834	194			
中層	758	758	226			
下層	217	217	54			
下層～底面	69	69	23			
底面直上	4	4	1			
壁際（裏込め）上層	88	88	26			
中層	55	55	11			
下層～底面	63	63	24			
一括取り上げ	124	124	41			

検出遺構	①	②	③	④	⑤	⑥
大型土壙状遺構						
上層	852	846	194	6	6	
貝殻集中部	63	59	28	4	4	
下層	474	460	131	14	14	
上下層一括	386	381	113	5	5	
下層～底面直上	170	166	55	4	4	

①出土かわらけ総点数　②この内ロクロ成形品の点数　③ロクロ成形品で口縁部片確認出来るもの
④この内手捏ね成形品の点数　⑤手捏ね成形品で口縁部片確認出来るもの
⑥戦国期・側面観逆台形を呈するロクロ成形品

第3表　出土遺物点数表　国産・舶載品

出土遺物 / 検出遺構	常滑窯系製品	渥美窯系製品	渥美窯系山茶碗	美濃窯系山茶碗	瀬戸窯製品	伊勢系土鍋	手焙り製品・火鉢	鉄製和釘状製品	スラグ	フイゴの羽口	滑石製品	舶載品・青磁	舶載品・白磁	その他
包含層中(近現)	23						2			1				
包含層中(中世)	96		11		17	1	6	10	14	3		4	2	銅銭3鍔窯1硯1砥石3
中世基盤層直上	5		2	1	1			4	1					
井戸址	1								1					
土壙 1	1							2						
土壙 2	8							2	2					伊勢系土鍋に近似の土器1
土壙 3	1						3	13	3	1				
土壙 4	13		1					4	7	1				
土壙 5	3							4						
土壙 6	17	1	2		1		2	4	3			1		
土壙 7	20				1			7						
土壙 8	15			1	1		3		2	1				砥石3
土壙 9	1		2			1								
土壙10	2													
土壙11	3							2			1			［方形竪穴建築址］
土壙12			1	1				5	1					鍔釜1梅瓶1硯1
土壙13														砥石3
土壙14														［大型土壙状遺構］
土壙15														白かわらけ1土錘1
土壙16														銅銭3砥石3
方形竪穴建築址	69	3	8	2	8		6	17	3	1	1	4	5	瓦器打ち折り小皿1
大型土壙状遺構	106	7	5	5	9	19	18	19	9	4	1	5		帰属年代産地不明の叩甕1

第4表　出土遺物点数表　礫

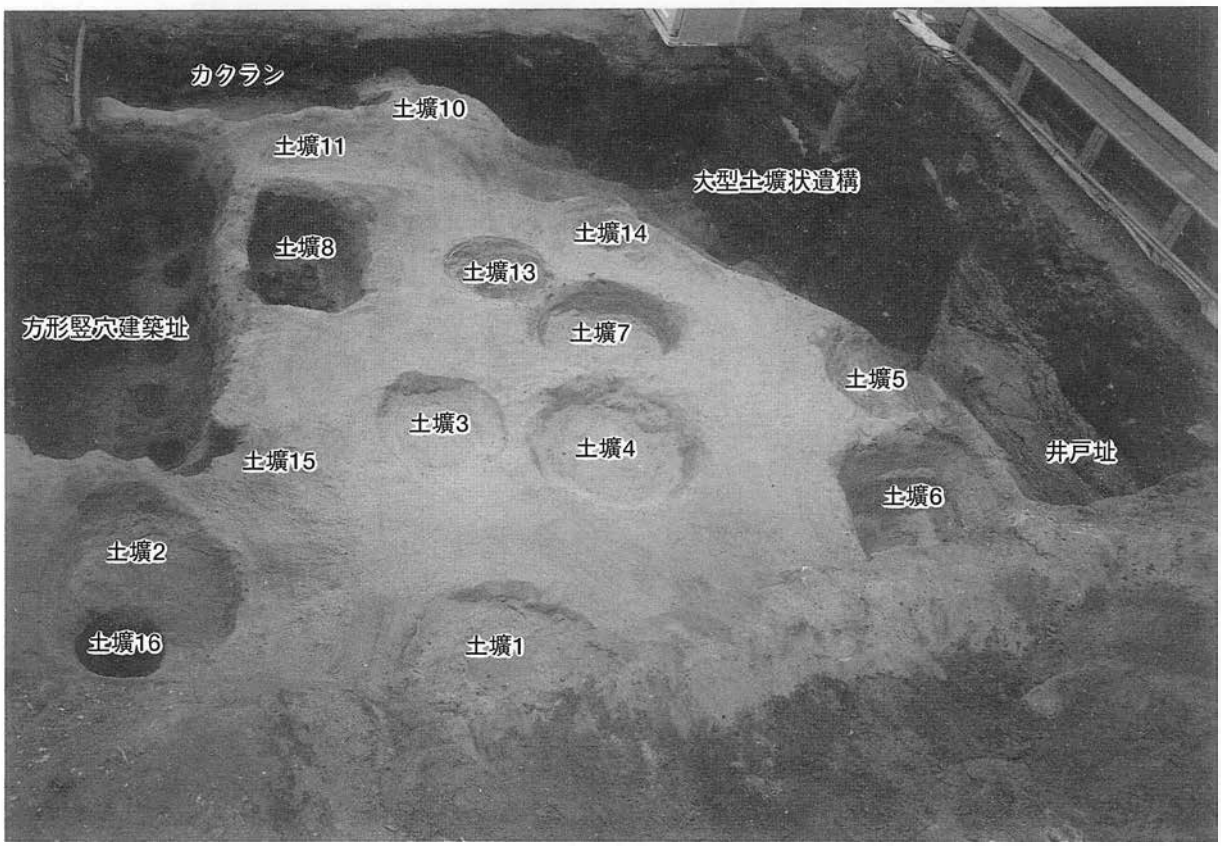
検出遺構 出土礫	包含層中 （近現）	包含層中 （中世）	中世基盤 層直上	井戸址	方形竪穴 建築址	大型土壙 状遺構	表　採
硬質砂岩		1			1	4	
流文岩質凝灰岩		2			1	5	1
安山岩		13		1		8	
安山岩(根府川石)					4	2	
安山岩(小松石)		1				7	
ホルンフェルス		10			5	2	
石英					1	2	
鎌倉石		33	5		25	15	
泥岩		7			3	11	
閃緑岩		4	1		37	6	
硬質細粒凝灰岩		46	3	2	303	33	
硬質中粒凝灰岩		341	6		955	258	
軟質細粒凝灰岩					1		
砂岩		8	3		1	4	
粗粒凝灰岩		4				1	
結晶片岩		2			9		
輝緑凝灰岩					2		
輝石安山岩					29		
輝石安山岩(小松石)					1		
斑レイ岩		7			1		
チャート					2		
玄武岩					1		
中粒凝灰岩		1					
軽石		1					
粘板岩		1					
変朽安山岩		1					

検出遺構 出土礫	土壙 1	土壙 2	土壙 3	土壙 4	土壙 5	土壙 6	土壙 7	土壙 8	土壙 9	土壙 10	土壙 11	土壙 12	土壙 13	土壙 14	土壙 15	土壙 16
硬質砂岩								2				1				
流文岩質凝灰岩																
安山岩		1	6	3		2	9	1								
安山岩(根府川石)			1			4										
安山岩(小松石)				3												
ホルンフェルス												1				
石英																
鎌倉石		1		2			5									
泥岩			1													
閃緑岩			2	1				2				1				
硬質細粒凝灰岩		3	4	3		2	1	3		2	2				1	
硬質中粒凝灰岩		7	14	5	2	1	1	26	2	4	4	3	1		2	
軟質細粒凝灰岩						1	2									
砂岩			4	1			2	2		1	1					
粗粒凝灰岩																
結晶片																
岩輝緑凝灰岩																
輝石安山岩																
輝石安山岩(小松石)																
斑レイ岩																
チャート		1		1		1										
玄武岩																
中粒凝灰岩																
軽石							1									

第5表　出土遺物点数表　貝類

出土遺物 検出遺構	ハマグリ・片殻数	アカニシ	キサゴ
包含層中（近·現代）			
包含層中（中世）	254	8	645
中世基盤層直上			
井戸址			
土壙 1	14	2	4
土壙 2	78	2	120
土壙 3	8	2	8
土壙 4	3	4	44
土壙 5	27	1	203
土壙 6	40	3	60
土壙 7	6	6	67
土壙 8	9	8	55
土壙 9	22		1
土壙10	2		
土壙11			5
土壙12			
土壙13			1
土壙14	1		
土壙15	1		
土壙16	3		
方形竪穴建築址	192	8	1335
大型土壙状遺構	586	9	653

写　真　図　版



◀調査区全景（南側から撮影）

図版2

◀方形竪穴建築址、土層堆積状態（東側から撮影）

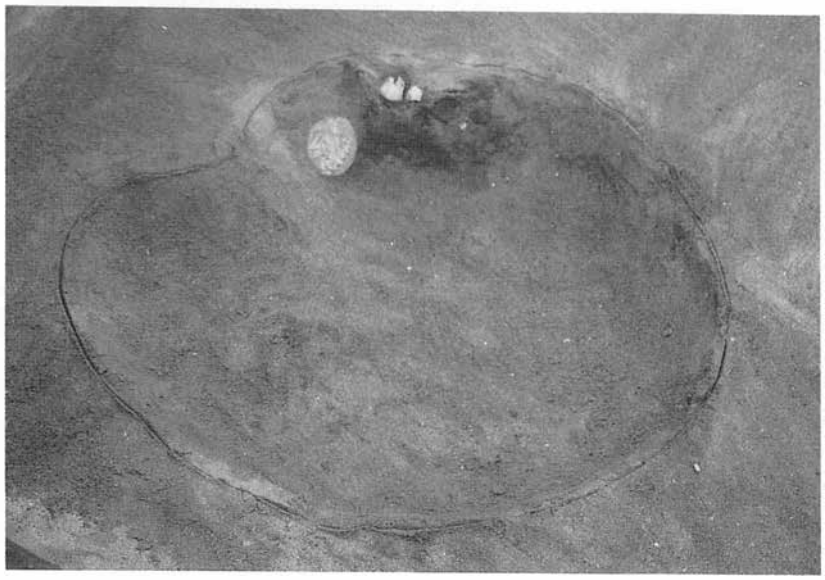
◀方形竪穴建築址、完掘状態（南側から撮影）

◀大型土壙状遺構完掘状態（南側から撮影）

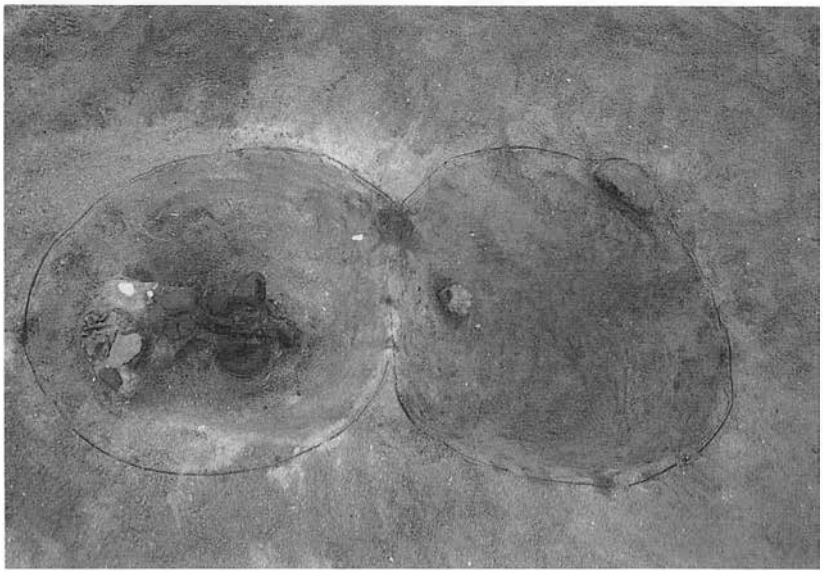
◀大型土壙状遺構土層堆積状態（西側から撮影）

図版4

◀土壙1完掘状態（北側から撮影）



◀土壙2完掘状態（南側から撮影）



◀土壙3（左側）土壙4（右側）遺物出土状態（南側から撮影）

◀土壙5遺物出土状態（西側から撮影）

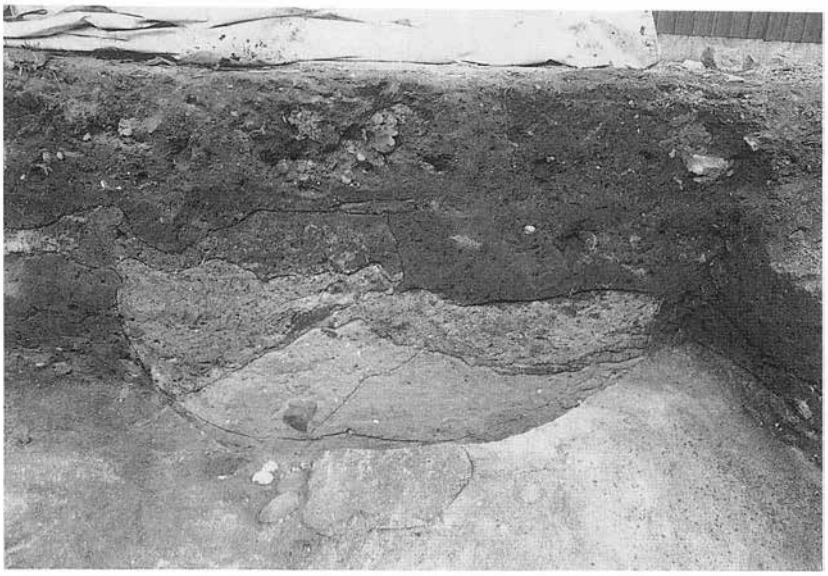
◀土壙5完掘状態（西側から撮影）

◀土壙6完掘状態（北側から撮影）

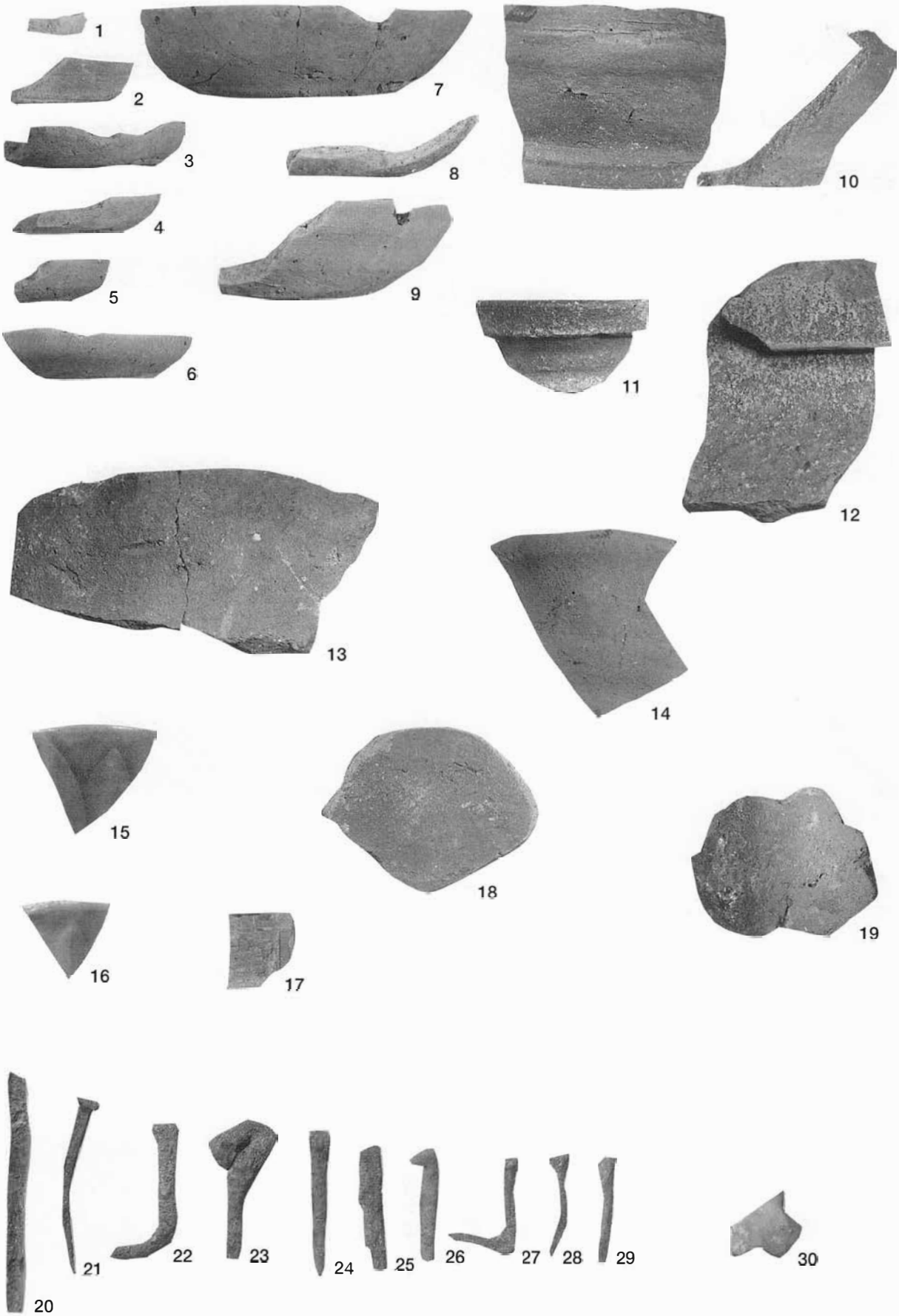
図版6

◀土壙7遺物出土状態（北側から撮影）

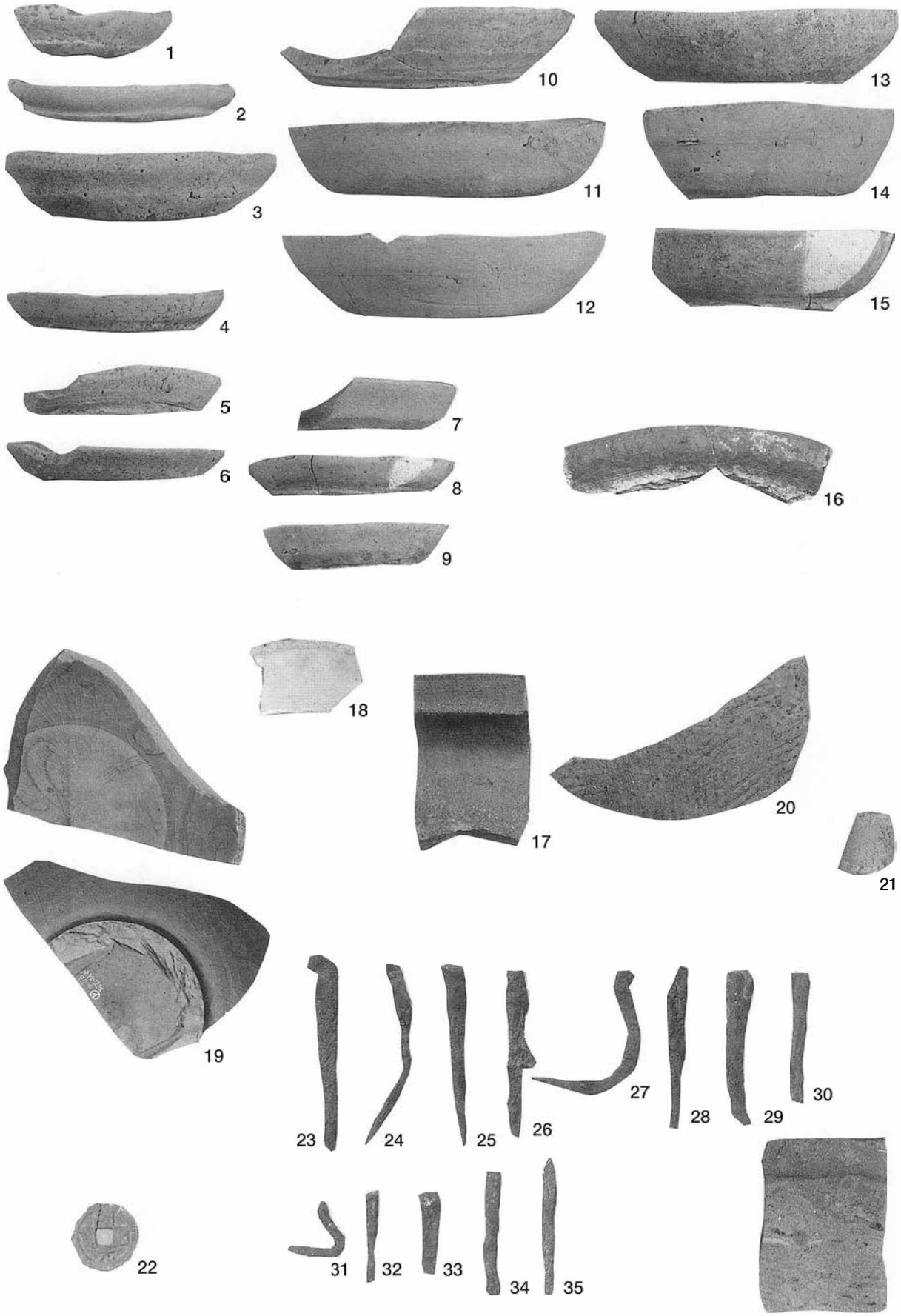
▶土壙8遺物出土状態（東側から撮影）



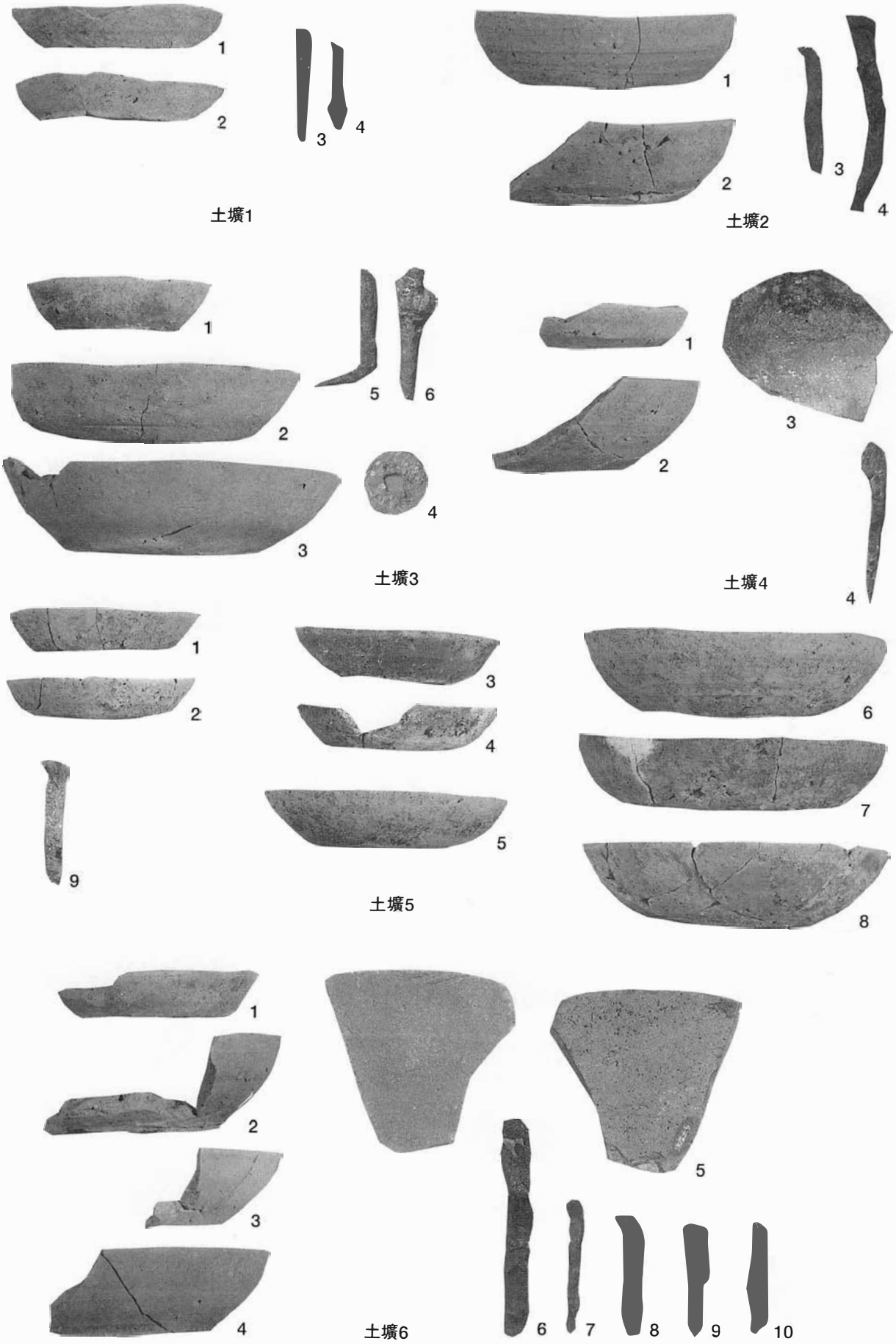
◀井戸址土層堆積状態（西側から撮影）



出土遺物（方形竪穴建築址）

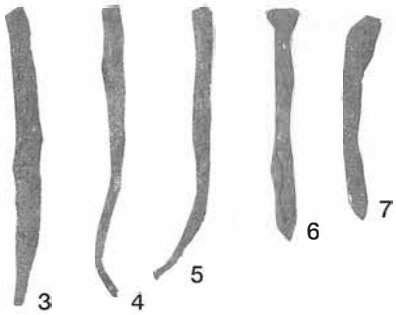


出土遺物（大型土壙状遺構）

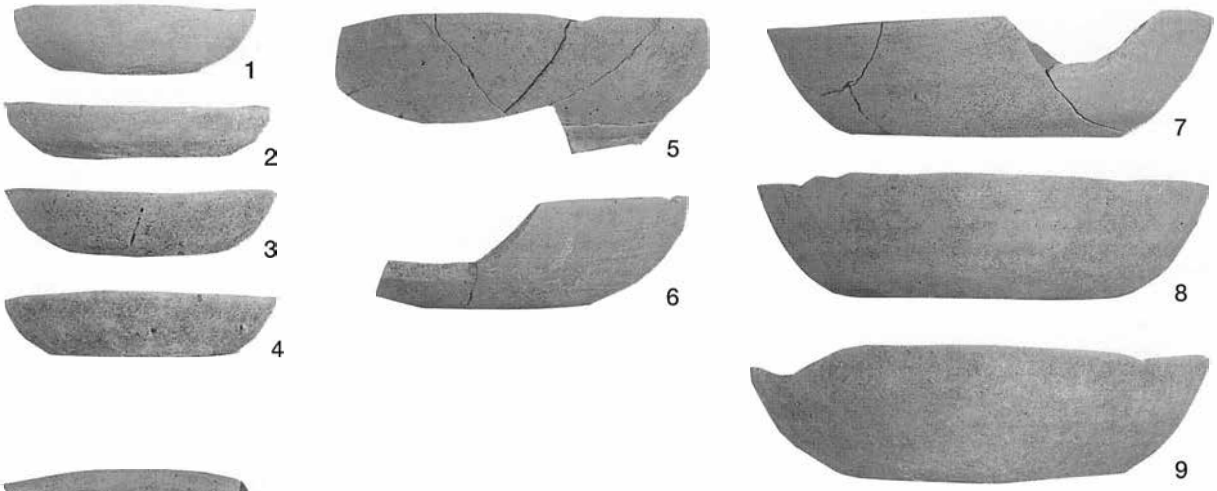

1
2
3
4
土壙1
1
2
3
4
土壙2
1
2
3
4
5
6
土壙3
1
2
3
4
土壙4
1
2
3
4
5
6
7
8
9
土壙5
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
土壙6

出土遺物（土壙）

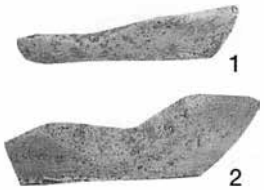
図版10



土壙7

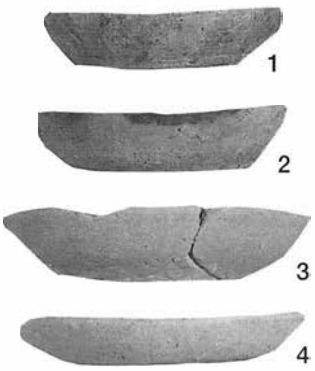


土壙8

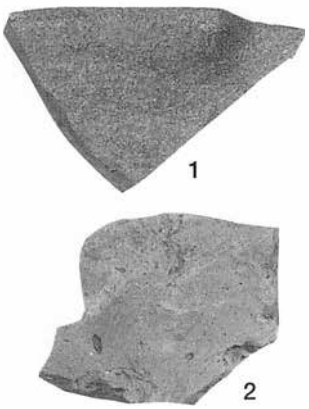


土壙9

土壙11



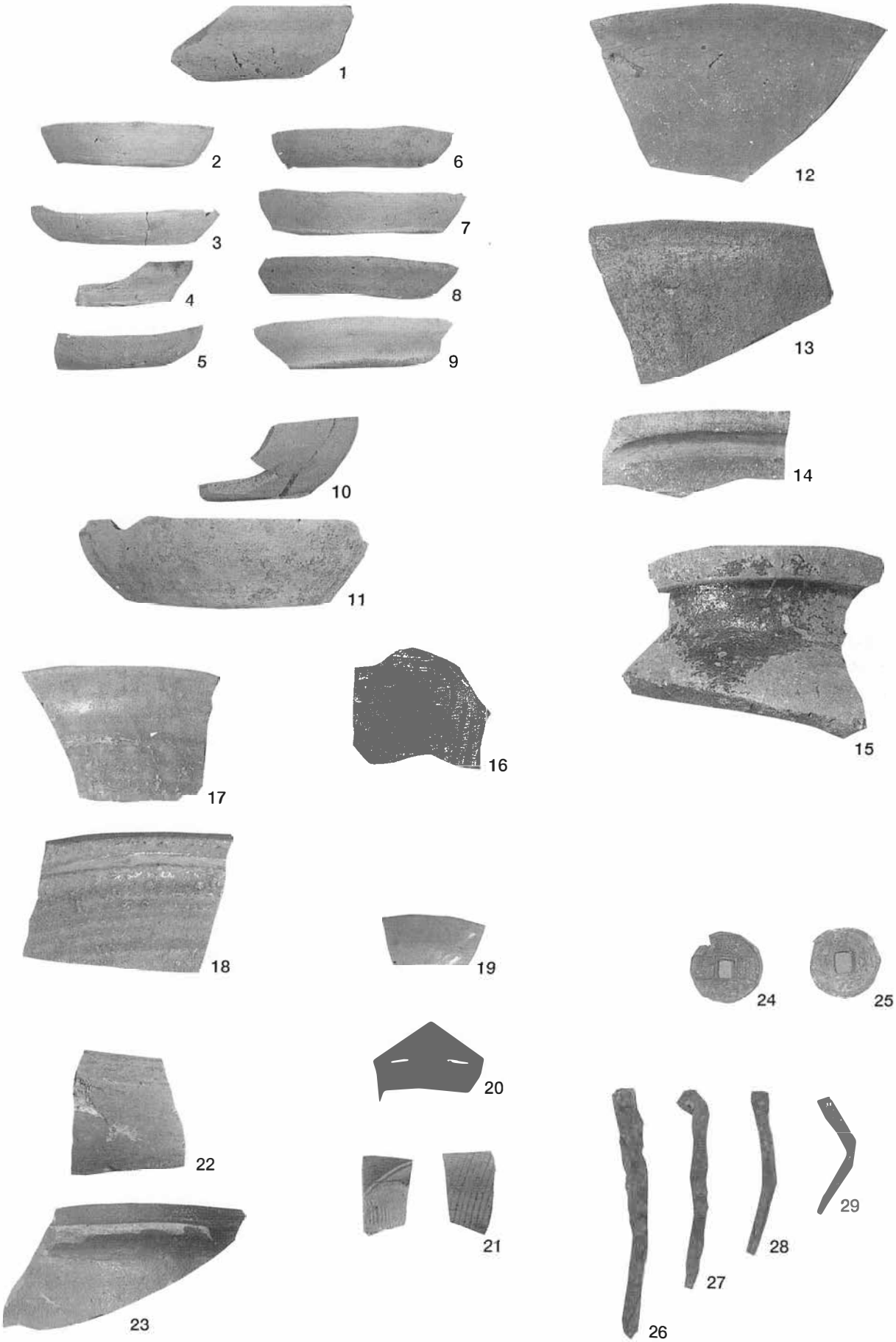
中世基盤層直上



包含層中（近・現代）

土壙15

出土遺物（土壙・その他）



出土遺物（中世遺物包含層）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	田代　郁夫
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺 遺跡群（No.242）	神奈川県鎌倉市由比ガ浜一丁目118番7					951218～ 951229	15	自己用住宅に係る車庫造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路周辺 遺跡群 （No.242）	都市	鎌倉時代～室町時代	方形竪穴建築址　1 大型土壙状遺構　1 土壙　16 井戸址　1	かわらけ 常滑窯製品 瀬戸窯製品 山茶碗窯製品 礫 獣骨・魚骨・貝殻 鉄製品 舶載品	特になし

下馬周辺遺跡（No.200）

げばしゅうへんいせき

由比ガ浜二丁目107番１地点

例　　言

1．本編は、鎌倉市由比ガ浜二丁目107番１他地点に於ける、店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、国庫補助事業分の報告である。

2．調査は平成７年10月22日から平成８年１月14日まで行われた。発掘調査対象面積は125㎡であり、この内平成７年12月11日以後の調査面積40㎡を鎌倉市教育委員会が実施した。

3．本編では原因者負担分を含めた調査区全体図と出土遺物の一部は併せて掲載した。

4．出土遺物等発掘調査に関する諸資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

5．整理作業には調査員・調査補助員があたり、他に坂倉美恵子・太田美知子の協力を得た。
本稿の執筆は、以下の通り分担して行い、稿末にその名を明記した。
第一章－Ⅰ、第二章－Ⅱ　川又隆央
第二章－Ⅱ、第二章－Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ、第三章の遺構及び遺物観察表の内、石・骨製品　汐見一夫
第三章の遺物観察表　山上玉恵　坂倉美恵子
第四章は調査参加者討議の上汐見が文責を負い、本編全体の編集を受持った。

6．本書に使用した写真は、遺構は汐見・川又が、出土遺物は太田が撮影した。

7．本稿での、挿図中の縮尺及び使用した記号は基本的に以下の通り。
遺構面全測図……１／120　　遺構個別図……１／40
遺物実測図……１／３（但；銅銭拓影は原寸）
挿図中の水糸レヴェルは海抜高を示し、スクリーントーン等はその都度注釈を加えた。
遺物実測図中の、←→は使用痕の範囲、←・→は加工痕、－・－・－は釉の限界を示す。

8．現地調査から本稿作成過程に於いて、次の各氏・機関から御指導・御教示・御協力を賜った。
藤澤良祐　佐野　元　金子健一　本澤慎輔　田中　信
鎌倉考古学研究所　東国歴史考古学研究所　第一建設　湘和総合開発
㈱シルバー人材センター　田中金物店（田中義一）　（順不同、敬称略）

9．調査体制は以下の通り
調　査　員　　汐見一夫　山上玉恵
調査補助員　　川又隆央　杉山智恵子　渡邊美佐子
調査参加者　　箕田孝善　長島三男　長瀬充男　関卯之松　都丸誥司　山下俊明　大内　宏
　　多田徳蔵　山崎一男

本　文　目　次

第一章　環境と立地 ……145
　Ⅰ．歴史的環境 ……145
　Ⅱ．地理的環境 ……147
第二章　調査の概要 ……149
　Ⅰ．調査の経緯と経過 ……149
　Ⅱ．調査の方法 ……149
　Ⅲ．調査結果の概要 ……150
　Ⅳ．堆積土層 ……150
第三章　検出された遺構と遺物 ……152
　・１面の遺構と遺物 ……152
　・２面の遺構と遺物 ……154
　・３面の遺構と遺物 ……158
　・土壙40構造部材計測表について ……166
　・他遺構外等出土遺物 ……174
第四章　まとめ ……179
附　編　下馬周辺遺跡の花粉化石　　鈴　木　茂 ……180

挿　図　目　次

図１　下馬周辺遺跡・調査地点位置 ……146
図２　調査地点周辺図 ……147
図３　国土座標上の位置及びグリッド配置図 149
図４　堆積土層模式概念図 ……151
図５　１面全側図（北半） ……152
図６　１面検出遺構・出土遺物 ……153
図７　２面全側図 ……154
図８　２面検出遺構・土壙35出土遺物（１）…155
図９　土壙35出土遺物（２）・溝３出土遺物…156
図10　２面上出土遺物 ……157
図11　３面全側図 ……158
図12　溝４出土遺物 ……159
図13　土壙40 ……160
図14　土壙40木組状況立面図 ……161
図15　土壙40出土遺物（１） ……164
図16　土壙40出土遺物（２）……166
図17　３面検出遺構・土壙41出土遺物 ……169
図18　土壙38出土遺物 ……170
図19　３面上出土遺物 ……172
図20　Ⅱ区トレンチ設定図及びトレンチ出土遺物 ……174
図21　採集及び試掘壙出土遺物 ……175
図22　Ⅰ区出土遺物　舶載陶磁器・木製品 …177
図23　常滑窯甕押印文 ……178

表　目　次

出土遺物観察表　1　土壙30・土壙31 ……153
出土遺物観察表　2　土壙35 ……156
出土遺物観察表　3　溝３ ……157
出土遺物観察表　4　２面上 ……157
出土遺物観察表　5　溝４ ……159
出土遺物観察表　6　土壙40（１）……165
出土遺物観察表　7　土壙40（２）……166
土壙40構造部材計測表　1 ……166
土壙40構造部材計測表　2 ……167
土壙40構造部材計測表　3 ……168
出土遺物観察表　8　土壙41 ……169
出土遺物観察表　9　土壙38 ……171
出土遺物観察表10　３面上 ……173
出土遺物観察表11　各トレンチ内 ……174
出土遺物観察表12　採集及び試掘壙内 ……176
出土遺物観察表13　Ⅰ区出土舶載陶磁器 ……176
出土遺物観察表14　Ⅰ区出土木製品 ……177
出土遺物観察表15　常滑窯甕押印文 ……178

図　版　目　次

図版１　１．１面全景（北から） ……199
　　２．１面溝３（北から）
　　３．１面土壙30（東から）
図版２　１．３面全景（北から） ……200
　　２．３面土壙40（南から）
　　３．３面土壙40⑦（西から）
図版３　１．３面土壙40①北東部分（東から） ……201
　　２．３面土壙40①東側横板（西から）
　　３．３面土壙40①東側横板及び杭（西から）
図版４　１．３面土壙40②北側横板（南から） ……202
　　２．３面土壙40②付近（南から）
　　３．３面土壙40③・④付近（南から）
図版５　出土遺物①　かわらけ・国内産諸窯 ……203
図版６　出土遺物②　山茶碗窯系・常滑 ……204
図版７　出土遺物③　舶載陶磁器・骨角・金属・石製品 ……205
図版８　出土遺物④　木製品 ……206

第一章　環境と立地

Ⅰ．歴史的環境

本調査地点の北側には、現在国道134号線が東西に走っている。この道筋は、古代においては宝亀二年（771年）以前の古東海道の可能性を示唆され（註１）、中世においての大町大路と重複するものと考えられている。

古東海道が存在した可能性を示唆されるように、古くから本調査地点周辺では人々が生活を営んできた痕跡が残されている。国道134号線より南側の海浜砂丘地帯での調査では、弥生時代後期の遺構・遺物が検出され、この時期には人々が既に生活していたことが確認されている。また、時代は下るが、本調査地点から南西約300m程（現在の和田塚周辺）には、かつて小坪から由比ヶ浜にかけて造営された下向原古墳群の一つであり、無情堂塚（采女塚）と呼ばれた古墳時代後期の高塚式円墳が存在していた。現在に至っては、これら墳丘群は見る影もないが、この古墳から出土したとされる女性人物埴輪が京都大学に所蔵されている。さらに長谷小路周辺遺跡では祭祀の際に使用されたと考えられる土器が廃棄した状態で出土している（註２）。これらの事例からも本調査地点周辺は、古墳時代においては先に述べた下向原古墳群に多分に関連する地域的性格を有していたものと考えられる。

古代（奈良・平安期）になると、本調査地点より北へ約500m程の地点には、古代相模国の鎌倉郡衙跡である今小路西遺跡（御成小学校内遺跡）が存在している。本調査地点から国道134号線に沿って西側の地域においても、中世遺構群に削平を受けているものの、古代住居址など遺構や遺物が検出されることから、奈良時代には鎌倉郡衙と古東海道を中心とした生活区域である「マチ」の存在が考えられる。しかしながら平安時代後半になると、源義朝の屋敷である鎌倉の盾に代表される「マチ」の中心は鎌倉郡衙跡をさらに北へ約500mほどの地点（現寿福寺周辺か）へ移り、本調査地点周辺は「マチ」の中心から離れた、周縁の地域的様相を呈するようになる。古東海道が付近を通過していたにもかかわらず、本調査地点付近の調査事例では土壙墓などが検出される（註３）傍ら、土壙墓が造られた年代に相当する生活活動址の痕跡が確認できないことは、付近一帯が葬送区域として認識されていたことになるのではないだろうか。

中世になるとこの道筋は大町大路と姿を変える。大町大路とは、西は極楽寺方面から派生し、若宮大路と交わり、さらに東の名越方面へ抜けるという、中世鎌倉での主要幹線道路の一つの内、今小路と交差する地点より東側の道筋を指す。今小路より以西は長谷小路と名称を異にする。従って鎌倉の中心軸とも言われる若宮大路と交差する現在の下馬四つ角付近は交通の要衝であり、実際に建保元年(1213年)に鎌倉市中を騒然とさせた和田合戦などでも、当時は下の下馬とされた下馬四つ角付近を含め、若宮大路に存在した三つの下馬では激しい戦闘が繰広げられた。また、この付近は交通の要路であるとともに、幕府から裁許を受けた米町（または穀町）や魚町が存在した。活発な商業活動が行われた商業地としての性格だけではなく『吾妻鏡』仁治二年十一月で三浦氏と小山氏が下の下馬の妓楼において酒宴の末に喧嘩になった記載からも、妓楼というものの存在から鎌倉市中でもより繁華な地域であったことが推察できると同時に、同じ若宮大路沿いでも宇都宮辻子幕府・若宮大路幕府などの政治的中枢機関や北条氏に代表される御家人など武士階級の居住区域があった鶴ケ丘八幡宮付近の北地域、並びに膨大な量の人骨検出例が報告されている南地域である前浜一帯とは、大きくその地域的性格を異にしている。

鎌倉幕府滅亡後も、それまで東国の中心都市として機能してきた鎌倉は、室町幕府のもとで鎌倉府と

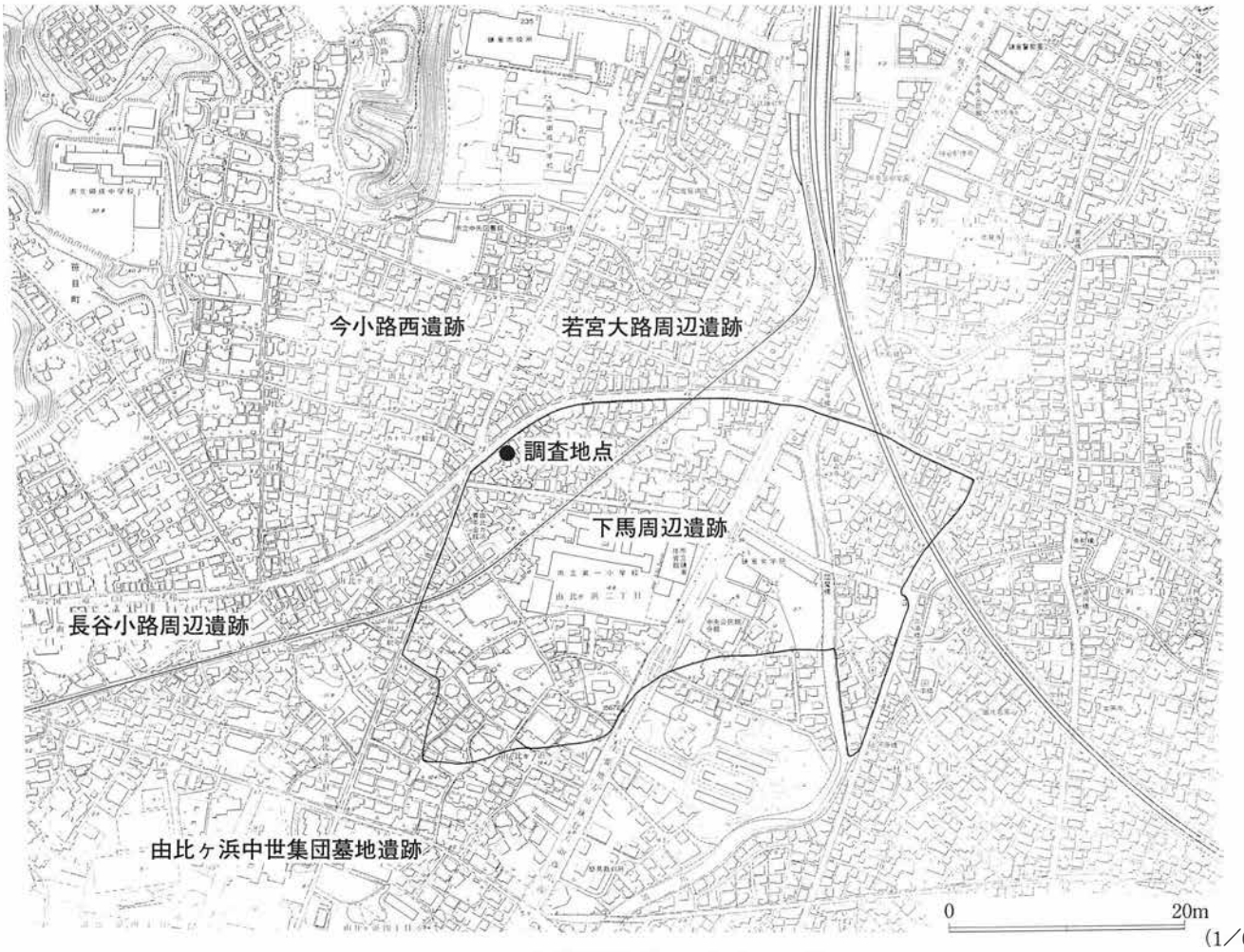


図１　下馬周辺遺跡・調査地点位置

して存続する。この室町幕府における鎌倉での中心機関である鎌倉府は、現在の浄明寺近辺に存在していた。しかしながら永享十年（1483年）に勃発した永享の乱以降は、鎌倉府の権力は失墜し、同時に中心都市としての鎌倉の栄華も次第に衰退していった。近世の古絵図「鎌倉一覧之図」嘉永三年（1850年）刊などによると本調査地点周辺は田畠の広がっている風景が描かれており、中世での繁栄を垣間見ることができない。本調査地点のすぐ北には六地蔵という六体の石製地蔵尊が安置されている。これは、この付近はかつて刑場跡であり、永い間飢渇畠と呼ばれる荒れ地となっていたが、刑場跡を弔う為に安置されたものという。また、この六地蔵から東へ約20ｍで、本調査地点から国道134号線を挟んだ北側の調査では、近世面から約30体もの人骨の検出例が報告されている。（註５）。六地蔵の由来と多数の人骨検出から本調査地点周辺が刑場跡と考えるのは性急だが、少なくとも近世の本調査地点周辺は鎌倉市中では前浜一帯や平安末期と同じように「マチ」の外として認識され、葬送区域として利用されていたのではないだろうか。

（川又隆央）

註１　『鎌倉市史・総説編』

註２　他に長谷小路遺跡で故意に脚台を打ち欠いた高坏・鉢や、胴部下半を打ち欠いた小壺がハマグリと共に埋置されている。これらは何れも住居址を伴わず、生活面上に遺物のみが検出されている。

註３　『長谷小路周辺遺跡』（由比ケ浜二丁目258番地点）　1995年　長谷小路遺跡群発掘調査団

註４　1953年の東大人類学教室を始めとし、由比ケ浜中世集団墓地遺跡（静養館用地・1982年）では91体、現在調査中である由比ケ浜南遺跡では1996年10月現在で約3000体の人骨検出が報告されている。

註５　『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』（由比ケ浜一丁目129番５地点）　1995年　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

Ⅱ．地理的環境

下馬周辺遺跡は、調査地点前を通る国道134号線を境に若宮大路周辺遺跡群（No.200）、六地蔵より西の国道134号線北側は今小路西遺跡（No.201）・南側は長谷小路周辺遺跡（No.236）とされている。更に下馬周辺遺跡の南側一帯は由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（No.372）の名称が付され、本調査地点はそれぞれ異なった空間に囲まれた遺跡内の北西隅に位置する。これまでに下馬周辺遺跡内では７箇所程調査が実施されているが、現下馬交差点付近に多く、本調査地点付近の長谷小路周辺遺跡寄りでは少ない。

図２に周辺の主な調査地点を示した。何れの調査地点でも主たる堆積土層は砂層乃至殆ど土壌化していない砂質土で、遺構の主体は方形竪穴建築址である。

地点１は平成５年度に調査が実施され、中世～近世に至る遺構群が検出されている。近世遺構は溝１条と多数の人骨で、上層には宝永七年噴火の富士山降灰層が堆積していた。共伴する出土遺物から19世紀代とされているが、棺箱の形態や六銅銭年代から年代観の再検討も示唆されている。鎌倉市街域での近世埋葬骨のまとまった検出例は珍しく、又、付近がかつては飢渇畠（けかちばたけ）という名称が付されていたこともあり興味深い事例である。中世遺構は方形竪穴建築址・溝状土壙・土壙で構成され、方形竪穴建築址間の空閑地に道路状 遺構の可能性を指摘し、各遺構群は若宮大路の規制外の方向性を示すとされている。年代は概ね13世紀後葉～14世紀代とされている。

地点２は昭和62年度に調査が実施され、13世紀後葉～14世紀代に至る３時期の中世遺構群が報告されている。検出された遺構は方形竪穴建築址・側溝を伴う道路状遺構・土壙等で、各遺構は検出された道路状遺構を意識して営まれている。この道路状 遺構は、側溝を伴うことやその幅員から幹線道路に近いことが示唆され、若宮大路とは直交・平行関係にはないことが指摘されている。又、遺構こそ確認されてはいないものの、中世以前の遺物が一定量出土し付近には古代の遺構も在るであろう事が指摘されている。

地点３は昭和63年度に調査が実施され、狭い調査区内に複雑に重複する方形竪穴建築址群が検出されている。方形竪穴建築址は、鎌倉石切石をその構造に伴うものや根太木を敷くもの等、構造に多様性が観られた。年代は概ね14世紀代。調査区の現車道寄りでは地点４で検出されたのと同様の中世基盤砂層が検出されている。湧水の為古代の調査は行われず、又、中世遺構覆土・層位中からも中世以前の遺物

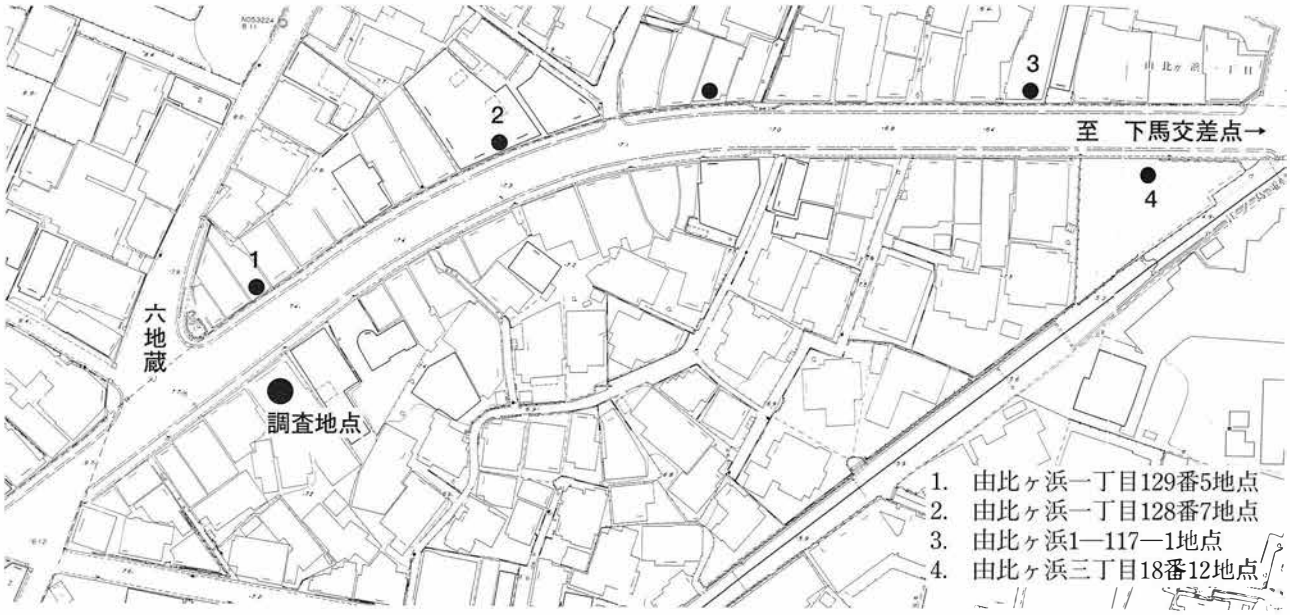


図２　調査地点周辺図

は殆ど出土しなかった。

地点４は平成２年度に調査が実施され、中世３時期の遺構面が報告されている。出土したかわらけの年代観から13世紀末～15世紀前葉と考えられている。検出された遺構は方形竪穴建築址・井戸・土壙・柱穴群等で、方形竪穴建築址には底面全面に石を敷詰める構造をもつ大型のものや、根太木が良好に遺存しているもの等がある。

以上のように付近を極めて大雑把に概観したが、共通して言えるのは遺構群が方形竪穴建築址を中心とし、その年代が概ね14世紀代に盛行する事であろう。同時期に墓域足る人骨群が確認されていない事を除けば、長谷小路周辺遺跡群や由比ヶ浜中世集団墓地遺跡群とよく似た遺構の構成である。出土遺物も、どちらかといえば舶載品等の良品と言われるものよりも、日常雑器的なものが主体を占め、かわらけ溜りがまず検出されないこと等所謂浜地的な景観が強く想像されよう。　　（汐見一夫）

【引用・参考文献】

『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』 1995年５月　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』「２．若宮大路周辺遺跡群　由比ヶ浜一丁目128番７地点」 昭和63年３月　鎌倉市教育委員会
『由比ヶ浜１－117－１地点遺跡』 1991年５月　若宮大路周辺遺跡発掘調査団
『下馬周辺遺跡』 1992年３月　下馬周辺遺跡発掘調査団

第二章　調査の概要

Ⅰ．調査の経緯と経過

本調査は、神奈川県遺跡台帳No.200・下馬周辺遺跡内に於いて店舗併用住宅建設の計画があり、試掘調査の結果を基に自己用住宅部分に相当する約40㎡を鎌倉市教育委員会が実施した。調査範囲は基礎工事との兼合いで建築範囲全面に渡ることなく、敷地境界から安全な後退距離と調査の進行に伴う残土置場を確保の上、図３のように調査区を設定した。

原因者負担分と平行して、1995年10月23日より表土掘削を開始し敷地内南側より順次調査を進めた。各調査面共に湧水が甚だしく雨天時或は調査の進行と共に難渋を極めたが、施工業者の協力を得つつ排水対策を施した。1995年12月11日より敷地内北側の自己用住宅範囲分の調査に入り、近世地業層１期、中世地業層２期と地業面期に伴う建物址等諸遺構を検出した。各調査面毎に必要な記録を採り、化学分析を経て1996年１月14日に器材等を撤収し、関係各方面に連絡の上調査を終了した。　　（汐見一夫）

Ⅱ．調査の方法

前項で述べた様に調査の進行に伴う残土を敷地内で処理する必要から、調査区をⅠ区・Ⅱ区に２分割せざるを得なかった。両区共に、湧水が著しく必要に応じて調査区際に側溝を切りその部分は調査対象外と見なした。又、調査の進行に伴い安全を考慮し、Ⅰ区では調査中に調査区壁からの後退距離を取った。

調査の開始にあたり、調査敷地内に5.0mの方眼を設定した。その後調査地点の位置と平面直角座標系との整合を測るため、国土座標を有する鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点を使用した。ここで使用した４級基準点は、

R064（x；−76249.249.　y；−25787.473）

R065（x；−76285.430.　y；−25797.012）

の２点である。４級基準点と調査地点内の方眼との測量結果は図３に示した。又、計算によって任意の点Ａと基準杭の国土座標値も導き出した。この結果当調査地点は、他の調査地点との正確な図面上での合成が可能となる。

方眼は東西方向にアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ…）、南北方向に算用数字（１・２・３…）を付し、各方眼名称は北西角の交点を用いた。なお、測量はすべて時計回りで行っている。又、調査区内を南北に通過するＢラインはＸ軸に対して25°36’19”西に傾いている。　　（川又隆央）

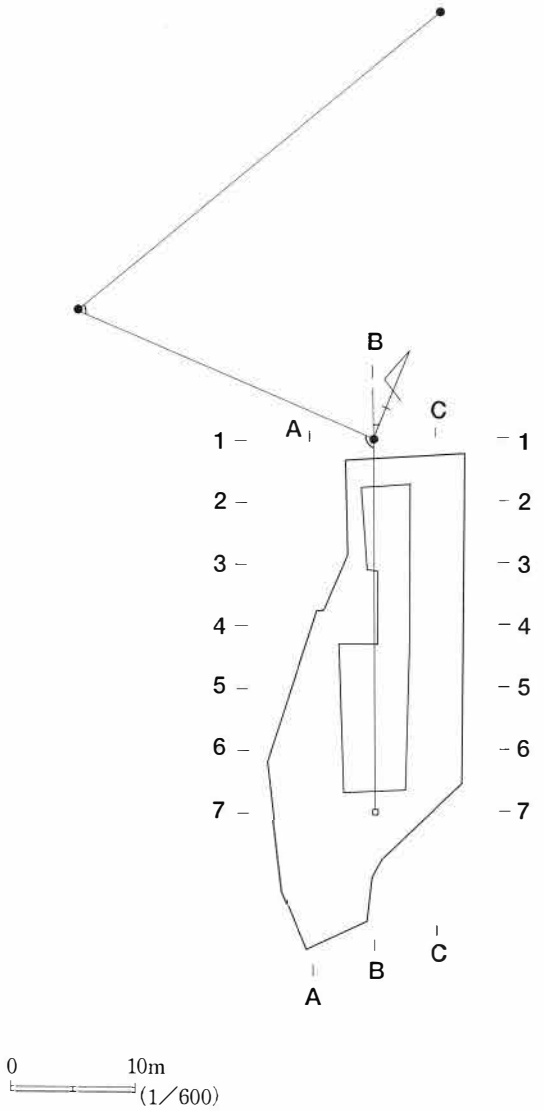


図３　国土座標上の位置及びグリッド配置図

Ⅲ．調査結果の概要

前項で述べた通り、調査地点は原因者負担分と国庫補助事業分とに分割されている。検出された遺構は両調査区に跨って営まれたものがあり、後の煩雑な誤解を避ける為にここでは原因者負担分を含めた全調査区125㎡で検出された遺構を、各調査面毎に現地で付した名称に従って羅列する。

1面　近世以後の生活面　調査区のⅡ区のみ確認
　　遺構：土壙5基　ピット5口

2面　中世面　Ⅰ区では1面構築の際に削平を受ける。遺構は希薄。
　　遺構：土壙7基　ピット3口　溝1条

3面　中世面　遺構密度が高く、出土遺物も多い。3面の中で細分も可能か。
　　遺構：土壙20基　ピット23口　溝2条

4面　中世面　Ⅰ区のみ確認。3面の古時期の可能性もある。
　　遺構：土壙3基　ピット4口

検出された土壙の中には、本報文内3面土壙40の様に建物と判断される遺構も含まれる。又、Ⅰ区の諸遺構は未だ整理作業に着手しておらず、整理時に於いての検討を加えた後に発掘調査団から刊行される報告書の数値とは異なる可能性がある。

両区共に海抜4m付近までトレンチにて掘下げ堆積土層等を確認したが、調査最終面以下には中世以前を含め文化層は認められなかった。出土遺物はⅠ区・Ⅱ区を併せ、テンバコ約60箱出土した。相対的に甕を始めとして常滑窯諸製品が比較的多く、舶載陶磁器類と瀬戸窯の製品は付近他の調査地点と比べても面積中りの出土点数は少ない。付近の浜地と総称される地域の調査では多く出土する石・骨・鉄製品や、人骨・獣骨・貝類等の自然遺物は殆ど出土しなかった。又、中世以前の出土遺物も、上記中世遺構内或は生活面上に極数点混入していたに過ぎない。

尚後章では、紙数の都合もあり各調査面の全測図は提示するが、各遺構の個別図は詳細については発掘調査団が刊行する報告書を参照されたい。

Ⅳ．堆積土層

第一章で述べた様に、調査地点は砂丘上の微高地東端に辺り当初は地点1や地点5等と同様の堆積土層が予想されたが、意に反し砂層は調査区内の最下層で僅かに確認されたのみで、他は全て粘質土系乃至はかなり土壌化した砂質土であった。恐らくは砂丘間の後背湿地状の窪地で在ったと考えられるが、周辺の調査地点の堆積土層とは全くと言っていい程異なる。図4には本調査地点の概念図と周辺域の調査地点の土層概念図を併記し、可能な限り双方を対照し模式的に示した。

尚、調査経過の項で触れた様に、調査区が分断されたことに起因するⅠ区とⅡ区との極細部での整合は未だ行い得ない為、調査団より刊行される報告書中では若干の修正を伴うかもしれない。

以下、図4層序に従い各土層について説明を加える。

Ⅰ層　近現代瓦礫層　関東大震災の際の瓦礫整理及びそれ以後の人為的掘削に拠る攪乱層。

Ⅱ層　近　世　層　関東大震災以前の堆積土。図2の地点1では宝永7年富士山の噴火に拠る降灰層と埋葬人骨が検出されている。

Ⅲ層　中　世　層　図2の各調査地点に於いては遺物包含層・遺構覆土共に、若干土壌化した砂質土乃至砂層。自然堆積土は地点に依って多少の差異はあるが、概ね黄灰色乃至灰白色系で、微細貝粒子以外は殆ど夾雑物を含まない比較的純粋な風成或は海成の砂

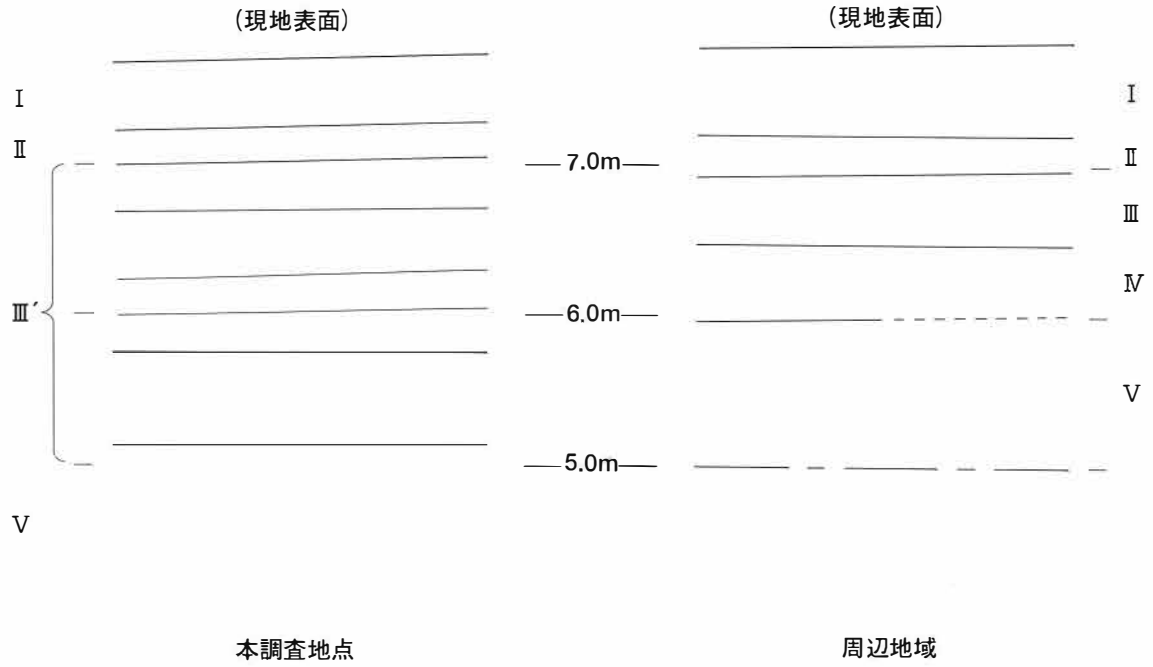


図4　堆積土層模式概念図

層。本調査地点から西側一帯の長谷小路周辺遺跡群内では、この自然堆積層の下位には暗茶褐色弱粘質砂層が確認され、調査地点に依り13世紀代の遺構・遺物が検出されている。

Ⅲ'層　中　世　層　本調査地点では、付近の調査地点で検出される砂質土乃至砂層は殆ど検出されず、殆どが粘質土或はかなり土壌化した砂質土の堆積であった。所謂街中の調査で観察される様な客土も多少は混入するであろうか、人為的な整地層が確認されている。

Ⅳ層　古　代　層　地点に依って多少の差異はあるが、概ね黄褐色乃至暗黄灰色の砂層。図2の地点1・5では、相当する層位から中世以前の遺物が出土し、人為的な遺構等の存在も示唆されている。本調査地点では比定し得る堆積土は確認されていない。

Ⅴ層　自然堆積土層　現段階に於いては、人為的な痕跡や出土遺物が確認されていない土層である。これまでに触れたように図2の各調査地点では概ね風成或は海成の砂層か、調査時の状 況や湧水等の理由に因り確認はされていない。本調査地点では、トレンチよりサンプル土壌採取時の所見に於いて、縄文期前後の堆積土の可能性があるとの御教示を賜ったが、委細は本報告文末の化学分析の項を参照されたい。

本調査に於いてはⅠ層及びⅡ層上面は、重機に拠る表土掘削の際に失われており、調査区の壁面からの観察を記述した。Ⅲ'層・Ⅳ層の土層観察は、後章にて各面毎或はトレンチの項で構成土について触れ、遺構覆土は極力本文中で述べることとする。尚、本稿で述べた土層は現段階での調査地点標準土層としてⅠ～Ⅳの略号をそのまま用いる。

第三章　検出された遺構と遺物

1面の遺構と遺物

表土掘削終了後、海抜6.60m付近で検出したやや硬化した灰褐色土層上面を1面とした。Ⅰ区の調査に於いては、重機に拠り掘削した際に失われている。図5は1面として扱った調査区北半の全測図である。2ライン付近は、表土掘削の際に掘り過ぎて下層の堆積土が露出してしまった為、図示を割愛している。調査区壁面の観察からは、海抜6.63m前後には土丹面があったようだ。検出した遺構は、土壙5基・ピット5口である。各検出遺構の個別図と出土遺物は図6に示し、土壙30及び土壙31の出土遺物観察表を付した。

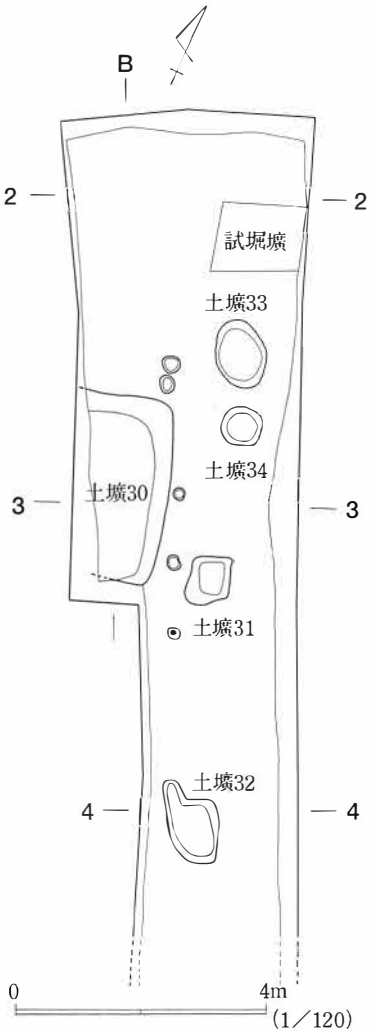


図5　1面全測図（北半）

以下、各検出遺構と硬化面について述べる。

土壙30はⅡ区中央付近西壁際で検出された。上場計測で南北2.95m、東西は調査区外に延びる為不明だが最大計測値で2.38mを測る。長軸は不明だが、平面形やや歪んだ方形を呈する。西壁土層断面の観察からは、1面構築土層より上層から掘り込まれており、実際には1面に帰属するものではないが本稿で扱った。覆土は腐食した木器層・貝混じり粗砂・しまりの悪い粘質土が互層を成しごみ捨て穴であろう。覆土中には近世以降の遺物も内包しているが、掘込みレベルからⅠ層よりは古い。出土したかわらけ2点は、混入品であろう。

ピット30～34は硬化面精査中にプランを確認し、覆土や出土遺物の様相からも1面から掘り込まれた遺構であると考えている。何れも上場径20～30はⅡ内外を測り平面形は円形、深さはまちまちで底面に礎板等は検出されていない。ピット30～32に並びを考えられるが、東西方向には－土壙30に因り失われたものか－伸びない。各ピット内からは、かわらけや国内産陶土器小破片が出土しているが、図化し得なかった。

土壙31～34は、後述硬化面の起伏を表現する序でに通して断面図を提示しているが、特に4基の土壙に規則的な並びや相互の関係を看取している訳ではない。覆土や内包する遺物からは、全ての土壙が必ずしも1面に帰属するとは考えられず、重機掘削に因り失われた上層の遺構をこのレベルで確認した可能性がある。

硬化面は厳密に言えば、図5全面で確認した分けではなく概ねグリッド4ラインより北の、断面図Dで示した様に蒲鉾型に盛上がる土壙31と土壙33・34間が顕著に堅く、その北或は南側付近では若干弱い。堅い範囲は粘質土と砂質土を混交した様な土で構成され、1面掘下げの際にベルトを残し土層を確認した際には後項2面構成土を削平した上で、人為的に同質の土を積重ねている様相が観察された。その範囲は土壙30等の掘込みに因り不安な部分が多いが、概ね幅約3.5m内外で調査区前を通る現車道と同方向に走行する印象を受けた。本稿始めに触れた調査区北端付近の土層断面で、この硬化面より若干上層付近に厚さ10～20cm程の上面ほぼ水平な土丹層を確認している。整理作業の進んでいないⅠ区との兼合いや、周辺の他調査地点との検討を加えていない為、今回は図示することは避けたが両層の道路状遺構の可能性は指摘しておく。

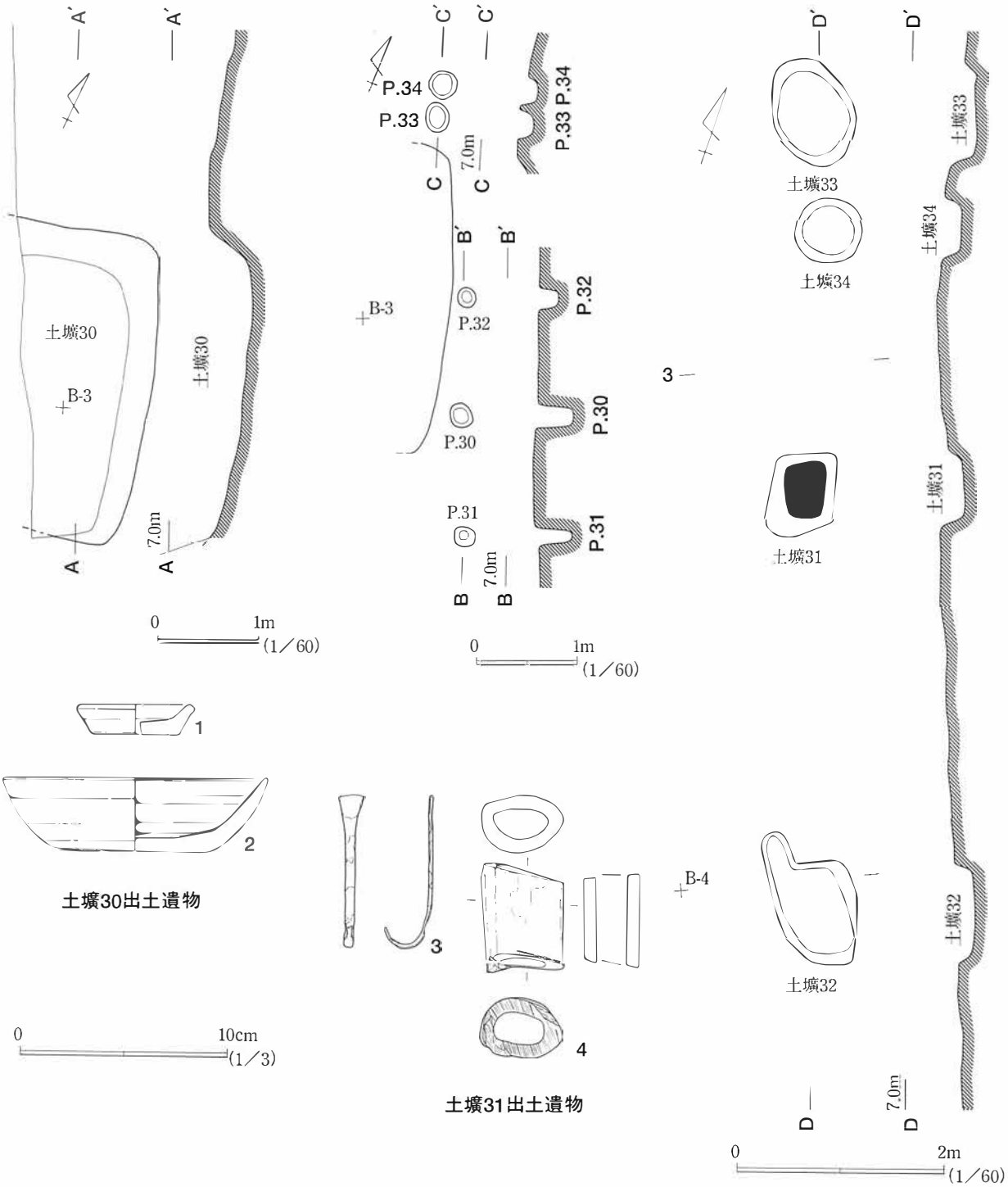


図６　１面検出遺構・出土遺物

1	かわらけ	法量　口径5.8cm　底径4.2cm　器高1.5cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
2	かわらけ	法量　口径13.0cm　底径7.6cm　器高3.65cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、シルト岩粒含む　色調　淡灰褐色　焼成　良好　備考　板状圧痕
3	銅製品 斧	法量　長さ(9.2)cm　最大幅1.2cm　厚さ0.2　備考　磨き仕上げ
4	骨製品 裁断骨	法量　長さ4.2cm　幅4.05cm　厚さ0.6cm　種目　馬　部位　中足骨 備考　鋸状工具切断痕

出土遺物観察表１　土壙30・土壙31

2面の遺構と遺物

前項で若干触れたように、1面は現地表面と同様に北から南への極緩やかな斜面を、或は東西方向では不規則な起伏を修正するべく、削平を伴う人為的な堆積土であった。Ⅰ区の調査では2面を調査開始面としており、表土掘削後に現れた部分的に貝砂粒子の混じる黄褐色乃至褐色土上面を整地層と把えた。本報告該当範囲のⅡ区では、既に述べた1面の造作に因り同様の整地層は確認されず、1面構成土除去後の海抜6.5m前後で確認した遺構を、上層を削平された2面の遺構と判断し本稿で扱う。検出された遺構は、南北方向に走行する溝1条と土壙1基である。Ⅰ区では建物址の可能性のあるものを含めて、土壙3基・ピット3口を検出している。

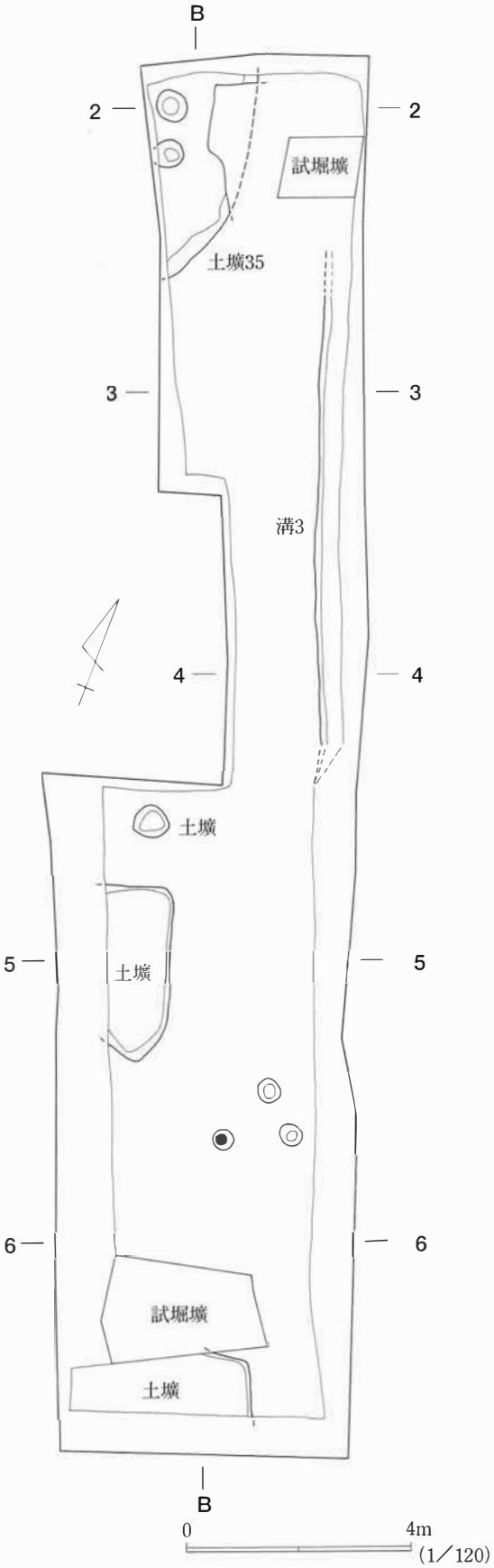


図7　2面全測図

溝3は調査区東壁に沿って検出された。Ⅰ区では、遺構面精査に先んじて排水用の側溝を掘っている為、確認されていない。東側の溝肩は調査区外に在る為溝幅は不明。覆土は上層は暗褐色粘質土乃至かなり土壌化している砂質土で、土丹粒を多量に含む。下層は拳大の土丹で占められており、溝廃棄時に人為的に埋められた様相が窺える。その際には、構造に関わる木組や杭等は抜取られたものか何等検出されていない。底面は遺構確認面の傾斜に沿って南へ緩やかに下り、図8断面図Bより北は溝確認当初から最下層堆積土の土丹が露出していた。下層3面でも地割を暗示する南北方向の溝が検出されており、踏襲しているとすれば、少なくともこの時期まではこの付近が漠然とした意味での地境辺りになるのであろうか。

土壙35は、調査区北東隅で検出され全体形は調査区外に延びる為不明。東側壁は、一部調査の際の不手際に因り下層まで掘り抜いてしまった為推定線を破線で書加えた。確認した範囲では平面形不整形、上場最大値で南北約3.54m×東西約1.97m、平坦部までの深さ40cm強程を測る。覆土は砂質土・土丹を混交する暗褐色粘質土で、図8・9に示した様に多くの遺物を内包する。遺構底面では、径50cm前後・深さ20cm程の柱穴様の遺構を2基検出している。調査時には単独の土壙No.を付していたが、検出状況や覆土から土壙35底面に伴う遺構と判断している。

上記の他には遺構らしき掘込みは、1面構築土或は1面土壙30の削平もあり何等検出し得なかった。

図10には、1面構築土除去後の層位上面を精査中に出土した遺物を図示した。尚、1面構築土掘下げ中には、図化し得る遺物は殆ど出土していない。

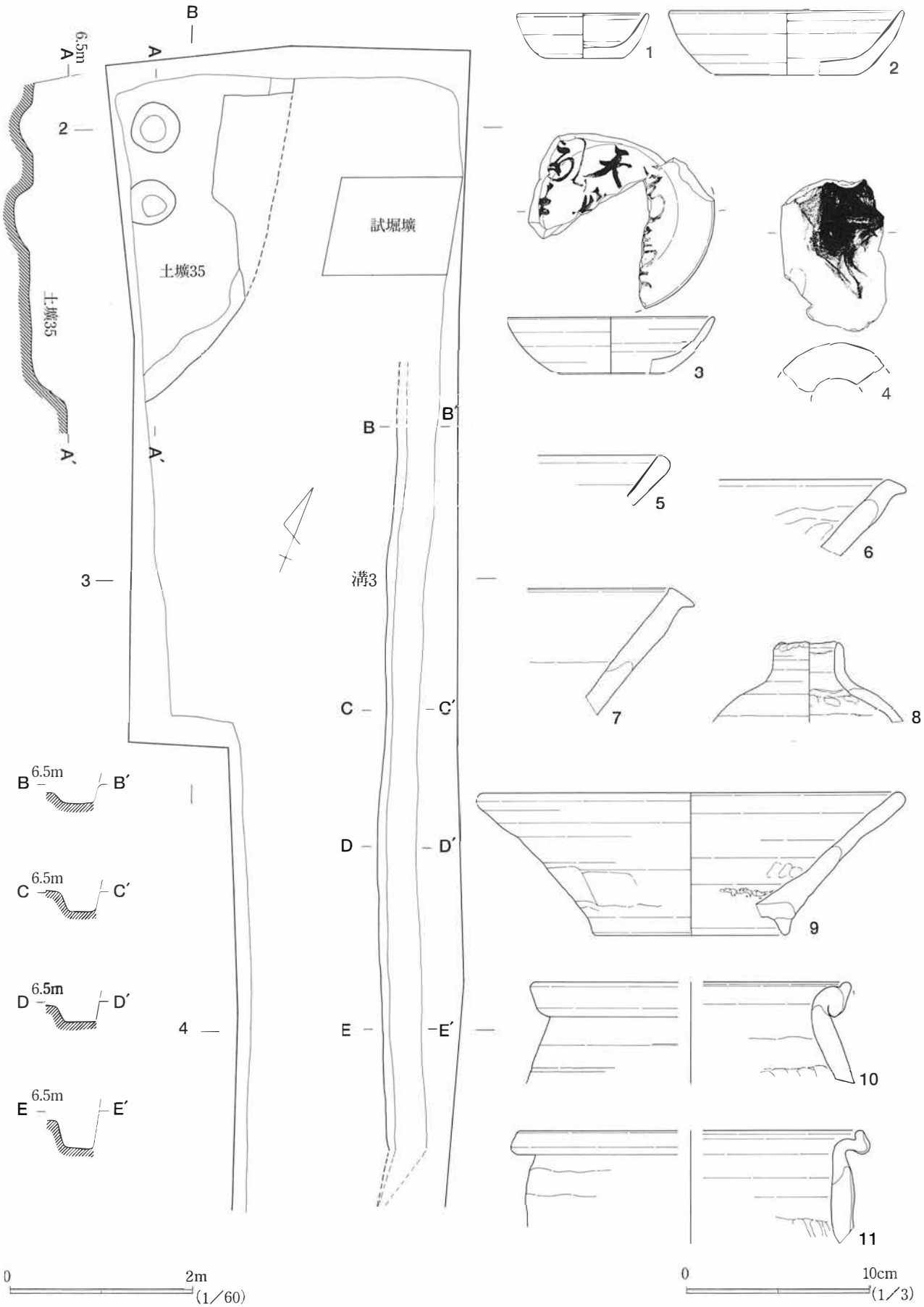


図８　２面検出遺構・土壙35出土遺物（１）

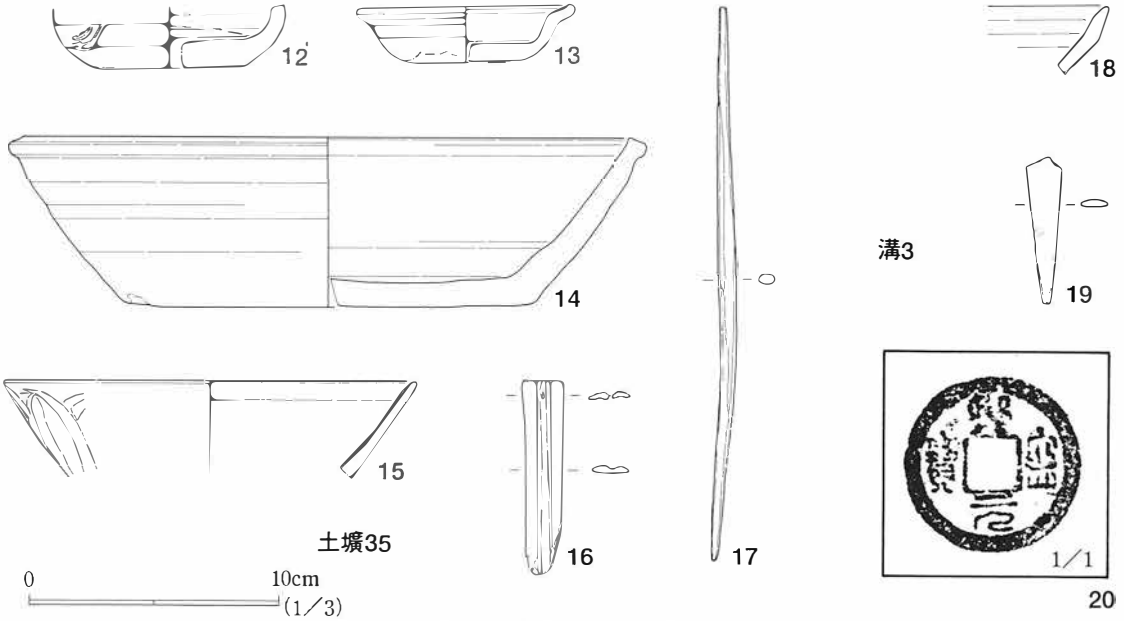


図９　土壙35出土遺物（２）・溝３出土遺物

1	かわらけ	法量　口径7.3cm　底径４.5cm　器高2.5cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
2	かわらけ	法量　口径13.0cm　底径8.0cm　器高3.6cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
3	かわらけ （墨書）	法量　口径11.5cm　底径5.5cm　器高3.2cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、赤色小粒、シルト岩粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好 備考　内底部に墨書（判読不能）
4	鞴　羽口	法量　外径7.5cm　内径3.1cm　厚さ1.95cm　成形　棒に粘土を巻いて成形　外面にナデ 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒、貝片含む　気孔あり　色調　灰橙色　焼成　良好
5	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積後ロクロ　胎土　長石含む　色調　暗灰色　焼成　良好
6	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部横ナデ　内面指頭痕あり 胎土　小石、白色粒子含む　気孔あり　色調　淡灰橙色　焼成　良好
7	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部横ナデ　内面指頭痕あり 胎土　灰褐色　砂粒、長石含む　色調　茶褐色　焼成　良好
8	常滑 細頸壷	法量　口径4.2cm　成形　輪積　内面指頭痕　胎土　灰白色　砂粒、小石、白色粒子含む 色調　褐色　焼成　良好 備考　外面肩部に降灰　口縁部に重ね焼痕あり　二次焼成を受ける
9	常滑Ⅰ類 捏鉢	法量　口径23.8cm　底径10.5cm　器高7.85cm　成形　輪積後ロクロ　内面指頭痕あり　高台貼り付け　外底部脇ヘラ削り　胎土　砂粒、長石含む　色調　灰橙色　焼成　良好 備考　口縁部に降灰あり
10	常滑 壷	法量　口径(17.8)cm　成形　輪積後ロクロ　内面指頭痕　胎土　灰黒色　砂粒、小石含む 色調　茶褐色　焼成　良好　備考　肩部条線１本　二次焼成を受ける
11	常滑 壷	法量　口径(19.8)cm　成形　輪積後ロクロ　内面指頭痕　胎土　灰白色　砂粒、小石、白色粒子　色調　茶褐色　焼成　良好　備考　外面二次焼成で釉が肥厚　内外面に降灰
12	瀬戸 香炉	法量　底径6.2cm　成形　ロクロ　外底部糸きり　胎土　黄灰色　褐色粒子含む　気孔あり 文様　体部外面に線刻　釉薬　内底部・外面　灰緑色　ハケ塗り・漬け掛け　焼成　良好
13	瀬戸 折縁小皿	法量　口径8.8cm　底径4.8cm　器高2.25cm　成形　ロクロ　外底部回転糸きり 胎土　黄灰色　白色粒子含む　気孔あり　釉薬　淡黄褐色　透明　漬け掛け　焼成　良好
14	瀬戸 洗	法量　口径25.6cm　底径16.0cm　器高6.85cm　成形　ロクロ後外底部ヘラ削り 胎土　黄灰色　気孔あり　釉薬　内面淡灰緑色　外面黄灰色、褐色　ハケ塗り　焼成　良好 備考　内底部に焼台痕あり
15	竜泉窯 青磁　碗	法量　口径16.6cm　成形　ロクロ　文様　体部外面に鎬蓮弁　素地　淡灰色 釉薬　灰緑色半透明　焼成　良好
16	骨製品 笄	法量　長さ(7.8)cm　最大幅1.73cm　厚さ0.3cm　成形　磨き仕上げ 種目　鹿　部位　中足骨か？（遠位端部？）　色調　褐色
17	箸	法量　長さ22.3cm　幅0.7cm　厚さ0.45cm　成形　両口

出土遺物観察表２　土壙35

18	瀬戸 平碗	成形　ロクロ　　胎土　黄白色　白色粒子含む　　釉薬　灰緑色　透明　漬け掛け 焼成　良好
19	骨製品 笄	法量　長さ(5.9)cm　幅1.2cm　厚さ0.25cm　　成形　磨き仕上げ 種目　鹿？　　部位　不明　　色調　明褐色
20	銭	熙寧元宝　　北宋　　初鋳　1068年　　篆書

出土遺物観察表３　溝３

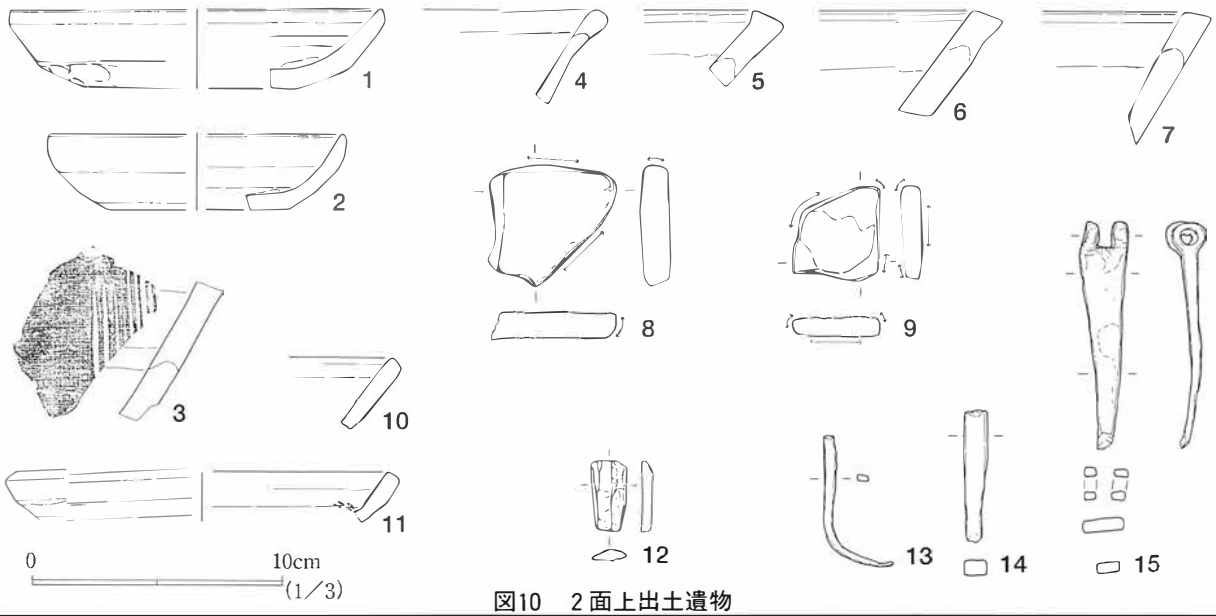


図10　２面上出土遺物

1	かわらけ	法量　口径(15.0)cm　底径(7.8)cm　器高(3.2)cm　　成形　手捏ね　内底部ナデ後口縁部ナデ 胎土　針状物質、砂粒多量、赤色小粒含む　　色調 灰橙色　　焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	かわらけ	法量　口径(12.0)cm　底径(7.4)cm　器高(3.05)cm　　成形　ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸きり　胎土　針状物質、赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好 備考　二次焼成を受ける
3	備前 擂鉢	成形　輪積後ロクロ　条線4本遺存　　胎土　砂粒、白色粒子、赤色小粒、長石含む 色調　灰褐色　　焼成　普通
4	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積後ロクロ　　胎土　小石、長石含む　　色調　灰色　　焼成　良好 備考　内面口縁部あたりに降灰
5	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部ナデ　　胎土　灰黒色　砂粒、シルト岩粒、長石含む 色調　茶褐色　口縁部に降灰　　焼成　良好
6	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部ナデ　　胎土　灰黒色　砂粒、小石含む　　色調　茶色　　焼成　良好
7	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部ナデ　　胎土　灰黒色　砂粒、黒色小粒、長石含む 色調　茶色　　焼成　良好
8	常滑 甕　転用	法量　長さ4.8cm　幅5.0cm　厚さ1.2cm　　胎土　灰褐色　黒色粒子、シルト岩粒、長石含む 色調　灰黒色　　焼成　良好　　備考　外面に降灰　２面砥面
9	常滑 甕　転用	法量　長さ3.8cm　幅3.5cm　厚さ0.8cm　　胎土　灰褐色　シルト岩粒、石英含む 色調　褐色　　焼成　良好　　備考　３面砥面
10	瀬戸 卸皿	成形　ロクロ　口縁部横ナデ　　胎土　灰白色　砂粒含む　気孔あり 釉薬　灰緑色　透明　ハケ塗り　　焼成　良好
11	瀬戸 卸皿	法量　口径(15.8)cm　　成形　ロクロ　口縁部横ナデ　　胎土　灰色　砂粒、白色粒子含む　気孔有り　　釉薬　灰緑色　ハケ塗り　　焼成　良好　　備考　二次焼成を受ける
12	骨　未製品	法量　長さ2.8cm　幅1.4cm　厚さ0.4cm　　種目　鹿　　部位　中手(足)骨 備考　両面に加工痕
13	鉄製品 釘	法量　長さ(6.6)cm　幅0.4cm　厚さ0.25cm
14	鉄製品 不明	法量　長さ(5.6)cm　幅0.9cm　厚さ0.6cm
15	鉄製品 環状金具	法量　長さ(9.0)cm　幅1.95cm　厚さ0.6cm

出土遺物観察表４　２面上

3面の遺構と遺物

海抜6.2m前後に顕れる、貝砂混じりの灰黒色乃至暗青灰色土上面を3面とした。これまでの整地層と同様に、南に向って緩やかに傾斜しⅠ区南端では海抜9.9m前後を測る。本調査区全体の中で、検出遺構・出土遺物の質量共に最も多く、それ故にⅠ区の整理作業が進まぬ現段階では切放して記述し難い部分もあり、年代観等は後に刊行される発掘調査団の報文に於いては、若干の変更・訂正が加えられるであろう事を予めお断りしておく。

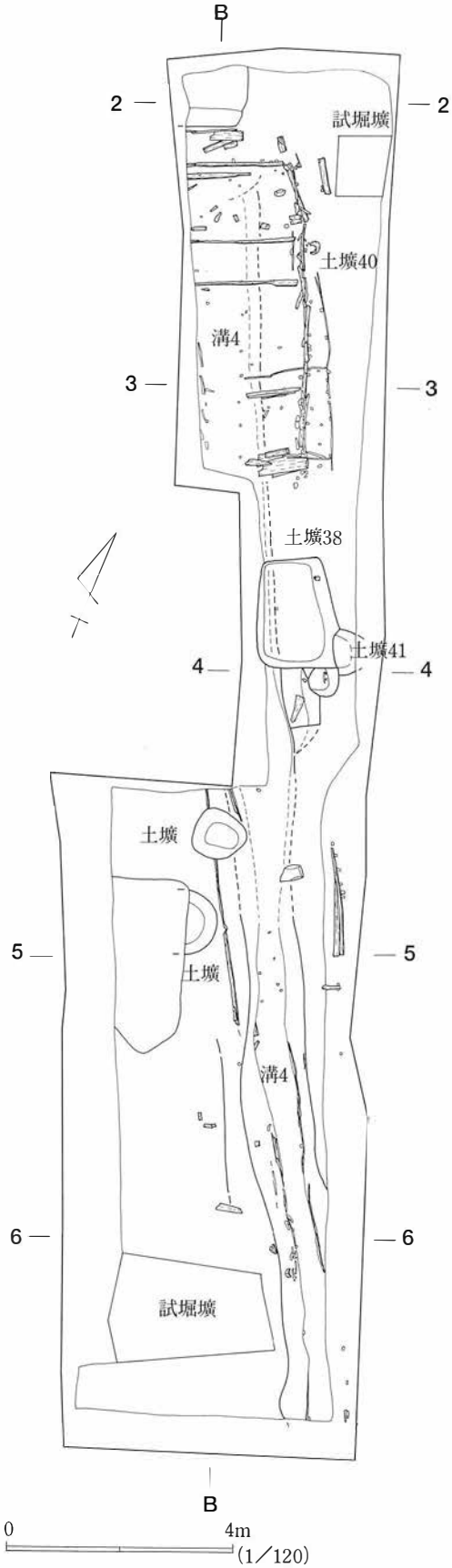


図11　3面全測図

第二章で触れた様に、3面は新旧の2時期に分割される可能性が高く、又、調査時4面として扱った遺構群が3面の古い時期に含まれる要素も含むが、本報告ではとりあえず一括して3面として扱う。検出された主遺構は、Ⅰ区に跨る溝1条・建物址の可能性のあるものを含め土壙5基である。全体図・図11には整理が追いつかず図示し得なかったが、Ⅰ区では建物の可能性のあるものを含め土壙20基・礎板を伴うものを含めピット23口等を検出している。尚、本稿に於いてはⅠ区との兼合いや資料の提示を鑑み、本報告該当範囲内検出遺構の内土壙3基・溝1条をここで扱う。

溝4は、Ⅱ区調査開始当初よりその存在は予想されてはいたが、後に述べる土壙40の乱立する杭に惑わされ結果的にほぼ土壙40と一緒に掘り上げてしまった。土層断面等の観察から土壙40より新しい遺構である（図13断面図A）。

良好な状態では検出し得なかった為、Ⅰ区で検出された様相を併せ観て述べる。

走行方向は南北で断面箱形を呈し、ほぼ同位置に新旧の2時期に造り替えられている。古い方が深く掘られ、新しい方はやや幅広な掘り方を持ち浅い。何れも掘り方内に横板を組み、内側から杭で支える構造。杭・横板共に寸法はまちまちで、誂えものは殆どなく再利用品或は自然木に僅かに手を加えただけの部材も使われていた様に観受けられた。底面は掘り方の侭で3面の傾斜に従って南に向って緩やかに下り、レベルはⅡ区の確認値で5.70m程、Ⅰ区最南端では5.36m程である。覆土は図13に土壙40の断面図と共に示した。概ね土壌化した砂質土乃至粘質土で総じて土丹粒や貝粒子を含む。覆土最上層には、大型土丹塊や河原石等が投込まれた如く点々と溝の方向に沿って確認されている。

筆者の怠慢に拠り確認はしていないが、図2地点1で検出されている方形竪穴建築址の軸方位とはそう変らないと考えており、付近の遺構の方向性延いては地境を示していると想われる。

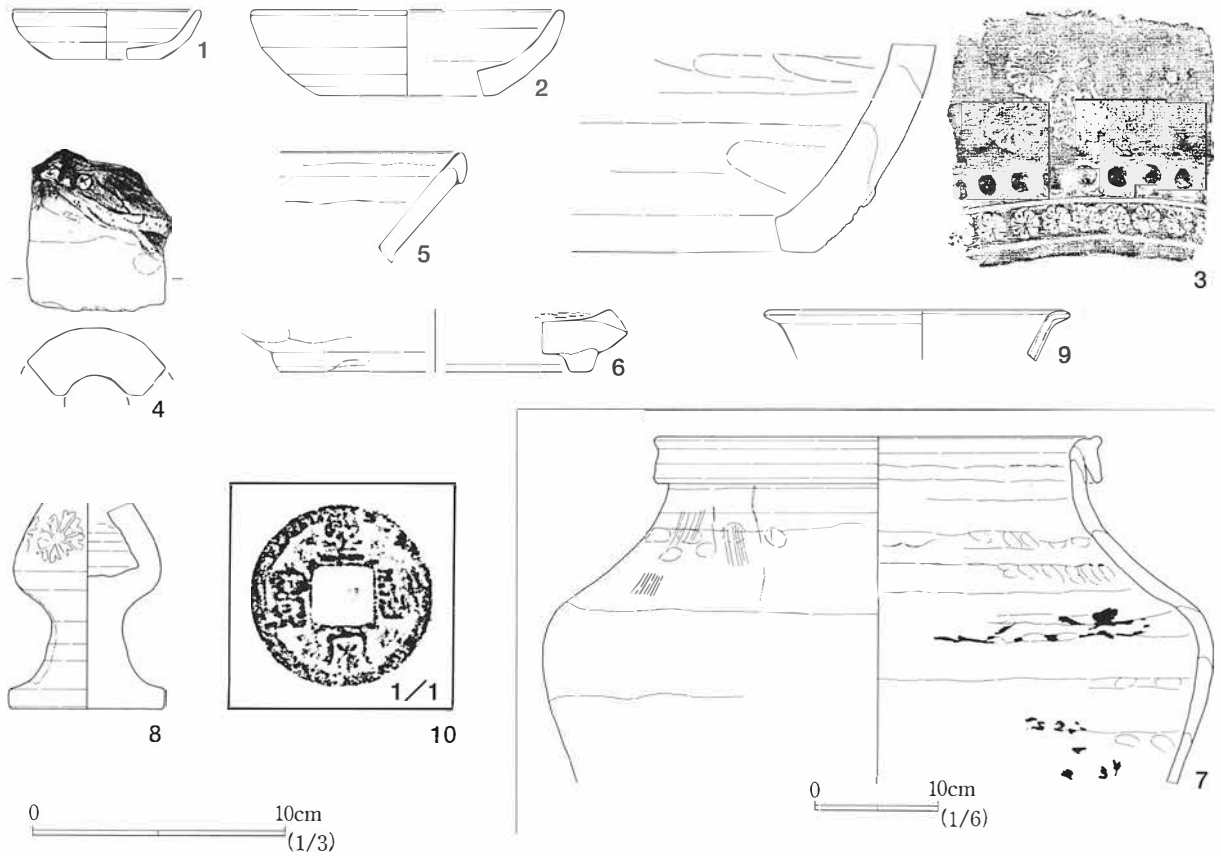
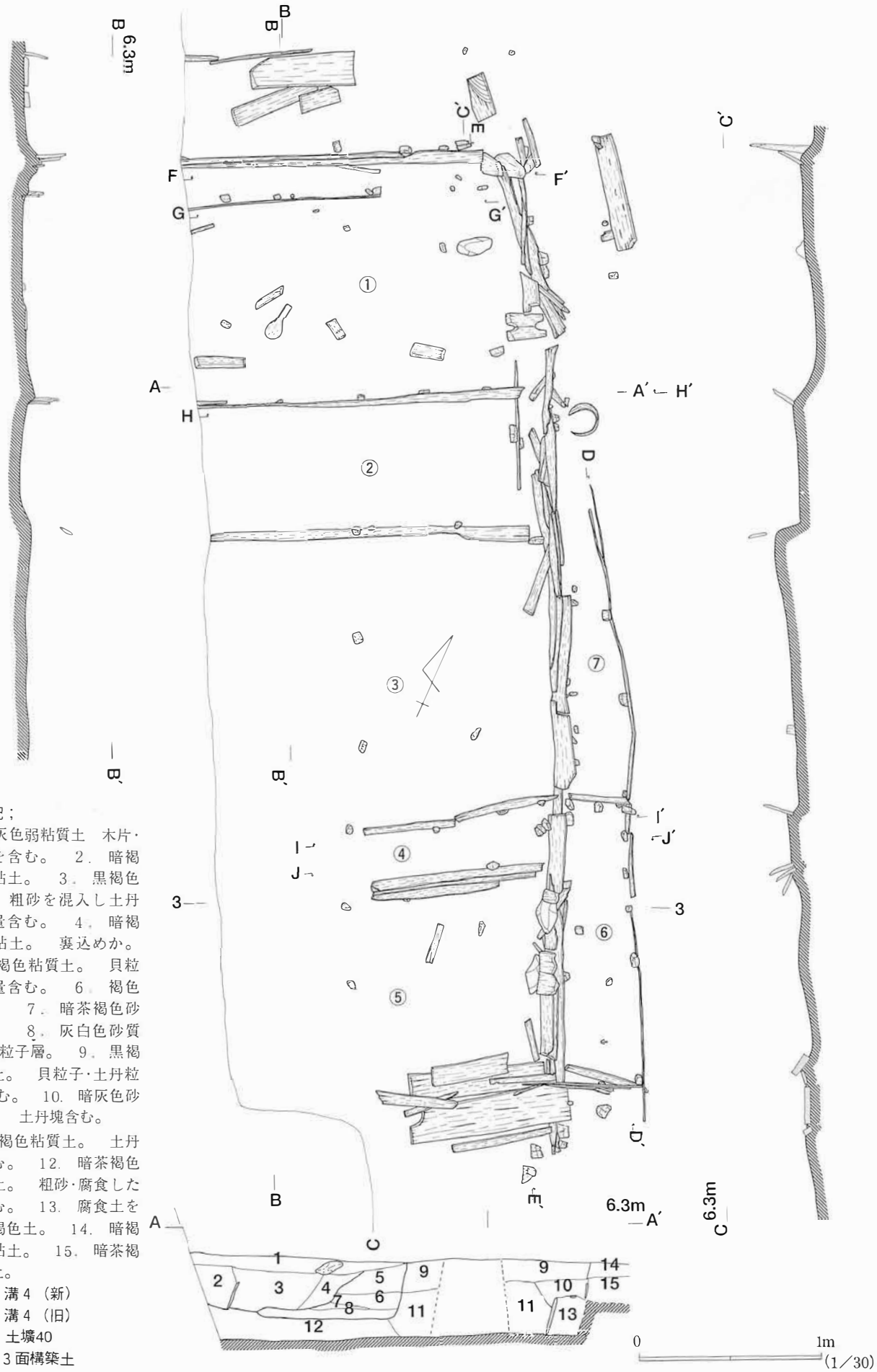


図12　溝４出土遺物

1	かわらけ	法量　口径7.6cm　底径4.4cm　器高2.05cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒、貝片含む　色調　淡灰橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
2	かわらけ	法量　口径12.6cm　底径7.0cm　器高3.0cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好
3	瓦質 火鉢	成形　輪積　内外面横ナデ　外面ヘラ磨き　文様　体部外面中位より大菊花文押印・貼り付け 型押し連珠文・沈線・連続小菊花文押印・沈線　胎土　灰白色　小石、長石含む　気孔あり 色調　内面灰色　外面灰黒色　焼成　良好　備考　脚付きか？
4	鞴　羽口	法量　外径(6.6)cm　内径(2.6)cm　厚さ1.9cm　成形　棒に粘土を巻いて成形　外面ナデあり 胎土　砂粒、シルト岩粒含む　気孔あり　色調　淡灰橙色　焼成　良好
5	東播系 捏鉢	成形　輪積後ナデ　胎土　砂粒、小石、白色粒子含む　色調　暗灰色　焼成　良好
6	渥美 捏鉢	法量　底径(12.6)cm　成形　輪積後ロクロ　高台貼り付け　外底部脇ヘラ削り 胎土　小石、白色粒子含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　摩耗痕あり
7	常滑 甕	法量　口径35.4cm　成形　輪積　内面指頭痕　外面縦方向にハケ目あり　胎土　砂粒、小石 、長石、石英含む　色調　茶褐色　焼成　普通　備考　内面に漆か油付着
8	瀬戸 仏華瓶	法量　胴部径5.9cm　脚部径2.8cm　底径6.2cm　成形　ロクロ　外底部回転糸きり 文様　胴部外面に菊花文押印　胎土　灰白色　砂粒含む　釉薬　暗緑色　漬け掛け 焼成　良好
9	竜泉窯 青磁　小鉢	法量　口径12.8cm　成形　ロクロ　素地　灰色　砂粒含む　釉薬　灰緑色　半透明 焼成　良好
10	銭	皇宋通宝　北宋　初鋳　1039年　篆書

出土遺物観察表５　溝４

図12に図示した出土遺物は、新旧２時期の掘り分け・遺物の分類は行い得なかったものの、グリッド４ラインより南から出土したものと断面図Ａ確認後に出土したものであり、概ね土壙40に帰属するべき遺物との混在はないと考える。



土層注記；
1．暗灰色弱粘質土　木片・土丹粒を含む。　2．暗褐色砂質粘土。　3．黒褐色粘土。　粗砂を混入し土丹粒を多量含む。　4．暗褐色砂質粘土。　裏込めか。　5．暗褐色粘質土。　貝粒子を大量含む。　6．褐色粘質土。　7．暗茶褐色砂質粘土。　8．灰白色砂質土＋貝粒子層。　9．黒褐色粘質土。　貝粒子・土丹粒・木片含む。　10．暗灰色砂質粘土。　土丹塊含む。
11．黒褐色粘質土。　土丹小塊含む。　12．暗茶褐色砂質粘土。　粗砂・腐食した木片含む。　13．腐食土を含む黒褐色土。　14．暗褐色砂質粘土。　15．暗茶褐色粘質土。
1～4；溝4（新）
5～8；溝4（旧）
9～13；土壙40
14・15；3面構築土

図13　土壙40

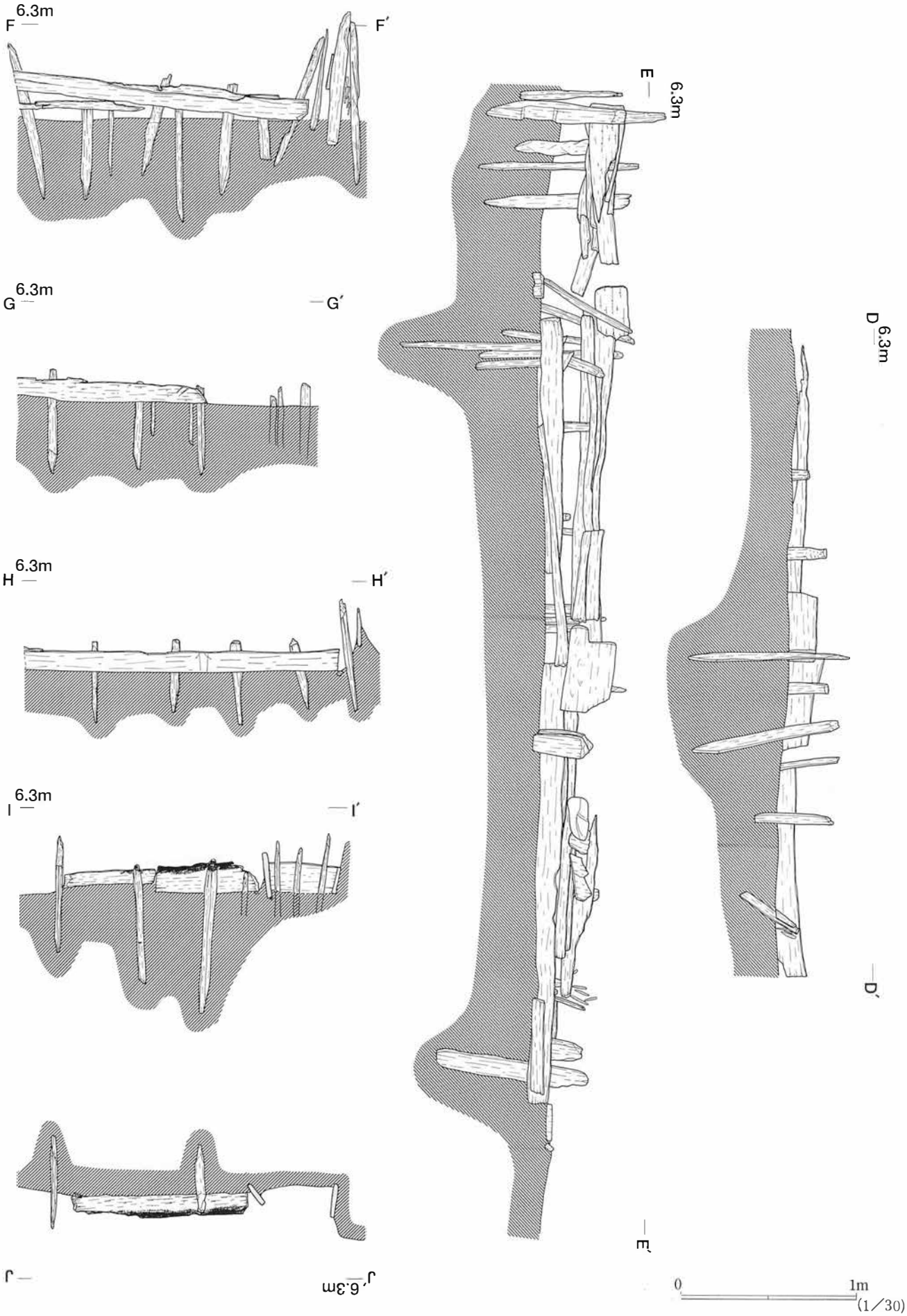


図14　土壙40木組状況立面図

土壙40は建物址の可能性のある木組構造を伴う遺構である。

検出時には遺構確認面でのほぼプラン通りに、南北約5.5m×東西最大で2.1mの範囲内に外周の杭と横板が検出されており同一遺構と判断している。溝４は土壙40埋没後に上層から掘り込まれている。

図40には土壙40とした範囲の平面図（S＝1／30)、図41には要所の立面図（S＝1／30）を示した。以下、挿図では顕しきれない調査時の所見を交え、全体の構造から杭・横板の組まれ方等について触れていく。

既に触れたように、図13断面図A14層での遺構確認の際に、方形に観られた遺構プランを順次掘下げていき、遺構底面に４箇所東西方向の杭と横板で区切られた構造であることが判断された。上層は概ね断面図A９層が拡がり、複数の遺構の重複ではないと考えられる。

外周は北東・南東の角を始め、要所では太めで長い杭が使用されている。現地調査時には、湧水等の為平面的な確認はし得なかったが、何れも杭に伴う掘込みや礎板はなかったと判断している。調査期間内で許す限り抜取った杭は殆どが先端を加工し尖らせたものであった。横板の状況は上面の削平や廃棄の際に抜かれたものか遺存状況は良くなかったが、北西隅に置いては杭の間に幅約10～20cm程の横板を挟んでいたであろう様相が観察された。この箇所の横板は検出時に少なくとも５枚は確認しており、仮に杭の間に挟んで組上げていたとすれば、北西隅に遺存する杭の頂部の高さに合致する。外周部の他の横板材も、比較的長く厚めのものだが幅や長さには統一性がなく、廃材の再利用と考えられる。南東隅では、厚さが10cm程もある板材が内側に倒れた状況で検出された。

内側は、東西方向の横板を境に底面のレベルが異なるが、横板直上の土層は相互に入り込んでいることから概ね同時期に埋没していると考えられる。以下の記述の都合上、横板を境に北から順に①～⑦の番号を与える。

①は土壙40とした範囲の中で最も北側に位置し、底面のレベルは5.80mを測る。底面は硬化しているとは言えないまでも、土壌化した同質の砂質土で整地されている。この整地層上には、鎌倉石・礎板状の板材・束柱状の部材が検出された。これらが床板を据える為の構造物とすれば、検出した整地層は床下の掘り方底面となろうか。立面図Gで顕した横板と杭は、この整地層上で造作された様に観察された。横板は表面に手斧痕が遺るも再利用品で、先端部を尖らせた杭に伴う掘込みは観察されず、打込まれたものであろう。

②の範囲は、底面を若干掘り過ぎている感もあるものの、①の如く構造を推し量る様な部材等は掘下げ時からは確認できなかった。東側の横板は、下場がほぼ底面付近で杭に挟まれた状況で検出されている。この杭は後に②範囲内でトレンチを入れた際に断面で確認したが、かなり地中深く迄入っているが、伴う掘込みは確認し得なかった。②の範囲に伴うのか、外周の構造に伴うのかは不明。北側の横板（断面図H）には「介」とも読める刻みが入る。南側の横板は、③に伴うものであろう。

③の範囲は、西寄り上層大部分を溝４に因り失われている。底面は固められてはいないものの、貝粒子を混交した同質の粗砂で平坦に均されており、レベルは約5.90m前後で外周部横板材の下場と合致する。底面中央付近にはほぼ等間隔で床束状の杭が３本検出された。上面のレベルはほぼ一致するが、横板上面や杭頂部とは10～15cmのレベル差がある。北側の横板は③の内側に倒れ込み、調査区壁より抜取った所長さ222cmを測り、土壙40とした東西範囲の目安となろうか。横板を支えている杭は、断面図Gの杭と同様に先端を尖らせ、打込んだものと観察された。①の範囲と同様に、底面に遺る部材等から建物址としての構造を推し量れる範囲である。図15に図示した出土遺物は、若干溝４の遺物が混入している恐れがあるが、この付近から出土したものが多い様に感じられた。

④の範囲は、狭小乍も横板や堆積土に特徴が観られた為独立させた。横板上面はほぼ同レベルで、上端の同じくらいの範囲及び杭の頂部が黒く焼け火熱を受けた様相が窺える。各杭は立面図の記録時に、杭の表面で断ち割り土層を丹念に精査したが、伴う掘込みは確認出来ず全て打込んだものと判断される。④は外周部を除き検出された横板材の中では比較的高い位置にあり、この板材間が検出時には硬化面があった事を考え併せると、他の範囲とは異なる空間・利用方法であったと想像されよう。又、立面図Ｉで示した横板は、別の板材にて継足す様に外周の部材を乗越え、偶然とは思えない一致する方向で東に延ばされ、⑦の範囲へと続く。④の範囲と外周部との境には、外周部角と同規模の太い柱が検出されている。断面図Ｉ・Ｊ中の最西端の杭は、溝４の杭と紛らわしかったが杭の大きさや、打込まれた深さ等から⑤の範囲に伴うものと判断している。

⑤の範囲は土壙40とした範囲内の南端に中るが、前項溝４検出時に部分的に掘り過ぎてしまい、南東隅の厚い横板材検出時に改めて土壙40内に含まれる事を判断しており、検出状況から述べるにはかなり不安がある。底面は断面図Ｃに示した様にかなり起伏があるが、本来は高い辺りが⑤の底面と考えている。底面には①や③の如く構造を推し量れる様な部材等は検出されなかったが、外周部際底面上とやや浮いた所には石が検出されている。⑤の範囲の外周部の横板は、廃材再利用品とはいえ比較的上等な横板が使用されており、土壙40の中では在る位置を占めていたと考えている。このことは内側に倒れ込んだ状態で検出された南端の分厚い板材からも想像されよう。理解に苦しむのは、倒れ込んだ厚い板材の上に外周材を跨いで⑥の範囲に及んで粗末な板材・木端が検出され、数枚壁横板状に確認されていることであろうか。これについては、⑥の項で触れる。

⑥の範囲は遺構プラン確認当初から覆土が類似し、土壙40とした範囲内に付属するとの予想はしていたが、外周材が通して続く事から一旦は別物であろうとの判断を下した。その後、これまでに述べてきた様な経過を辿り、やはり土壙40とした範囲の一部であろうと考えている。④・⑤の範囲と南北ほぼ同幅で東側に取付くように拡幅され、打込んだ杭にて横板を支えている。④の範囲延長上では、杭は比較的密な間隔で打込まれ横板も端材とはいえ厚いものが使われている。対して⑤の範囲延長上では、杭の間隔も雑なものとなり横板も薄い粗末なものとなる。調査時にはベルトの設定を怠り、グリッド３ライン付近で時期差或は同一遺構か否かを確認していない。

⑦の範囲は、調査時から土壙40とした範囲の東側裏込め的な部分なのか、⑦の東側横板と杭の打込まれた位置等から隣り合せに存在する土壙40と同様の遺構の横板なのかは判断に苦しんでいる。この付近の覆土は断面図Ａ14・15層とは類似するが、幾分しまりがない様な印象を受けた。①の東側と北側に検出された横板材も含めて本稿では帰属・性格等は保留させて頂きたい。

尚、図16には概ね範囲⑥・⑦からの出土遺物を図示した。

極めて抽象的且つ曖昧に述べてきたが、調査時遺構名の侭述べてきた土壙40は木材基礎構造の建物址と考えられる。外周材とした範囲内側が建物１軒分の範囲で、その中を東西方向の横板材等で間仕切りし、床面は板張が想像される。構造から観てもそう長持する建物とも思えないが、②や⑥の様相等からは使用途上での改築或は増築も考えられる。Ｉ区の調査に於いても、多くの杭が調査面上で検出されたが今の所同様の建物址を類推するには至らない。土壙状の掘込み底面に礎板が散在する遺構はいくつか観られたが、寧ろ礎板を伴う柱穴で掘立柱建物が数軒確認されそうである。

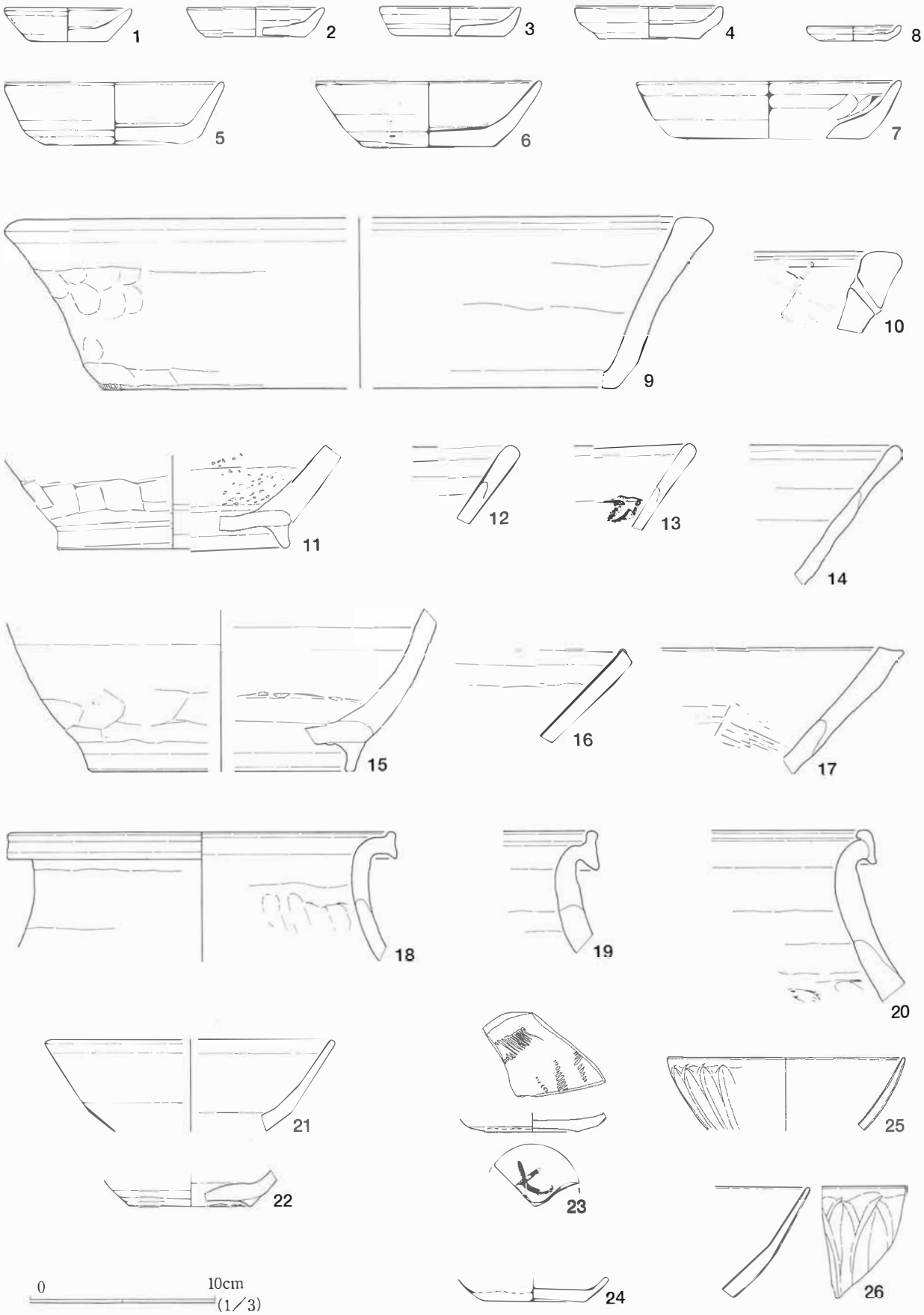


図15　土壙40出土遺物（1）

1	かわらけ	法量　口径6.9cm　底径4.2cm　器高1.85cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、赤色小粒、シルト岩粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり　二次焼成を受ける
2	かわらけ	法量　口径7.4cm　底径5.4cm　器高1.6cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒含む　気孔あり　色調　淡灰褐色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
3	かわらけ	法量　口径7.6cm　底径5.8cm　器高1.6cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒含む　気孔あり　色調　橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
4	かわらけ	法量　口径8.0cm　底径7.4cm　器高1.8cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒含む　色調　淡灰褐色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
5	かわらけ	法量　口径11.8cm　底径7.4cm　器高3.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒含む　気孔あり　色調　橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
6	かわらけ	法量　口径12.2cm　底径7.2cm　器高3.55cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒含む　色調　褐色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり　二次焼成を受ける
7	かわらけ	法量　口径14.2cm　底径10.4cm　器高3.15cm　成形　ロクロ　内底部ナデ 外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、シルト岩粒、貝粒含む　気孔あり　色調　灰橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
8	かわらけ 極小	法量　口径5.1cm　底径3.65cm　器高0.8cm　成形　ロクロ　内底部ナデ 外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、雲母含む　色調　淡橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
9	土器質 浅鉢型火鉢	法量　口径(38.2)cm　底径(27.7)cm　器高9.1cm　成形　輪積　外面上部横ナデ　中部指頭痕 下部ヘラ削り　胎土　灰色　砂粒、白色粒子含む　色調　内面灰黒色　外面黒色 焼成　良好
10	土器質 火鉢	成形　輪積　口縁下に孔あり　外面上部横ナデ　胎土　灰色　針状物質、白色粒子含む　気孔 あり　色調　内面灰黒色　外面黒色　焼成　良好
11	常滑Ⅰ類 捏鉢	法量　底径12.6cm　成形　輪積後ロクロ　高台貼り付け　外底部脇ヘラ削り 胎土　小石、長石、貝粒を多量に含む　色調　灰褐色　焼成　良好
12	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　胎土　小石、石英、黒色小粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好
13	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　胎土　小石、長石、石英、黒色小粒、貝粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好 備考　内面にスス付着
14	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　胎土　小石、長石、石英、貝粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好
15	常滑Ⅰ類 捏鉢	法量　底径14.4cm　成形　輪積後ロクロ　高台貼り付け　外底部脇ヘラ削り　胎土　小石、 砂粒、長石、石英、貝粒含む　色調　淡灰褐色　焼成　良好　備考　内面体部に重ね焼き痕
16	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部横ナデ　胎土　暗灰褐色　小石、長石、石英、黒色小粒含む 色調　褐色　焼成　良好
17	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　内面櫛歯状工具による調整　胎土　暗灰褐色　小石、砂粒、長石、石英、貝粒含 む　色調　橙色　焼成　良好
18	常滑 甕	法量　口径22.0cm　成形　輪積　内外面指頭痕あり　胎土　灰色　砂粒、小石、黒色小粒含 む　色調　茶褐色　焼成　良好
19	常滑 甕	成形　輪積　胎土　灰褐色　砂粒、小石、白色粒子、黒色小粒含む　色調　暗茶褐色 焼成　良好
20	常滑 甕	成形　輪積　内面指頭痕あり　胎土　灰褐色　白色粒子、シルト岩粒含む 色調　暗茶褐色　焼成　良好　備考　内面に油付着か
21	瀬戸 山茶碗	法量　口径(15.8)cm　成形　ロクロ　胎土　小石、長石、石英、黒色小粒含む 色調　淡灰褐色　焼成　良好
22	常滑 山茶碗	法量　底径6.6cm　成形　ロクロ　高台貼り付け　胎土　小石、石英、白色粒子、貝粒含む 色調　灰褐色　焼成　良好　備考　二次焼成を受ける　高台畳付き部分にもみがら痕あり
23	同安窯 青磁　皿	法量　底径5.0cm　成形　ロクロ　外底面ヘラ削り　文様　内底面櫛描き　素地　淡灰色 気孔あり　釉薬　暗灰緑色　透明　外底面露胎　焼成　良好　備考　外底部に墨書あり
24	白磁 口兀　皿	法量　底径5.5cm　成形　ロクロ　素地　灰白色　微気孔あり　釉薬　灰白色　半透明 焼成　良好
25	竜泉窯 青磁　碗	法量　口径12.8cm　成形　ロクロ　文様　体部外面に鎬蓮弁　素地　灰白色 釉薬　淡青緑色　半透明　焼成　良好
26	竜泉窯 青磁　碗	成形　ロクロ　文様　体部外面に鎬蓮弁　素地　淡灰橙色　釉薬　灰黄緑色　半透明 焼成　良好

出土遺物観察表６　土壙40（１）

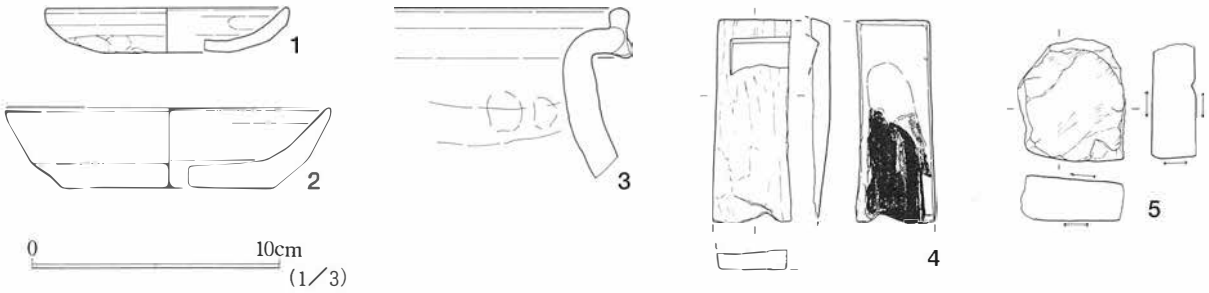


図16　土壙40出土遺物（２）

1	かわらけ	法量　口径9.8cm　底径4.8cm　器高1.8cm　成形　手捏ね　内定部ナデ後口縁部ナデ 胎土　針状物質、砂粒、小石含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　二次焼成を受ける
2	かわらけ	法量　口径13.0cm　底径4.3cm　器高3.25cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、赤色小粒、シルト岩粒、貝粒含む　気孔あり　色調　橙色　焼成　良好
3	常滑 甕	成形　輪積　内面指頭痕あり　胎土　灰褐色　砂粒、白色粒子、黒色小粒含む 色調　茶褐色　焼成　良好　備考　口縁部に多量の降灰あり
4	硯	法量　長さ(8.1)cm　幅(3.1)cm　厚さ(0.8)cm　産地　不明・黒色粘板岩製　成形　遺存側面鋸状切断痕　表面剥離　裏面　磨き仕上げ　備考　表面剥離後裏面に海部を造り出す。墨痕。
5	砥石	法量　長さ(4.9)cm　幅(4.1)cm　厚さ(1.8)cm　産地　天草産・中砥 備考　砥面は表裏２面主使用か。成形時加工痕は破損に因り不明。

出土遺物観察表７　土壙40（２）

土壙40構造部材計測表について

土壙40構造部材計測表１～３は、土壙40とした範囲内で出土した杭・横板類の内、調査時に抜取ったものを整理時に計測し一覧表にまとめたものである。発掘調査団から刊行される報告書との兼合いで図12との対照は控えるが、部材資料として発掘調査団の了解を得てその数値のみを提示するものである。

出土位置は土壙40とした範囲内での大まかな位置を、長さ・幅・厚さはcm単位で表している。備考欄には、計測時の観察を記入し（数値）削りとあるのは、例えば15.00削りとは杭として尖端を削り出す為下方15cmを加工している事を表す。（立）は、図13立面図中に表現されている部材を表している。

No.	遺構名	出土位置	種別	長さ	幅	厚さ	備　考
097	土40	北	横板	31.0	4.3	0.8	(立)
057	土40	南	横板	37.5	4.5	0.7	切込み
098	土40	北	横板	40.0	5.0	0.5	(立)
071	土40	北	横板	40.5	6.7	0.6	焼痕
060	土40	南	横板	45.0	10.0	3.8	手斧痕,焼痕
072	土40	南	横板	47.0	26.3	2.0	手斧痕,焼痕
067	土40	北	横板	51.7	21.0	3.5	手斧痕,焼痕
061	土40	南	横板	52.0	10.0	6.0	手斧痕(4面),焼痕
022	土40	北	横板	52.8	6.4	1.8	焼痕,釘穴,(立)
068	土40	北	横板	54.0	9.0	0.8	
031	土40	南	横板	55.0	8.0	2.0	漆喰,焼痕,(立)
032	土40	南	横板	58.0	17.0	1.5	漆喰,焼痕,(立)
052	土40	南	横板	60.0	10.5	2.0	手斧痕,釘
045	土40	北	横板	61.0	7.5	2.0	漆喰,焼痕
055	土40	南	横板	65.5	11.0	1.3	
023	土40	北	横板	66.0	10.0	1.9	手斧痕,釘,(立)
044	土40	北	横板	71.0	17.0	2.7	手斧痕
034	土40	南	横板	72.0	13.0	1.4	1cm位の穴
070	土40	中央	横板	73.7	8.3	0.8	焼痕
054	土40	南	横板	74.0	10.0	0.8	
046	土40	北	横板	75.0	3.6	0.3	
115	土40	北	横板	83.5	6.3	0.4	
053	土40	南	横板	84.0	9.5	1.0	
048	土40	北	横板	84.5	10.0	0.5	焼痕

土壙40構造部材計測表１

No.	遺構名	出土位置	種別	長さ	幅	厚さ	備　考
059	土40	南	横板	86.0	10.5	2.5	漆喰,焼痕
114	土40	北	横板	86.0	6.5	0.4	漆喰,焼痕
058	土40	南	横板	94.0	18.3	3.0	手斧痕,漆喰,焼痕
051	土40	北	横板	98.5	10.0	0.5	漆喰
033	土40	南	横板	99.5	13.0	2.0	釘穴,漆喰(下方)
063	土40	南	横板	107.2	8.5	1.5	焼痕
110	土40	北	横板	115.5	4.5	0.5	漆喰
028	土40	北	横板	116.0	5.3	1.0	(立)
050	土40	北	横板	121.0	11.0	0.5	
049	土40	北	横板	125.0	8.5	0.5	針穴1ケ
065	土40	南	横板	135.0	11.0	2.0	手斧痕,ホゾ穴1ケ,釘,釘穴,焼痕
108	土40	中央	横板	148.5	9.7	0.8	漆喰,焼痕
006	土40	北	横板	149.5	10.5	0.8	(立)
069	土40	北	横板	153.0	11.0	1.2	
008	土40	北	横板	158.0	14.0	1.5	手斧痕,漆喰,焼痕,切痕,(立)
001	土40	北	横板	163.5	12.0	6.0	漆喰 (立)
015	土40	北	横板	168.5	14.5	2.0	手斧痕,釘穴1ケ,焼痕,(立)
073	土40	南	横板	199.0	11.4	1.0	焼痕,釘1ケ,釘穴5ケ
109	土40	北	横板	202.0	11.0	1.2	漆喰
021	土40	北	横板	222.0	12.0	2.2	手斧痕,釘,釘穴,焼痕,(立)
107	土40	北	横板	245.0	11.0	0.8	漆喰,1.0位の穴
154	土40		杭	20.0	4.5	3.0	釘
012	土40	北	杭	28.0	2.0	1.5	焼痕,(立)
037	土40	南	杭	29.5	8.0	2.0	
024	土40	北	杭	30.5	6.3	3.2	9.2削り
013	土40	北	杭	31.5	2.6	2.0	焼痕,切込み,(立)
079	土40	北	杭	33.0	6.0	2.5	漆喰,焼痕,4.5削り
147	土40		杭	33.0	4.0	1.8	
036	土40	南	杭	34.0	9.0	2.0	焼痕
030	土40	南	杭	38.5	3.7	3.0	自然木
133	土40		杭	39.5	3.5	2.8	15.5削り
130	土40		杭	40.0	3.5	3.0	手斧痕,12.5削り
077	土40	北	杭	40.5	3.0	3.0	焼痕,7.5削り
131	土40		杭	40.5	4.0	3.0	漆喰,13.0削り
020	土40	北	杭	41.2	5.5	2.0	焼痕,釘穴,15.1削り,(立)
135	土40		杭	41.5	4.0	4.5	手斧痕,釘,ホゾ穴
018	土40	北	杭	41.8	5.0	2.2	焼痕,釘,14.0削り,(立)
148	土40		杭	43.0	5.5	3.0	28.0削り
035	土40	南	杭	45.5	11.0	3.5	焼痕
139	土40		杭	45.5	6.5	3.0	釘穴,26.5削り
017	土40	北	杭	47.0	3.7	2.0	手斧痕,16.0削り,(立)
141	土40		杭	47.0	9.0	2.0	14.5削り
150	土40		杭	47.0	5.3	3.0	手斧痕,焼痕,9.0,12.0削り
019	土40	北	杭	47.5	6.7	2.8	焼痕,釘穴,28削り,(立)
096	土40	南	杭	50.0	10.0	6.0	焼痕
011	土40	北	杭	50.5	4.5	2.8	焼痕,8.5削り,(立)
014	土40	北	杭	50.5	3.7	3.1	10.5削り,(立)
090	土40	北	杭	53.5	7.8	7.8	漆喰,焼痕, 釘穴,自然木?
121	土40		杭	54.0	4.0	2.5	
087	土40	北	杭	54.5	7.5	7.5	焼痕,自然木?,円筒状
104	土40	北	杭	54.5	6.0	3.5	焼痕,7.5削り
153	土40		杭	55.0	4.0	3.5	手斧痕,13.0削り
127	土40		杭	56.0	4.5	3.0	釘穴,21.0削り
138	土40		杭	56.0	3.0	2.5	11.0削り
095	土40	南	杭	57.0	6.0	5.0	釘3ケ,19.0削り
076	土40	北	杭	57.5	6.0	2.2	焼痕,12.5削り
116	土40		杭	58.0	5.5	3.0	釘,22.0削り
056	土40	南	杭	58.5	3.5	0.4	漆喰
010	土40	北	杭	58.7	4.7	3.5	焼痕,14.0削り,(立)
080	土40	北	杭	59.0	5.5	2.5	漆喰,15.0削り

土壙40構造部材計測表 2

No.	遺構名	出土位置	種別	長さ	幅	厚さ	備　考
140	土40		杭	60.0	5.0	3.5	漆喰,焼痕,釘穴,15.0削り
142	土40		杭	60.0	5.5	3.0	釘,23.0削り
145	土40		杭	60.0	6.5	2.5	全体に焼痕,20.0削り
007	土40	北	杭	61.0	6.0	4.5	手斧痕,23.0削り
137	土40		杭	61.0	5.5	2.5	釘穴,ホゾ穴
118	土40		杭	62.0	5.0	2.5	漆喰?,焼痕
143	土40		杭	62.0	6.0	3.0	漆喰,焼痕,釘,16.0削り
152	土40		杭	62.0	7.0	3.0	手斧痕,全体に焼痕,23.0削り
134	土40		杭	62.5	4.5	1.7	漆喰,焼痕,9.0削り
082	土40	北	杭	63.0	11.0	3.0	漆喰,ホゾ穴痕
094	土40	南	杭	63.0	10.0	6.4	焼痕,釘穴8ケ,切込み,ホゾ穴
009	土40	北	杭	65.0	6.0	4.5	手斧痕,漆喰,19.0削り
091	土40	北	杭	65.0	4.5	4.0	9.0削り
129	土40		杭	65.0	2.5	2.5	釘穴,9.0削り
126	土40		杭	67.0	6.0	2.5	18.0削り
149	土40		杭	67.0	5.0	3.0	焼痕,21.0,10.0削り
027	土40	南	杭	67.5	5.0	3.0	釘穴,(立)
078	土40	北	杭	69.0	5.2	3.0	焼痕,10.5削り
119	土40		杭	72.5	4.5	3.6	漆喰?,ホゾ穴,21.0削り
128	土40		杭	74.0	5.0	3.5	漆喰,焼痕,10.0削り
144	土40		杭	74.0	4.0	3.0	手斧痕,10.0,11.0削り
151	土40		杭	74.0	5.0	3.0	手斧痕,焼痕,19.0削り
117	土40		杭	75.0	6.5	3.0	26.0削り
120	土40		杭	75.0	3.5	2.5	17.0削り
123	土40		杭	75.0	4.5	3.5	漆喰,ホゾ穴,20.0,15.0削り
122	土40		杭	76.0	5.5	2.0	漆喰,焼痕,釘穴,17.0(上下)
083	土40	北	杭	79.0	10.5	7.0	手斧痕
103	土40	北	杭	80.0	4.5	2.5	漆喰,焼痕,釘穴1ケ
125	土40		杭	80.0	5.5	3.5	手斧痕,焼痕,ホゾ穴,20.0削り
081	土40	北	杭	80.5	5.5	3.5	漆喰,釘穴,ホゾ穴痕,18.0削り
136	土40		杭	83.0	5.0	5.0	焼痕,自然木,9.14(上下)
089	土40	北	杭	85.0	8.0	3.5	焼痕,25.0削り
092	土40	北	杭	85.5	6.0	3.5	焼痕
093	土40	南	杭	88.0	11.0	7.5	釘穴,ホゾ穴
029	土40	南	杭	88.5	7.0	3.0	焼痕,(立)
047	土40	北	杭	88.5	10.0	0.5	
075	土40	北	杭	92.0	6.0	3.0	35.0削り
088	土40	北	杭	92.5	5.0	3.5	手斧痕,ホゾ穴,15.0削り
105	土40	北	杭	93.0	5.0	3.0	切込み,9.0削り
066	土40	南	杭	95.5	12.0	1.0	焼痕
084	土40	北	杭	97.0	6.5	5.0	手斧痕,16.0削り
016	土40	北	礎板	13.0	7.0	2.1	焼痕
064	土40	南	板	11.0	15.3	2.3	焼痕
062	土40	南	板	15.0	24.5	1.8	焼痕
111	土40	北	板	24.0	14.0	4.2	4.3×6,5×6.2の穴あり
146	土40		板	35.0	24.5	2.0	手斧痕,焼痕
124	土40		板	42.5	11.0	3.0	焼痕,ホゾ穴,7.0削り
132	土40		板	49.0	8.0	2.0	漆喰,焼痕,ホゾ穴
005	土40外	北	横板	23.0	11.2	3.5	手斧痕,焼痕
004	土40外	北	横板	51.0	10.5	4.1	焼痕
003	土40外	北	横板	59.5	17.0	1.8	焼痕
002	土40外	北	横板	60.7	17.0	1.8	手斧痕,切込み
099	土40外	南	杭	44.8	4.5	4.0	焼痕
086	土40外	北	杭	46.5	3.5	2.5	焼痕,6.0削り
085	土40外	北	杭	54.0	5.5	3.0	漆喰,焼痕,10.5削り
101	土40外	南	杭	61.0	6.5	6.5	焼痕,釘穴,19.0削り
074	土40外	北	杭	64.3	15.4	2.5	手斧痕,漆喰
106	土40外	南	杭	66.0	11.5	12.0	手斧痕,焼痕
100	土40外		杭	86.0	5.5	5.5	焼痕,自然木,22.0,15.0
102	土40外	南	杭	94.0	4.5	2.8	13.0削り
112	土40外		板	25.7	11.3	3.4	18.0×7.3の柱当たり,釘

土壙40構造部材計測表 3

図17土壙38は土壙40の南にやや距離を置いて検出された方形土壙である。この付近は、西側調査区下場付近を通る溝４の東側肩横板が遺存していたり、排水用の側溝を掘る程調査区幅がない為困難を究め、４基の土壙を一度に掘り上げる結果となってしまった。南・西側で重複する３基の土壙は、遺構の性格や土壙38・溝４との新旧関係は不明。土壙38の北東掘り込み壁際と底面上には角材状の杭が検出された。遺構確認当初は、その位置や方向・出土遺物の多さから土壙40或は溝４との関係が考えられたが、北側掘り込み壁が比較的明瞭に立上がり、単独の土壙と判断している。上場規模で南北3.82m×東西2.88m・深さ40cm強を測る。図18に土壙38出土遺物として図示したものの中には、上記重複する３土壙や付近遺構確認面状の遺物が紛れ込んでいる可能性がある。

図19には、２面から３面への掘下げ時及び３面把握後の遺構面精査で出土した遺物を図示した。図示した他にも多くの遺物が出土しているが、整理時の制約により割愛した。全体的に観ても常滑窯の製品が多く、舶載品や瀬戸窯諸製品は殆ど出土していない。上層の面で見逃した遺構があったのか、年代的にはばらつきが感じられる。

Ⅰ区の調査では、３面終了後の下層に整地層らしき平坦面を確認し４面として調査したが、Ⅱ区に於いては土壙40に時間をとられたこともあって、３面終了後はトレンチ調査に移った。設定したトレンチは図20に示し、出土遺物は試掘の際の出土品と共に図21に示した。設定したトレンチの土層断面から観る限りでは、３面以下には顕著な整地層・生活面は認められず、腐植土層や後背湿地性の概ね自然堆積層を確認したに留まった。

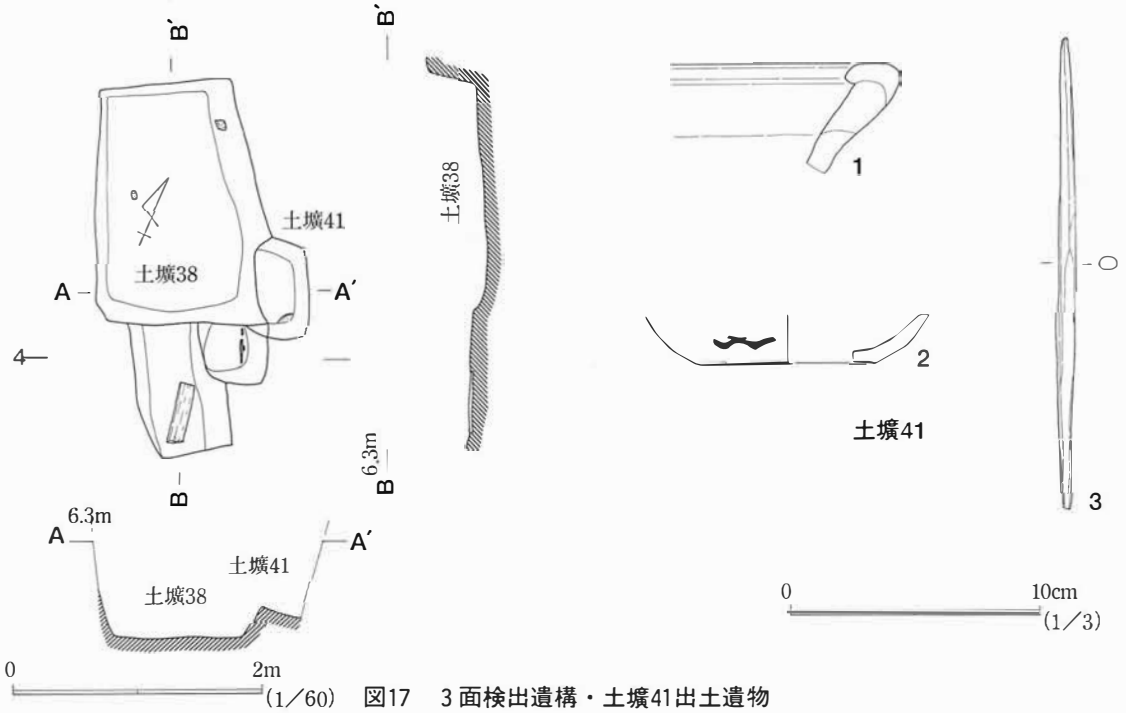


図17　３面検出遺構・土壙41出土遺物

1	土器質 浅鉢型火鉢	成形 色調	輪積 黒色	内外面横ナデ 焼成	口縁部外面ヘラナデ 良好	胎土	小石、白色粒子含む　気孔あり
2	漆器 皿	法量	底径7.2cm	成形	内外面黒漆塗り	文様	体部外面に朱漆で草文か？
3	箸	法量	長さ18.8cm	幅0.7cm	厚さ0.5cm	両口	

出土遺物観察表８　土壙41

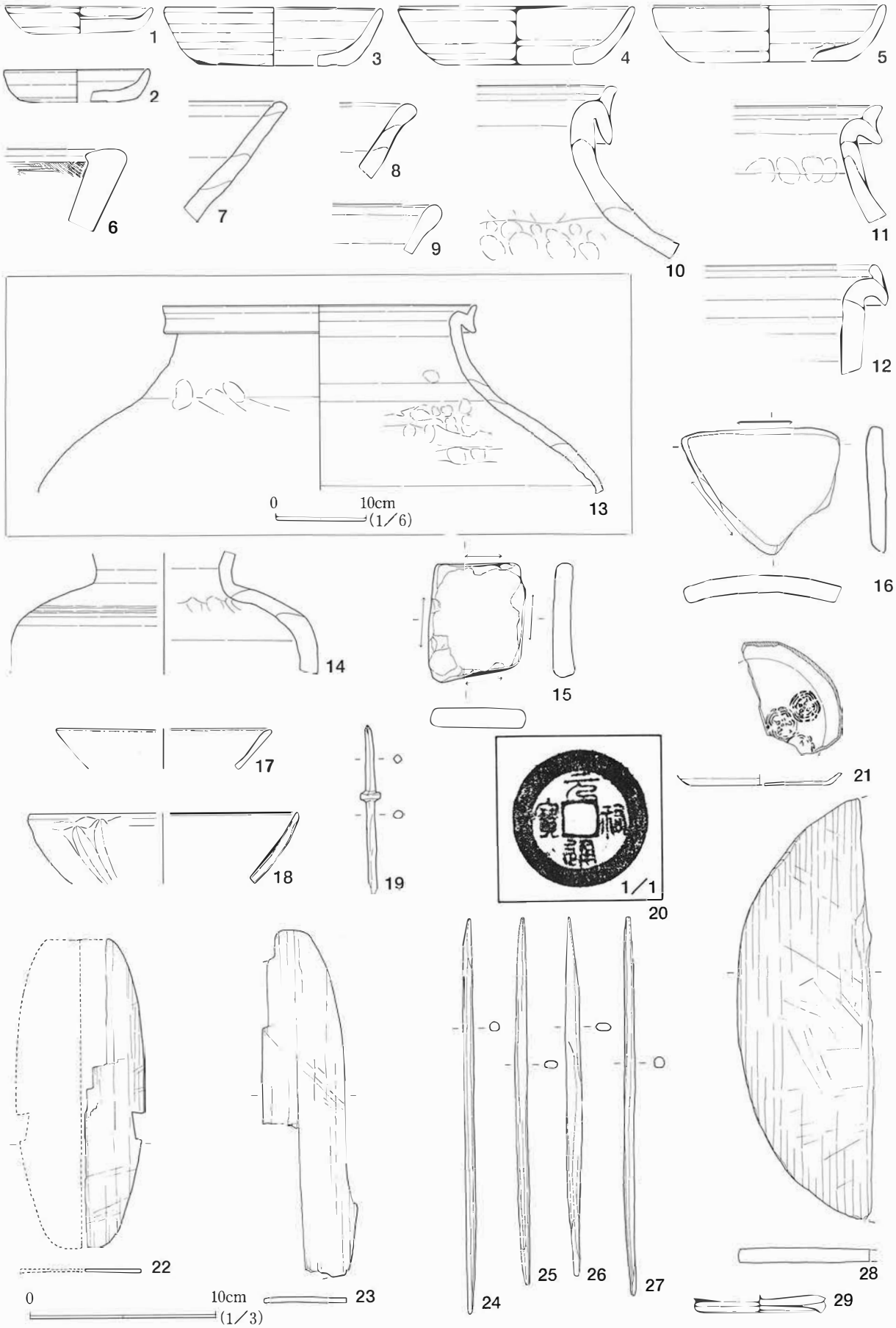


図18　土壙38出土遺物

1	かわらけ	法量　口径8.1cm 底径6.1cm　器高1.55cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、小石、シルト岩粒含む　　色調　灰褐色　　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
2	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径6.4cm　器高1.85cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、小石、白色粒子含む　　色調　暗灰橙色　　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
3	かわらけ	法量　口径12.0cm 底径8.2cm　器高3.2cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、小石、シルト岩粒含む　　色調　淡灰橙色　　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
4	かわらけ	法量　口径13.0cm 底径8.2cm　器高3.2cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、小石、シルト岩粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
5	かわらけ	法量　口径12.8cm 底径8.6cm　器高3.1cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、小石、シルト岩粒含む　　色調　暗灰橙色　　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
6	土器質 浅鉢型火鉢	成形　輪積　内面上部に細かい櫛歯状工具のナデあり　　胎土　灰褐色　針状物質、砂粒、小石、白色粒子、シルト岩粒含む　　色調　内面灰褐色　外面黒色　　焼成　良好
7	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　　胎土　小石、貝粒子、長石含む　　色調　灰褐色　　焼成　良好
8	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　　胎土　小石、黒色粒子、貝粒子含む　　色調　淡灰褐色　　焼成　良好
9	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　　胎土　小石、白色粒子、貝粒子、長石含む　　色調　暗茶褐色　　焼成　良好
10	常滑 甕	成形　輪積　　胎土　砂粒、小石、白色粒子、貝粒子、長石含む 色調　内面茶褐色　外面緑褐色　　焼成　良好
11	常滑 甕	成形　輪積　　胎土　灰褐色　小石、長石含む　　色調　褐色　　焼成　良好 備考　口縁部内外多量の降灰
12	常滑 甕	成形　輪積　　胎土　小石、白色粒子、貝粒子、長石含む　　色調　暗褐色　　焼成　良好
13	常滑 甕	法量　口径34.4cm　　成形　輪積　　胎土　淡灰褐色　小石、長石含む　　色調　茶褐色 焼成　良好
14	常滑 小壷	成形　輪積　　胎土　淡灰色　小石、長石含む　　色調　茶褐色　　焼成　良好 備考　肩部に２本の条線あり
15	常滑Ⅱ類 捏鉢転用	法量　長さ6.4cm　幅5.2cm　厚さ1.0cm　　胎土　淡灰褐色　砂粒、小石、白色粒子含む 色調　褐色　　焼成　良好　　備考　４面砥面
16	常滑甕 転用	法量　長さ6.9cm　幅9.1cm　厚さ0.9cm　　胎土　灰褐色　砂粒、小石、白色粒子含む 色調　茶褐色　　焼成　良好　　備考　２面砥面
17	白磁 口兀　皿	法量　口径(11.8)cm　　成形ロクロ　　素地　淡灰色　　釉薬　灰白色　不透明　　焼成　良好
18	竜泉窯 青磁　碗	法量　口径(14.8)cm　　成形ロクロ　　文様　体部外面に鎬蓮弁　　素地　灰白色 釉薬　淡青緑色　半透明　　焼成　良好
19	鉄製品 火箸	法量　上部0.4cm　下部0.45cm
20	銭	元祐通宝　北宋　初鋳　1086年　篆書
21	漆器 皿	法量　底径7.6cm　　成形　内外面黒漆塗り　　文様　内面に朱漆で花文
22	木製品 板草履	法量　長さ(17.0)cm　幅(7.0)cm　厚さ0.2cm　　柾目
23	木製品 板草履	法量　厚さ0.25cm　　柾目
24	箸	法量　長さ21.5cm　幅0.55cm　厚さ0.5cm　　両口
25	箸	法量　長さ20.0cm　幅0.7cm　厚さ0.3cm　　両口
26	箸	法量　長さ19.5cm　幅0.85cm　厚さ0.4cm　　両口
27	箸	法量　長さ20.7cm　幅0.6cm　厚さ0.6cm　　両口
28	曲物 底	法量　厚さ0.8cm　　柾目
29	灰釉陶器	法量　底径7.2cm　　成形　ロクロ　高台貼り付け　　胎土　針状物質、小石、白色粒子含む 色調　淡灰褐色　　焼成　良好

出土遺物観察表９　土壙38

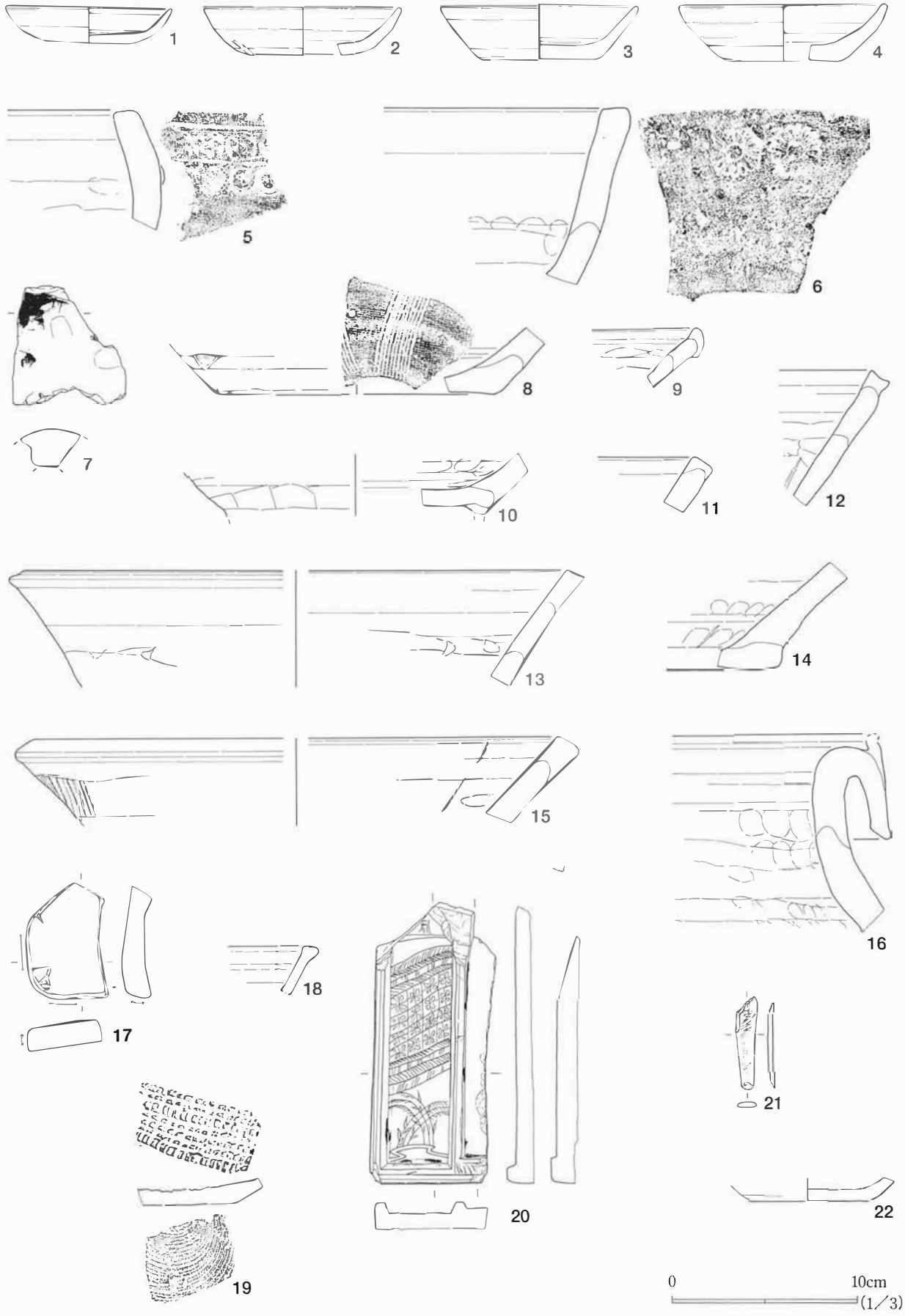


図19　3面上出土遺物

1	かわらけ	法量　口径9.1cm 底径4.9cm　器高1.95cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、赤色小粒、小石含む　　色調　淡灰橙色　　焼成　良好
2	かわらけ	法量　口径10.8cm 底径5.6cm　器高2.65cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、赤色小粒、シルト岩粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好 備考　灯明皿として使用　板状圧痕あり
3	かわらけ	法量　口径10.8cm 底径6.2cm　器高2.95cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、赤色小粒、シルト岩粒含む　　色調　淡灰橙色　　焼成　良好 備考　板状圧痕ああり
4	かわらけ	法量　口径11.4cm 底径6.6cm　器高3.15cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、赤色小粒、シルト岩粒含む　　色調　淡灰褐色　　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
5	瓦質 火鉢	成形　輪積　内面横ナデ　　文様　外面口縁下より沈線･鱗文型押し･沈線･貼り付け型押しの連珠 胎土　淡灰橙色　赤色小粒、小石含む　気孔あり　　色調　暗銀灰色　　焼成　良好
6	瓦質 火鉢	成形　輪積　内底部横ナデ　　文様　外面口縁下に菊花の押印　　胎土　砂粒、白色粒子、赤色小粒含む　気孔あり　　色調　内面灰色　外面淡灰橙色　　焼成　良好
7	鞴　羽口	法量　外径(8.0)cm　厚さ2.0cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形　外面ナデあり 胎土　針状物質、砂粒、赤色小粒含む　気孔あり　　色調　淡橙色　　焼成　良好
8	備前 擂鉢	法量　底径15.0cm　　成形　輪積後ロクロ　条線１束10本 胎土　灰褐色　砂粒、褐色粒子、長石含む　　色調　暗灰褐色　　焼成　良好
9	東播系 捏鉢	成形　輪積後ナデ　口縁端部内外面に強いナデ 胎土　砂粒、白色粒子含む　　色調　暗灰色　　焼成　良好
10	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積後ロクロ　内面指頭痕あり　高台貼り付け　外底部脇ヘラ削り 胎土　小石、長石、石英含む　　色調　灰褐色　　焼成　良好
11	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部ナデ　　胎土　灰黒色　砂粒、小石、石英含む　　色調　褐色 焼成　良好
12	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　口縁部横ナデ　　胎土　灰黒色　砂粒、小石、シルト岩粒、長石、石英含む 色調　茶褐色　　焼成　良好
13	常滑Ⅱ類 捏鉢	法量　口径(31.4)cm　　成形　輪積　口縁部横ナデ 胎土　灰黒色　砂粒、小石、シルト岩粒、石英含む　　色調　茶褐色　　焼成　良好
14	常滑Ⅱ類 捏鉢	成形　輪積　内面下位指頭痕あり　外面下位縦方向へヘラナデ 胎土　暗灰橙色　砂粒、小石、長石、石英含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
15	常滑Ⅱ類 捏鉢	法量　口径(31.4)cm　　成形　輪積　口縁部横ナデ　外面上位から下位へ櫛歯状工具による調整 胎土　灰褐色　砂粒、赤色小粒、小石、石英含む　　色調　外面明褐色　　焼成　良好
16	常滑 甕	成形　輪積　口縁端部横ナデ　内外面指頭痕あり　　胎土　灰色、砂粒、小石、長石、石英含む 色調　明褐色　　焼成　良好　　備考　肩部に少量の降灰
17	転用常滑	法量　長さ6.3cm　幅4.0cm　厚さ1.25cm 胎土　灰黒色　砂粒、石英含む　　色調　明褐色　　焼成　良好　　備考　２面砥面
18	瀬戸 卸皿	成形　ロクロ　　胎土　黄白色　砂粒、石英含む　気孔あり 釉薬　灰緑色　半透明　口縁部付近釉漬け掛け　　焼成　良好
19	瀬戸 卸皿	成形　ロクロ　　胎土　黄白色　砂粒含む　気孔あり 釉薬　淡灰緑色　半透明　　焼成　良好
20	硯	法量　長さ(15.4)㎝　幅(6.5)㎝　厚さ　縁1.5cm　筆置0.9cm　陸1.15cm　　成形　筆置付き 文様　筆置部分に情景文様　　石材　黒色粘板岩　　色調　黒色
21	骨製品 笄	法量　長さ(4.5)cm　幅1.1cm　厚さ0.3cm　　成形　磨き仕上げ後に再加工か？ 種目　鹿　　部位　不明　　色調　褐色
22	漆器 椀	法量　底径6.6cm　　成形　内外面黒漆塗り

出土遺物観察表10　３面上

他遺構外等出土遺物

図20には３面終了後に、下層の堆積土層の確認と資料採集の為に実施したトレンチ位置と、主な出土遺物を図示した。古代の遺物を２点図示したが、中世遺物が同層位から出土している。この２点を含め

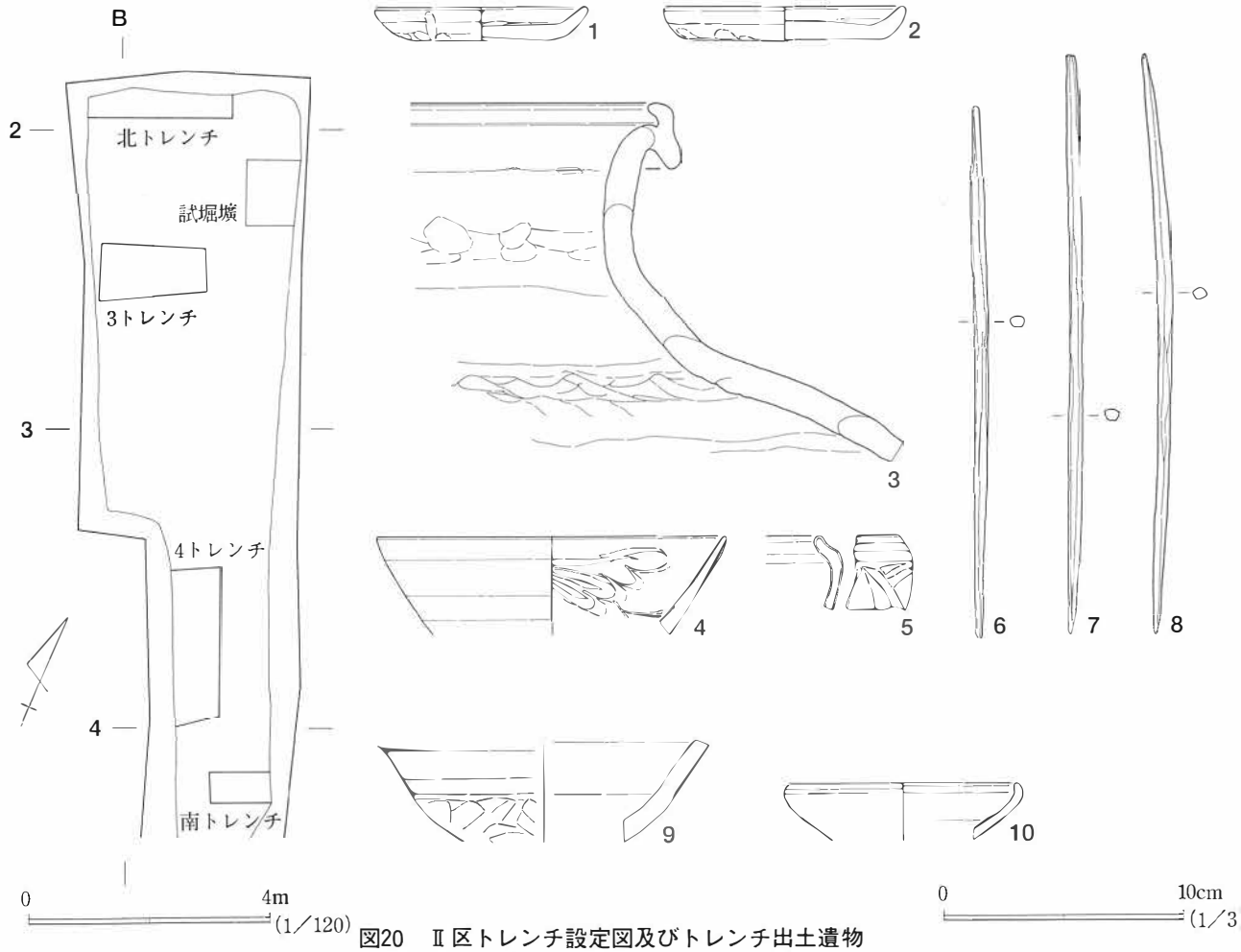


図20　Ⅱ区トレンチ設定図及びトレンチ出土遺物

1	かわらけ	法量　口径9.0cm　底径5.6cm　器高1.9cm　成形　手捏ね　内底部ナデ後口縁部ナデ 胎土　針状物質、砂粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好
2	かわらけ	法量　口径10.2cm　底径8.5cm　器高1.91cm　成形　手捏ね　内底部ナデ後口縁部ナデ 胎土　針状物質、砂粒、シルト岩粒含む　色調　灰橙色　焼成　普通
3	常滑 甕	成形　輪積　内外面指頭痕あり　胎土　砂粒、白色粒子、シルト岩粒、石英含む 色調　褐色　焼成　良好　備考　外面肩部にスタンプ文あり
4	竜泉窯 青磁　碗	法量　口径14.6cm　成形　ロクロ　文様　体部内面に画花文 素地　灰色　白色粒子少量含む　微気孔あり　釉薬　暗灰緑色　半透明　焼成　良好
5	竜泉窯 青磁広口壷	成形　ロクロ　文様　体部外面に鎬蓮弁　素地　灰白色　砂粒含む 釉薬　灰緑色　不透明　焼成　良好
6	箸	法量　長さ22.2cm　幅0.6cm　厚さ0.45cm　両口
7	箸	法量　長さ24.2cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
8	箸	法量　長さ24.3cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
9	土師器 坏	成形　手捏ね　内面ナデ　外面下位ヘラ削り　胎土　針状物質、砂粒、白色粒子含む 色調　橙色　焼成　良好　備考　内外面赤彩
10	土師器 坏	法量　口径10.0cm　成形　手捏ね　内外面横ナデ　胎土　砂粒、白色粒子少量含む 色調　淡褐色　焼成　良好

出土遺物観察表11　各トレンチ内

てもⅠ区・Ⅱ区を通して中世以前の出土遺物は10点に満たない。各出土地点は、1・2・9が3トレンチ（層位不明）、3が北トレンチの上層、4・6～8・10が北トレンチの下層、5が南トレンチ（層位不明）であり、何れの層位も層序・レベル共に3面よりは下で図4Ⅴ層よりは上である。

図21は、Ⅱ区の調査の際に帰属する遺構・層位が分らなくなってしまった遺物と、本調査に先立ってⅡ区内で実施された方の試掘壙内の出土遺物を図示した。整理の際には試掘壙内の出土遺物も調査時出土遺物との接合を試み、接合したものは基本的には該当遺構・層位に帰属させた。16は試掘壙壁面採集で、層位的には図13断面図A15層に相当する。

図22には、今回の報告該当範囲ではないがⅠ区の出土遺物の内、舶載品と木製品を資料の紹介と提示をかねて図示した。各出土層位・遺構は、4が2面上相当、1・5が2面遺構内、2・3・6・8が3面遺構内。7・9・10がⅠ区で4面として扱った遺構面上相当で、これは3面の古い時期の可能性がある。9・10は造り・刻印ともに同様だが、調査区内では離れた箇所からの出土である。

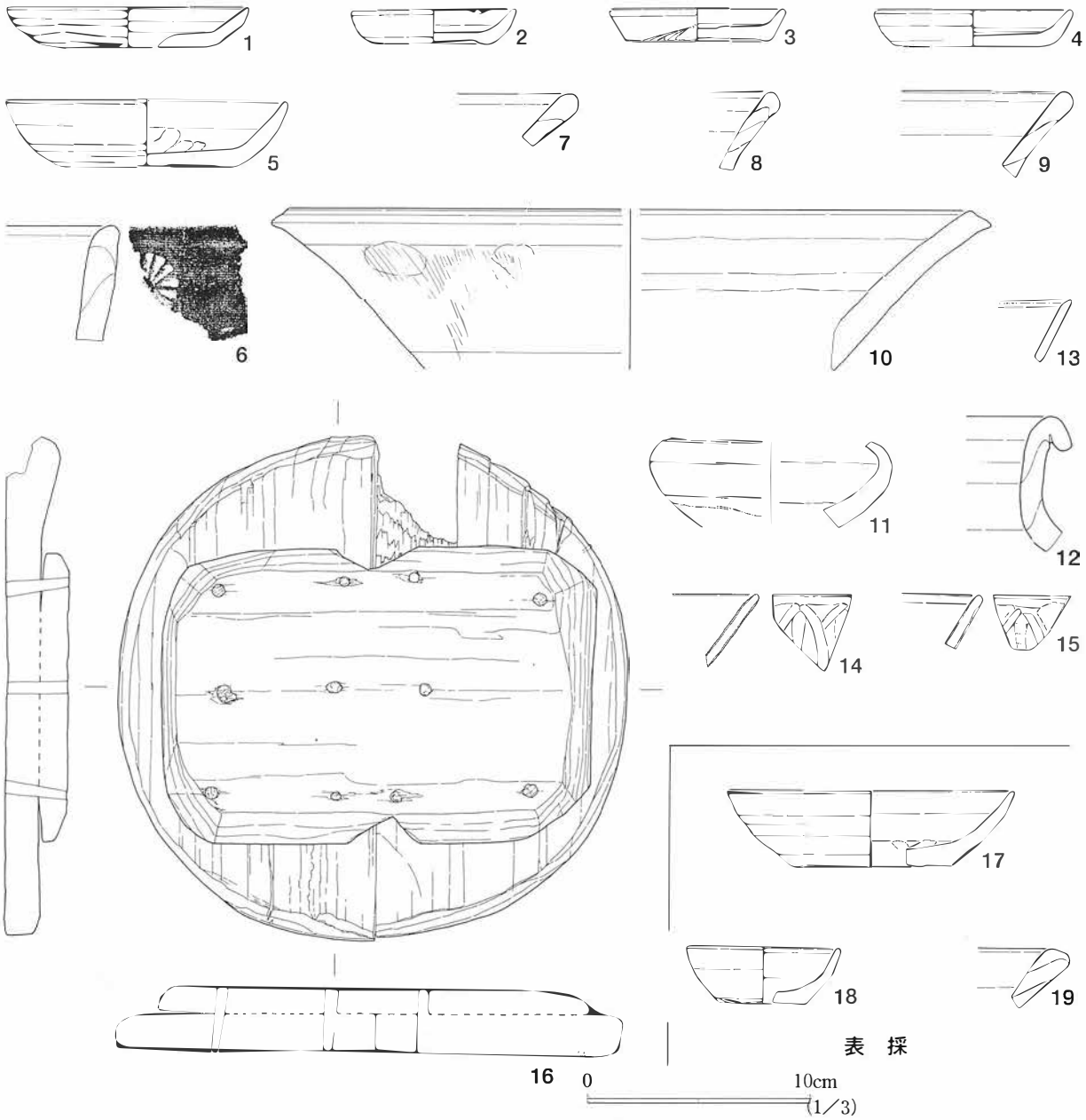


図21　採集及び試掘壙出土遺物

1	かわらけ	法量　口径12.0cm　底径7.0cm　器高1.8cm　成形　手捏ね　内底部ナデ後口縁部ナデ 胎土　針状物質、砂粒、白色粒子含む　色調　橙色　焼成　普通
2	かわらけ	法量　口径7.5cm 底径5.4cm　器高1.5cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、小石、白色粒子、シルト岩粒含む　色調　淡橙色　焼成　良好 備考　灯明皿として使用　油煤付着　板状圧痕あり
3	かわらけ	法量　口径8.0cm 底径6.6cm　器高1.5cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、白色粒子、雲母、シルト岩粒含む　色調　橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
4	かわらけ	法量　口径9.0cm 底径7.2cm　器高1.65cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、白色粒子、シルト岩粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
5	かわらけ	法量　口径12.8cm 底径8.4cm　器高3.0cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、白色粒子、シルト岩粒、貝粒子含む　色調　淡橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
6	瓦質 火鉢	成形　輪積　内外面ヘラ磨き　文様　外面上位に菊花文押印　胎土　灰色　針状物質、砂粒、小石、白色粒子含む　色調　内面赤褐色　外面黒色　焼成　良好
7	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　胎土　針状物質、小石、長石、貝粒子含む　色調　灰色　焼成　良好
8	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　胎土　小石、白色粒子、長石、橙粒子含む　色調　灰色　焼成　良好
9	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　胎土　小石、白色粒子、黒色粒子、長石、貝粒子含む 色調　灰色　焼成　良好
10	常滑Ⅱ類 捏鉢	法量　口径(32.6)cm　成形　輪積　内外面指頭痕　外面縦方向にハケ目 胎土　淡灰色　砂粒、小石、白色粒子、長石、貝粒子含む　色調　褐色　焼成　普通
11	瀬戸 華瓶	成形　ロクロ　胎土　灰白色　砂粒、白色粒子含む　釉薬　淡灰緑色　半透明　漬け掛け 焼成　良好
12	渥美 壷	成形　輪積　胎土　砂粒、白色粒子、黒色粒子、橙粒子、長石、貝粒子含む 釉薬　灰色　ハケ塗り　焼成　良好
13	白磁 口兀	成形ロクロ　素地　淡灰色　釉薬　灰白色　不透明　焼成　良好
14	竜泉窯 青磁　碗	成形　ロクロ　文様　体部外面に鎬蓮弁　素地　灰白色　緻密 釉薬　淡青緑色　透明　焼成　良好
15	竜泉窯 青磁　碗	成形　ロクロ　文様　体部外面に鎬蓮弁　素地　灰白色　釉薬　淡青緑色　透明 焼成　良好
16	木製品 蓋	法量　径22.8cm　厚さ　蓋部分1.9cm　取っ手部分1.1cm　備考（本文参照）
17	かわらけ	法量　口径13.0cm 底径7.2cm　器高3.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、小石、シルト岩粒含む　色調　淡橙色　焼成　良好 備考　板状圧痕あり
18	かわらけ	法量　口径7.0cm 底径3.8cm　器高2.55cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸きり 胎土　針状物質、砂粒、雲母含む　色調　淡橙色　焼成　良好
19	常滑Ⅰ類 捏鉢	成形　輪積　胎土　小石、白色粒子、貝粒子含む　色調　灰色　焼成　良好

出土遺物観察12　採集及び試掘壙内

1	泉州窯 黄釉　洗	法量　口径22.8cm　成形　輪積　胎土　灰黄色　長石含む　気孔あり 釉薬　外面露胎で灰褐色　内面灰黄緑色　化粧掛け後釉を掛ける　焼成　良好
2	緑釉 壷	成形　ロクロ　素地　灰白色　砂粒含む　施文技法　外面を掻き落としたのち黒土を充填、その上に灰釉系の緑釉を掛ける　釉薬　内面緑褐色　焼成　良好
3	泉州窯 黄釉　深鉢	成形　輪積　胎土　淡褐色　小石、赤色小粒含む　釉薬　外面露胎で淡黄褐色　内面灰黄色 化粧掛け後釉を掛ける　焼成　良好
4	竜泉窯 青磁 酒会壷　蓋	法量　鍔径(27.2)cm　下部径(17.6)cm　成形　ロクロ　文様　上部分外面鎬蓮弁 素地　灰白色　砂粒含む　釉薬　灰緑色　不透明　鍔部分の裏面鉄漿塗り　焼成　良好 備考　割れ口に漆付着
5	青白磁 水注　蓋	法量　上部径2.0cm　下部径1.3cm　器高2.1cm　成形　上部分型作り　下部分手捏ね　上下貼り付け　素地　乳白色　砂粒含む　釉薬　淡青色　透明　焼成　良好

出土遺物観察表13　Ⅰ区出土舶載陶磁器

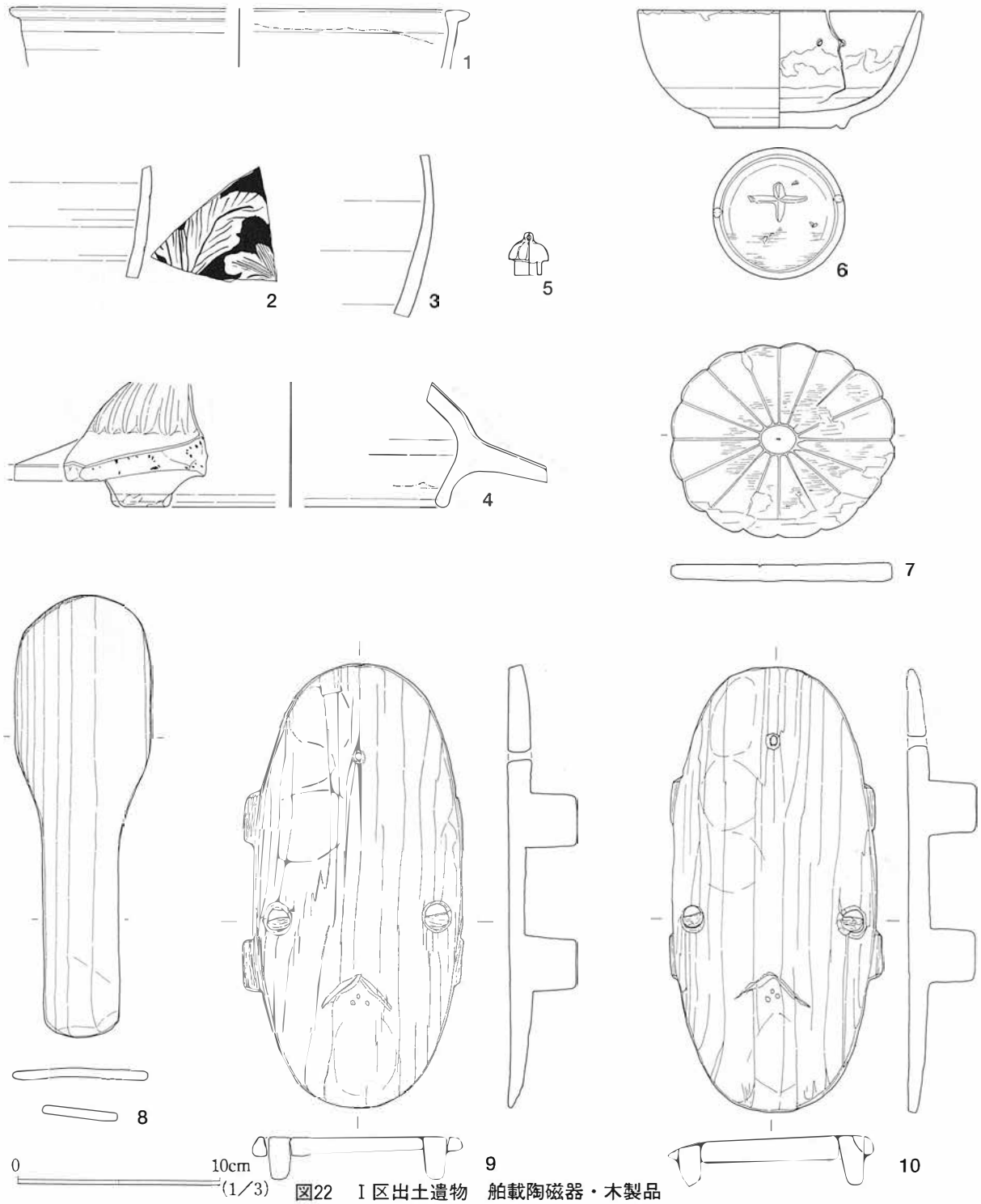


図22　Ⅰ区出土遺物　舶載陶磁器・木製品

6	漆器 椀	法量　口径14.0cm　底径6.4cm　器高5.8cm　　成形　内外面黒漆塗り 備考　体部上方に小孔2ヶ、外底部に目根と十文字の線刻あり
7	木製品 用途不明	法量　長径11.0cm　短径9.5cm　厚さ0.8cm　　柾目取り　　備考　16弁菊花型
8	木製品 杓子	法量　長さ21.8cm　最大幅6.8cm　最小幅3.7cm　　柾目取り　　備考　先端部使用痕か？
9	木製品 下駄	法量　縦21.9cm　横10.3cm　高さ3.4cm　　成形　連歯　板目取り　　備考　かかと部分に焼き刻印あり　屋号か？
10	木製品 下駄	法量　縦21.8cm　横10.2cm　高さ3.4cm　　成形　連歯　板目取り 備考　かかと部分に焼き刻印あり　屋号か？

出土遺物観察表14　Ⅰ区出土木製品

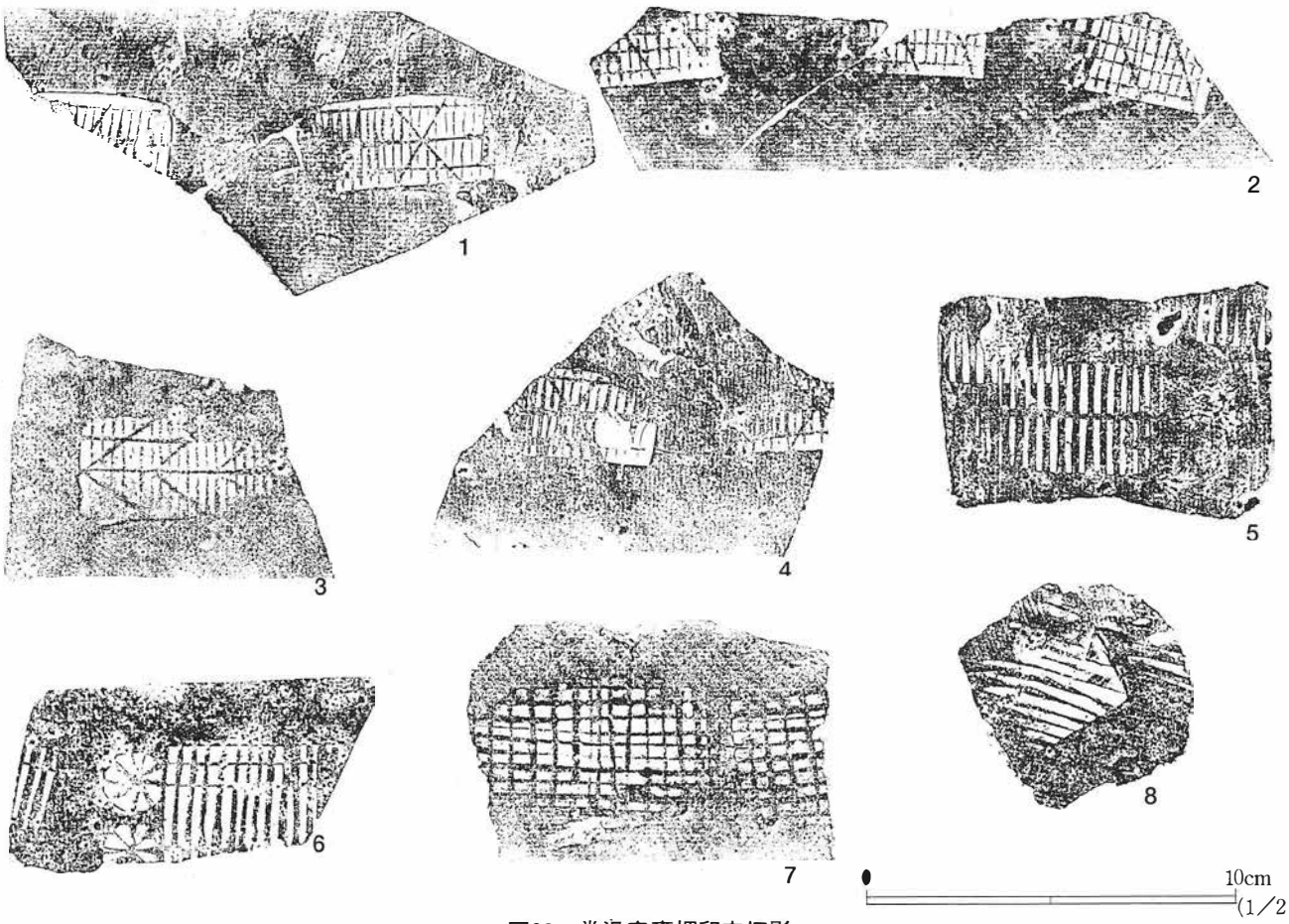


図23　常滑窯甕押印文拓影

1	常滑甕	出土層位　3面上	部位　肩部上	格子文・対角線状斜線文 組合わせ	
2	常滑甕	出土層位　3面上	部位　肩部上	格子文・斜線文 組合わせ	
3	常滑甕	出土遺構　3面土壙38	部位　肩部上	格子文・斜線文 組合わせ	
4	常滑甕	出土遺構　3面土壙40	部位　肩部下位	格子文・斜線文 組合わせ	
5	常滑甕	出土遺構　3面土壙38	部位　肩部上	格子文	
6	常滑甕	出土遺構　3面土壙38	部位　肩部上	格子文・花文 組合わせ	
7	常滑甕	出土遺構　（試掘壙）	部位　肩部上	格子文	
8	常滑甕	出土層位　2面上	（部位不明）	連弧文	

出土遺物観察表15　常滑窯甕押印文

出土常滑窯甕片押印文拓影について

図23にはⅡ区より出土した、常滑窯甕に捺された押印文の拓影を示した。8点を図示しているが無論これが全てではなく、文様が良好に残るものを中心に全体の数量的相対比を反映させて提示している。従って、文様が珍しいものでも極小片や文様が分り難いものは割愛した。

全体的には他の文様との組合わせを含めての格子文が圧倒的に多く、格子文の中でも5や7のパターン、斜線の入り方等で細分も可能であろう。組合わせでは6の如く、火鉢のスタンプによく観られる様な菊花もあり、今後更なる集成が必要であろう。

第四章　まとめ

Ⅱ区の調査では近世を含めて３時期に渡る生活面を捉え、各面毎の遺構と遺物について述べてきた。本報は全体の調査区の中では一部であり言及できない部分も多いが、現段階で考え得る事柄を極簡単に述べる。

本地点で検出された遺構は、第一章・第二章で触れた付近の他の調査地点とは、堆積土層を含め全く異なるものであった。或は本地点が後背湿地状の地盤に立地するが為にこの様な違いが、生じるとも言える。本地点で遺構・遺物共に最も充実しているのは３面である。付近の堆積土層の傾斜或は出土遺物の年代観から観て、地点１の中世面と同時期（同時に存在していたかどうかは別として）と考えらよう。地点１の中世面では、付近の調査でも極当り前に検出される方形竪穴建物が検出されている。他方本地点の３面では土壙40とした建物状遺構が検出され、方形竪穴建築址はⅠ区の調査を通じても１軒も検出されていない。単純に湧水等の不安がある地盤の悪さから、わざわざ生活面を整地し掘り窪める必要のない建物を選択した結果が土壙40の様な構造になったとも考えられる。

土壙40は現段階で仮に１軒の建物状遺構としているが、これは構造等が所謂板壁掘立柱建物或は板囲い建物に構造や部材の配置等が似ていることから、建物の可能性を考えているだけで、逆に火処がない、土間状部分がない等の否定的要因も備えている。これまでに呼称されている建物形態に固執するつもりは毛頭ないが、建物名称を呼称した先人達との相互の検討を行わない内にいたずらに名称を増やす必要もないと考える。本報では、建物の可能性のある遺構＝土壙40と言うことでご容赦願いたい。

出土遺物の観察から本地点の性格を考えるに、舶載品・瀬戸窯諸製品が極めて少なく、端材を利用した建物形態から観ても富裕な階層の姿はまず見えて来ない。一方、付近調査地点によっては多量に出土する加工骨・石製品や、道具・工具類も殆ど出土していない。建物形態や、付近の状況を鑑みるにそうした階層が居住していても良さそうなものだが、出土遺物からは言及するには至らない。甚だふざけた様な言い方ではあるが、調査現場を見学に来た方々に申上げた「裕福ではないし、手に職もない。でもなんとなく生活雑器は充実していて、建物を建てる甲斐性はある。」というのが、甚だ我田引水的ではあるが中っているように感じられる。

各遺構面の年代観については、本報で提示した出土遺物は整理期間等の都合に因り、Ⅱ区調査区の全てではなく、又、整理作業が未だ手付かずのⅠ区調査区の問題もあるが、現段階での調査時の印象で述べる。１面は先にも触れたように、検出された遺構と硬化面の間には時期差が感じられる。諸土壙は近世でも新しい時期、硬化面は或は地点１の近世遺構に前後する時期を考えている。２面・３面は本報では提示し得ないⅠ区の出土遺物を併せ観た上で、大まかに２面を14世紀中葉、３面は溝４の時期と土壙40段階を拡く捉え13世紀後半～14世紀中葉と考えている。

尚、報文中でも繰返し断ってはいるが、本報後に発掘調査団から刊行される報告書中では諸見解・年代観等が変更される可能性がある事を改めて文末ながら申し添える次第である。

下馬周辺遺跡の花粉化石

鈴木　茂・藤根　久・古橋美智子（パレオ・ラボ）

鎌倉市小町二丁目に所在する下馬周辺遺跡において行われた発掘調査で、出土遺物などから近世および中世の土層が検出された。また、一部において深掘り調査が行われ、遺構・遺物は出土しなかったが木本質の泥炭層が検出された。本地点付近は弥生時代頃に形成された海岸砂丘（松島　1974）の後背地にあたり、深掘り調査で検出された泥炭層はこの後背湿地期に形成されたものと推測される。こうしたことから、近世および中世の遺跡周辺の古植生を検討するとともに、その基盤となる後背湿地期における湿地の古環境について、植物珪酸体分析・珪藻分析（藤根・古橋担当）を加え検討した。

1．試料

試料は、図1に示した土層断面より、下部については柱状で採取し、実験室内であらためて土相観察を行って後、8点採取し、また、上部においてはスポットで6点採取し、総計14点を試料とした(図2)。以下に試料を採取した各土層について記載を示すが、層位番号は遺跡より頂いた断面図に記されていたものを使用した。

最上位0層は、上部が客土および関東地震の際の焼土・カワラ層、下部が暗灰色の砂質シルトの土壌層で、土丹（泥岩）・他のレキ・炭片が散在している。1層は黄色を帯びた暗灰色のシルト質砂で、小レキが点在しており、近世の耕作土ではないかと考えられている。2層（中世遺物包含層）は暗灰～黒灰色の砂質シルトで、小さな空隙が多く認められ、土丹小片が散在、炭片・貝片が点在している。3層

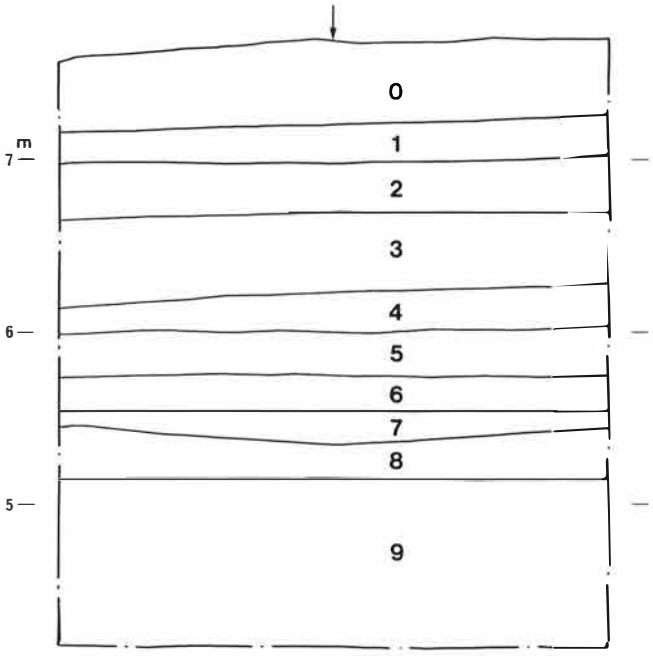


図1　試料採取地点付近の土層断面図

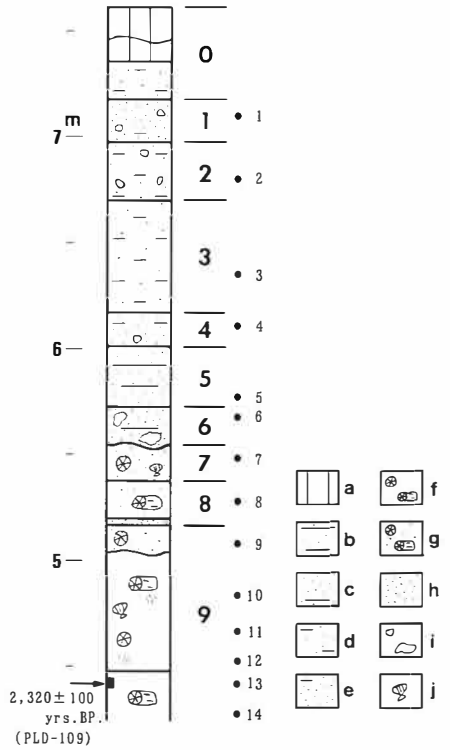


図2　試料採取地点の地質柱状図と試料採取層準

a：客土 b：砂質粘土～粘土質砂 c：粘土質砂 d：砂質シルト e：シルト質砂
f：木本質泥炭 g：砂質木本質泥炭 h：砂 i：レキ・土丹 j：貝

は黄色を帯びた暗灰色の砂質シルトで、やはり小さな空隙が多く認められ、貝片が散在、炭片が点在している。4層も黄色を帯びた暗灰色（3層より暗い）の砂質シルト～シルト質砂で、貝片が多く認められ、土丹が点在している。5層は黒灰～暗灰色の砂質粘土～粘土質砂で、この4，5層は中世木組溝の覆土である。6層は黒～暗灰色の粘土質砂で、大型の土丹が散在しており、微小貝片が多く認められる。7層は褐色の砂質木本質泥炭（分解質）で、微小貝片が多く認められる。また、上部からはハシ様の材片が検出され、最下部からはカワラケ片や貝化石（ダンベイキサゴ）が検出された。8層は黒褐色の砂質木本質泥炭（分解質）で、微小貝片が散在しており、最下部には微小貝片が多量に含まれる灰色細粒砂がレンズ状にみられる。また、試料採取時においてハシ様の材片が検出された。9層は3つに細分され、上部は8層とほぼ同様の層相を示しており、黒褐色の砂質木本質泥炭（分解質）で、微小貝片が散在している。中部は黒褐色で分解質の木本質泥炭となっており、草本質の遺体も多く認められ、径2cm前後の砂塊が点在している。また、下部は弱分解質の褐色～黄褐色木本質泥炭で、上部よりかたくしまっている。

なお、時代については、2層より上位が近世で、3～6層が中世と考えられていたが、上記したように、7層からはハシ？片およびカワラケ片が、8層からもハシ？片が検出されたことから、8層まで中世がさがる可能性もある。9層より下位につては遺物がなく時代について推測することができないことから、9層下部において放射性炭素年代測定を行った。その結果、2,320±100yrs.BP.(PLD－109）と縄文時代晩期終末から弥生時代初め頃の年代が得られ、このことから、9層は縄文時代晩期終末から弥生時代初期～古代から中世初期にかけての頃と推測される。

2．花粉分析

1）分析方法

上記した14試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約2～4ｇ）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、重液分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉45、草本花粉44、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計93である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図3に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し、各々にＰＬＣ．ＳＳ番号を付し、形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、花粉化石の産出傾向から4つの花粉化石群集帯、下位よりⅠ～Ⅳを設定した。

花粉帯Ⅰ（試料14）は草本類のガマ属とカヤツリグサ科の多産で特徴づけられ、サンショウモも他帯

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
樹木															
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	1	-	1	2
モミ属	*Abies*	-	-	-	2	2	1	-	-	4	1	5	8	1	37
ツガ属	*Tsuga*	-	-	-	9	1	8	1	-	17	5	6	8	1	11
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	3	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	5	1	-	10	10	16	1	1	9	2	2	3	-	4
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	2	-	5	-	2	-	-	2	-	1	1	-	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	1	-	-	1	-	5	1	-	2	-	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	1	1	-	14	16	11	4	7	70	104	89	71	104	48
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	-	1	-	1	1	3	1	2	7	27	22	22	67	9
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	3	1	4	2
ノグルミ属	*Platycarya*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	1	-	-	1	-	1	-	-	7	3	-	-	1	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	-	9	3	4	-	2	6	6	5	8	28	15
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	-	-	3	1	-	2	1	1	-	-	3
ハンノキ属	*Alnus*	-	2	-	9	4	2	1	1	4	-	-	1	1	-
ブナ属	*Fagus*	1	1	-	5	3	2	-	-	3	4	-	-	22	4
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	3	-	5	7	2	3	-	16	16	11	15	15	15
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	2	-	5	12	9	14	3	26	50	47	59	8	40
クリ属	*Castanea*	-	-	-	4	-	1	-	-	3	3	1	2	2	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	-	-	-	4	4	3	2	2	5	16	12	8	2	5
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	3	-	3	-	4	-	1	6	4	7	11	10	18
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	2	1	-	4
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
シキミ属	*Illicium*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イスノキ属	*Distylium*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フウ属	*Liquidambar*	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1
シラキ属	*Sapium*	-	-	-	-	-	-	1	15	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	1	-	1	3	1	1	1	1	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	1	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	-	-	-	9	14	-	1	-	2	-	-
シナノキ属	*Tilia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
サカキ属－ヒサカキ属近似種	cf. *Cleyera-Eurya*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ムラサキシキブ属	*Callicarpa*	-	-	-	-	-	2	1	4	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
草本															
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	-	-	-	1	5	4	22	16	4	154
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2
サジオモダカ属	*Alisma*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	1	-	-	-	1	34	54	6	2	1	-
イネ科	Gramineae	5	9	-	184	513	752	633	520	893	444	242	168	261	103
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	-	16	15	13	39	9	148	146	98	61	24	157
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	-	1	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	2	3	15	1	2	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	4	11	15	3	11	30	9	5	4	27	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	-	-	-	-	5	1	4	1	-	-	-	-
イブキトラノオ節	*Polygonum* sect. Bistorta	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	1	-	3	2	-	3	2	1	2	3	9
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-	-	83	36	56	22	10	69	15	10	-	18	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	2	1	2	3	3	-	-	2	-	4	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	1	-	2	4	12	-	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	1	-	1	3	-	38	13	18	5	148	1
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	1	-	-	68	21	27	1	3	17	19	13	5	23	-
ユキノシタ科	Saxifragaceae	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	-	1	35	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	2	4	-	3	1	-	1	-	-	-
ノアズキ属	*Dunbaria*	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
他のマメ科	other Leguminosae	-	-	-	2	2	2	16	9	3	-	6	2	1	2
フウロソウ属	*Geranium*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アマ属	*Linum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ミソハギ属	*Lythrum*	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	28
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	3	4	2	10	14	5	3	5	3	2	6
リンドウ属	*Gentiana*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	1	11	-	-	-	-	-	-	2
ナス属近似種	cf. *Solanum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	1	2	2	5	3	1	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	1	-	-	33	120	139	1122	141	82	22	19	15	30	11
ベニバナ属近似種	cf. *Carthamus*	-	-	-	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	4	8	9	69	6	19	4	4	4	1	5
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	2	-	69	12	10	6	1	4	1	2	-	-	-
シダ植物															
サンショウモ	*Salvinia natans*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	22
アカウキクサ属	*Azolla*	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	2	-	-
単条型胞子	Monolete spore	-	2	-	22	7	3	2	13	14	2	12	5	8	6
三条型胞子	Trilete spore	-	1	-	4	4	6	3	4	5	-	1	-	-	2
樹木花粉	Arboreal pollen	10	19	0	94	67	78	47	54	200	255	224	227	270	220
草本花粉	Nonarboreal pollen	11	11	0	475	752	1048	2018	752	1366	741	456	291	548	480
シダ植物胞子	Spores	0	3	0	26	11	9	5	17	23	3	13	7	8	30
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	21	33	0	595	830	1135	2070	823	1589	999	693	525	826	730
不明花粉	Unknown pollen	5	5	0	23	17	12	16	11	19	12	25	24	13	5

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

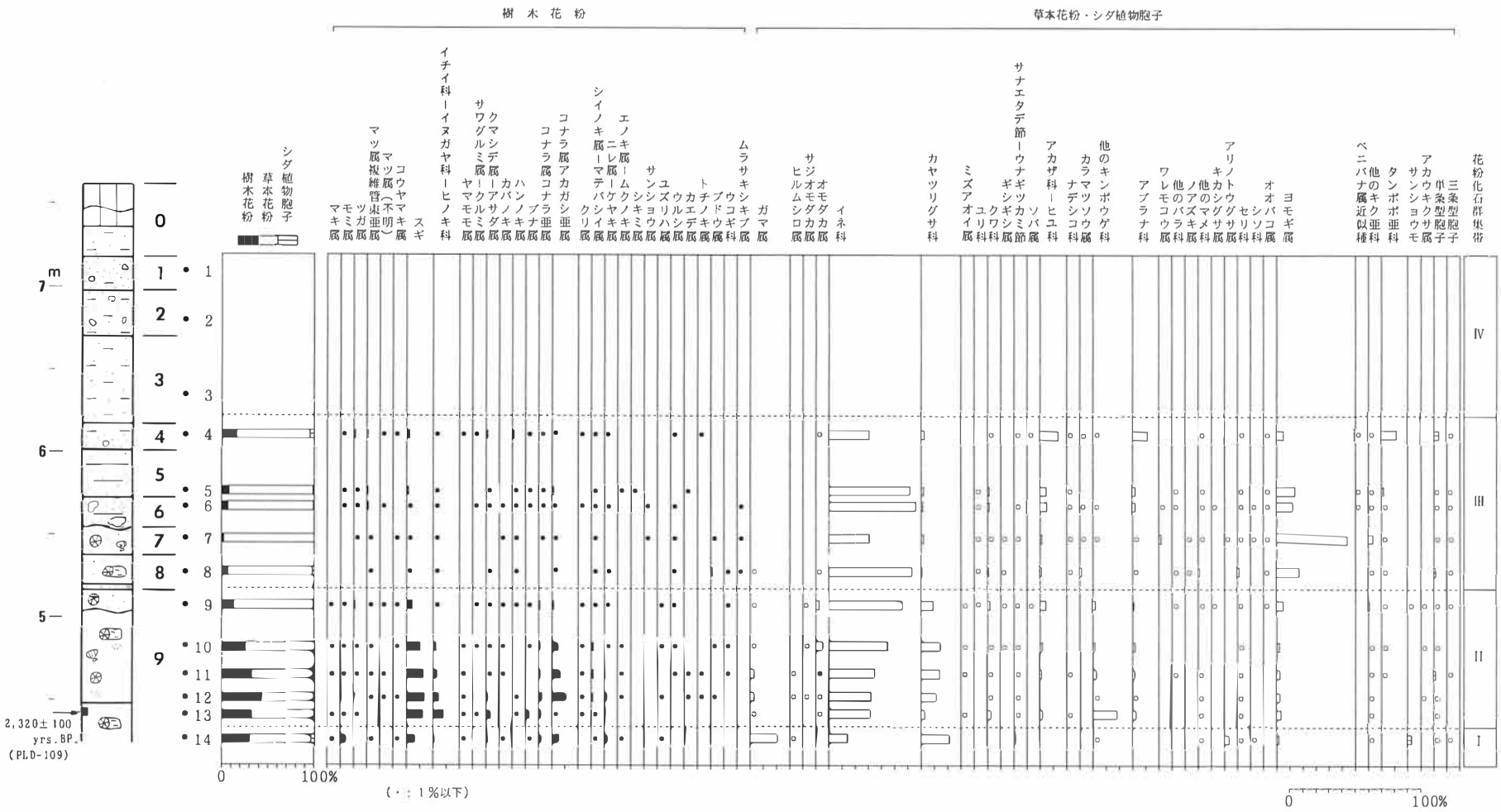


図 3　下馬周辺遺跡の主要花粉化石分布図

（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

に比べ多く検出されている。樹本花粉ではスギとコナラ属アカガシ亜属が20%前後の出現率示し、樹木類では最も多く検出されている。また、モミ属が他帯に比べ特徴的に多く得られている。

花粉帯Ⅱ（試料９～13）は樹本花粉のスギやアカガシ亜属の比較的高い出現で特徴づけられる。草本類ではイネ科が上部に向かい急増しており、最上部の試料９では60%近くに達するなど、最も多く得られている。次いで、カヤツリグサ科が10～20%検出されており、キンポウゲ科が試料13において突出した出現を示している。

花粉帯Ⅲ（試料４～８）はイネ科の優占で特徴づけられる。次いでヨモギ属が多く、試料７では50%を越え、イネ科より高い出現率を示している。その他、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科などが上部試料において出現率をやや高めている。樹木類ではⅡ帯で比較的多くみられたスギやアカガシ亜属は減少している。マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのニヨウマツ類）は上部において連続して１%を越えて得られており、シラキ属は試料14において、また、ブドウ属は試料13，14において他層準試料に比べ特徴的に多く得られている。

花粉帯Ⅳ（試料１～３）は得られた花粉化石数が少なく、分布図として示すことはできなかった。検出された花粉化石は、樹木類のニヨウマツ類、コナラ属の両亜属、ニレ属－ケヤキ属などと、草本類のイネ科やタンポポ亜科などである。

３）下馬周辺遺跡周辺の植生変遷

上記した花粉帯を基に遺跡周辺の古植生について示す。

ａ）Ⅰ帯

年代測定結果から、縄文時代終末から弥生時代初期の頃と推測されるが、この頃の下馬周辺遺跡周辺は縄文海進後の海退と砂丘形成にともない後背湿地化したとみられ、この湿地にはガマ属やイネ科、カヤツリグサ科、アリノトウグサ属が多くみられた。また、この頃の遺跡周辺丘陵部ではモミ属を交えたスギ林が優勢で、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林も成立していた。さらに、クマシデ属－アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹類も多く生育していたものとみられる。

ｂ）Ⅱ帯

時代は出土遺物などから、縄文時代終末から弥生時代初期～中世初期の頃と推測される。ガマ属やアリノトウグサ属は減少し、後背湿地にはイネ科、カヤツリグサ科、キンポウゲ科が多くみられたと推測される。また、後述する植物珪酸体分析より湿地の一部は切り開かれ水田化されたと推測され、水田雑草として普通にみられるオモダカやコナギなどを含む分類群（オモダカ属、ミズアオイ属）が生育地を広げたようである。なお、この水田稲作の開始時期についても後述するが、さらに検討が必要と考える。一方、この頃の遺跡周辺丘陵部では依然としてスギ林が優勢であったが、モミ属は減少し、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が代わって目立つ存在となった。また、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林も成立しており、これらに交じってクマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹類も生育していた。

c）Ⅲ帯

時期としては中世と考えられるが、詳しい時代については不明である。河野（1989）によれば、鎌倉末期の遺跡周辺は町屋地域となっていたと予想されており、花粉分析結果においても水田雑草を含む分類群がほとんどみられなくなるなど、試料採取地点は水田域から町屋へと変貌したとみられる。この頃の遺跡周辺はイネ科やヨモギ属を主体に、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、オオバコ属、タンポポ亜科などの雑草類が生育していた。また、遺跡周辺の丘陵部はそれまで優勢であったスギ林や照葉樹林は減少し、代わってニヨウマツ類が増えはじめたと推測される。しかしながら、ニヨウマツ類の出現率はそれほど高くならないことから、丘陵部を覆いつくすようなことにはならなかったと推測され、目立って優占するような森林はみられなくなったと思われる。

なお、試料７、８においては菌類胞子が非常に多く観察され、ヨモギ属が突出的に多く得られ、シラキ属やブドウ属が他の試料に比べ特徴的に多く検出されている。また、後述するが、イネやネザサ節型の機動細胞珪酸体も突出した産状を示している。こうしたことは、刈り取られたイネ科（イネ、ササ類など）やヨモギ属などの雑草類が試料採取地点にすてられ、それとともにシラキ属やブドウ属が混じって混入したものと思われる。

d）Ⅳ帯

時期としては近世と考えられているが、花粉化石がほとんど得られず植生については考察することはできないが、後述する植物珪酸体分析から稲作地であった可能性が考えられる。なお、花粉化石については、堆積物には小さな空隙が多く観察されることから、かなり土壌化をうけていたとみられ、それにより多くの花粉は分解・消失してしまったと思われる。

３．植物珪酸体分析

ここでは、試料１層準における耕作、および下位層の後背湿地期におけるヨシ原が予想され、これらを検証する目的で植物珪酸体分析を試みた。以下に示す植物珪酸体は、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもので、イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より珪酸を多量に吸収することが知られている。また、この植物珪酸体分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で盛んに行われている。

分析方法は、試料１、４、６～14の11点について、試料約１ｇに約0.02ｇのガラスビーズ加え、過酸化水素水にて脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを浸液としたプレパラートを適宜作

表２　試料１ｇ当りの機動細胞珪酸体個数

試料番号	イネ（個／g）	ネザサ節型（個／g）	クマザサ属型（個／g）	他のタケ亜科（個／g）	サヤヌカグサ属（個／g）	ヨシ属（個／g）	シバ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	ジュズダマ属（個／g）	不明（個／g）
1	20,300	64,900	13,600	3,900	0	1,000	0	1,000	41,600	0	28,100
4	33,000	53,700	14,700	2,400	0	0	1,200	7,300	19,500	0	17,100
6	22,800	77,100	8,800	3,800	0	2,500	0	5,100	17,700	0	29,100
7	72,500	96,700	1,300	1,300	1300	0	0	2,700	21,500	0	30,900
8	16,400	857,300	4,100	2,100	0	4,100	2,100	4,100	76,100	0	53,500
9	19,400	51,600	6,500	8,100	0	9,700	1,600	1,600	19,400	1600	29,000
１０	26,500	46,900	4,100	0	0	20,400	0	10,200	57,100	2000	36,700
１１	33,800	36,400	0	10,400	0	33,800	2,600	2,600	57,100	2600	36,400
１２	14,300	34,400	2,900	2,900	0	63,100	5,700	5,700	37,300	2900	48,700
１３	22,900	63,100	5,700	2,900	2900	60,200	0	5,700	71,700	0	60,200
１４	0	18,100	9,100	0	0	3,000	0	0	0	0	9,100

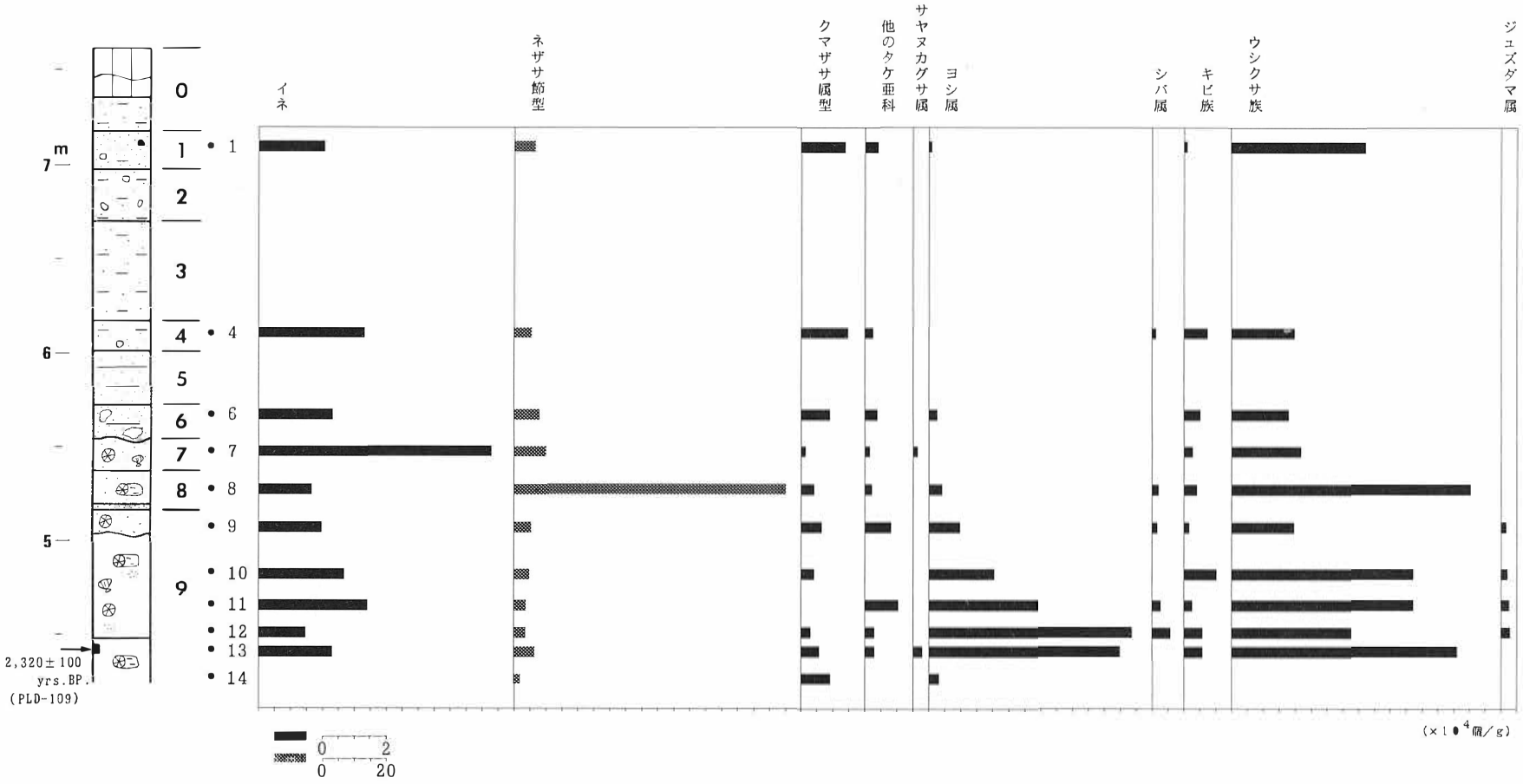


図4　下馬周辺遺跡の植物珪酸体分布図

成し、検鏡した。

検鏡は機動細胞に由来する植物珪酸体（機動細胞珪酸体）について行い、その結果、最下部の試料14を除く他の10試料よりイネの機動細胞珪酸体が10,000個以上と多く検出され、試料７では70,000個を越えている（表２、図４）。イネ以外では、ネザサ節型が全試料10,000個以上と、最も多く検出されており、試料８では約860，000個と非常に多く得られている。また、ヨシ属は下部の試料12、13で約60,000個と多く、上位に向かい急減するものの、試料９でも約10，000個とヨシ属としては多く得られている。

ここで検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネの機動細胞珪酸体が試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状 態や遺構の状況をふまえて判断されている。下馬周辺遺跡では、上記の5,000個をはるかに越える個数が下位試料より得られており、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。花粉分析結果をみると、イネの機動細胞珪酸体が検出し始める試料13よりイネ科花粉が多産し始め、水田雑草とみられる分類群（オモダカ属・ミズアオイ属など）も産出し始めていることから、花粉分析からも稲作の可能性が考えられる。時代としては、試料13層準において行われた放射性炭素年代測定結果、2,320±100yrs.BP.(PLD.109）からすると、縄文時代晩期終末から弥生時代初期の頃と推測される。関東地方における水田址の最も古い検出例は弥生時代後期初頭（群馬県高崎市の並榎北遺跡）で、また、籾痕と思われる小孔が付いた弥生時代前期の土器が群馬県子持村の押手遺跡から出土している（小島　1991)。その他、千葉県富津市の常代遺跡においては弥生時代中期の土層からイネの外穎が多数検出されている（百原　1996)。こうしてみると、今回の分析結果から推測される稲作の開始時期についてはかなり古く興味深いが、時期については別地点による年代測定や植物珪酸体分析などの事例を増やすことが必要であり、それによって鎌倉における稲作の開始時期について述べることができると考える。さらに、遺物など、考古方面からの時代の検証が望まれ、水田遺構の検出も望まれる。下馬周辺遺跡近辺における今後の発掘調査にはこういった観点からの調査も行われることを期待したい。

その他、遺跡周辺ではこの水田稲作地とともに、ヨシ属（ヨシ、ツルヨシなど）やサヤヌカグサ属（サヤヌカグサ、アシカキなど)、ジュズダマ属などが生育する湿地も一部に広がっていたであろう。また、これらの植物は水田脇の水路などにも多くみられたと予想される。

その後、試料４、６の中世においてもイネの機動細胞珪酸体が多く検出されているが、この頃の遺跡周辺は町屋地域へと次第に変貌していく時期と考えられ、稲作地は縮小していったとみられる。こうしたことから、このイネの機動細胞珪酸体は屋根葺材や燃料材としての稲わらの利用や、土地改変の際における混入といった要因により多く検出されたのではないかと思われる。

近世試料１においてもイネの機動細胞珪酸体が多く検出されており、検出個数だけをみれば稲作が行われていた可能性が考えられる。しかしながら、上記のようなことも考えられ、遺構の検出など、多方面からの検証が望まれる。

４．珪藻化石

珪藻は、10～500μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられている。また、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群も設定されている(小杉　1988、安藤　1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川

や沼地あるいは池などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給される環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種(陸生珪藻)も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、過去の堆積物中の珪藻化石の解析から、堆積物の堆積環境について知ることが可能である。

ここでは、下馬周辺遺跡の堆積物下位層を対象として、珪藻化石群集の解析を行い、これら堆積物の堆積環境とその変遷について検討した。

1）試料と処理方法

試料は、遺跡層位の7層～9層の8試料である。これの試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作製した。

(1)試料から湿重約1ｇ程度を取り出し、計量した後ビーカーに移し、蒸留水を加えた後懸濁液を回収する。放置後上澄み液を除去し、30%過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。(2)反応終了後水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す（7回程度)。(3)ビーカーに残った残渣は、遠心管に細粒分のみ回収する。(4)マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し乾燥さる。乾燥後は、マウントメディア（封入剤）で封入しプレパラートを作成する。

作成したプレパラートは光学顕微鏡下600～1000倍で珪藻種を同定・計数した。なお、珪藻化石を十分に多く含む試料は200個以上同定・計数し、少ない試料はプレパラート全面を検鏡した。

2）珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、また、海水種と汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。安藤（1990）が設定した淡水域における指標種群の概要は、以下の通りである。

分類群	種群	7	8	9	10	11	12	13	14
Actinoptychus senarius	?	1	-	-	1	-	-	-	-
Cocconeis scutellum	Cl	-	1	-	1	-	-	-	-
Grammatophora macilenta	B	-	-	-	-	2	-	-	-
Nitzschia cocconeiformis	El	-	-	-	-	1	-	-	-
Thalassiothrix spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	3
Diploneis smithii	El	-	-	-	-	-	3	-	-
Nitzschia littoralis	?	-	-	-	2	-	-	-	-
Achnanthes exigua	W	-	-	4	-	1	4	-	-
A. lanceolata	X	-	-	9	-	1	-	4	-
A. minutissima	W	-	-	-	-	2	3	-	-
A. spp.	?	-	-	1	-	-	1	-	-
Amphora montana	W	-	-	2	-	-	-	-	-
A. ovalis var.libyca	W	-	-	6	22	17	16	83	4
A. spp.	?	-	-	1	-	-	1	1	-
Anomoeoneis sphaerophora	W	-	-	7	6	3	6	-	-
A. vitrea	W	-	-	-	-	1	-	-	-
Bacillaria paradoxa	W	-	-	-	1	-	-	-	-
Caloneis bacillum	W	-	-	1	-	4	1	6	-
C. lauta	W	-	-	-	-	2	1	-	-
C. schroederi	W	-	-	-	-	-	1	-	-
C. silicula	W	-	-	1	6	7	9	4	1
Cocconeis placentula	W	-	-	-	-	-	-	-	4
Cyclotella meneghiniana	L	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymatopleura solea	W	-	-	-	2	-	-	-	-
Cymbella minuta	W	-	-	-	2	-	-	-	1
C. subaequalis	O	-	-	-	-	5	4	-	-
C. tumida	W	-	-	1	-	3	-	-	1
C. turgida	W	-	-	-	-	-	-	-	1
C. spp.	?	-	-	1	2	-	-	-	5
Diploneis finnica	W	-	-	-	-	-	1	-	-
D. ovalis	W	-	-	-	4	8	6	1	-
D. spp.	?	-	-	-	-	-	3	1	-
Epithemia sorex	W	-	-	-	-	-	-	-	9
E. turgida	W	-	-	-	-	-	-	-	94
E. spp.	?	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia formica	W	-	-	-	-	-	-	-	1
E. pectinalis var.undulata	O	-	-	-	-	2	-	-	1
E. praerupta var.bidens	O	-	-	-	-	-	-	-	1
E. spp.	?	-	-	1	1	-	6	-	3
Frustulia vulgaris	W	-	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema acuminatum	O	-	-	-	-	-	-	-	7
G. gracile	O	-	-	-	-	3	1	2	-
G. parvulum	W	-	-	6	1	3	1	3	-
G. truncatum	W	-	-	1	2	9	-	-	1
G. spp.	?	-	-	-	1	4	3	1	4
Gyrosigma spp.	?	-	-	8	2	3	1	-	-
Hantzschia amphioxys	Q	-	-	-	3	3	7	2	-
Melosira ambigua	N	-	-	-	-	-	-	1	-
M. varians	X	-	-	5	11	12	17	12	6
Navicula bacillum	W	-	-	-	1	1	-	-	-
N. confervacea	W	-	-	1	-	-	-	-	-
N. contenta	Q	-	-	1	-	-	-	-	-
N. crucisula	W	-	-	1	-	-	-	-	-
N. cuspidata	W	-	-	2	2	2	-	-	-
N. elginensis	O	-	-	4	-	-	-	1	-
N. pupula	W	-	-	-	-	1	5	1	-
N. radiosa	W	-	-	-	-	-	-	-	10
N. tokyoensis	W	-	-	-	-	-	-	1	-
N. veneta	W	-	-	10	3	1	1	-	-
N. viridula	W	-	-	1	-	1	2	1	2
N. spp.	?	-	-	24	4	3	6	-	-
Neidium iridis	O	-	-	1	3	3	4	1	-
Nitzschia amphibia	W	-	-	10	1	1	-	-	-
N. tryblionella	W	-	-	1	-	-	-	-	-
N. umbonata	W	7	-	16	-	3	-	5	-
N. spp.	?	7	-	37	3	4	7	10	-
Pinnularia acrosphaeria	O	-	-	-	1	-	2	1	-
P. divergens	W	-	-	1	1	2	-	9	-
P. gibba	O	-	-	-	-	3	2	10	-
P. hemiptera	W	-	-	-	2	-	-	-	-
P. interrupta	W	-	-	-	-	1	2	-	-
P. maior	W	-	-	-	2	-	-	-	-
P. microstauron	W	-	-	3	4	12	1	14	-
P. sudetica	W	-	-	-	6	1	1	1	-
P. viridis	O	1	-	-	11	10	13	11	-
P. spp.	?	-	-	10	7	9	7	9	1
Rhopalodia gibba	W	-	-	-	42	10	39	5	12
R. gibberula	W	-	-	-	-	4	-	-	2
R. spp	?	-	-	-	1	-	1	-	-
Stauroneis acuta	W	1	-	14	23	9	3	-	-
S. phoenicenteron	O	-	-	3	14	7	8	2	-
S. spp.	?	-	-	1	4	-	-	-	-
Surirella elegans	W	-	-	-	1	-	-	-	-
S. robusta	W	-	-	-	4	-	-	-	-
S. tenera	W	-	-	3	3	5	2	-	-
S. spp.	?	-	-	1	4	1	1	-	-
Synedra rumpens	W	-	-	-	-	1	-	-	1
S. ulna	W	-	-	1	8	9	7	17	27
S. spp.	?	-	-	-	1	1	2	-	-
Unknown	?	2	-	5	1	4	7	1	3
内湾	(B)	-	-	-	-	2	-	-	-
海水藻場	(Cl)	-	1	-	1	-	-	-	-
海水泥質干潟	(El)	-	-	-	-	1	3	-	-
不定または不明	(?)	1	-	-	3	-	-	-	3
中～下流性河川	(K)	-	-	14	11	13	17	16	6
最下流性河川	(L)	-	-	-	-	1	-	-	-
湖沼沼沢湿地	(N)	-	-	-	-	-	-	1	-
沼沢湿地付着生	(O)	1	-	8	29	33	34	28	9
陸域	(Q)	-	-	1	3	3	7	2	-
広布種	(W)	8	-	93	149	124	113	151	171
不明	(?)	9	-	90	31	29	47	23	16
珪藻殻数		19	1	206	227	206	221	221	205

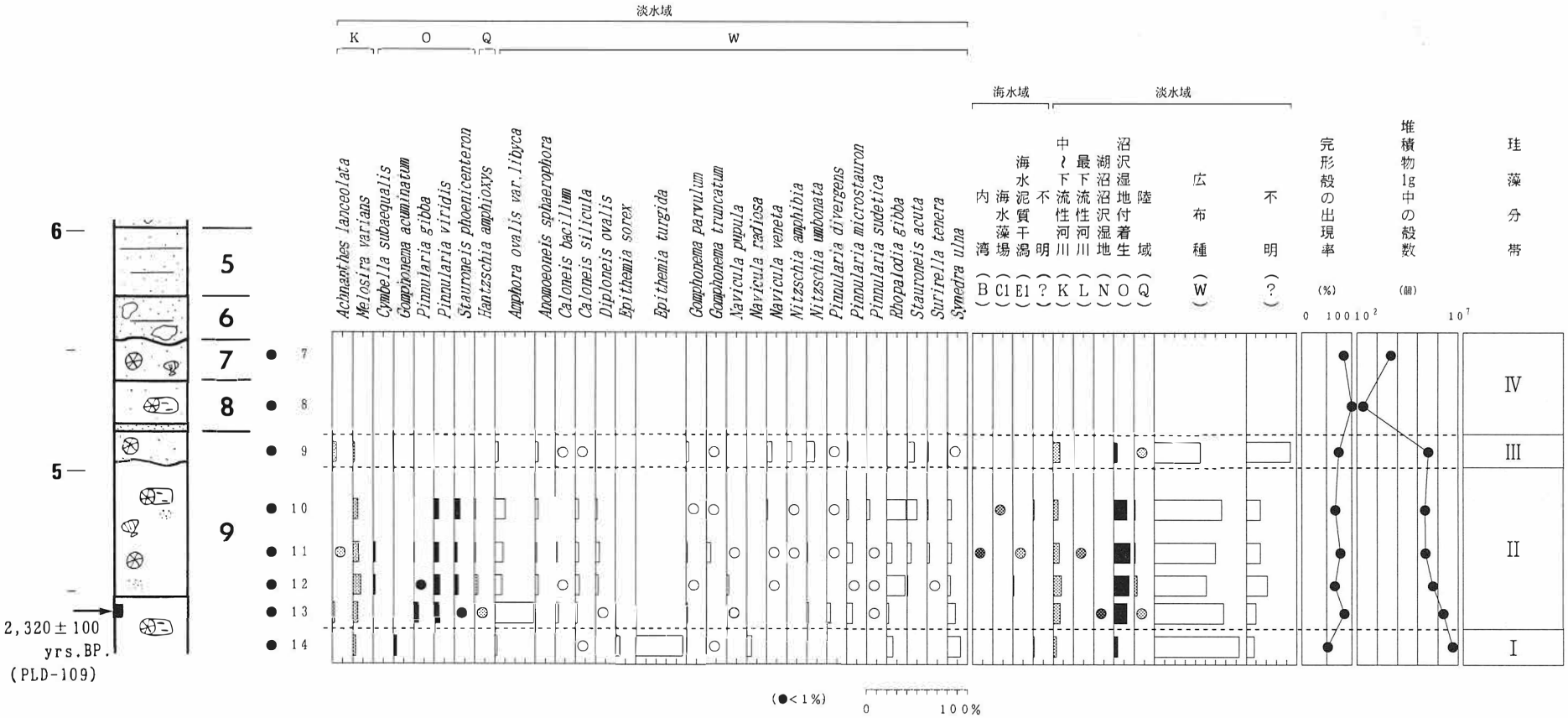


図５　下馬周辺遺跡下位層の珪藻化石分布図（２%以上出現する分類群を表示）

［上流性河川指標種群（J）］：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。

［中～下流性河川指標種群（K）］：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。

［最下流性河川指標種群（L）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。

［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：水深が1 m内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地である。

［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：沼沢ならびに、前述した湿地で付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P）］：ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

3）珪藻化石群集の特徴と堆積環境

8試料から得られた珪藻化石は全体では89分類群で、海～汽水種が7分類群6属6種、淡水種が82分類群25属64種3亜種である。これらの珪藻化石群集から、海～汽水種について3環境指標種群、淡水種について6環境指標種群がそれぞれ設定された（表3）。淡水種の環境指標種群およびその出現傾向から、4珪藻分帯が設定された（図5）。以下では、各地点について、設定された珪藻分帯に基づいて珪藻化石群集の特徴とその堆積環境について述べる。

Ⅰ帯（試料14）

堆積物1 g中の珪藻殻数は、5.34 x 10^6個である。珪藻化石の完形殻の出現率は約52%である。堆積環境を指標する種群としては、中～下流性河川指標種群の *Melosira varians* や沼沢湿地付着生指標種群の *Gomphonema acuminatum* が低率ではあるが出現する。特徴的に出現する珪藻種は、広布種の *Epithemia turgida* が全体の約46%出現する。また、広布種の *Rhopalodia gibba* や *Synedra ulna* も多く出現する。

こうしたことから、沼沢地的環境を伴う流水環境が推定される。

Ⅱ帯（試料10～13）

堆積物1 g中の珪藻殻数は2.34 x 105～1.88 x 106個である。珪藻化石の完形殻の出現率は約66%～85%である。堆積環境を指標する種群としては、沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia virids* あるいは *Stauroneis phoeniceneron* などが比較的多く、中～下流性河川指標種群の *Melosira varians* なども随伴する。

こうしたことから、流水を伴う沼沢地環境が推定される。

Ⅲ帯（試料9）

堆積物1 g中の珪藻殻数は、3.40 x 105個である。珪藻化石の完形殻の出現率は約74%である。中～下流性河川指標種群の *Melosira varians* や沼沢湿地付着生指標種群が見られるものの、腐水環境に特徴的に見られる *Nitzschia umbonata* や *Nitzschia* 属などが非常に多く出現する。

こうしたことから、腐水要素の強い環境が推定される。

Ⅳ帯（試料７、８）

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は、4.80×10^3および2.04×10^2個であり、珪藻化石は非常に少ない。堆積物が砂質であること、珪藻化石がわずかではあるが検出されることから、水成環境である可能性はある。

５．下馬周辺遺跡の古環境変遷

これまで行ってきた花粉・植物珪酸体・珪藻の各分析結果・考察から、下馬周辺遺跡の古環境変遷について以下に示す。

松島（1974）によると、縄文海進最盛期（約６～５千年前）の鎌倉地域は海が侵入しており、その後、約４千５百年前頃より海は退きはじめ、約２千年前には現在より２～３ｍ高い位置か、ほぼ同じ位置にまで後退したと考えられている。放射性炭素年代からこの頃と推測される下馬周辺遺跡周辺では、沼沢地的環境をともなう流水環境、すなわち後背湿地化したと推測された。松島（1974）には、海退とともに由比ヶ浜や材木座海岸近くには海岸砂丘が形成され、砂丘の後背地の下馬四ッ辻付近などには泥炭層も形成されたと記されており、下馬周辺遺跡下位層より検出された泥炭層はこれにあたると思われる。この後背湿地にはガマ属・ヨシ属・カヤツリグサ科・アリノトウグサ属などの湿地生の草本類が生育しており、周辺丘陵部はスギ林が優勢であり、照葉樹林も成立していた。また、ネザサ節型のササ類（ゴキダケ、アズマネザサなど）やウシクサ族（ススキ、チガヤなど）が生育する開けた草地的な環境も一部には広がっていたとみられる。

縄文時代終末から弥生時代初期～古代全般と推測されるが、遺跡周辺の後背湿地にはヨシ属やカヤツリグサ科が生育しており、一部は水田化され、水田雑草類も多くみられるようになった。また、この頃の遺跡周辺丘陵部では依然としてスギ林が優勢であり、照葉樹林も成立しており、ネザサ節型のササ類やウシクサ族が生育する開けた草地的な環境も一部には広がっていたとみられる。なお、先にも記したが、時代については鎌倉における水田稲作の開始時期に係わる問題であり、さらに注意深く検討することが必要であろう。

中世初期と推測される頃の遺跡周辺では、珪藻分析から腐水要素の強い環境が推定されており、中世の溝にみられるようなゴミ捨て場的な様相であったと思われる。その後、珪藻化石がほとんど得られなくなり、遺跡周辺は乾陸化したと推測される。このように、中世の遺跡周辺では水田域からゴミ捨て場的な様相をへて、イネ科やヨモギ属などの雑草類が生育する町屋へと次第に変貌していったとみられる。また、この頃の遺跡周辺丘陵部ではスギ林や照葉樹林が減少し、代わってニヨウマツ類が増えるものの、目立った森林はみられなくなったが、ネザサ節型のササ類やウシクサ族は依然として広く生育していた。

近世になると、植物珪酸体分析から遺跡周辺は稲作地であった可能性が示されているが、花粉化石がほとんど得られていないことから、乾陸化していたとみられ、稲作地とすれば乾いた状 況での稲作とみられる。

６．まとめ

年代測定および出土遺物から縄文時代晩期終末から弥生時代初期～古代全般と推測されるが、遺跡周辺は湿地化し、一部は水田化された。こうした湿地や水田、あるいはそれらの周辺にはヨシ属やジュズ

ダマ属などのイネ科、カヤツリグサ科、キンポウゲ科、アリノトウグサ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが生育していた。また、周辺丘陵部ではスギ林や照葉樹林が優勢であり、ネザサ節型のササ類やウシクサ族も生育していた。

中世の遺跡周辺は次第に町屋地域へと変貌し、イネ科やヨモギ属を主体に、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、オオバコ属、タンポポ亜科などの雑草類が生育していた。また、周辺丘陵部では優勢であったスギ林や照葉樹林は減少し、その後、目立って優占するような森林はみられなくなったが、ネザサ節型のササ類やウシクサ族は依然として多く生育していた。

近世の遺跡周辺は稲作地であった可能性もあるが、今回の分析だけでは可能性にとどめたい。また、植生については花粉化石が得られず不明である。

引用文献

安藤一男（1990） 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42－2，p. 73－88.

藤原宏志（1984） プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル，227，p. 2－7．

河野真知郎（1989） 発掘から試算した人口．よみがえる中世【3】武士の都 鎌倉，平凡社，p. 61－63.

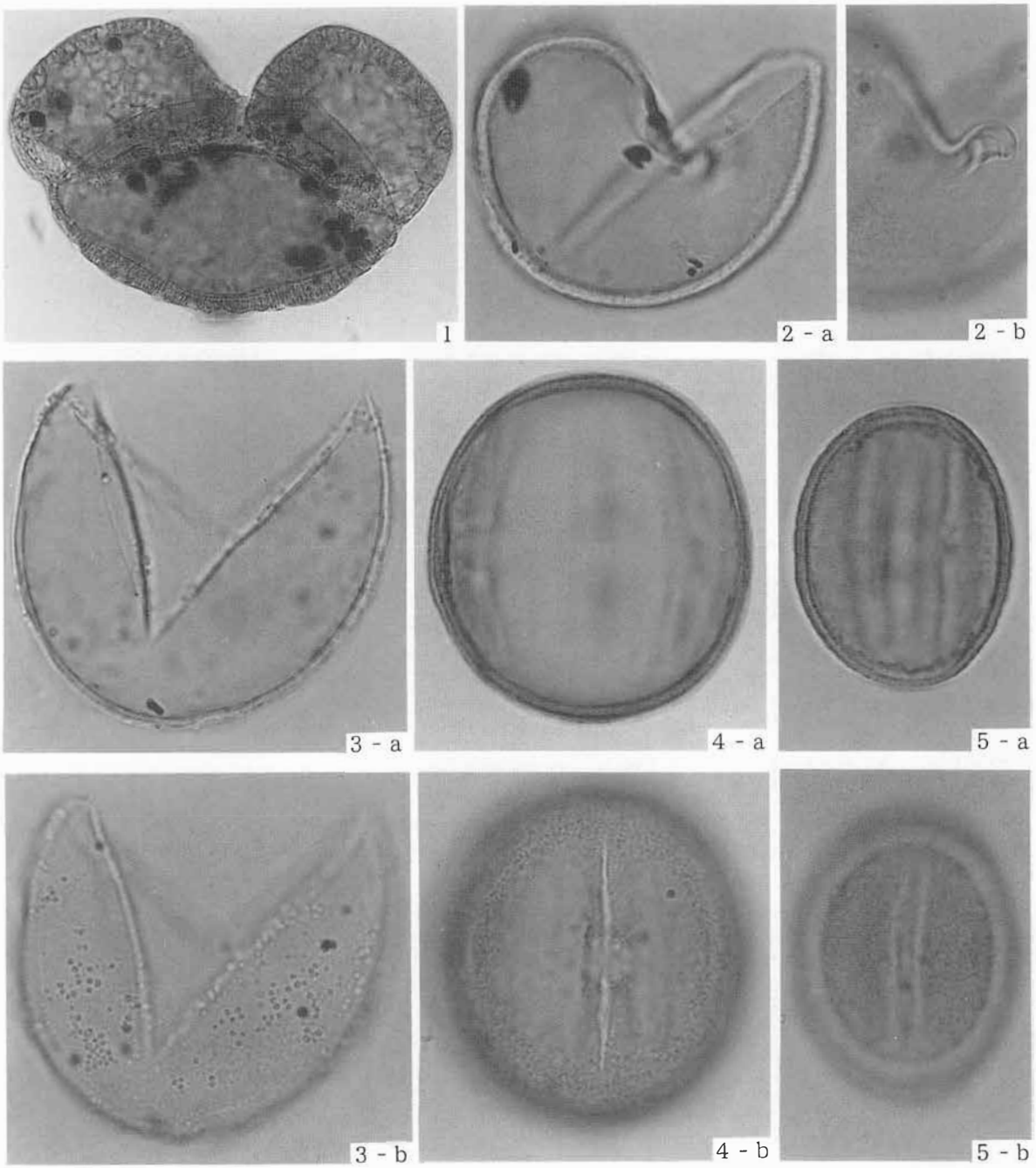
小島敦子（1991） 関東地方における稲作農耕の開始と展開．シンポジウム 日本における稲作農耕の起源と展開，日本考古学協会編，学生社，p. 53－59.

小杉正人（1988） 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1－20.

松島義章（1974） 鎌倉の沖積層．神奈川県立博物館報告 自然科学5，p. 3－20.

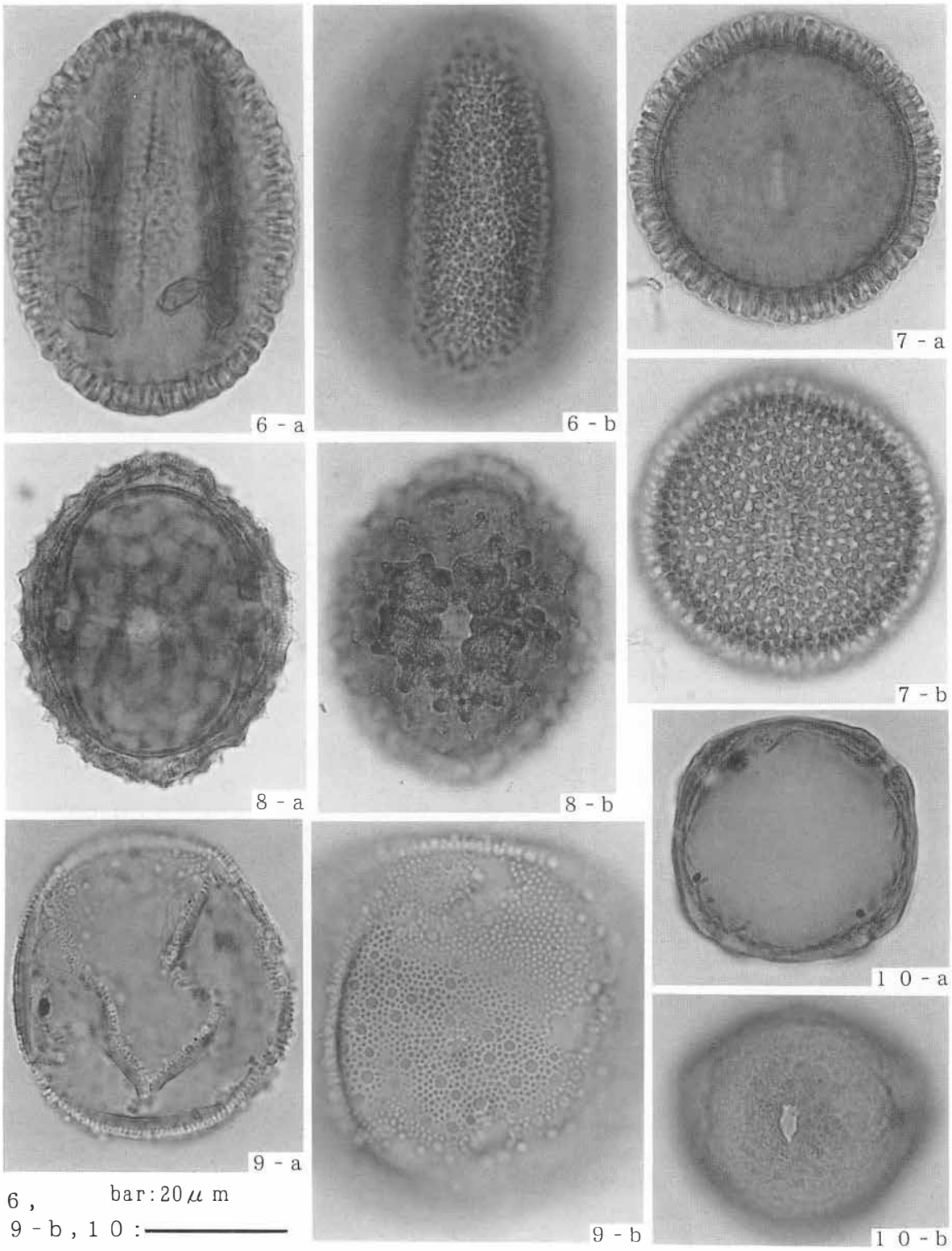
百原 新（1996） 君津市常代遺跡の大型植物化石群．財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第112集－千葉県君津市－常代遺跡群 第3分冊 常代遺跡弥生時代大溝・分析鑑定・考察編，君津市常代土地区画整理組合・財団法人 君津郡市文化財センター，p. 862－873.

図版1



1：50 μm　　2～5：20 μm

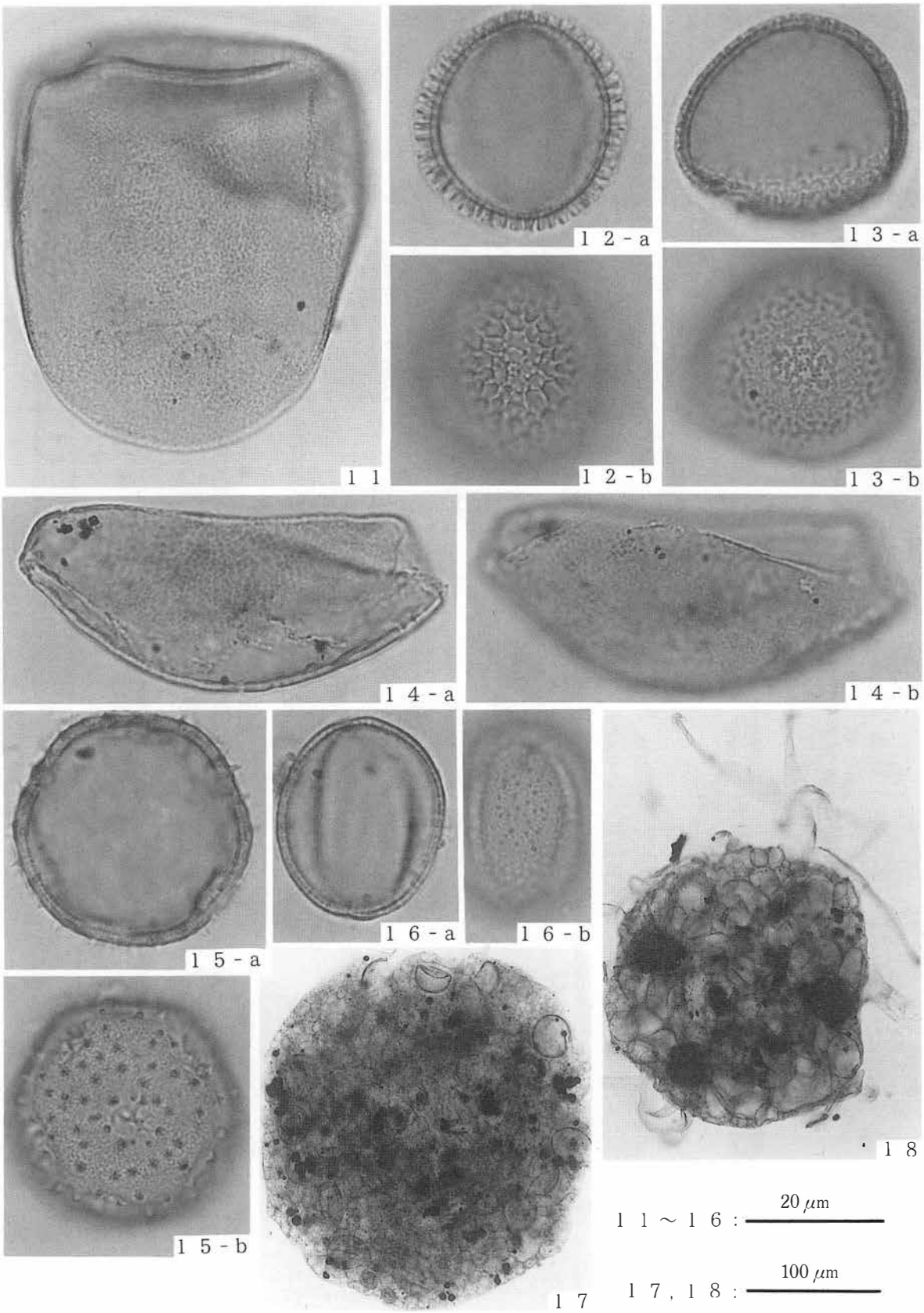
図版1　下馬周辺遺跡の花粉化石
1：モミ属　PLC.SS　1847　試料14
2：スギ属　PLC.SS　1852　試料13
3：イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科　PLC.SS　1853　試料13
4：ブナ属　PLC.SS　1844　試料14
5：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS　1848　試料14



6，　bar:20μm
9-b，10：
7，8，9-a：

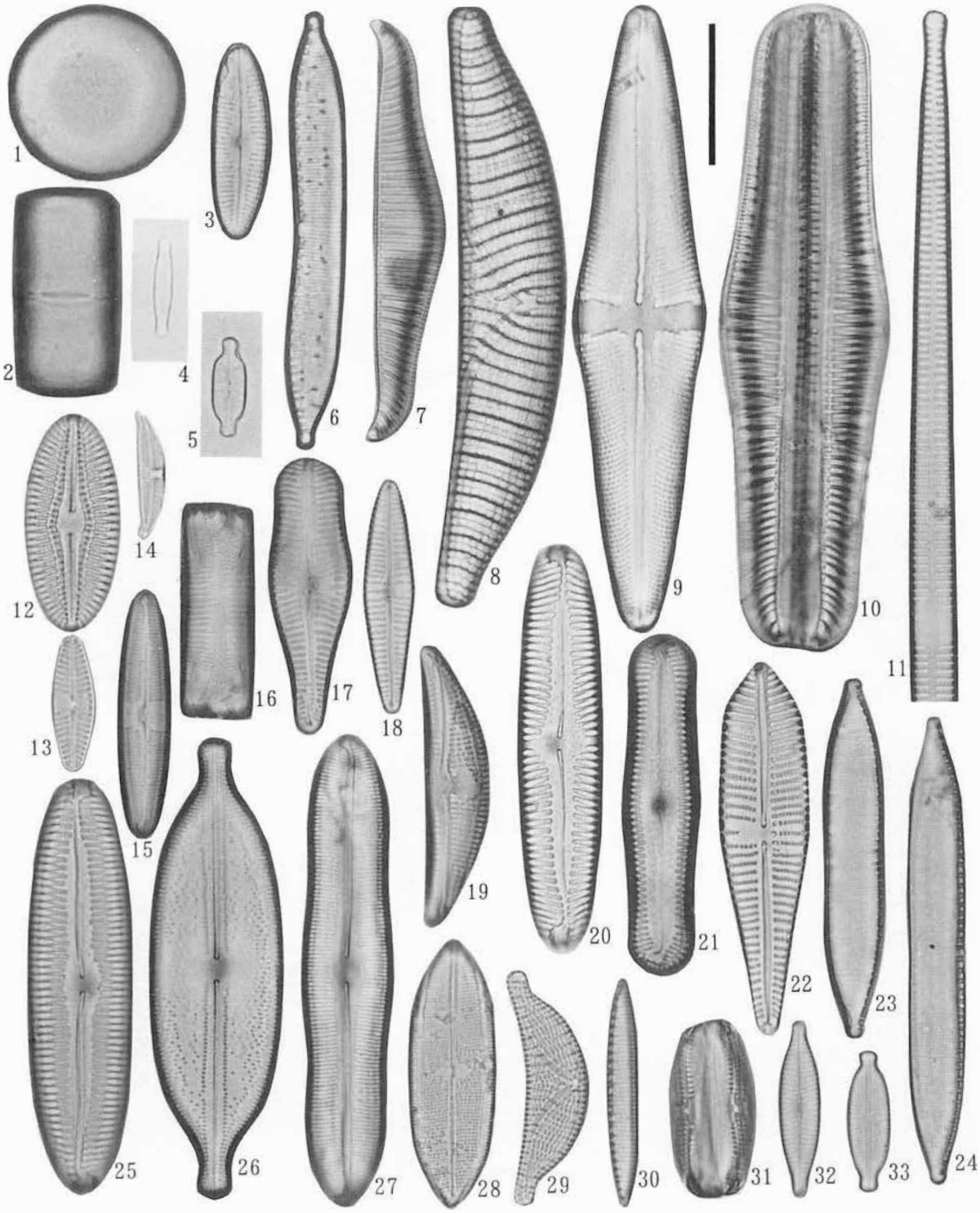
図版2　下馬周辺遺跡の花粉化石
6：ソバ属　PLC.SS　1855　試料9
7：フクロウソウ属　PLC.SS　1861　試料7
8：ベニバナ属近似種　PLC.SS　1862　試料5
9：アマ属　PLC.SS　1835　試料7
10：アリノトウグサ属　PLC.SS　1843　試料14

図版3



図版3　下馬周辺遺跡の花粉化石

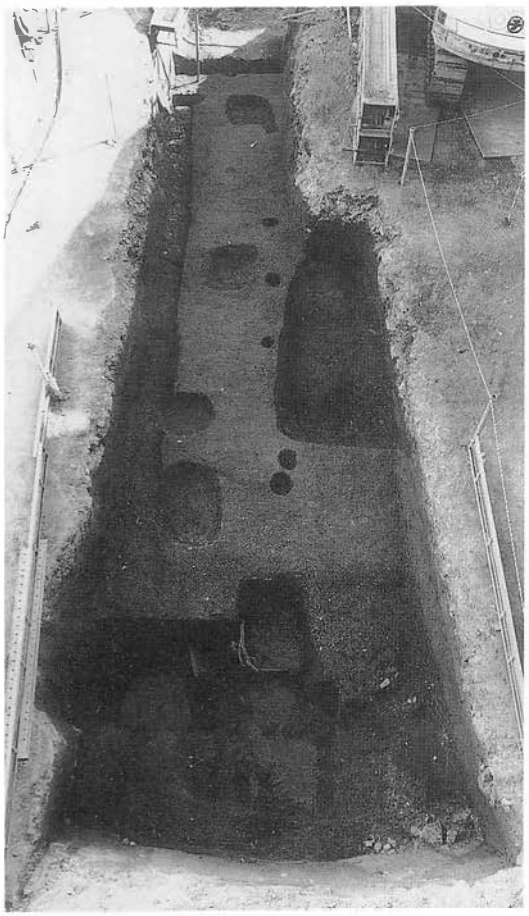
11：カヤツリグサ属　PLC.SS　1849　試料14
12：アブラナ科　PLC.SS　1856　試料13
13：ガマ属　PLC.SS　1846　試料14
14：ミズアオイ属　PLC.SS　1850　試料13
15：オモダカ属　PLC.SS　1857　試料9
16：キンポウゲ科　PLC.SS　1851　試料13
17：サンショウモ　PLC.SS　1845　試料14
18：アカウキクサ属　PLC.SS　1854　試料9



図版4　珪藻化石の顕微鏡写真（スケール：20 μm）

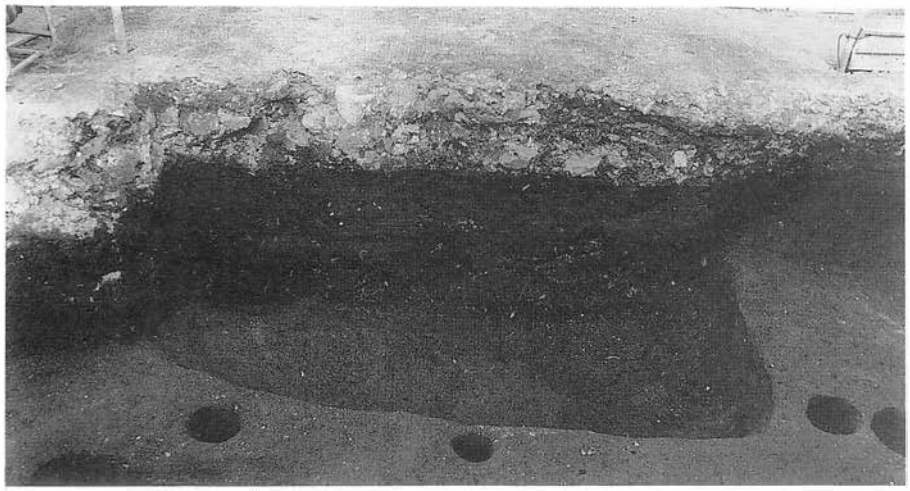
1. Melosira varians (No.11)
2. Melosira varians (No.12)
3. Cymbella subaequalis (No.11)
4. Achnanthes minutissima (No.11)
5. Achnanthes exigua (No.12)
6. Hantzschia amphioxys (No.11)
7. Rhopalodia gibba (No.11)
8. Epithemia turgida (No.14)
9. Stauronis acuta (No.9)
10. Rhopalodia gibba (No.11)
11. Synedra ulna (No.9)
12. Diploneis ovalis (No.11)
13. Achnanthes lanceolata (No.11)
14. Amphora montana (No.9)
15. Caloneis bacillum (No.9)
16. Eunotia spp. (No.9)
17. Gomphonama truncatum (No.9)
18. Gomphonama gracile (No.11)
19. Amphora ovalis var.liybca (No.11)
20. Pinnularia microstauron (No.11)
21. Pinnularia acrosphaeria (No.9)
22. Gomphonama acuminatum (No.14)
23. Nitzschia umbonata (No.9)
24. Nitzschia umbonata (No.9)
25. Pinnularia viridis (No.9)
26. Anomoeoneis sphaerophora (No.12)
27. Caloneis silicula (No.11)
28. Neidium iridis (No.12)
29. Epithemia sorex (14)
30. Nitzschia amphibia (No.9)
31. Amphora ovalis var.libyca (No.9)
32. Navicula veneta (No.9)
33. Navicula elginensis (No.9)

写　真　図　版



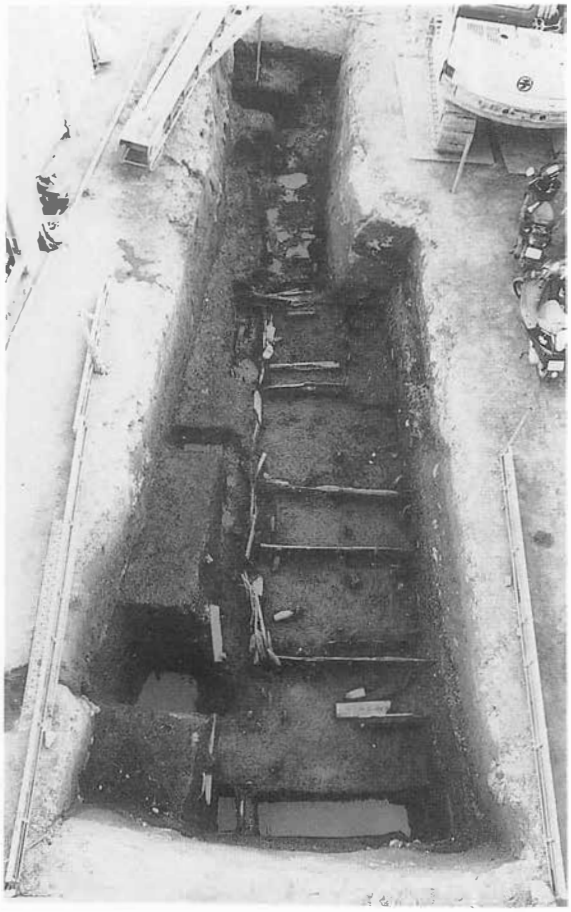
1. 1面全景（北から）

2. 1面溝3（北から）



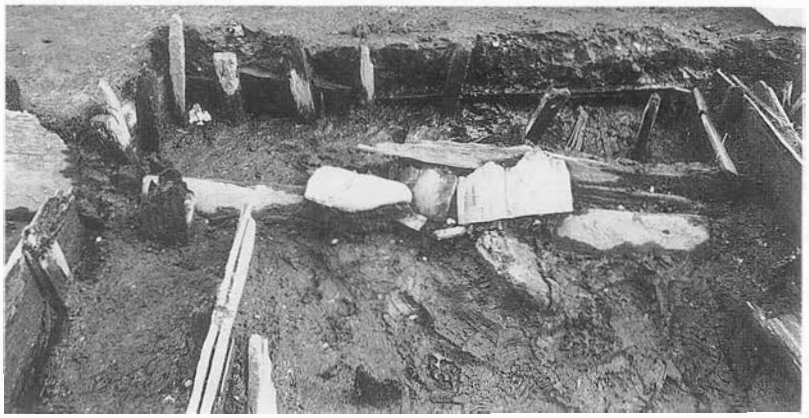
3. 1面土壙30（東から）

図版2

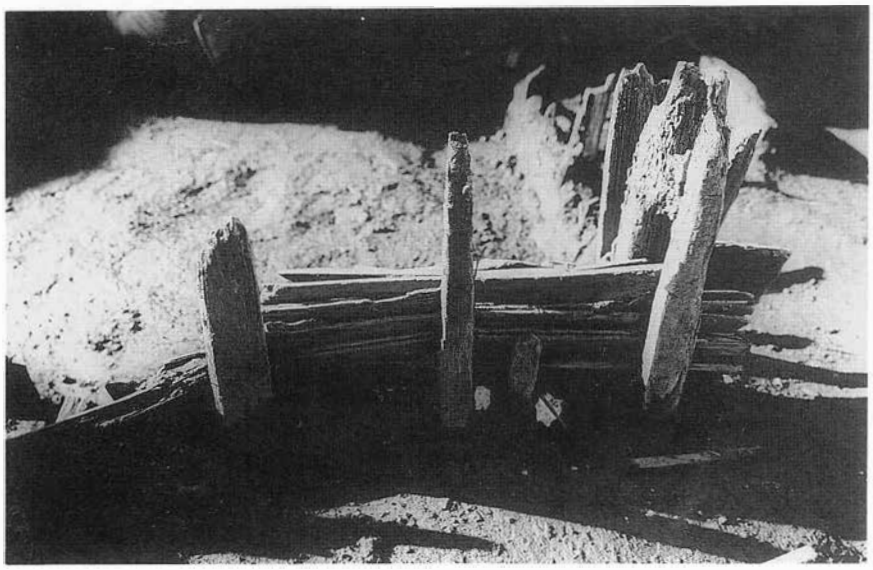


1.　3面全景（北から）

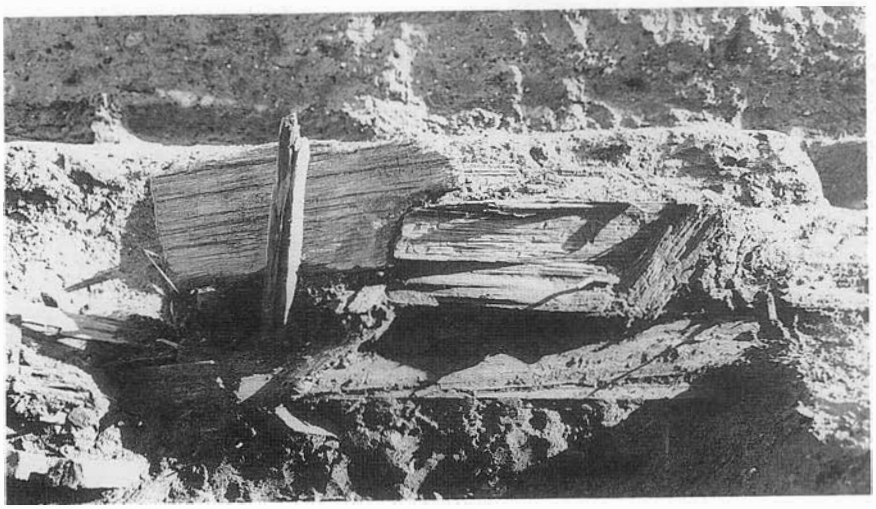
2.　3面土壙40（南から）



3.　3面土壙40⑦（西から）
（本文参照）



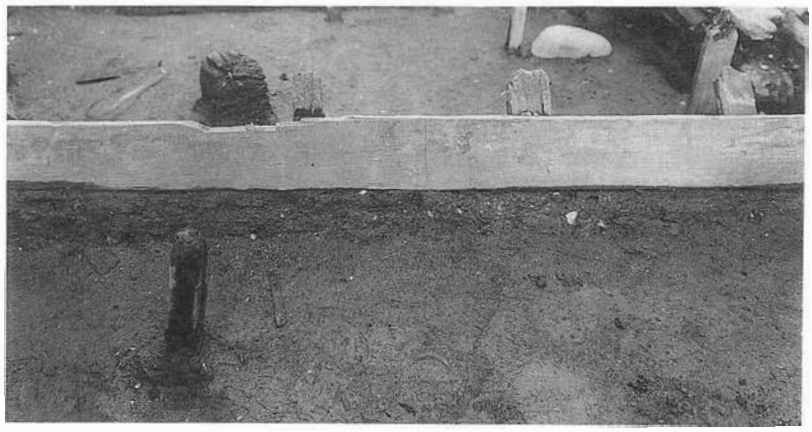
1. 3面土壙40①北東部分（東から）



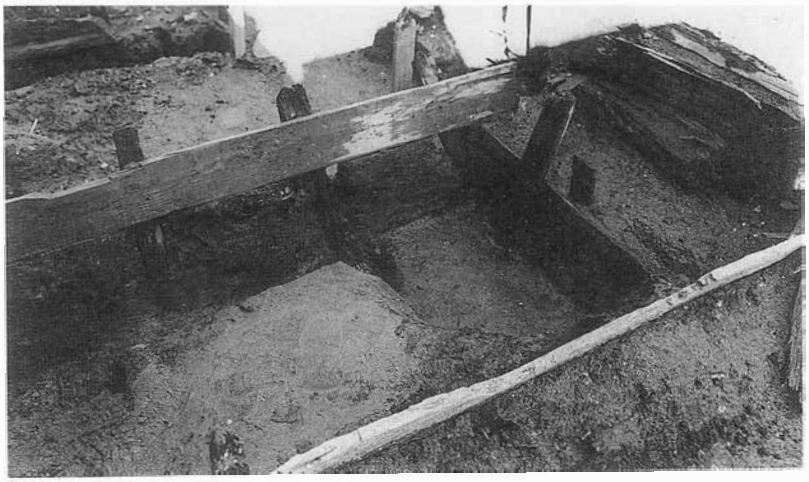
2. 3面土壙40①東側横板（西から）

3. 3面土壙40①東側横板及び杭（西から）
杭に伴う掘り込みは確認されない

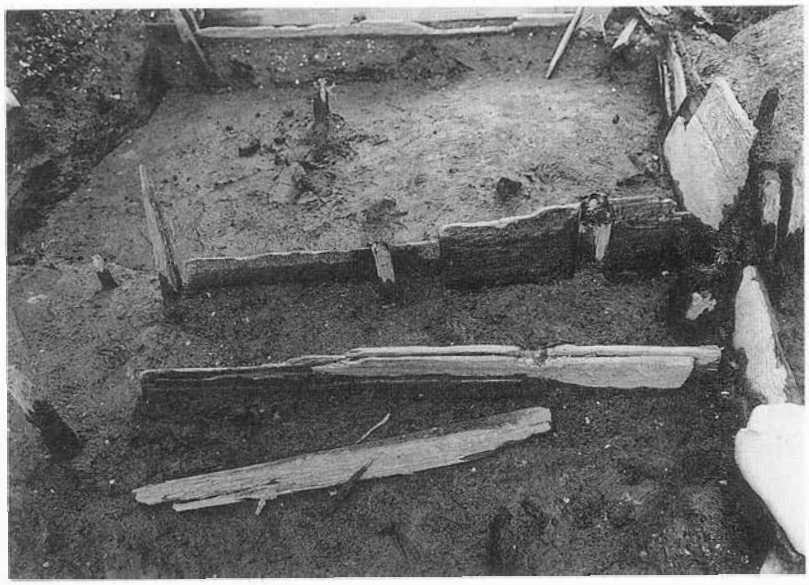
図版4



1. 3面土壙40②北側横板（南から）



2. 3面土壙40②付近（南から）
杭打ち込み検出状況



3. 3面土壙40③・④付近（南から）

15-8

19-1

8-1

12-1

21-2

21-3

20-1

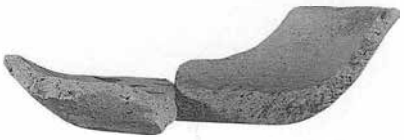
20-2

15-7

16-2

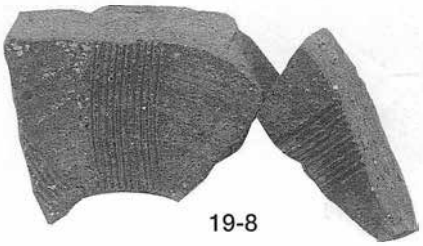
15-5

6-2


8-3

19-9

12-5

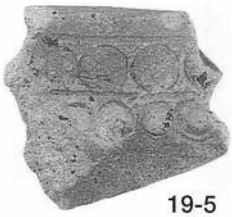

19-8

15-9

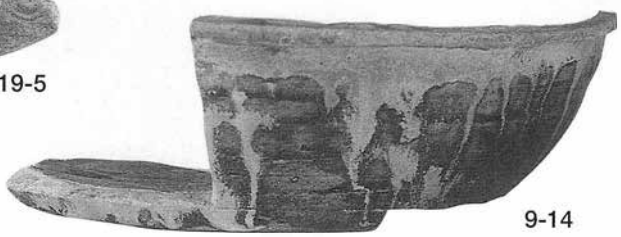
12-3

12-8

19-6


19-5

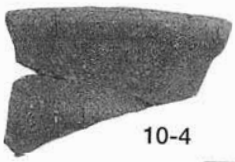
9-13


9-14

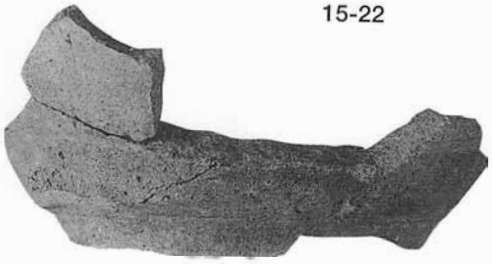
図版6

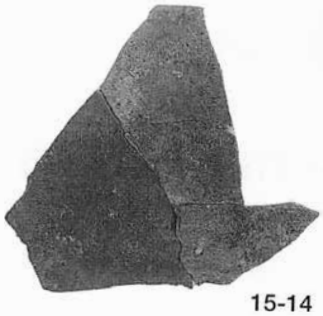
15-21

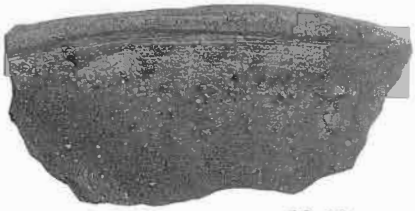
15-22

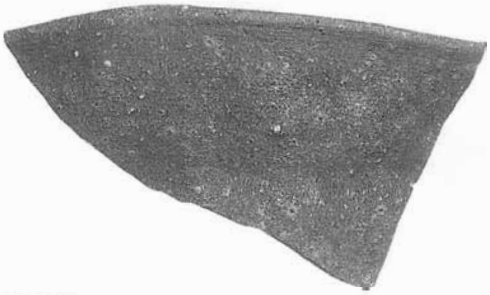

10-4

18-7

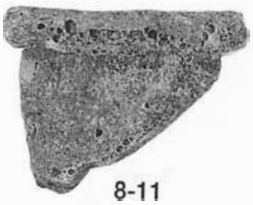

15-15

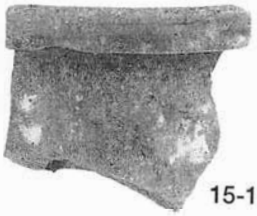

15-14

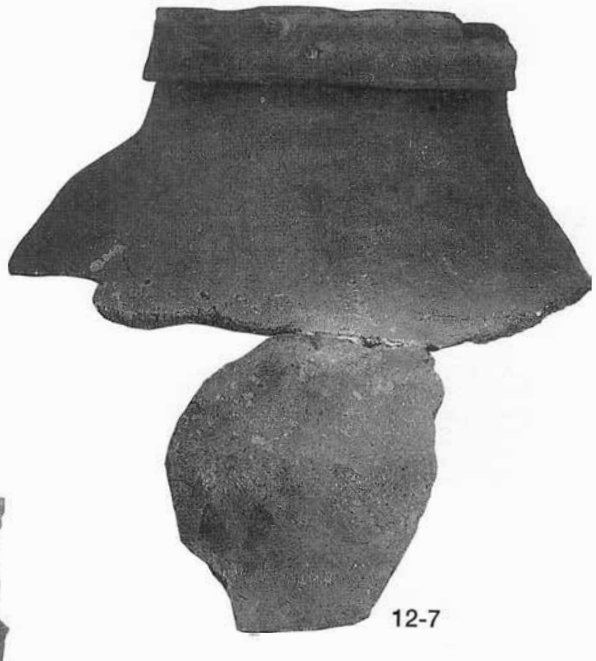

19-15


19-13

8-8


8-11

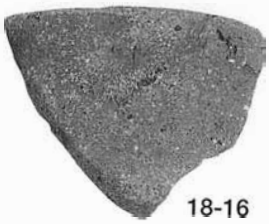

15-18


12-7

18-13

20-3

18-15


18-16

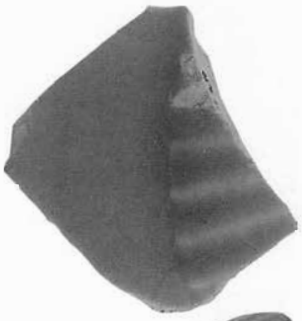
22-1

22-5

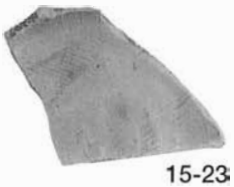
9-15

15-25

20-5



20-4

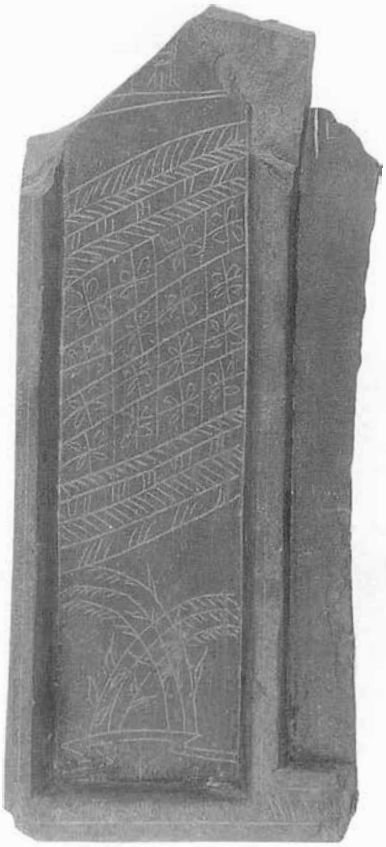

15-23

22-4

6-4

9-16

10-12

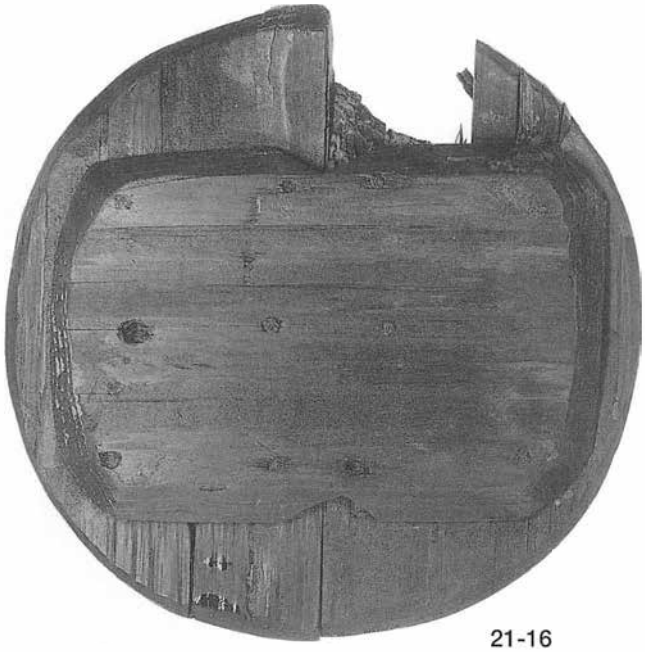

19-20

16-4

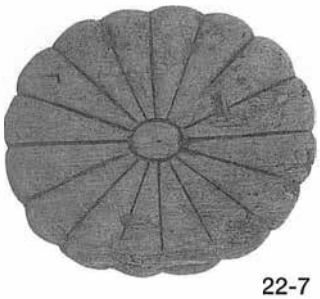
10-15

18-19

図版8



21-16



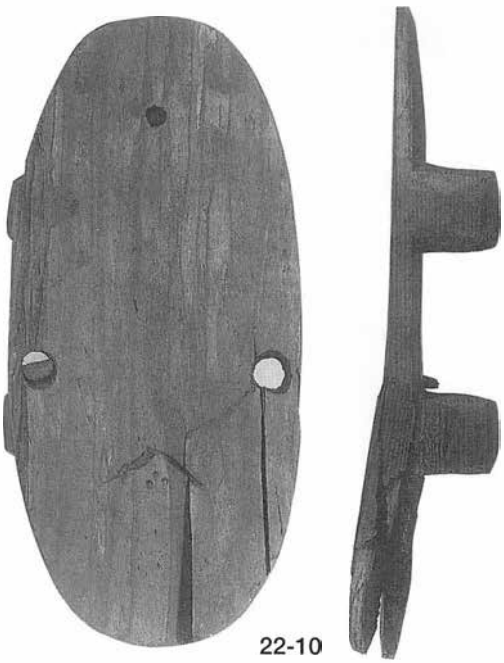
22-7

22-8

22-6

18-21

22-9



22-10

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	第2分冊
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	汐見一夫　川又隆央
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248　神奈川県鎌倉市御成町18番10　TEL　0467－23－3000
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	かながわけんかまくらしゆいがはま 神奈川県鎌倉市由比ヶ浜	14204	200			19951211 ～ 19960114	40㎡	店舗併用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下馬周辺遺跡	都市	中世～近世	土壙　溝 建物址	かわらけ　常滑 国内産陶土器 舶載陶磁器 石・鉄・骨・木製品 テンバコ約60箱	

宇津宮辻子幕府跡（No.239）

うつのみやずしばくふあと

小町二丁目361番１地点

例　　言

1．本報は、鎌倉市小町二丁目361番1地点に所在する宇津宮辻子幕府跡遺跡における埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる自己専用住宅の報告である。

2．発掘調査は、調査対象面積144㎡のうち30㎡を国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施し、残りの面積を宇津宮辻子幕府跡発掘調査団（団長　原　廣志）が行った。調査期間は平成8年2月15日より同年4月4日にかけて実施した。

3．調査体制は次のとおりである。

担　当　者　原　廣志

調　査　員　小林重子・須佐直子・岩野祐巳・岡陽一郎

調査補助員　丹　正行・鍛冶屋勝二・秋山哲雄・佐藤正之・島貫　聡・弓削拓郎・駒村大輔・渡辺岳史・須佐仁和・早坂伸市

調査協力者　富岡眞之・福本寿夫・菅野五郎・星　富蔵

協力　機関　（社）鎌倉市高齢者事業団シルバー人材センター

4．本報の執筆は、第一章を原、第二章を小林、第三章を須佐直子が分担・執筆し、第四章については調査員協議のうえ、小林・原が執筆した。

遺物実測・トレース・図版作成には小林・須佐・須佐（仁）・早坂・原があたり、秋山哲雄・駒村大輔の協力を得た。

5．本報掲載写真は、遺構を岩野・岡・原が、遺物を小林が撮影し、空撮は㈱シン航空のラジコンヘリによる。

6．発掘調査中・本報作成段階において次の方々から多大な御教示・御指導を賜った。記して深謝の意を表する（敬称略、順不同）。

大三輪龍彦・大橋康二・藤原良章・松尾剛次・手塚直樹・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・小野正敏・木村美代治・近藤真佐夫・西野　修

7．本発掘調査における出土遺物・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例　言 ……210
目　次 ……211
第一章　調査地点概観 ……214
　位置 ……214
　歴史的環境について ……214
　宇津宮辻子幕府跡の調査事例 ……215

第二章　調査の概要 ……217
　調査経過とグリット設定 ……217
　調査概要 ……217

第三章　検出した遺構・遺物 ……224

第四章　まとめ ……237

＜附篇＞宇都宮辻子幕府趾の花粉化石　鈴木　茂 ……240

挿　図　目　次

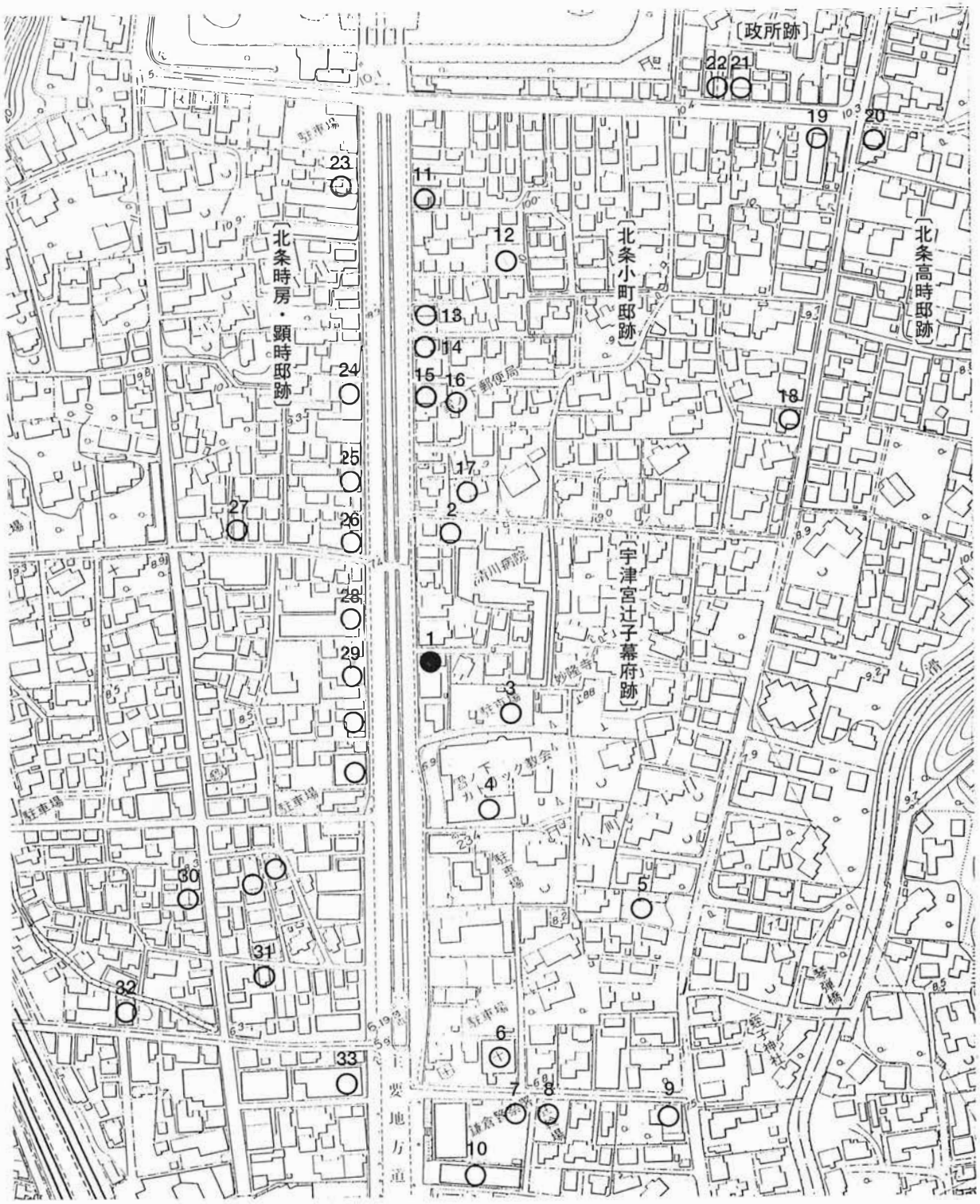
図１　調査地点と遺跡周辺図 ……213
図２　調査地点グリット設定図 ……218
図３　調査区位置図 ……219
図４　グリット配置図 ……219
図５　検出遺構全図 ……220
図６　調査区壁土層堆積図 ……221
図７　調査区遺構全図 ……223
図８　溝１出土遺物（１）……225
図９　溝１出土遺物（２）……226
図10　溝２出土遺物（１）……227
図11　溝２出土遺物（２）……228
図12　溝３出土遺物 ……228
図13　遺構外下層出土遺物 ……229
図14　遺構外上層出土遺物 ……230
図15　宇津宮辻子幕府跡の調査地点事例 ……238

表　目　次

表１　溝１出土遺物観察表（１）……231
表２　溝１出土遺物観察表（２）……232
表３　溝２出土遺物観察表（１）……233
表４　溝２出土遺物観察表（２）……234
表５　溝３出土遺物観察表 ……234
表６　遺構外下層出土遺物観察表（１）……235
表７　遺構外下層出土遺物観察表（２）……236
表８　遺構外上層出土遺物観察表 ……236

図　版　目　次

図版1　a．空撮全景 ……253
　　b．調査区全景（東から）……253
図版2　a．溝2構築材出土状況（東から）　254
　　b．溝2（北から）　……254
　　c．調査区北壁土層堆積（南から）　254
図版3　a．溝1出土遺物 ……255
図版4　a．溝1出土遺物 ……256
　　b．溝2出土遺物 ……256
　　c．遺構外下層出土遺物 ……256



1.調査地点
2.小町二丁目366番1
3.小町二丁目354番12
4.小町二丁目354番2
5.小町二丁目389番1
6.小町二丁目345番2
7.小町一丁目321番1
8.駐輪場
9.小町一丁目325番イ外
10.スイミングクラブ
11.雪ノ下一丁目377番7
12.雪ノ下一丁目374番2
13.雪ノ下一丁目371番1
14.雪ノ下一丁目372番7
15.雪ノ下一丁目369番
16.雪ノ下一丁目369番他
17.雪ノ下一丁目419番3
18.雪ノ下一丁目432番2
19.雪ノ下一丁目395番他
20.小町三丁目426番3
21.雪ノ下三丁目987番1.2
22.雪ノ下三丁目988番
23.雪ノ下一丁目293番1
24.雪ノ下一丁目271番1
25.雪ノ下一丁目273番ロ
26.雪ノ下一丁目274番2
27.雪ノ下一丁目233番9
28.小町二丁目276番他
29.小町二丁目279番2
30.小町二丁目12番18
31.みのビル
32.小町二丁目63番3
33.日本生命ビル

図1　調査地点と遺跡周辺図

第一章　調査地点概観

位置

中世都市鎌倉は、鶴岡八幡宮から南の海岸へと向かって縦貫する若宮大路があり、これにほぼ並行・直交して走るいくつかの通り（○○大路）によって区画されている。鶴岡八幡宮前を東西に走る通りを「横大路」、この道路の東端では宝戒寺門前で交差（塔ノ辻）する「小町大路」であり、南が下馬付近で若宮大路と交差する「町大路」（大町大路）、西側には「今大路」が南北に走り基幹道路を構成している。若宮大路は、『吾妻鏡』によれば寿永元年（1182）３月、妻政子の安産祈願のために頼朝自らが監督し、北条時政らの重臣も土石を運んで、鶴岡八幡宮へと一直線に延びる参詣道を完成させたのだという。

遺跡名である宇津宮辻子幕府跡は、北辺が清川病院の北側を若宮大路から小町大路にいたる路地で一辺100m程、この路地から約130m南までの距離で西限が若宮大路、東限が小町大路になる台形の地域が「宇津宮辻子幕府跡」として神奈川県遺跡台帳（台帳番号239）に記載されている場所である。本地点はこの広範囲な地域の西辺やや北寄りの一角にあたり、現在の段葛を二ノ鳥居から鶴岡八幡宮へ180m程進んだ若宮大路東側歩道に臨むところである。地番は鎌倉市小町二丁目361番１である。

歴史的環境について

宇津宮辻子幕府は、若宮大路と交差する小路である宇津宮辻子に面して置かれた４代将軍九条頼経の御所のことである。摂家将軍を迎えて北条氏が幕府の実権を挙握するとともに頼朝以来、政治的中心として鶴岡八幡宮の東側、大倉の地にあった幕府を若宮大路ぞいの東側に移転し、執権北条泰時の下に都市としての鎌倉が整備されていくのである。『吾妻鏡』によれば、嘉禄元（1225）年10月に大倉から宇津宮辻子への御所（幕府）移転が泰時らによって発議・決定され、同年12月には将軍頼経の移徒が実現している。ところが嘉禎二（1236）年には、土公の祟りを忌避するという理由で僅か11年だけの短い期間で、「若宮大路の幕府」への移転がなされたのである。

宇津宮辻子の幕府の規模について、『吾妻鏡』を読むと東西256丈５尺、南北61丈とある。この点について、高柳光寿『鎌倉市史　総説編』がこれまで通説的な見解を示してきた。それは横大路を北辺、若宮大路を西辺とした南北百間ほどが北条泰時邸の規模と推定しており、それに南接する形で東西56丈５尺（約171m）、南北61丈（約184m）の区画を「宇津宮辻子幕府」の敷地と比定され、『吾妻鏡』の東西256丈５尺（約774m）ついては、おそらくこの記載が間違いだろうとされた。それに関連してもう一つが嘉禎二年の幕府移転についてである。北接する泰時邸の移転や改築の記述が書かれていない点にふれ、同一敷地内での移転であると推定し、それぞれ宇津宮辻子と若宮大路を主として名称を変えたのではないかとされた。

また大三輪龍彦氏は「中世都市鎌倉の地割制試論」と「鎌倉の都市計画　―政治都市として、軍事都市として―」（大三輪　1986・1989）の中で、丈尺を基本とした地割都市を想定し、宇津宮辻子の位置についても言及されている。石井進氏は都市構造を根本的に改変するものとして、鎌倉の基本軸の移動（鎌倉政権草創の源義朝館―鶴岡八幡宮―大倉の御所を結ぶ東西ラインから鶴岡八幡宮―宇津宮辻子の御所―若宮大路の南北ラインへ）という都市の質的転換を伴ったものであったことを指摘されている。御所移転に関しては、最近伊藤正義・松尾剛次の両氏が相ついで発表され論証が注目されている（伊藤　1992、

松尾　1992A・B)。

伊藤氏は御所の破却と再生の中に密む心性と意識という人々の内なる世界の解読を試みられた。頼朝が幕府を開いてから、その子頼家、実朝と、いわゆる源氏三代の将軍の御所であった大倉の故地からの移転は、尼将軍政子の死去を契機に北条泰時らの発議・決定によって宇津宮辻子へ御所を移し、源氏三代の霊魂・怨霊の地からの絶縁、そして決別を意味するものであったとされた。

松尾氏は『鎌倉市史』で『吾妻鏡』の記載を誤りであろうとした「宇津宮辻子の幕府」の東西距離の数値（256丈5尺）が、伊賀朝行邸から移転直前の御所と予定地の北西隅との位置関係を示したものであることを想定された。また同氏は「嘉禎二年」の御所移転が土公の祟りを忌避するという理由である以上、同一敷地内への移転はありえないとし、「若宮大路の幕府」は「宇津宮辻子の幕府」の北西に位置したと指摘されている。伊藤・松尾両氏とも宇津宮辻子の位置については大三輪氏の説に拠られている。

宇津宮辻子幕府跡の調査事例

宇津宮辻子幕府跡とされる郭内では、本地点以外の今までの調査事例は若宮大路に面した図1（以下同じ）－2地点（清川病院用地）と3地点（雪ノ下カトリック教会用地）、中央やや西寄りにあたる4地点（妙隆寺裏手）の3ケ所と、小町大路沿いの東側に位置した5地点（日蓮辻説法碑前）の1ケ所で調査が行なわれている。

2地点は本地点と同様、中世の生活面が近世の削平で残存せず、中世地山上からは西端で若宮大路側溝（13世紀中頃～14世紀中頃）と側溝に直交して走る古手の東西溝があり、この溝の南北域に小規模な掘立柱建物、柵列と多くの井戸が散在するだけで、遺構の密度の薄く本地点に近い傾向を示していた。

これとは対照的に3地点では、12世紀末～13世紀前半の下層面（中世地山面上）から柱間が5間をこす6棟以上の大規模な掘立柱建物と、何時期もの建て替えを思わす膨大な量の柱穴群、建物を繋いだ渡廊を想起させる柱穴列など、密度の高い遺構群が検出されている。さらに4地点は調査区中央で大路に直交する布掘りの柵列（柱間約120cm）、その南北に掘立柱建物・土壙や多数の柱穴が切り合い激しく地山面（13世紀前～中葉が中心）から検出された。柵列は、幅80cm程の布掘り底面に1辺約60cmの方形柱穴をもち、屋敷内を区画するような柵列とは異なる規模で東西ともに調査区外へ延びていた。

一方、小町大路に面した5地点では、中世については部分的なものを入れて5面（13世紀前葉～15世紀前半）にわたる生活面から掘立柱建物、井戸、土壙、溝、柱穴列や多数の柱穴などの遺構が確認された。13世紀前半～中頃にあたる4面（中世地山面）から現小町大路と、現若宮大路とに平行する軸方位の異なる掘立柱建物がそれぞれ検出され、前者が先行した建物であった。また3B面（13世紀後半）からも若宮大路と同一の軸方位を示した掘立柱建物が検出されており、従って4面から3面にかけて敷地内の主要な一角を占めてはいるが、掘立柱建物の軸線を一新する画期が想定されている。この他、往時の道筋に関する調査成果として現小町大路より西へ約6.5mの位置に大路西肩かと思われる落ち込みが確認されている。

今後は、こうした各調査地点の遺構の成立と消滅の具体相を明らかにし、若宮大路東側の御所を核とした中枢域と、その周辺域も含めて都市構造全体の変遷の中にどう位置付けていくかが、重要な課題であろう。

＜引用・参考文献＞

1）高柳光寿『鎌倉市史　総説編』　吉川弘文館　1959年

2）大三輪龍彦「中世都市鎌倉の地割制試論」『仏教芸術』164号　毎日新聞社　1985年

3）石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世３　－武士の都・鎌倉－』　平凡社　1989年

4）伊藤正義「鎌倉・大倉幕府から宇津宮辻子幕府へ　－御所の破却と政権の再生－」安田元久『平成元年度～３年度科学研究費補助金研究成果報告書「吾妻鏡」の総合的研究』　1992年

5）松尾剛次「武家の『首都』鎌倉の成立　－将軍御所と鶴岡八幡宮を中心に－」石井進編『都と鄙の中世史』　吉川弘文館　1992年

6）松尾剛次「宇津宮辻子御所考　－都市鎌倉論補考－」『山形大学史学論収』第12号　1992年

7）田畑佐和子「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第１回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』　鎌倉考古学研究所・中世都市研究会　1991年　さらに調査担当者の手塚直樹氏から多大なご教示をいただいた。

8）繼　実「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第３回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』　鎌倉考古学研究所・中世都市研究同人会　1993年

9）佐藤仁彦「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第５回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』　鎌倉考古学研究所・中世都市研究同人会　1995年

10）熊谷洋一・浜野洋一・佐藤仁彦「宇津宮辻子幕府跡（No.239）　－小町二丁目354番12外地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９－平成４年度発掘調査報告（第１分冊）－』　鎌倉市教育委員会　1993年

11）佐藤仁彦・小林重子・須佐直子・原　廣志「宇津宮辻子幕府跡（No.239）　－小町二丁目389番１地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12－平成７年度発掘調査報告（第１分冊）－』　鎌倉市教育委員会　1996年

第二章　調査の概要

調査経過とグリット設定

本地点に対する発掘調査は、1996年２月15日から開始された。調査対象面積は144㎡であるが、残土処理の関係上調査区を東西に分割し（便宜上、東側をⅠ区、西側をⅡ区とした）、Ⅰ区から調査を行い３月17日に終了、ついでⅡ区に移行し同年４月４日をもって現地調査の全行程を終了した。本調査は、調査面積の約30㎡（２割）を国庫補助事業の範囲として行い、残りの約114㎡（８割）を宇津宮辻子幕府跡発掘調査団（団長原廣志）が発掘調査を実施した。尚、本調査報告は国庫補助事業の調査区範囲を含めて対象としたものである。

調査方法は、鎌倉市教育委員会文化財課による試掘調査の結果に基づき、近現代の表土・撹乱及び、近世水田耕作土を地表下約60㎝まで重機により除去し、以下を人力により掘り下げを行った。

調査区のグリット設定にあたっては、鶴岡八幡宮社頭から同ニノ鳥居までの間の若宮大路段葛中軸線を南北とし、その基準点をニノ鳥居基礎の北辺中央に設定したものを用い、ニノ鳥居基礎の基準点から北へ176m、東へ直角に15mのところをＣ－３とした（図２・４）。従って、その方位はＭｇ．Ｎ－34°－Ｅとなる。Ｃ－３杭を基準に調査区内を２ｍグリットに区画し、東西方向に西からアルファベット、南北方向に北から算用数字を付した。各区画は北西隅の交点杭をもって呼称した。また本遺跡の正確な位置をつかむため、鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点と、調査区内Ｃ－３杭の位置関係を明記した（図２）。各４級基準点の国土座標は、Ｕ001（Ｘ軸－75619.887、Ｙ軸－25146.469）、Ｕ005（Ｘ軸－75704.854、Ｙ軸－25179.279）である。

調査概要

調査区内の堆積土層（図６）は、地表より約20～30㎝ほどを近現代の表土・撹乱が覆い、その下には近世の水田耕作土が約60～70㎝ほど堆積し、中世の地山面上には水田の床土が確認されている。また特に注目された点は水田耕作土の上部から宝永年間（1707年）の富士山噴火の火山灰が溝状に確認されたことである。この点からみて、近世における水田事業の一端が窺えよう。宝永の火山灰確認の標高は5.3ｍ～5.6ｍ、中世地山面の標高は5.1ｍである。この堆積土から推し量れるとおり、本調査地点は近世の削平が著しく、中世期の生活面の把握は困難であり中世基盤層の上面での遺構検出となった。また中世地山層である黒褐色粘質土の確認もほとんど困難な状況であり、近世の削平は少なからず中世基盤層まで及んでいたことがわかる。

検出遺構は、石組みの近世井戸１基、大路側溝を含む溝（南北２条、東西１条）、築地塀跡の基礎と思われる礎板・礎石を伴う遺構、土壙、井戸状遺構、柱穴などである。また、調査区東壁沿いに微かではあるが、近世水田の畦の土留め杭・横板と思われる木材を確認した。

出土遺物は、かわらけ（ロクロ・手づくね）、国産陶磁器（常滑・渥美・瀬戸・肥前）、貿易陶磁器（青磁・白磁・青白磁）、瓦質製品、土器製品、骨角製品、金属製品、漆製品、木製品等、鎌倉市内で発見されている中世期の遺物はほぼ出土している。尚、大まかな年代としては中世期は13世紀中頃から14世紀前半と考えられる。

図2　調査地点グリッド設定図

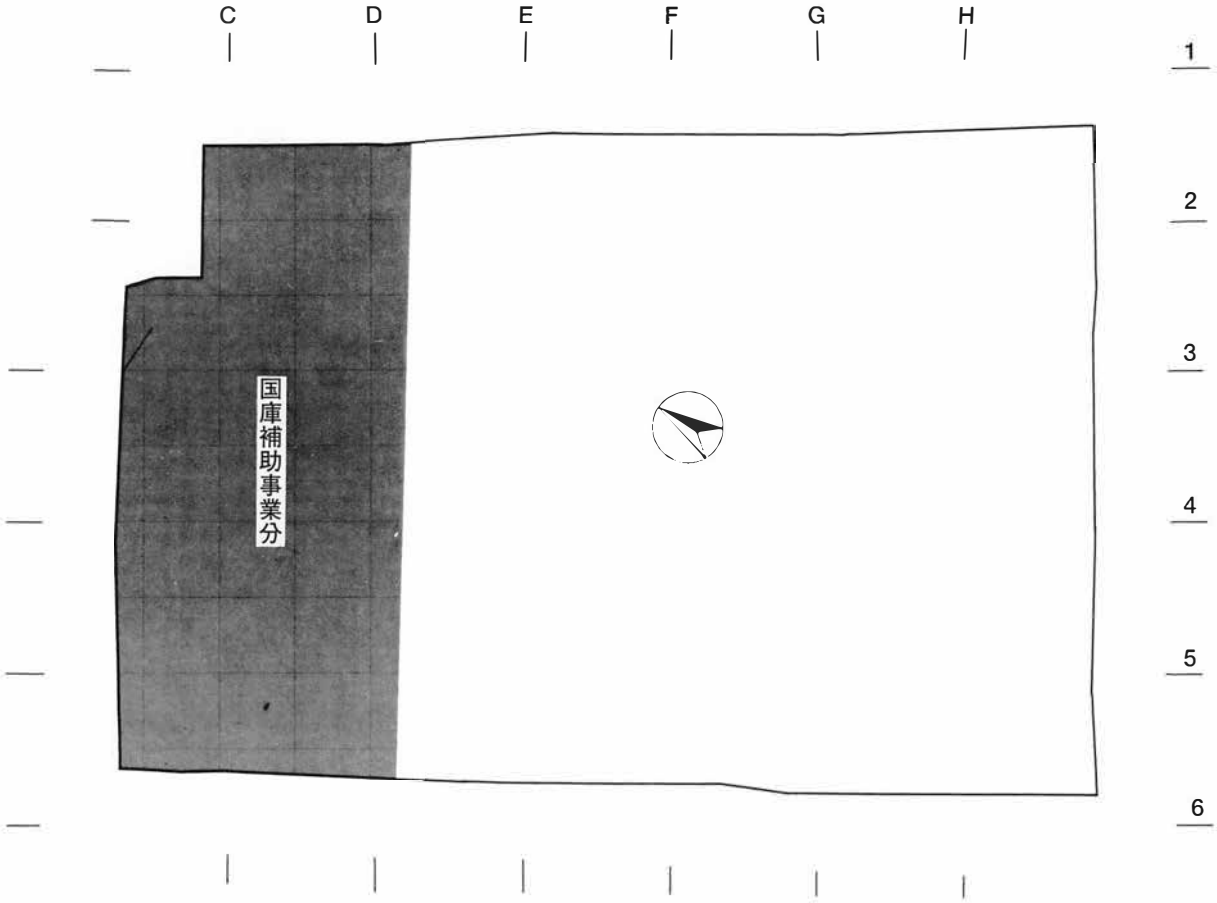


図3　調査区位置図

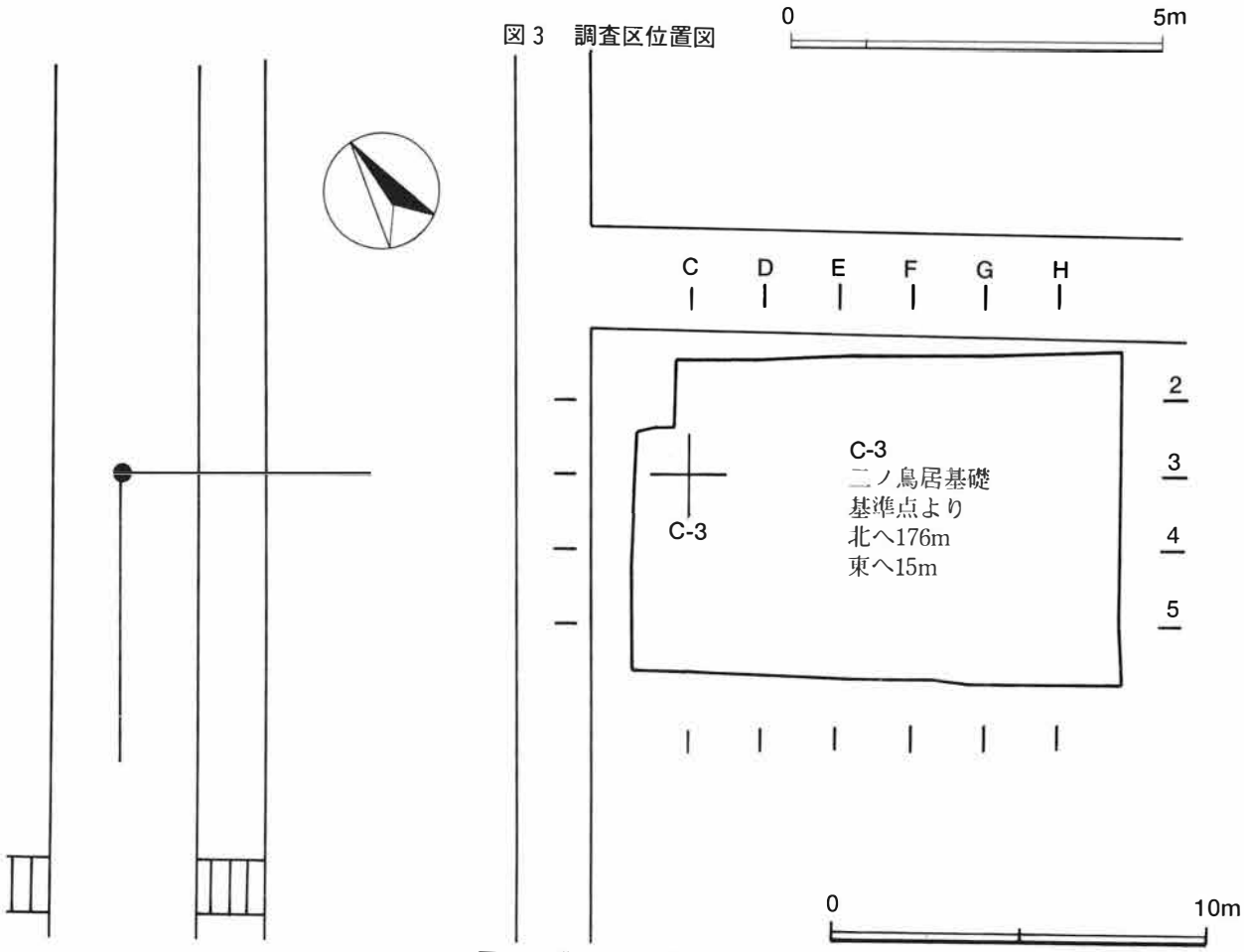


図4　グリッド配置図

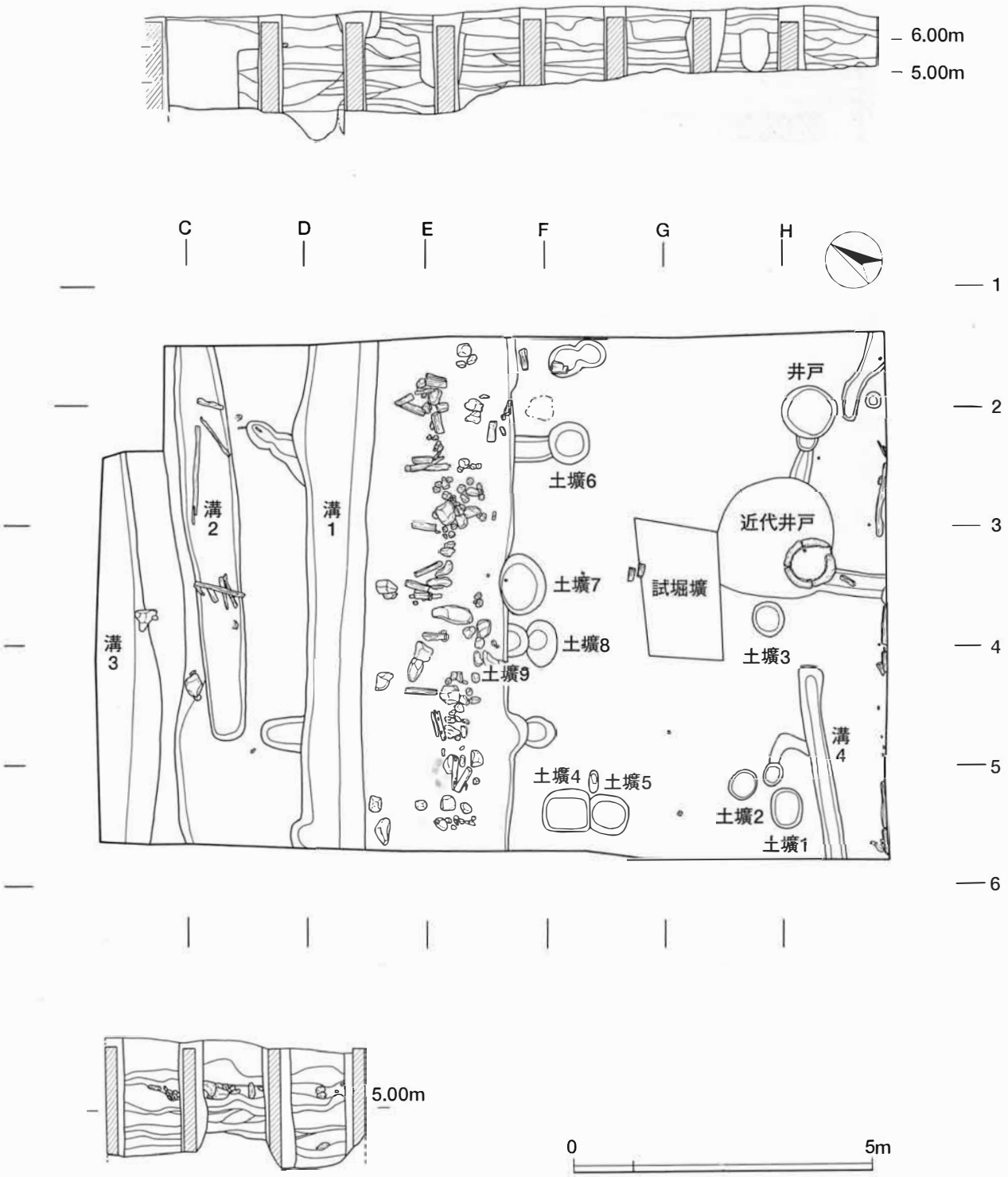
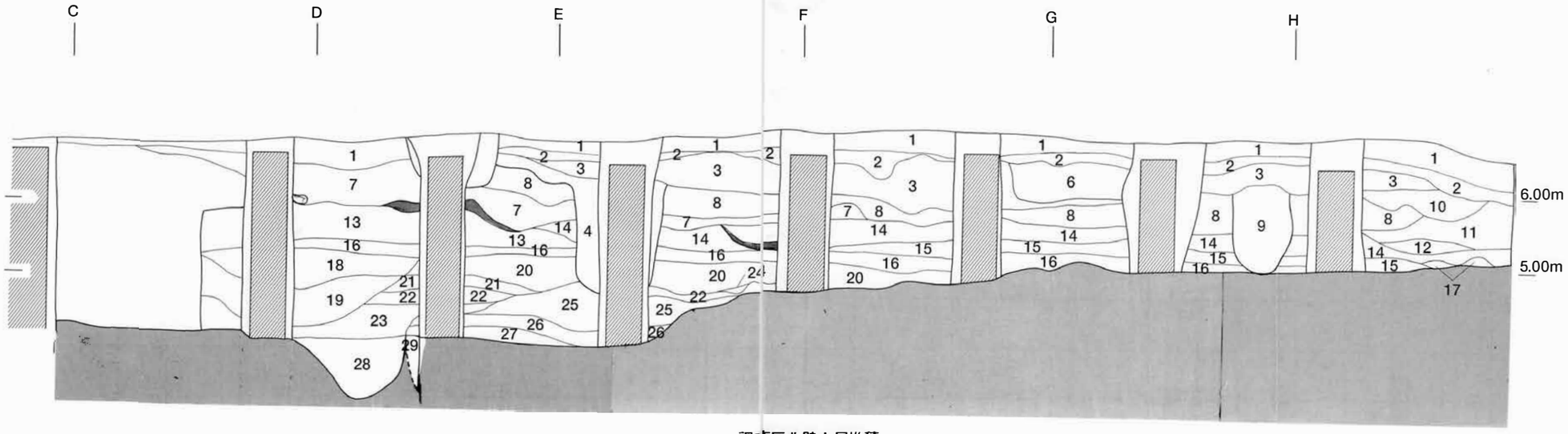

6.00m
5.00m
C
D
E
F
G
H
1
2
3
4
5
6
井戸
近代井戸
溝
1
溝
2
溝
3
溝
4
土壙6
土壙7
土壙8
土壙9
試堀壙
土壙3
土壙4
土壙5
土壙2
土壙1
5.00m
0
5m

図5　遺構全体図



調査区北壁土層堆積

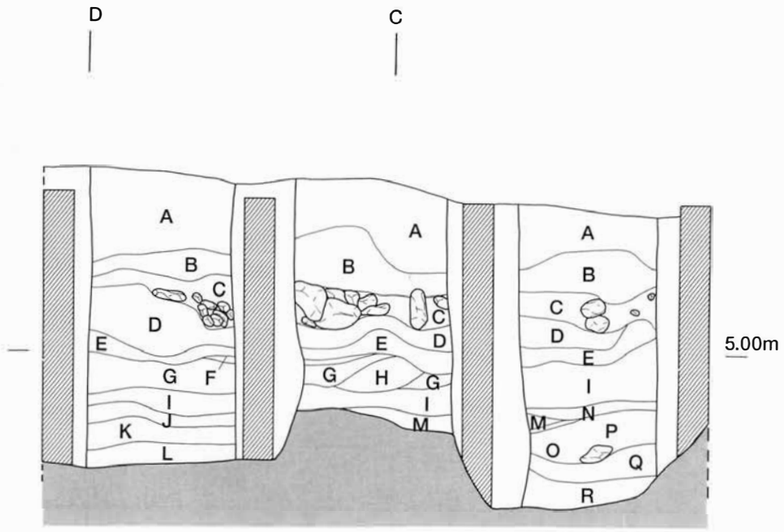


図6　調査区壁土層堆積図

<US>　南壁セクション　土層注記

A	黄茶褐色弱粘質土	近・現代腐土
B	茶褐色土	土丹塊(1cm～5cm大) 流土粒 炭化物粒 かわらけ粒 固くしまる
C	茶褐色土	土丹塊多 玉石少々 しまり強 下層に比べやや褐色
D	暗茶褐色土	かわらけ粒 土丹粒 少量の木片 下層に流れた木片 しまり強
E	黒茶褐色土	土丹塊(1cm～3cm大) 極少量の石 粘性・しまり強
F	暗茶褐色砂質土	極少量の土器粒 多量の砂混入 しまり強
G	茶褐色土	炭様物無 粘性強 粘質土
H	黒灰茶褐色土	砂マーブル状に混入 下層に木片・かわらけ粒流入
I	黒茶褐色土	木片 極少量の貝殻 粘性弱
J	黒褐色砂質土	貝殻 木片 磨耗かわらけ片 粗砂多
K	黒茶褐色土	土丹塊(2cm～5cm大) 砂マーブル状に混入 比較的しまる
L	茶褐色土	下層に土丹粒・小石混入 比較的しまる
M	黒褐色砂質土	小石 土丹塊(5cm大) 貝片 かわらけ片
N	暗茶褐色粘質土	微かにかわらけ片
O	黒色砂質土	極少量の貝片 炭多量に混入 しまり無し
P	黒灰褐色土	かわらけ片 木片 土丹塊点在 少量の砂混入 粘性強
Q	黒灰褐色土	下層に極少量の木片 少量の砂混入 粘性強
R	灰茶褐色土	薄層地山 砂混入 少量の粘土

<US>　北壁東西セクション　土層注記

1	黄茶褐色土	近・現代腐土
2	赤茶褐色土	近・現代腐土
3	茶褐色土	近・現代腐土
4	黄褐色土	近・現代腐土
5	茶褐色土	近・現代撹乱
6	明茶褐色土	近・現代撹乱
7	暗茶褐色砂質土	流土粒 炭化物粒散らばる 下層に火山灰(宝永)混入 固くしまる
8	灰茶褐色砂質土	流土粒 炭化物粒散らばる
9	黄茶褐色土	粘土土丹ブロック多混入
10	黄褐色砂質土	流土粒 炭化物粒 土丹粒
11	暗褐色砂質土	流土粒 炭化物粒
12	暗茶褐色粘質土	全体に5cm大土丹散らばる 固くしまる
13	茶褐色粘質土	流土粒 炭化物粒 土丹粒 固くしまる
14	明茶褐色砂質土	流土粒 炭化物粒 土丹粒 固くしまる
15	黒茶褐色粘質土	土丹粒・流土粒・かわらけ粒少量 固くしまる
16	黒茶褐色粘質土	流土粒 炭化物粒 土丹粒 木片 固くしまる
17	茶褐色土	黒茶褐色粘質土 土地山土
18	茶褐色粘質土	土丹ブロック(大) 土器片 木片 玉石点在 固くしまる
19	黒茶褐色粘質土	土丹ブロック 玉石点在 固くしまる
20	茶褐色土	土丹ブロック・粒 木片 土器にかわらけ片・玉石
21	黒茶褐色砂質土	玉石の他炭化物無し 粘性弱
22	黒茶褐色粘質土	貝片 粘性強
23	灰黒色砂質土	炭様物無し
24	黒黄褐色砂質土	炭様物無し
25	黒色粘質土	炭様物無し 粘性強
26	黒色土	土丹ブロック 薄 かわらけ片 木片 貝殻
27	黒茶褐色砂質土	木片 かわらけ粒 地山土混入
28	灰茶褐色砂質土	下層に土丹粒・流土粒めだつ 比較的しまる
29	黒色粘質土	貝片多量に混入 土器粒

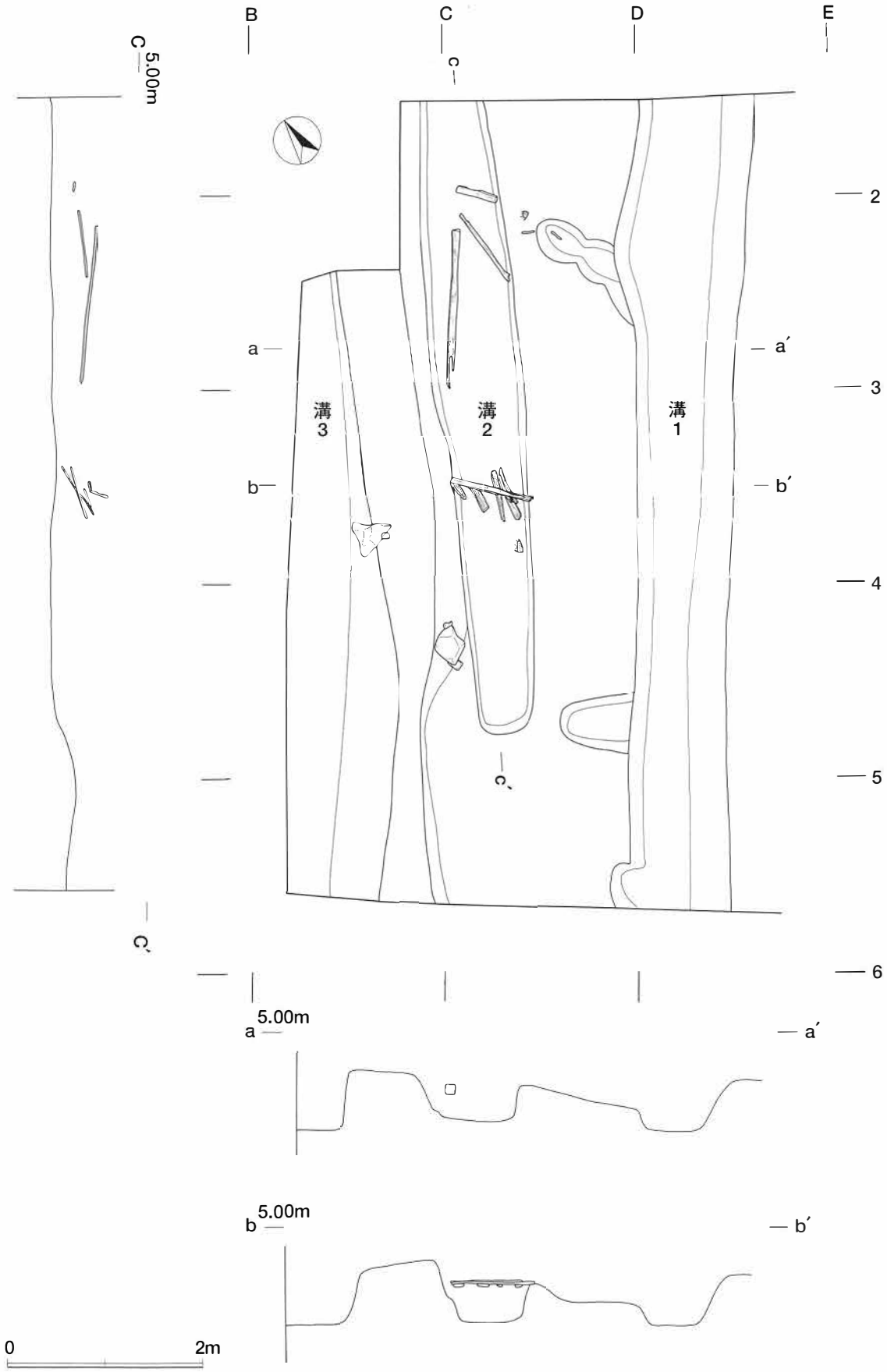


図7　調査区遺構全図

第三章　検出した遺構・遺物

遺構は、前章でも述べたごとく中世地山は大半の部分において近世以降の削平を受けているため、中世基盤層である黒褐色粘質土もしくはその下に堆積する灰褐色・黄褐色砂層の上面で確認した。

検出した遺構は、調査区全体では近世の井戸・水田畦土留め遺構、中世の大路東側溝・土壙・柱穴列・柱穴などである。尚、これらの遺構のうち本報告では国庫補助事業にかかる部分の範囲のみに限ったものであるが、遺構の性格上これを切り離す事はできないので、図５として調査区全体の遺構を図示した。範囲外の遺構に関しては原因者負担分の調査報告書に併せて収録することにする。

ａ．溝（図５～12、表１～５、図版２～４）

若宮大路に平行して走る溝３条を検出した。ほぼＦ軸より調査区西端にかけて存在する溝は、西側が調査区外に拡がりをみせ、後世の撹乱もあり正確な幅や規模は不明であり、本地点北方の清川病院南部地点（図１－２地点）の調査で発見されているような、東側溝の底面におかれた柄穴を切った土台の角材は認められなかった。しかし、その位置や規模からみて、清川病院地点で検出された溝の続きと考えられ、中世鎌倉の最盛期にあたる若宮大路東側溝であることはほぼ間違いなかろう。なお北壁土層断面から近世期の溝をおもわす宝永の火山灰の落ち込む堆積が認められた。

溝は複雑に重複して何度も掘り直され、しかも後世の削平は中世基盤層にまで及んでおり、土台材は抜き取られたらしく、溝覆土は後世の撹乱が深く及んでいて土層断面から側溝を明確にすることは非常に難しかった。そのため、以下に記す溝１～３は個々の側溝を示すものではなく、溝の掘り方底面の両脇に土台材を据えるために掘った、おそらく溝状の痕跡と考えられるものであることをことわっておきたい。したがって、現場作業中に側溝を厳密に区別しながら掘削する事は実際上不可能に近かったが、溝１～３の埋土そのものの区別は可能であったため、出土遺物の分別はできた。ここでは土台材が抜き取られたであろう溝状の遺構についてのみ触れることにしたい。

溝１

Ｄ軸に西肩を沿って走る溝で、南北ともに調査区外に延びている。幅は90cm前後、深さ約40cmで開いた逆台形の断面をもち、北から南に向かってやや下がっている。覆土は灰茶褐色砂質土で下層には土丹粒・焼土粒がみられしまりがある。

出土遺物には、ロクロ・手づくね成形のかわらけのほか、国産陶器、瓦、土製品、龍泉窯青磁碗・皿、鉄製品、木製品などがある。木製品には片端を尖らせた木簡が出土したが　残りが悪く墨書の文字は判読できなかった。若宮大路側溝を造るにあたり、幕府が御家人たちに課役したことを示す木簡が、側溝の東西から出土しているが、出土地点や形状からみて本例もそれに当たるものと思われる。出土遺物は若干の混乱が認められるが、おおむね鎌倉時代中～後期と考えられる。

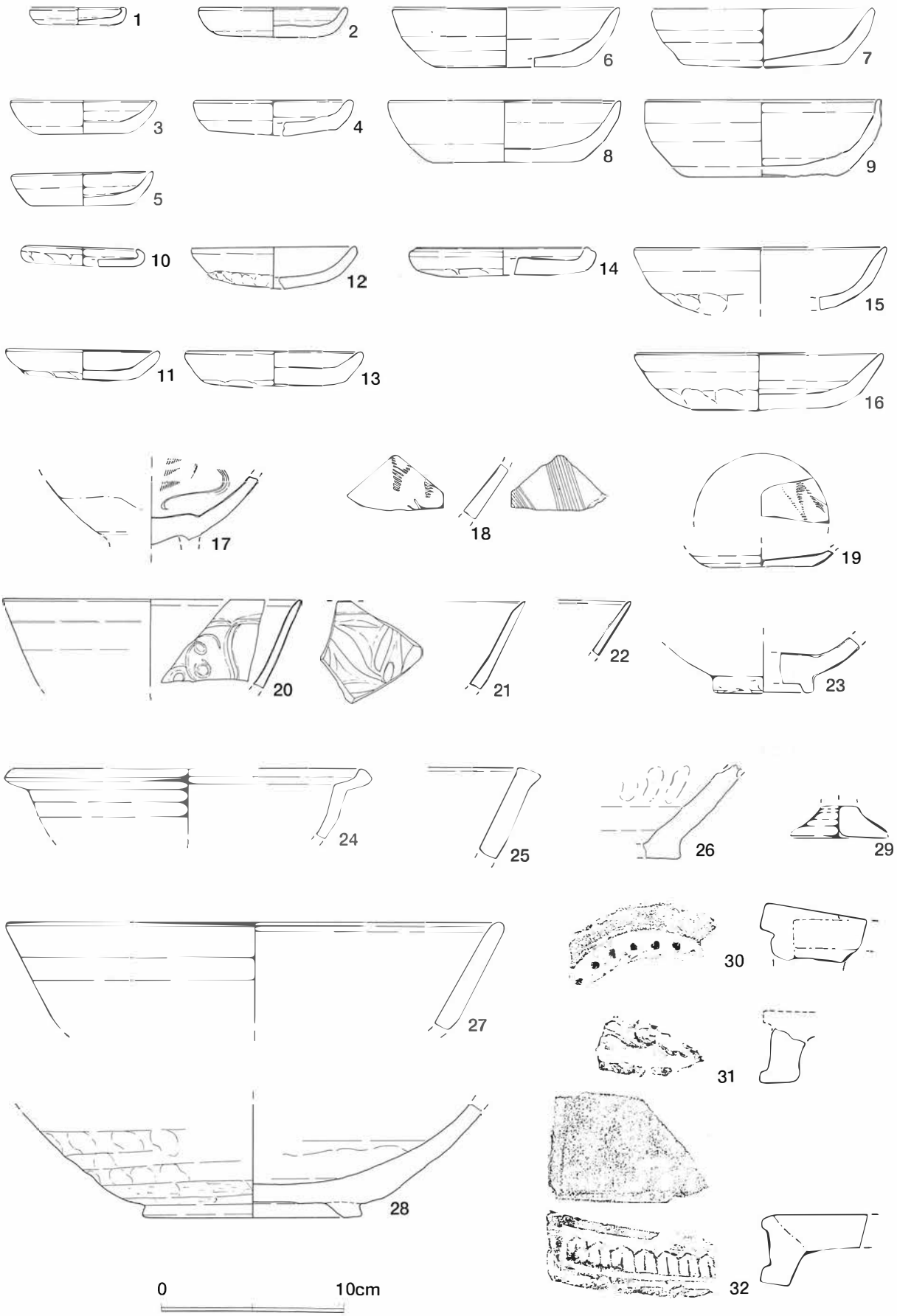

1
2
6
7
3
4
8
9
5
10
12
14
15
11
13
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
29
27
30
31
28
32
0
10cm

図8　溝1出土遺物（1）

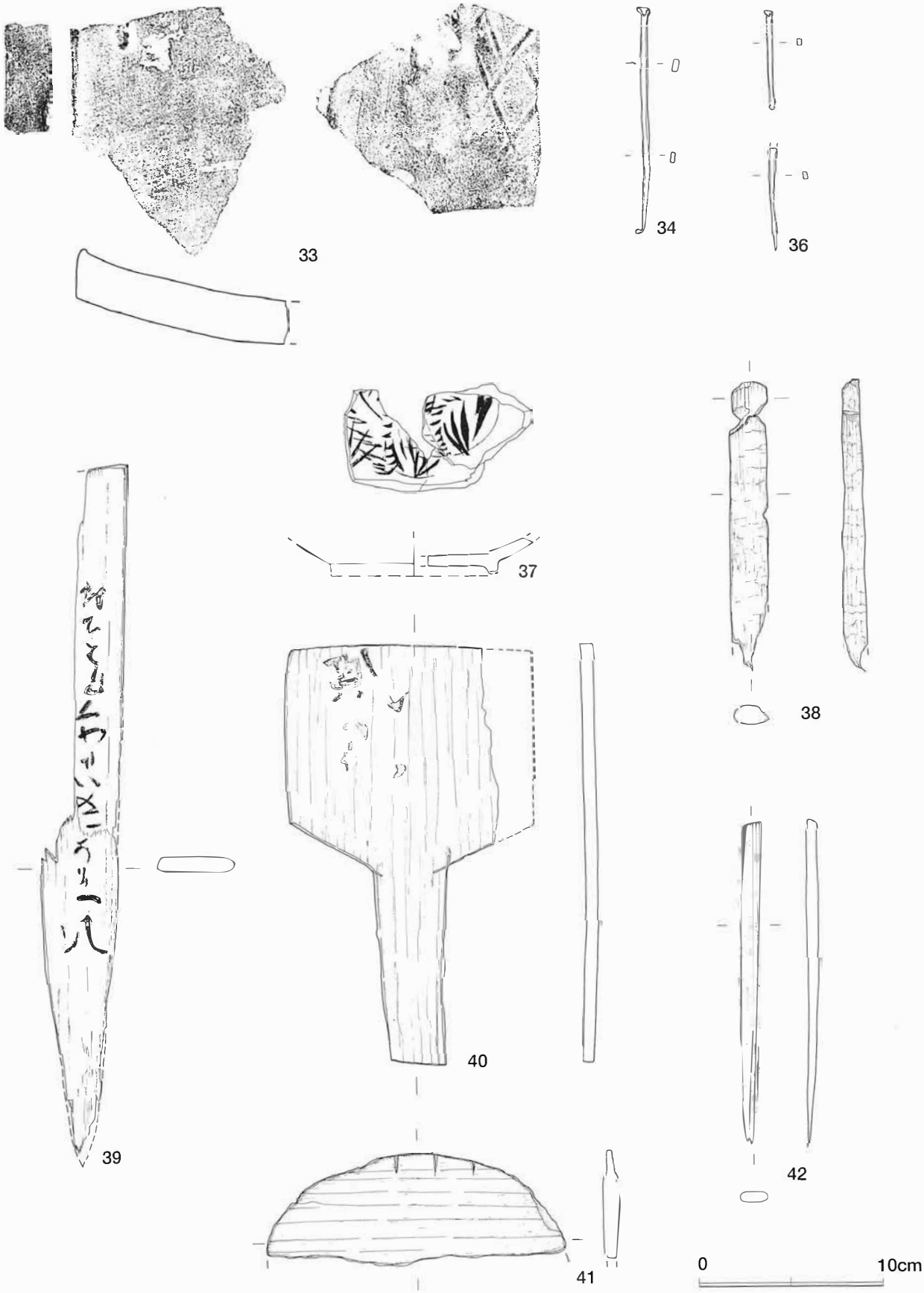


図9　溝1出土遺物（2）

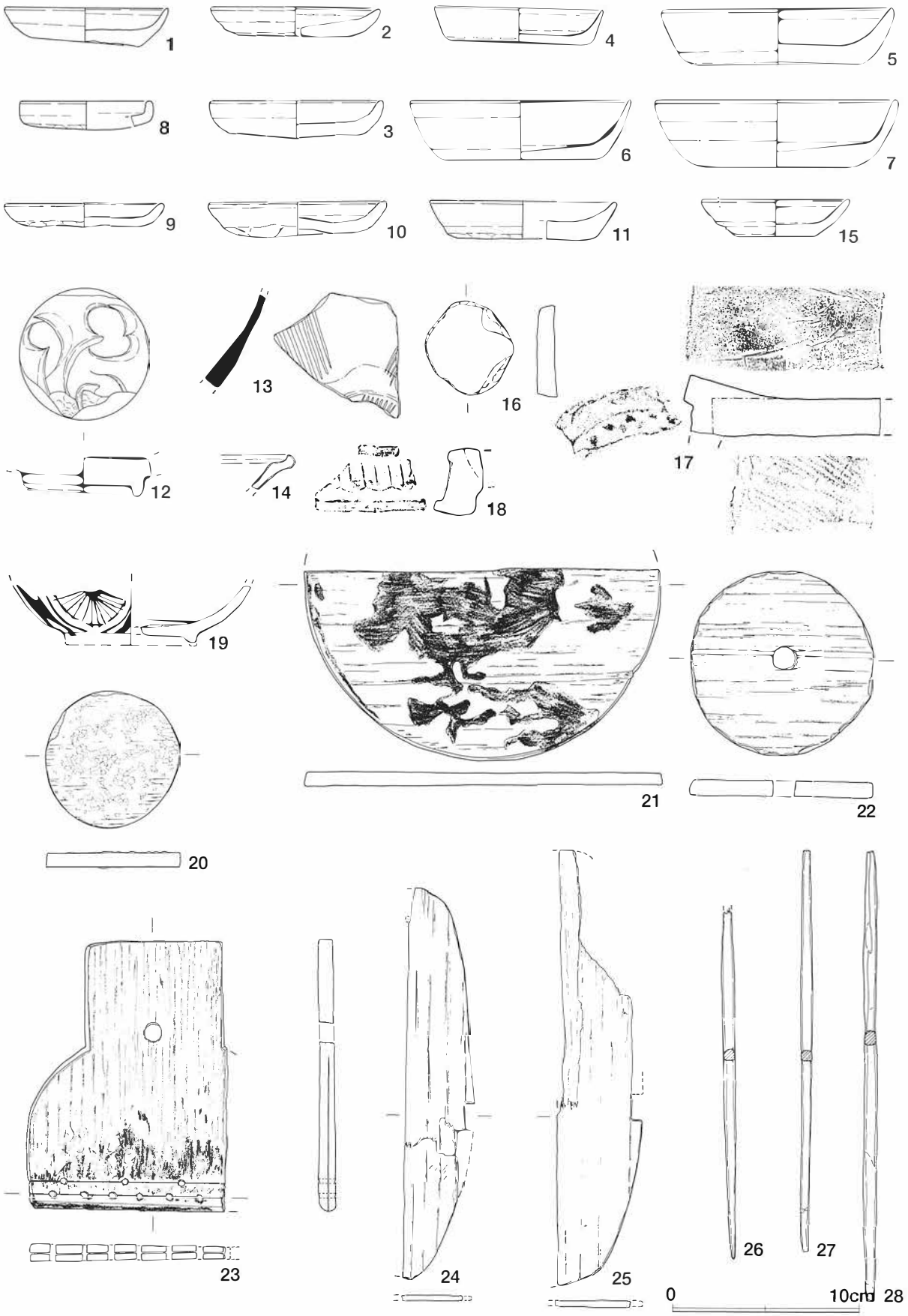

1
2
4
5
8
3
6
7
9
10
11
15
13
16
17
12
14
18
19
21
22
20
23
24
25
26
27
0
10cm
28

図10　溝２出土遺物（１）

溝 2

C軸に沿って走る溝で、5軸の北側から始まり調査区外に延びている。幅は約90cm、深さ約20cmほどの逆台形の断面である。溝中には木材が認められたが、木組みに関係するものでは無く、むしろ抜き取られた廃材を投げこんだような出土状 況であった。溝底面の東脇に土台材のぶれを防ぐ杭が検出されている。覆土は茶褐色土で砂利・土丹塊・貝片を含む。

出土遺物には、やはりかわらけのほか、国産陶器、瓦、龍泉窯青磁碗・鉢、漆器碗、木製品、銅製品などがあり、木製品には非常に珍しい漆刷毛が出土している。年代的には多少の混乱がみられるが大きくみて鎌倉時代後期と捉えておきたい。

溝 3

調査区西端に沿って検出された溝である。西側は調査区外にもぐり込んでおり、幅は不明である。逆台形の断面をもち、深さ40cmほどで低面は平らである。

出土遺物には手づくね成形のかわらけのほか、劃花文や櫛掻文青磁碗、国産陶器も少量出土したが、かなりの混乱が認められる。

ここでは若宮大路側溝の木組みが遺存状態の良い調査事例からその構造について述べてみたい。

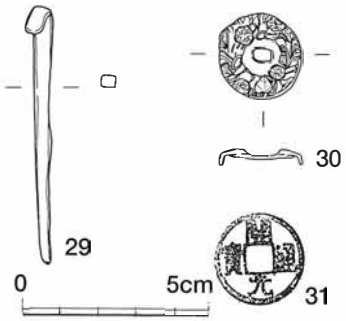


図11　溝 2 出土遺物（2）

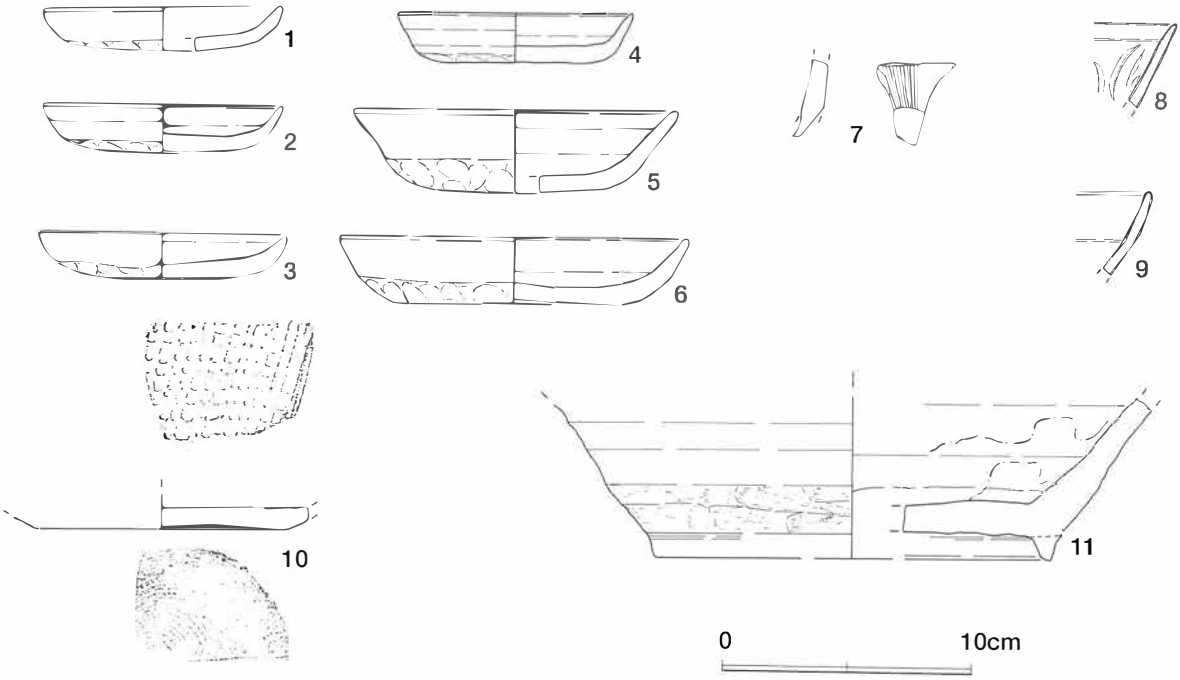


図12　溝 3 出土遺物

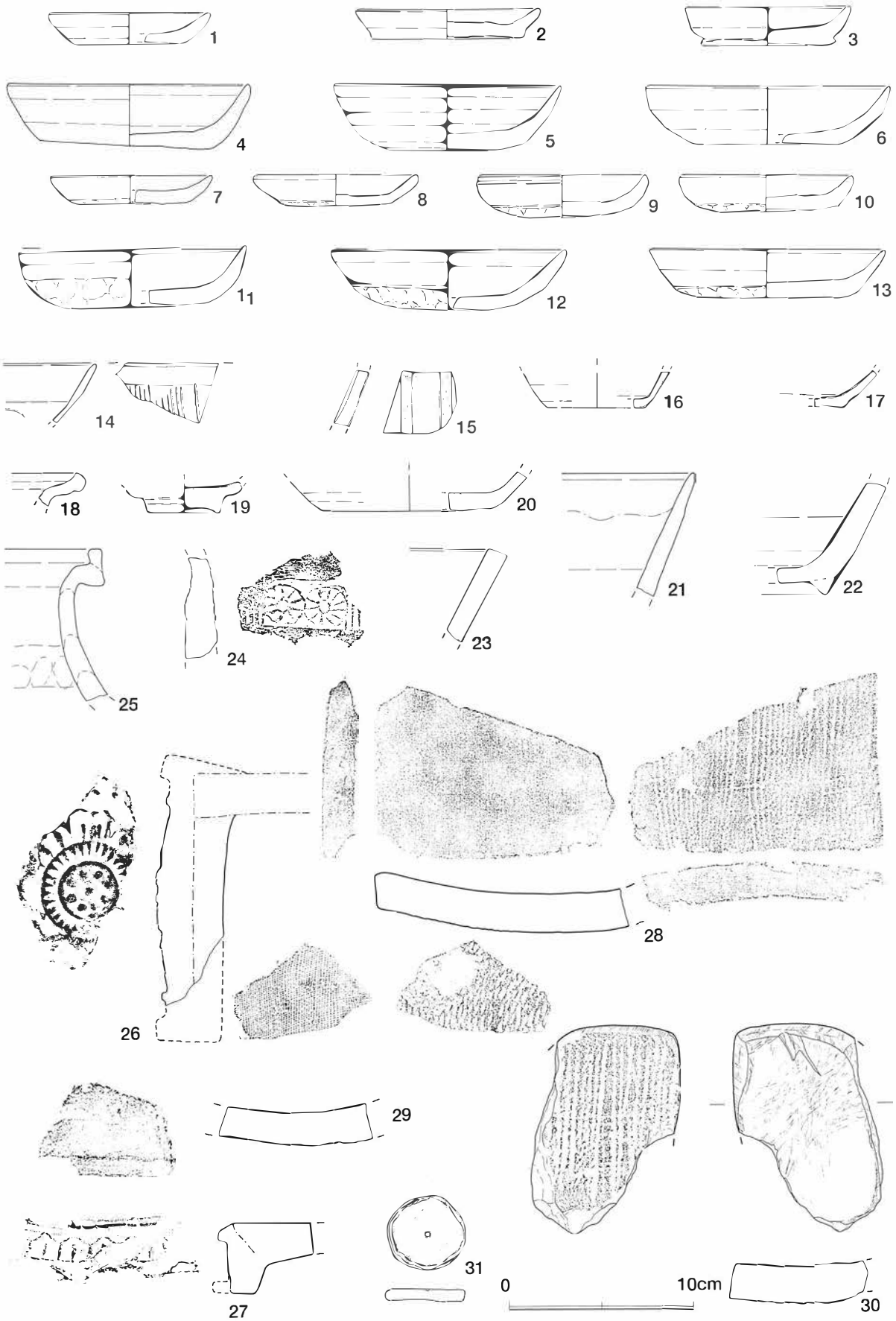


図13　遺構外下層出土遺物

若宮大路側溝は東西両側ともに鎌倉時代中頃には木組み構造の側溝になっていたことが、近年の若宮大路周辺の調査成果から解明されてきている。まず構造は箱堀にした溝底の両側縁に約３ｍ（１丈）幅で、柄穴を切った角材の土台（土台材１本分の長さ約390～430cm、柄穴の芯々50～60cm間隔）を据えて、その柄穴には束柱（長さ約150cmの角材で両端柄切り）を立てて、地表になる高さで束柱上に土台材と同じ柄穴をもつ縁木状 の角材をのせて組み合わせる（Ｉ字形に材を組む)。さらに裏込めにあたる土壁をおさえる壁板は横板材を用い、掘り方裏込めとＩ字形の材に挟まれるようになる。

ところで、外方からの土圧を防ぐために次のような方法が取られていた。一つが北条時房・顕時邸跡（図１－25地点・鶴岡旅館用地）で確認された側溝は、内側の底面と地表面に横梁の角材をかませるようにしていたと考えられる。『北野天神縁起』に出てくる菅原是善邸の前には、木組みの溝が描かれている。そこには地表面に縁木状 の木材とともに、壁を支える束柱上部の位置に横梁らしき角材を支えとして入れている。もう一つは横梁を用いないもので、『蒙古襲来絵詞』にみられる秋田城介安達安盛邸の前に描かれた木組み溝がり、それでは束柱から柄で控え梁らしき角材の先端が角のように顔を出している。それと同じ構造が予想されるものが、北条時房・顕時邸跡（同図－24地点・民宿ビル用地）や北条小町邸（北条泰時・時頼邸跡　同図－11地点・鎌倉彫店舗地点13地点）などから検出された外方（溝肩側）地中に控え梁をもつもので、壁を支えている束柱の一本置きに入れている。

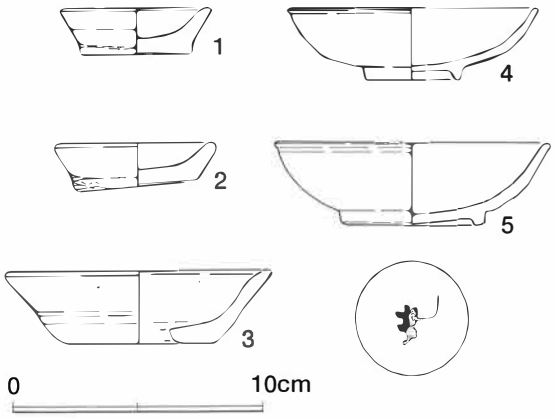


図14　遺構外上層出土遺物

このような木組み構造は、規模の違いはあるものの市街地の調査例にもみられ、若宮大路周辺遺跡（図１－９地点）の小町大路西側溝や足利公方屋敷跡（「公方屋敷跡　浄明寺三丁目143番２地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10平成５年度発掘調査報告』)、今小路西遺跡（御成小学校内）などの溝に使われ、しかも方形竪穴建築址は柄穴を切った角材の土台に隅柱や間柱を立て、外側に横板材の壁板で土壁をおさえる構造になっている。要するに建物と溝という用途の違いがあるものの、使用された土木技術は当時の鎌倉では一般的な工法であったようである。

図8	種　類	法量　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	法量　口径4.8cm　底径4.2cm　器高1.0cm　せいけい　ロクロ　内折れ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒 色調　淡赤灰色
2	かわらけ	法量　口径8.0cm　底径5.4cm　器高1.6cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　小石 色調　淡橙灰色
3	かわらけ	法量　口径7.7cm　底径5.0cm　器高1.85cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　小石 色調　淡黄灰色
4	かわらけ	法量　口径8.7cm　底径6.9cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　白針　赤色粒 色調　淡赤灰色
5	かわらけ	法量　口径7.6cm　底径5.7cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　小石 色調　黄灰色（内面赤灰色）
6	かわらけ	法量　口径12.2cm　底径7.7cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　色調 淡黄灰色
7	かわらけ	法量　口径11.5cm　底径8.5cm　器高3.3cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　赤色粒 色調　淡茶灰色
8	かわらけ	法量　口径12.5cm　底径7.6cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　小石 色調　淡黄灰色
9	かわらけ	法量　口径12.8cm　底径8.2cm　器高4.2cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　赤色粒　土丹粒 色調　淡肌色
10	白かわらけ	法量　口径6.1cm　底径6.7cm　器高1.0cm　せいけい　手づくね　内折れ　胎土　微砂　雲母　白色粒 色調　乳白色
11	かわらけ	法量　口径8.1cm　底径6.5cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　赤色 粒　色調　暗黄灰色
12	かわらけ	法量　口径8.5cm　底径7.5cm　器高2.2cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂 色調　暗灰白色
13	かわらけ	法量　口径9.4cm　底径7.9cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒 色調　橙白色
14	かわらけ	法量　口径8.9cm　底径9.2cm　器高1.5cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針 色調　淡黄灰色
15	かわらけ	法量　口径13.5cm　底径10.8cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針 色調　肌色
16	かわらけ	法量　口径13.3cm　底径11.2cm　器高3.1cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　白色粒　赤 色粒　小石　色調　暗橙灰色
17	青磁 碗	低部～体部片　素地　灰色　若干気孔を含む　緻密　釉薬　淡灰黄色透明　備考　櫛　描文
18	青磁 碗	体部片　素地　灰白色　緻密　釉薬　淡黄緑色透明　備考　櫛描文
19	青磁 皿	低部片　法量　底径5.5cm　素地　灰色　若干気孔を含むが緻密　釉薬　淡灰黄色　透明　貫入あり　備考 櫛描文
20	青磁 碗	口縁～体部片　法量　口径15.9cm　素地　灰白色　緻密　釉薬　淡灰緑色　備考　劃花文
21	青磁 碗	口縁～体部片　素地　黄灰白色　堅緻　釉薬　淡灰黄色透明　貫入多くあり　備考　劃花文
22	青磁 碗	口縁片　素地　暗灰色　堅緻　釉薬　灰緑色半透明　備考　無文

表1　溝1出土遺物観察表（1）

23	青磁 碗	低部～体部片　法量　底径5.5cm　素地　灰色　緻密　釉薬　淡黄緑色半透明　貫入少しあり　備考　無文
24	瀬戸 折縁鉢	口縁～体部片　法量　口径19.8cm　胎土　灰白色　釉薬　灰緑色
25	常滑 捏鉢	口縁片　胎土　長石　小礫を多く含む　色調　茶褐色　芯部　灰黒色
26	常滑 捏鉢	低部～体部片　胎土　長石　小礫を多く含む粗土　色調　茶褐色　芯部　灰黒色
27	山茶碗窯 捏鉢	口縁～体部片　法量　口径27.0cm　胎土　白色粒　雲母　小石　色調　灰色
28	渥美 捏鉢	低部～体部片　法量　底径12.1cm　胎土　黒色微砂　色調　灰色　芯部　灰色
29	土製品 灯明具か	低部片　法量　底径5.4cm　胎土　微砂　白色粒　色調　乳白色　備考　仏華瓶　ミニチュアの可能性もあり
30	鐙瓦	法量　瓦当径（12.8cm）　男瓦部厚1.8cm　胎土　暗灰色　砂粒　白色粒　良土　色調　暗灰～灰黒色　備考　外区片　小粒の珠文密　巴文か
31	宇瓦 唐草文	胎土　灰褐色　細砂粒　色調　灰黒色　製作技法　瓦当貼付け　備考　均正唐草文　瓦当面に黒色微砂の離れ砂
32	宇瓦 剣頭文	法量　瓦当厚3.35cm　女瓦部厚1.7cm　顎部幅1.7cm　胎土　灰白色　黒色粒　白色粒　色調　灰黒色　製作技法　瓦当貼付け　備考　凸線の上向き剣頭文　界線は下のみ
図9		
33	女瓦	法量　厚2.4cm　凹面　細かな布目痕　凸面　×状の斜格子　ナデ調整　胎土　灰色　長石　石礫　粗土　色調　灰褐色　備考　凹凸面に微砂の離れ砂
34	鉄製品 釘	法量　長12.2cm　厚0.3cm×0.7cm
35	鉄製品釘	法量　残長5.4cm　厚0.2cm×0.35cm
36	鉄製品 釘	法量　残長5.6cm　厚0.2cm×0.4cm
37	漆器 椀	法量　底径8.9cm　備考　黒漆地に朱漆で草木の文様を描く
38	木製品形代	法量　残長15.2cm　厚1.●cm～1.1cm　備考　人形　横向き
39	木製品 木簡	法量　長36.5cm以上　幅4.1cm　厚0.7cm　備考　墨書あり文字不明
40	木製品	法量　長22.4cm　厚0.7cm　備考　墨書あり意味不明
41	木製品 曲物底板	法量　厚0.7cm
42	木製品 ヘラ状	法量　長17.0cm　幅0.7cm～1.5cm　厚0.2cm～0.65cm

表2　溝1出土遺物観察表（2）

図10	種　類	法量　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	法量　口径8.7cm　底径5.8cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　白色粒　小石　色調　淡橙灰色
2	かわらけ	法量　口径9.0cm　底径6.0cm　器高1.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　色調　橙灰色
3	かわらけ	法量　口径9.2cm　底径7.2cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂雲母　白針　白色粒　色調　淡黄灰色
4	かわらけ	法量　口径9.0cm　底径7.4cm　器高1.8cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　色調　淡橙灰色
5	かわらけ	法量　口径12.2cm　底径9.2cm　器高3.0cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　色調　橙灰色
6	かわらけ	法量　口径11.8cm　底径8.4cm　器高3.2cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　白色粒　色調　暗肌色
7	かわらけ	法量　口径13.0cm　底径8.5cm　器高3.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　小石　色調　暗赤灰色
8	かわらけ	法量　口径7.0cm　底径6.2cm　器高1.5cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　黒色粒　色調　淡橙灰色
9	かわらけ	法量　口径8.4cm　底径7.4cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　赤色粒　白色粒　色調　灰白色
10	かわらけ	法量　口径9.2cm　底径7.9cm　器高1.5cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　小石　色調　暗黄灰色
11	かわらけ	法量　口径10.0cm　底径8.2cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　小石　色調　淡橙灰色
12	青磁 碗	低部片　法量　高台径6.0cm　素地　暗灰白色　緻密　釉薬　黄灰色　透明　貫入あり　備考　劃花文
13	青磁 碗	体部下半片　素地　灰色　気孔やや含むが緻密　釉薬　淡灰緑色　透明　貫入あり　備考　内面　劃花文　外面　櫛描文
14	青磁 折縁鉢	口縁片　素地　灰色　堅緻　釉薬　淡草緑色　備考　無文
15	山皿	法量　口径7.8cm　底径4.2cm　器高2.0cm　胎土　微砂　雲母　石英　長石　小石　色調　暗灰白色
16	常滑 円板	法量　4.7cm×5.0cm　厚0.9cm　備考　周縁は打ち欠きと部分的な研磨
17	鐙瓦	法量　外区幅1.4cm　男瓦部厚2.0cm　男瓦部　凹面　黒色微砂多量に付着　糸切痕　凸面縄目叩きを縦位ナデ　胎土　橙灰色　白色粒含む粗土　色調　橙灰白色
18	宇瓦 剣頭文	法量　瓦当厚3.2cm　顎部幅2.2cm　胎土　暗灰色　雲母を多く含む粗土　色調　暗灰白色　製作技法　瓦当貼付け　備考　凸線の下き向剣頭文界線なし
19	漆器 椀	低部～体部片　法量　底径7.1cm　備考　黒漆地に朱漆で簡略化された「菊花文」(又は御所車の“車輪文”か“日輪文”か？）を外面と内底面にのみ手描きする
20	木製品 曲物底	法量　径7.2cm　厚0.7cm　備考　内外面に黒漆と思われる付着物あり
21	木製品 曲物底	法量　径19.2cm　厚0.7cm　備考　周縁が斜めに面取りされ、側面観が台形を呈す　物質は不明だが底板面に茶褐色の物が付着
22	木製品 曲物蓋	法量　径9.9cm　厚0.8cm　孔径1.2cm　備考　周縁は刃物（小刀）による荒い削りで面取りを施す

表３　溝２出土遺物観察表（１）

23	木製品 漆刷毛	法量　長14.2cm　幅(13.7cm)　厚0.7cm～0.9cm　備考　漆製品を作る際に塗師が使ったものと考えられ、先端部分に多く漆が付着　毛の部分はない
24	木製品 板草履	法量　長20.7cm　厚0.35cm　備考　斜め方向にワラを巻いた時の痕跡あり
25	木製品 板草履	法量　長23cm　厚０．３cm　備考　斜め方向にワラを巻いた時の痕跡あり
26	木製品 箸	法量　残長18.2cm　幅0.6cm
27	木製品 箸	法量　長21.2cm　幅0.5cm
28	木製品 箸	法量　長23.8cm　幅0.7cm
図11		
29	鉄製品 釘	法量　長6.2cm　0.35cm×0.3cm
30	銅製品 釘隠	法量　径2.2cm　釘穴0.3cm～0.5cm　備考　青銅製　表面に菊花と葉を毛刻り
31	銭 開元通宝	法量　径2.4cm　楷書　唐　初鋳　621年

表４　溝２出土遺物観察表（２）

図12	種　類	法量　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	法量　口径9.6cm　底径7.8cm　器高1.8cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　白針　色調　褐色
2	かわらけ	法量　口径9.6cm　底径8.0cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　赤色粒　色調　暗灰白色
3	かわらけ	法量　口径9.5cm　底径8.3cm　器高1.9cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　雲母　白針　赤色粒　白色粒　色調　暗灰白色
4	かわらけ	法量　口径9.5cm　底径8.4cm　器高2.0cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　白針　色調　灰白色
5	かわらけ	法量　口径13.0cm　底径10.4cm　器高3.4cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　白針　色調　淡茶褐色
6	かわらけ	法量　口径14.0cm　底径12.6cm　器高2.7cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　白針　色調　暗灰白色
7	青磁 碗	素地　灰白色　緻密　釉薬　淡黄緑色透明　備考　櫛描文
8	青磁 碗	素地　灰白色　堅緻　釉薬　灰緑色透明　備考　劃花文
9	青磁 碗	素地　灰白色　堅緻　釉薬　薄い草緑色　備考　口縁下沈線から櫛描文か
10	瀬戸 卸皿	法量　底径10.0cm　胎土　灰色　釉薬　淡灰緑色
11	山茶碗窯 捏鉢	法量　底径14.0cm　胎土　白色粒多量　色調　暗灰色

表５　溝３出土遺物観察表

図13	種　類	法量　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	法量　口径8.8cm　底径6.0cm　器高1.7cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　色調　肌色
2	かわらけ	法量　口径9.4cm　底径7.3cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　赤色粒　白色粒　色調　暗灰褐色
3	かわらけ	法量　口径8.9cm　底径7.2cm　器高2.1cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂白針　色調　暗茶灰褐色
4	かわらけ	法量　口径13.2cm　底径9.5cm　器高3.4cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　赤色粒　色調　淡赤灰色
5	かわらけ	法量　口径12.3cm　底径6.4cm　器高3.5cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　白針　色調　暗茶灰色
6	かわらけ	法量　口径13.3cm　底径7.9cm　器高3.1cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　赤色粒　色調　淡茶灰色
7	かわらけ	法量　口径8.8cm　底径6.8cm　器高1.6cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　赤色粒　色調　赤灰色
8	かわらけ	法量　口径9.0cm　底径6.3cm　器高1.7cm　せいけい　手づくね　胎土微砂　赤色粒　色調　暗灰白色
9	かわらけ	法量　口径9.4cm　底径7.8cm　器高2.3cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　色調　暗赤灰色
10	かわらけ	法量　口径９．４cm　底径７．７cm　器高２．０cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　赤色粒　色調　淡赤灰色
11	かわらけ	法量　口径12．２cm　底径11．７cm　器高３．１cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　小石　色調　赤灰色
12	かわらけ	法量　口径12．７cm　底径10．５cm　器高３．３cm　せいけい　手づくね　胎土　微砂　赤色粒　色調　淡赤灰色
13	かわらけ	法量　口径12．８cm　底径９．９cm　器高２．７cm　せいけい　手づくね　胎土微砂　赤色粒　色調　灰白色
14	青磁 碗	口縁～体部片　素地灰　白色　緻密　釉薬　黄緑色　透明　備考　内面　劃花文　外面　櫛描文
15	青磁 壷	体部片　素地　灰白色　緻密　釉薬　淡緑色　失透　備考　酒会壺片か？
16	白磁 口兀皿	低部～体部片　法量　底径５．２cm　素地　白色　緻密　釉薬　淡灰青色　透明
17	黄釉 盤	低部片　素地　長石粒多い粗土　粘質　釉薬　淡黄緑色
18	瀬戸 折縁鉢	口縁部片　胎土　明灰色　釉薬　灰釉を薄くハケ塗り
19	瀬戸 天目茶碗	低部片　法量底　径４．１cm　胎土　黄味灰白色　やや緻密　釉薬　鉄釉
20	瀬戸 折縁鉢	低部～体部片　法量　底径９．２cm　胎土　黄味灰白色　微砂　釉薬灰釉を薄くハケ塗り　備考　内底に印花文
21	山茶碗窯 捏鉢	口縁～体部片　胎土　白色粒多量に含む　色調　暗灰色　備考　口縁部内面に緑灰色の自然釉
22	山茶碗窯 捏鉢	低部～体部片　胎土　白色粒多量に含む　色調　灰色　備考　貼付け高台

表６　遺構外下層出土遺物（１）

23	常滑 捏鉢	口縁部片　胎土　砂粒　小石　色調　橙色
24	常滑 甕	肩部片　胎土　小石粒やや少ない　色調　赤銅色　芯部　灰黒色　備考　叩き車輪文か
25	常滑 甕	口縁～頸部片　法量　縁帯幅1.9cm　胎土　長石　小石粒　色調　暗灰褐色　降灰茶褐色
26	鐙瓦 蓮華文	法量　瓦当径(15.3cm)　内区径(8.8cm　中房径3.3cm　蓮子数１＋８　外区幅(3.3cm)　男瓦部厚2.2cm 胎土　灰色　白色粒　雲母を多く含むが良土　色調　灰黒色　備考　八葉複弁蓮華文　永福寺創建瓦と同笵
27	宇瓦 剣頭文	法量　瓦当厚3.2cm　上外区厚0.9cm　下外区厚1.1cm　女瓦部厚2.0cm　顎部幅2.3cm　胎土　白色　小石 赤色粒を多く含む粗土　色調　灰白色　製作技法　瓦当貼付け　備考　凸線の上き間剣頭文　上下に界線 永福寺Ⅲ期瓦と同笵
28	女瓦	法量　厚2.0cm　凹面　細かな布目痕を丁寧な縦位ナデでスリ消す　凸面　縦位縄目叩き離れ砂打ち込まれる　胎土　砂粒含むが精良土　色調　灰黒色　備考　永福寺創建瓦と同種
29	女瓦	法量　厚1.7cm～1.9cm　凹面　布目痕　凸面　縄目叩き　胎土　砂粒を含むが良土 色調　灰褐色　焼成堅緻　備考　今小路西遺跡出土の古代瓦と類似（一枚作り）
30	女瓦 転用砥石	法量　厚2.0cm　凹面　離れ砂付着　凸面　縄目叩き　胎土　砂粒を含むが良土 色調　暗灰色　備考　凹面の上方と端面、側面に多数の切擦痕を残す　砥石に使用か？
31	かわらけ 円板	法量　径4.2cm　厚0.6cm　備考　円板状　中央に小孔かわらけ底部を加工

表７　遺構外下層出土遺物（２）

図14	種　類	法量　せいけい　胎土　素地　色調　釉薬　備考
1	かわらけ	法量　口径6.1cm　底径4.5cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　白針　赤色粒　色調　赤褐色
2	かわらけ	法量　口径6.6cm　底径5.0cm　器高1.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　白針　赤色粒　色調　赤灰色
3	かわらけ	法量　口径10.7cm　底径6.1cm　器高2.9cm　せいけい　ロクロ　胎土　微砂　赤色粒　色調　赤灰色
4	漆器 椀	法量　口径9.9cm　底径1.9cm　器高2.9cm　備考　文様なし　全面朱漆（小豆色）　黒漆地に薄く朱漆を塗る　しっかりした輪高台
5	漆器 椀	法量　口径11.1cm　底径5.8cm　器高3.3cm　備考　外底の高台内に黒漆で文字一字を記す　全面朱漆（かなり赤味が強い）　黒漆地に薄く朱漆を塗る

表８　遺構外上層出土遺物

第四章　まとめ

本遺跡は、鎌倉時代中期～後期に執権北条泰時や時頼らの正邸のあった場所とも、いわゆる若宮大路の幕府ともいわれる「北条小町邸跡（北条泰時・時頼邸跡）」の遺跡の南に隣接する宇津宮辻子幕府跡（1225年～1236年）の推定地内（遺跡台帳による）、若宮大路沿いに面したほぼ中央に位置している。宇津宮辻子幕府と言われる、その辻子の位置については今日の宇津宮稲荷に入る雪ノ下カトリック教会南側の小径をあてる説が有力になっている。御所本体は若宮大路に面していなかったらしいことが御所移転にともなう『吾妻鏡』の記事から推定されており（松尾　1992、第一章の引用文献を参照）、東西は若宮大路と小町大路に挟まれ、清川病院北側の道路から教会南側までの現地形に残る区画内のどこかに存在した事は間違いなさそうである。

今回報告分は、国庫補助にかかる部分を調査の対象としたもので、極めて狭い範囲ではあったが、調査区西端に南北に走る溝を（少なくとも２時期以上）が検出された。この南北溝は、現在まで若宮大路沿いでの発掘調査で確認されている大路側溝と、位置、規模等の点からみて、大路側溝と考えてほぼ間違いないであろう。現在までの発掘調査で検出された大路側溝は、いずれもしっかりした構築方法をとっており、溝低部からは等間隔のホゾ穴のある土台材が発見されている。しかしながら本溝からは、他地点でみられたような土台材は確認できなかった。宇津宮辻子幕府推定地区域内での発掘調査は、今までのところ清川病院北西部（図15－事例１）と教会南部（同図事例２）とで広い範囲で実施され、本調査地東方で（同図－事例３）と小町大路沿い地点（同図事例４）とで小規模の例があり、本調査地点を含めて５ケ所の地点で実施されている。以下、各調査地点事例の概要を記し、本調査地点との対比を行ってまとめにかえたい。

＜事例１．清川病院地点・小町二丁目366番１他＞

近世の削平（地表より１ｍ）により中世生活面での遺構確認はされておらず、中世地山上には宝永年間（18世紀初頭）の富士山噴火に伴う火山灰が認められ、その上部には近世における水田床土が厚く堆積していた。検出した遺構は若宮大路の東側溝、そこに流入する直交方向の溝や何棟かの小規模な掘立柱建物跡、塀らしき柱穴列があって、井戸も20基と多く検出されている。出土遺物から年代を考えると13世紀中頃から15世紀初頭に位置付けられるが、遺構の主体は鎌倉時代後期で幕府のあった時期までは遡らないものがほとんどである。いずれの事例も幕府そのものについては明らかにならなかったが、考え方を変えれば幕府の北端部はあまり利用されていない地域であったのかもしれない。

＜事例２．本調査地東方地点・小町二丁目354番12外＞

カトリック教会北方に位置した場所で、13世紀前葉から14世紀前半にわたる２次期の生活面とそれに伴う遺構が確認されているが、主体は13世紀前半のもので幕府が存在した鎌倉時代前期まで遡りそうである。検出した遺構は多数の柱穴と井戸や土壙、調査区中央で東西方向の塀跡がある。塀跡は幅80cm程の布掘り状 の掘り方をもち、底面に一辺約60cmの方形柱穴が120cmの間隔で配されたもので、一般の屋敷内を区画するような塀や柵などとは異なる大がかりな規模を有している。

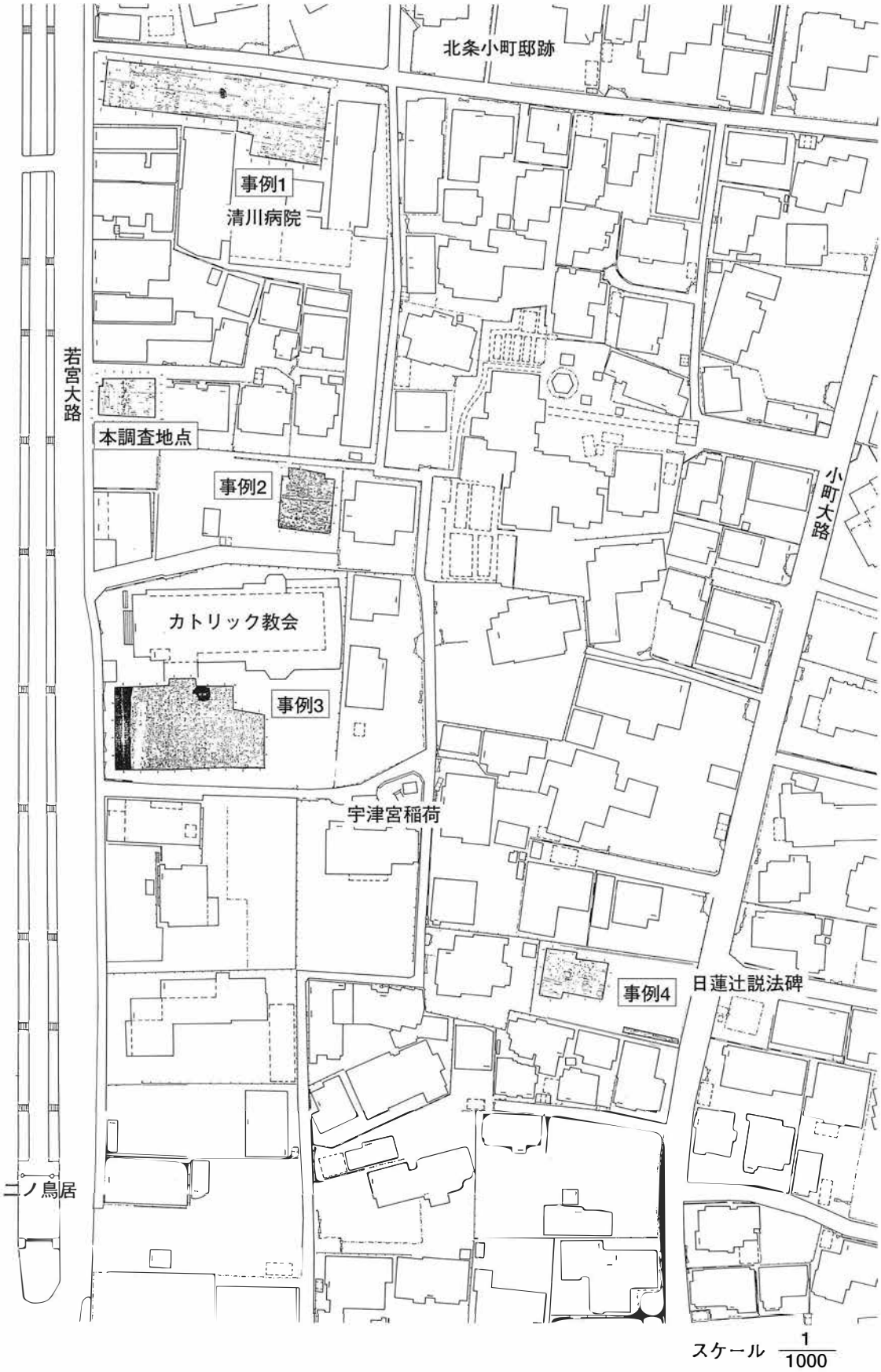


図15　宇都宮辻子幕府の調査地点事例

＜事例３．カトリック教会地点・小町二丁目354番２＞

若宮大路よりやや東に入った場所に位置し、２次期の生活面が確認された。１面の遺構は、道路状遺構・溝状遺構・土壙・かわらけ溜まり数ケ所で、年代は出土遺物から14世紀前半と考えられる。２面の遺構は、中世地山面上で掘立柱建物９棟・柱穴列・橋脚・溝状遺構・土壙・井戸19基・柱穴多数を検出した。若宮大路東側溝は後世の撹乱により発見されなかったが、鎌倉時代前期の柱間数が５～６間という大型の掘立柱建物跡と建物を繋いだ渡廊を想起させる柱穴列があり、建物の軸方位はほぼ一定で、大規模な建物をともなう場所であったと考えられる。

＜事例４．日蓮辻説法碑前地点・小町二丁目389番１＞

小町大路に面した場所に位置し、この遺跡の南は幕府から商業免許を得ていた「小町」の推定地でもあり、往来の多い繁華な場所であった。中世は本調査区が５面（13世紀前葉～15世紀前半）にわたる生活面から掘立柱建物・井戸・土壙・溝・柱穴列と多数の柱穴、また小町大路確認トレンチからは現小町大路より西へ約6.5mの所で大路側溝西肩と思われる落ち込みが確認されている（15世紀前半頃）。検出した遺構の軸方位や遺物などの特徴から４期に分けられる。１期は13世紀前半から中頃で中世地山上面から現小町大路に平行した柱通り方向の掘立柱建物や井戸状遺構が調査区西側に寄った位置で確認された。13世紀後半の２Ａ期も建物の位置関係は１期を踏襲するが、現若宮大路にほぼ平行した柱通りの掘立柱建物、土壙が検出され、13世紀後半～14世紀前半の２Ｂ期は建物方向も２Ａ期に近い柱通りを示すが、建物主軸が東西位で位置も小町大路側に進出している。３期は15世紀前半で遺構は現小町大路の軸方位に大きく変化する。小型の掘立柱建物１棟・井戸・土壙・溝が主体で、この時期ここは町屋的な様相の場所であったと考えられる。

以上のような事例から、宇津宮辻子幕府推定地内の様相が、若干ではあるが見え隠れするのではないだろうか。大雑把な見方をすれば、若宮大路沿いでは近世の削平が著しいが、東へ入るに従い若宮大路に平行する建物、大路側溝に直行する東西溝、また小町大路に平行した建物等が目立ってくる。本調査地点は、近世水田耕作土の削平を受け、宝永の火山灰の下から所謂大路側溝を検出した。これは事例１とかなり類似点をもち、本地点の遺構が、事例１で確認された大路東側溝に続く可能性を指摘できよう。事例４では現小町大路に平行した西側溝の肩が確認され、当時の町割の区画が現在と大きくは変化していなかったと考えられる。しかし事例１の掘立柱建物・井戸などの遺構は概して鎌倉時代後期のもので、幕府が存在した時期までは遡らないようである。本地点を含め宇津宮辻子幕府の存在そのものを示す明確な遺構を確認することができなかったが、御所本体は若宮大路に面していなかったとの推定もなされており、両事例ともこの時期の遺構がすくないのは中世地山の著しい削平による原因ばかりではなさそうで、幕府の北端は余り利用されない場所であったのかもしれない。

ところが若宮大路から東に入る場所に位置する事例２・３からは、鎌倉時代前期を中心とした遺構が検出されている。事例２は調査範囲も狭く、建物の規模を把握するには至らなかったが、一般的な武家屋敷内にみられない立派な東西方向の塀跡が確認されている。事例３からは柱間数５間以上、整然とした配置をもった大型の掘立柱建物が検出されており、事例２とともに幕府の存在を示唆する遺構かもしれない。宇津宮辻子幕府は若宮大路と小町大路に挟まれた、現在の地形に残る区画内のどこかに御所本体があった事は間違いなさそうである。『吾妻鏡』の記事には御所の移転に際して「礎を据える」という記載が散見しており、御所の主要な建物は礎石建物であったことが予想されるが、これらの事例では礎石建物が検出されておらず、宇津宮辻子幕府跡の解明はまだまだ将来の課題であろう。

宇津宮辻子幕府跡の花粉化石

鈴木　　茂（パレオ・ラボ）

鎌倉市小町二丁目に所在する宇津宮辻子幕府跡遺跡において行われた発掘調査で、いくつかの溝が検出された。このうち、若宮大路に沿って検出された溝と、それよりやや奥から検出された溝を埋積している堆積物について花粉分析を行った。時代は出土遺物から13世紀中葉と考えられており、この頃は幕府の実権が北条氏に移り、鎌倉が最も栄える時代を迎えようとしている時期である。こうした鎌倉の繁栄に際して遺跡周辺の植生は大きな影響をうけたことが予想され、花粉分析よりそうした様相について明らかになることが期待される。

1．試料

花粉分析用試料について、若宮大路に沿って検出された溝２では、調査区南壁より柱状で採取し、実験室内であらためて土相観察を行って後、７点採取し、試料とした（図１）。また、この側溝２から２～３ｍ奥より検出された溝１については、調査区北壁よりスポットで採取した９点を試料とした（図１）。以下に試料を採取した各土層（中世）について記載を示すが、層位番号は遺跡より頂いたセクション図に記されていたものを使用した。

ａ．溝２（試料番号１～７）

Ｅ層は褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土（試料１）で、その上位のＤ層は近世の水田層ではないかと考えられている、泥岩（土丹）混じりの黒灰色砂質粘土である。Ｉ層も褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土であるが、ややシルト質で、大型のレキが点在している（試料２）。Ｎ層も褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土であるが、上位のＩ層より明るい（試料３）。下位のＯ層は暗灰色の砂レキ層である。Ｐ層は上部の黒褐色有機質粘土（試料４、５）、中部の明灰色シルト（土丹の風化土？）、および下部の黒褐色（有機質）を斑状に含む暗灰色砂質シルト（試料６）に細分される。Ｑ層は青色を帯びた暗灰色の砂質シルトで、黒褐色の有機質粘土が混じり、貝殻片が含まれる（試料７）。Ｒ層は黒褐色のシルト質砂で、縦方向に根様の植物遺体がみられる（地山？）。

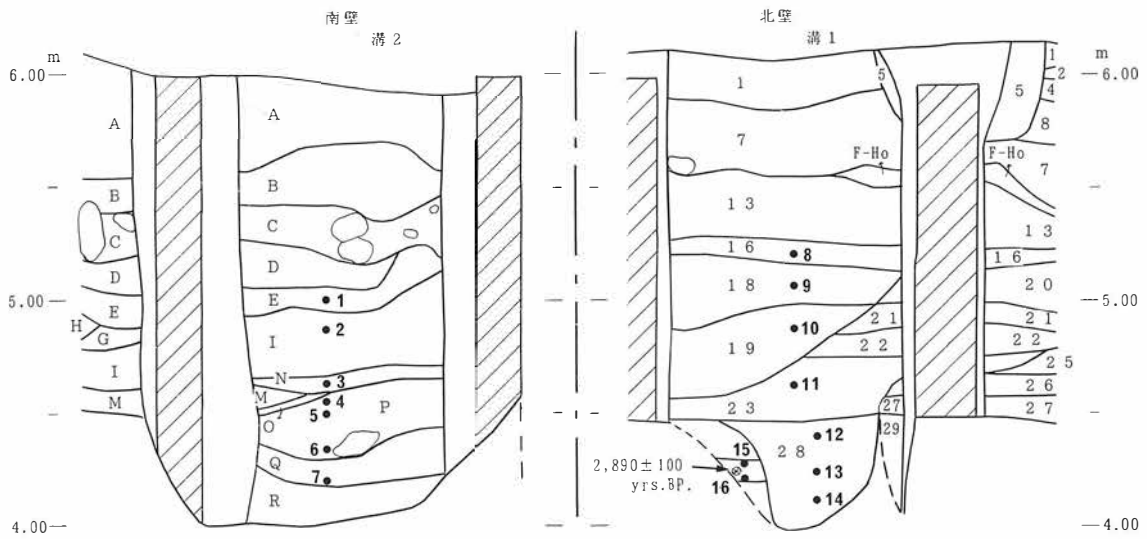


図１　試料採取地点付近の土層断面図と試料採取層準

b．溝１（試料番号８～16）

16層は黒灰色の砂質粘土（試料８）で、その上位の13層は近世の水田層と考えられている暗褐色の砂質粘土で、さらに上位の７層との境界部には富士宝永テフラ（Ｈ－Ｆ●）がレンズ状 に観察される。18層は黒灰色の砂質粘土～シルトで、土丹が多く含まれている（試料９）。19層は黒灰色の砂質粘土で、貝殻の小片が散在している（試料10)。23層は黒灰色の粘土質の砂レキで、貝殻の小片が散在しており、大型の土丹が点在している（試料11)。また、下位との境界部にはクスノキ（松葉（パレオ・ラボ）が同定）の材片がみられる。28層は、上・中・下部に別れ、そのうち上部は黒褐色の砂質粘土で、貝殻小片が少しみられる（試料12)。中部は黒灰色の粘土で、軟らかく、粘性が高い（試料13)。下部は黒灰褐色の粘土で、軟らかく、さらに粘性が高くなっている（試料14)。また、側溝部を離れた地点における23層の下位は地山層となっており、黄灰色の砂レキの下位に、黒灰褐色の砂質泥炭質粘土(試料15、16)がみられ、その下位は灰色の砂レキ層となっている。なお、試料15、16を採取した砂質泥炭質粘土より木材遺体（トチノキとアカガシ亜属）が検出され、この木材遺体を用いて放射性炭素年代測定を行った結果、２，890±100ｙｒｓ．ＢＰ．（ＰＬＤ－139）が得られた。

２．大型植物化石

溝１の23層と下位の28層との境界付近と思われる層準より植物遺体に富む粘土塊が採取され、この植物遺体について大型植物化石分析を行った（吉川純子さんに依頼)。その結果、樹木類ではクロマツの葉、マツ属の種子・雄花序、スギの種子・雄花序、コナラ属殻斗片、サンショウの内果皮が検出された。また、草本類では、オオムギ近似種の穎果、ハナタデ近似種・ノミノフスマ近似種・イヌコウジュ属の果実、アオツヅラフジ・カタバミ属・ノブドウ・ナス属・ヒョウタン仲間・メロン仲間の種子が得られた。

３．分析方法

上記した16試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約２～４ｇ）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、重液分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

４．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉50、草本花粉41、形態分類を含むシダ植物胞子３の総計94である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図２（側溝２)、図３（側溝１）に示した。なお、これらの分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群は、それら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を

表１　宇都宮辻子幕府跡遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	南壁 若宮大路側溝２							北壁 若宮大路側溝１								
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
樹木																	
マキ属	*Podocarpus*	2	-	-	2	3	2	4	-	1	-	3	3	-	1	1	1
モミ属	*Abies*	-	-	-	-	5	1	2	-	5	4	2	7	-	3	19	16
ツガ属	*Tsuga*	1	2	-	2	7	4	9	2	6	6	6	9	3	12	1	4
トウヒ属	*Picea*	1	1	-	-	-	1	1	-	4	4	-	1	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	132	54	96	14	2	5	9	206	99	73	41	9	5	6	2	4
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	34	28	14	1	2	1	2	38	16	10	3	4	2	2	1	2
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	1	2	4	2	2	-	1	-	1	-	1	1	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	7	16	27	23	41	66	65	12	17	8	44	87	29	55	49	34
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	1	3	4	2	3	6	2	3	7	-	2	4	8	5	19	16
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	1	2	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	-	2	1	-	-	1	-	1	3	-	-	2	-	2	6
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	1	5	1	5	9	2	2	1	4	4	7	5	6	4	7	15
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	-	1	4	1	5	2	-	2	3	3	3	2	2	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	4	5	2	3	-	-	1	1	5	6	6	4	2	3	3	1
ブナ属	*Fagus*	-	5	1	-	3	1	-	-	6	7	5	-	1	-	-	2
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	3	3	5	10	9	7	3	6	1	8	10	6	14	3	6
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	2	6	14	19	12	22	27	4	7	16	26	29	42	69	42	41
クリ属	*Castanea*	-	-	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	2	2	4	4	11	8	-	2	3	6	2	6	12	3	6
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	1	4	4	4	1	2	3	3	5	4	5	8	9	44	45
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	2	-	-	-	-	-	4	18	3	2	1	2	3	5
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-
シキミ属	*Illicium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
フウ属	*Liquidambar*	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サクラ属近似種	*cf. Prunus*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	1
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	2	3	1	2	1
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
ムクロジ属	*Sapindus*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	4	1
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	4	2	2	1	-	3	1	4	-	1	1	-	-
シナノキ属	*Tilia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サカキ属－ヒサカキ属	*Cleyera-Eurya*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	2	-	4	4	1	-	-	1	-	-	1	1	-	1
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
テイカカズラ属	*Trachelospermum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ムラサキシキブ属	*Callicarpa*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
クサギ属	*Clerodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	1	-
草本																	
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	2	-	-
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	-	-	1	3	1	2	-	-	3	2	5	-	-
イネ科	Gramineae	34	86	286	1389	626	1397	839	99	297	679	979	1166	249	363	15	5
カヤツリグサ科	Cyperaceae	61	53	22	30	41	112	58	17	43	13	25	43	24	35	1	2
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	-	3	-	-	1	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	6	12	14	30	7	-	9	54	5	6	10	10	1	4
ギシギシ属	*Rumex*	1	-	-	-	-	-	-	-	2	13	3	-	-	1	-	-
イブキトラノオ節	*Polygonum* sect. Bistorta	-	-	-	-	3	2	4	-	2	7	57	5	1	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	5	4	3	6	32	-	5	46	2	2	3	3	-	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	3	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	8	29	12	38	78	36	71	16	79	171	169	44	15	31	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	2	2	3	5	1	6	-	4	14	8	5	2	5	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	5	7	6	2	-	-	2	4	7	-	1	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	1	3	2	-	3	5	5	1	2	4	-	-
アブラナ科	Cruciferae	8	48	24	25	16	17	16	21	39	50	77	20	8	18	-	-
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	1	2	-	-	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	5	-	3	2	3	-	-	1	2	5	1	-	-	-
ノアズキ属	*Dunbaria*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
他のマメ科	other Leguminosae	-	-	-	8	8	7	8	-	4	1	7	9	1	-	1	2
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミソハギ属	*Lythrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	4	-	4	2	8	3	-	4	19	10	10	3	1	-	-
シソ科	Labiatae	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-
ナス属近似種	*cf. Solanum*	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	107	1	-	3	-	-
オオバコ属	*Plantago*	2	2	-	2	1	-	8	-	3	2	5	-	-	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	1	2	2	1	1	1	-	1	2	-	1	1	-	-
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キキョウ属	*Platycodon*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミゾカクシ属	*Lobelia*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ベニバナ属近似種	*cf. Carthamus*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	5	17	80	811	306	326	333	6	23	119	288	424	102	161	-	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	3	9	10	19	18	12	1	3	32	15	30	3	9	-	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	24	124	31	8	17	16	20	23	9	16	16	15	8	8	-	-
シダ植物																	
アカウキクサ属	*Azolla*	4	21	10	-	-	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	23	52	22	8	24	12	23	3	27	31	27	27	35	46	79	72
三条型胞子	Trilete spore	7	8	1	1	6	2	5	2	5	5	1	5	3	1	12	5
樹木花粉	Arboreal pollen	188	135	183	98	126	144	150	275	205	183	181	188	139	208	208	213
草本花粉	Nonarboreal pollen	147	368	490	2358	1156	1994	1433	186	531	1255	1797	1807	438	662	18	16
シダ植物胞子	Spores	34	81	33	9	30	14	28	13	32	36	28	32	38	47	91	77
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	369	584	706	2465	1312	2152	1611	474	768	1474	2006	2027	615	917	317	306
不明花粉	Unknown pollen	9	27	13	26	22	22	23	4	24	21	19	24	22	44	47	35

Ｔ．－Ｃ．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

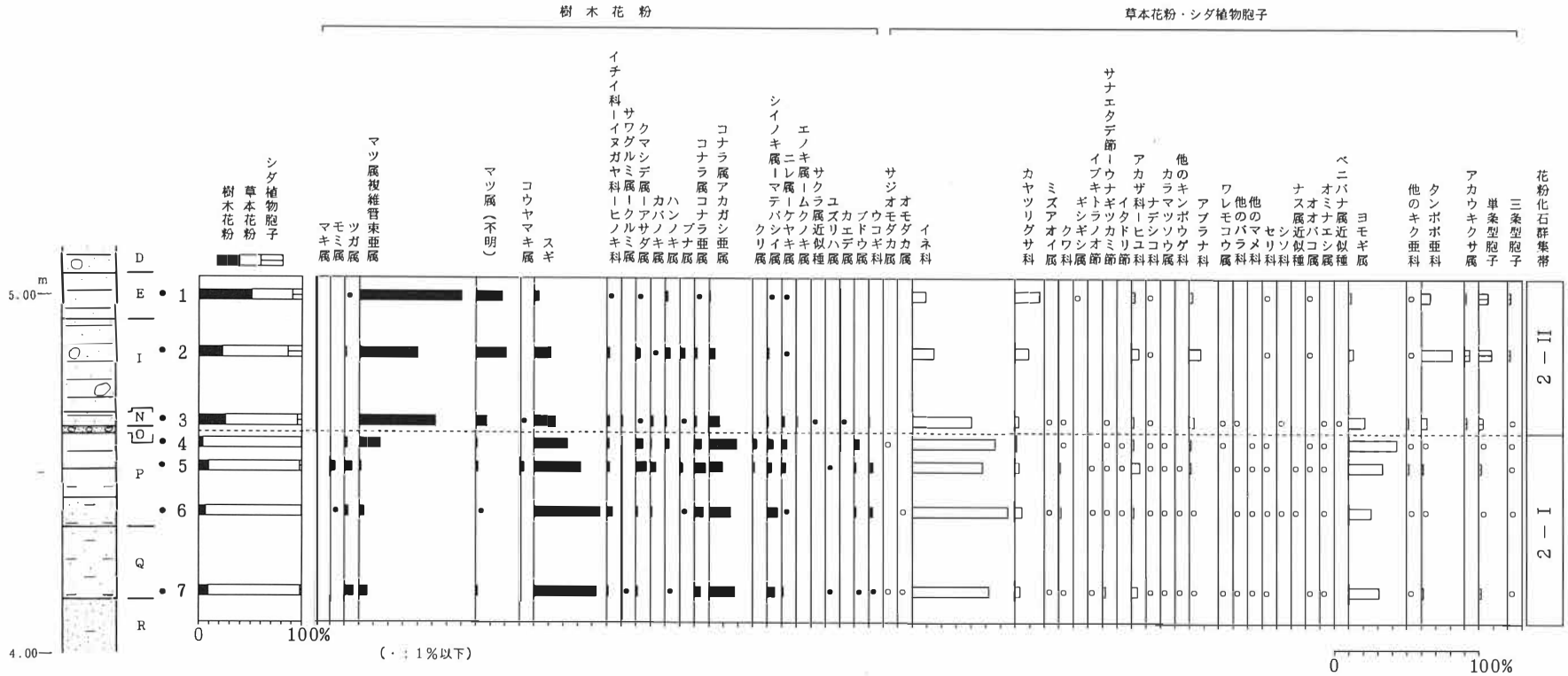


図２　宇津宮辻子幕府跡遺跡側溝２（南壁）の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

a）溝２（図２）

検鏡の結果、樹木花粉の産出傾向から２つの花粉化石群集帯、下位より２－Ⅰ、２－Ⅱを設定した。

花粉帯２－Ⅰ（試料４～７）は草本花粉の占める割合が90％前後と非常に高くなっている。少ない樹木類の中ではスギが40％と高い出現率を示しているが、上部では急減している。次いでコナラ属アカガシ亜属が多く、10～20％の出現率を示し、コナラ属コナラ亜属やシイノキ属－マテバシイ属は５～10％で、クマシデ属－アサダ属も上部において同様の出現率を示している。また、マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が上部の試料４で10％を越えて検出されており、増加する傾向を示している。草本類では、イネ科が50～60％と高い出現率を示して最優占しており、ヨモギ属も20％前後と多く検出されている。その他はいずれも出現率が低く、カヤツリグサ科やアカザ科－ヒユ科が５％前後得られている程度で、また、水生植物のオモダカ属やミズアオイ属が若干検出されている。

花粉帯２－Ⅱ（試料１～３）はニヨウマツ類の急増で特徴づけられ、最上部の試料１では70％弱に達している。２－Ⅰ帯で多産から急減傾向を示していたスギはさらに減少し、アカガシ亜属も同様である。また、その他多くの分類群についても減る傾向がみられ、検出される分類群数も少なくなっている。草本類では、２－Ⅰ帯で多産していたイネ科やヨモギ属は急減し、検出される分類群数も樹木類同様に少なくなっている。反対に、カヤツリグサ科やタンポポ亜科が増加しており、アブラナ科も同様の傾向がみられる。

b）溝１（図３）

本地点においても、樹木花粉の産出傾向から花粉化石群集帯、下位より１－Ⅰ、１－Ⅱ、１－Ⅲを設定した。

花粉帯１－Ⅰ（試料15、16）はスギ、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属の多産で特徴づけられる。その他、モミ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科も他帯に比べやや高い出現率を示している。草本類は検出数が少なく、イネ科やカヤツリグサ科などがわずかにみられるだけであるが、単条型のシダ類胞子が多く検出されている。

花粉帯１－Ⅱ（試料11～14）はスギ、アカガシ亜属の多産で特徴づけられるが、アカガシ亜属は上部において減少している。また、ニヨウマツ類が上部の試料11においてやや高い出現率を示しており、急増傾向の始まりを示している。草本類ではイネ科が40～50％と高い出現率を示しており、次いでヨモギ属が多く検出されている。その他、検出数は少ないが、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ科、アブラナ科、セリ科、キク亜科、タンポポ亜科などが全試料から得られている。

花粉帯１－Ⅲ（試料８～10）はニヨウマツ類の急増で特徴づけられ、最上部の試料８では70％を越えている。１－Ⅱ帯で多産していたスギやアカガシ亜属は急減している。また、試料10においてエノキ属－ムクノキ属が他の試料に比べ高い出現率を示している。草本類では、やはりイネ科が高い出現率を示しているが、上部に向かい急減している。次いでアカザ科－ヒユ科が多く検出されているが、やはり上部で減少している。その他、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が１％を越えて得られている。

５．宇津宮辻子幕府跡遺跡周辺の古植生

上記したように、２つの側溝ともほぼ同様の傾向を示していることから、花粉帯を基に遺跡周辺の古植生について示す。

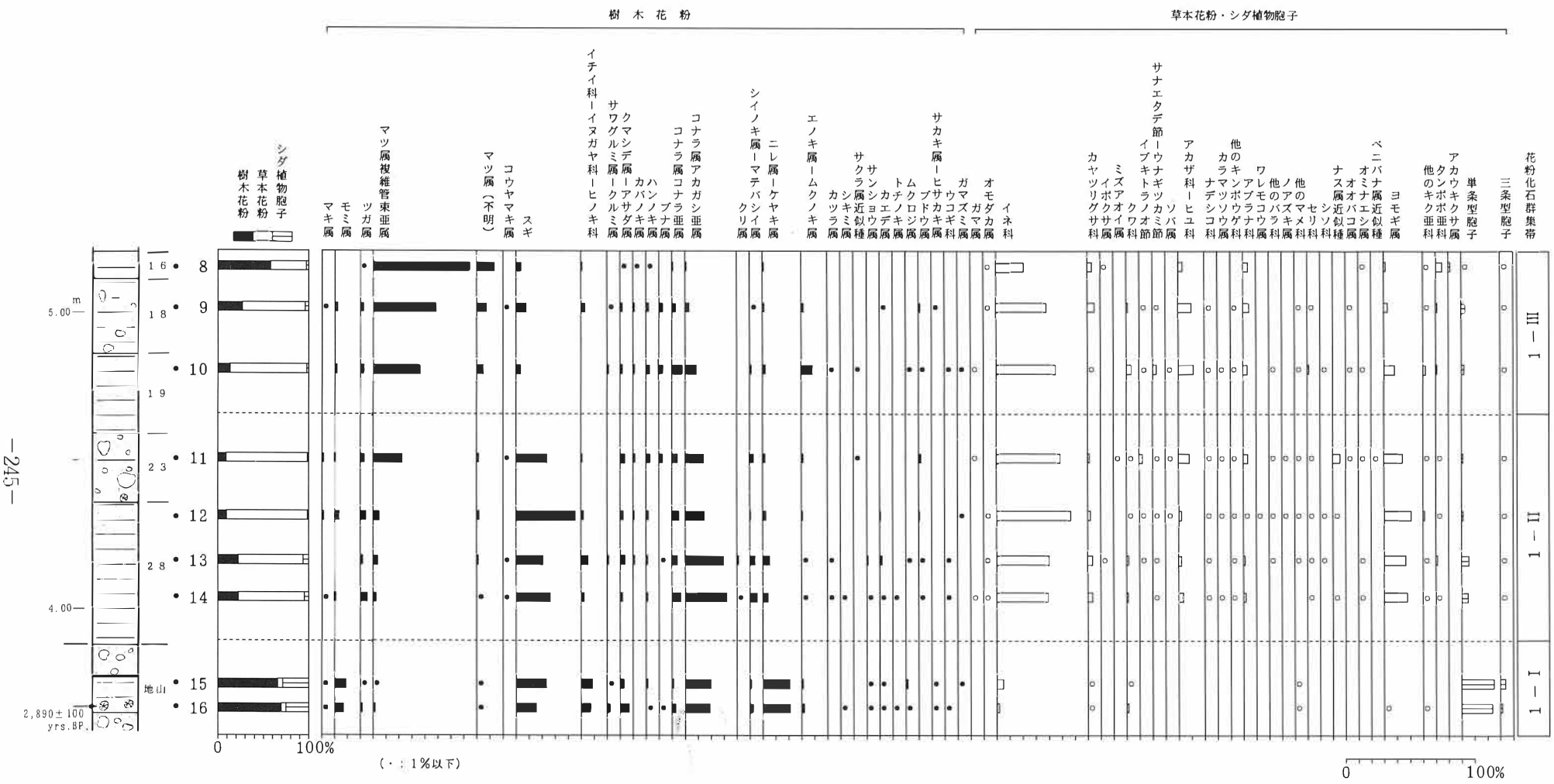


図３　宇津宮辻子幕府跡遺跡側溝１（北壁）の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

a）1－Ⅰ帯

放射性炭素年代測定、2,890±100yrs.BP.から本帯は、縄文時代後・晩期頃と推測され、スギ林・照葉樹林とともにニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹林も多く生育していたものとみられる。他地点の分析結果をみると、縄文時代中期から中世にかけての佐助ヶ谷遺跡ではスギ林が優勢で、アカガシ亜属やシイノキ属－マテバシイ属を主体とした照葉樹林も成立していた（鈴木　1993ｂ）。また、放射性炭素年代（4410±110y.B.P.(GaK－16116)）から縄文時代中期と考えられている大倉幕府周辺遺跡の花粉分析結果（井戸６）では、スギ林・照葉樹林に加え、モミ属やニレ属－ケヤキ属もやや目立って検出されており（鈴木　1993ａ）、今回の分析結果と同様の結果を示している。このように、中世以前の宇津宮辻子幕府跡周辺はスギ林や照葉樹林が優勢であり、モミ属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科・ニレ属－ケヤキ属もこれらに交じって多く生育していたものとみられる。

b）1－Ⅱ帯・2－Ⅰ帯

時期としては出土遺物などから13世紀中葉と考えられているが、この時期の遺跡周辺は依然としてスギ林や照葉樹林が優勢であり、本帯の終わり頃にはニヨウマツ類が増えはじめたと推測される。また、側溝近辺ではイネ科やヨモギ属を主体に、カヤツリグサ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科などの雑草類が生育していた。また、イネ属型とみられる花粉も比較的多く検出されており、水田雑草を含む分類群（オモダカ属・ミズアオイ属など）もわずかではあるが検出され、場所については不明であるが、水田域に生育する植物の花粉も多く含まれていると予想される。

c）1－Ⅲ帯・2－Ⅱ帯

この時期も13世紀中葉と考えられているが、明瞭な植生の交代がみられる。すなわち、それまで優勢であったスギ林や照葉樹林に代わり、アカマツやクロマツといったニヨウマツ類が優勢となった。また、検出される分類群数も減少しており、遺跡周辺丘陵部ではニヨウマツ類が大半を占めるような植生へと変貌したとみられる。この頃の鎌倉は北条氏が実権を握り、繁栄の時期を迎える頃にあたる。市内各地で開発が進み、また、各遺跡で検出される木材遺体の多くはスギであることからも推測されるが、スギ林の多くは伐採や開発などで大きな影響をうけたことが予想される。こうした跡地にニヨウマツ類が侵入し、二次林を形成したと思われ、今回の分析結果もこうした様相を示しているのであろう。

側溝近辺についてみると、イネ科やヨモギ属主体から、カヤツリグサ科・アカザ科－ヒユ科・アブラナ科・タンポポ亜科が増える植生へと変化したようである。また、検出される分類群数も樹木同様かなり減少している。時代的に多少ずれがあるためかも知れないが、若宮大路に近い溝２の方が上記の傾向が強く示されている傾向が見え、都市化とともに側溝近辺においては除草などの整備がよく行われるようになったのではないかと思われる。また、草本花粉における上記のような変化は、水田に関係する植物の影響が少なくなったことにも起因していると考えられ、これも遺跡周辺における都市化を示していると推測される。

このように、13世紀中葉以降の繁栄とともに植生に対する干渉が強くなり、スギ林や照葉樹林からニヨウマツ類を主体とした林へといった変化からも予想されるように、鎌倉の景観は一変した。

６．他地点との対比

本遺跡において、スギ林や照葉樹林を主体とした森林から、ニヨウマツ類への変化が明瞭に読み取れ、

同様のことがこれまで行ってきた市内の多くの遺跡においても示されている。そのうち永福寺跡では、13世紀初めころまではスギ林や照葉樹林が優勢であるが、13世紀前半には減少しはじめ、代わってニヨウマツ類が増加し、13世紀後半には多産している（鈴木　1996ａ）。また、北条高時邸跡では13世紀前半までスギ林や照葉樹林が優勢であるが、13世紀後半には激減しており、ニヨウマツ類は増える傾向にある（鈴木　1996ｂ）。このように、13世紀前半頃を境に植生が大きく代わっており、今回の分析もこの頃の周辺植生の変化を示していると思われる。

時代について、分析を行った側溝試料は出土遺物から全般に13世紀中葉と考えられているが、上記したことから考えるともう少し幅があるのでないかと思われる。すなわち、宇津宮辻子幕府跡に近い北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目337番７）においても今回と同様と思われる溝が検出されており、若宮大路に沿う溝８および溝７においてスギを主体とした温帯針葉樹林と照葉樹林の優勢が示され、この溝８の下部が鎌倉時代初期（12世紀末頃？）、溝７が鎌倉時代初期から前期（13世紀初頃？）と考えられている（鎌倉市教育委員会　1996、鈴木　1996ｃ）。こうしたことや先にも記したように、12世紀末から13世紀初頃にかけてはスギ林や照葉樹林の優勢が各遺跡で示されており、今回の側溝下部（１－Ⅱ帯・２－Ⅰ帯）についても鎌倉時代初期の12世紀末から13世紀初頃ではないかと花粉分析結果からは推測されるのであるが、いかがであろうか。

引用文献

鎌倉市教育委員会（1996）北条小町邸跡（泰時・時頼邸）．鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12　平成６年度発掘調査報告（第２分冊），ｐ.119－260.

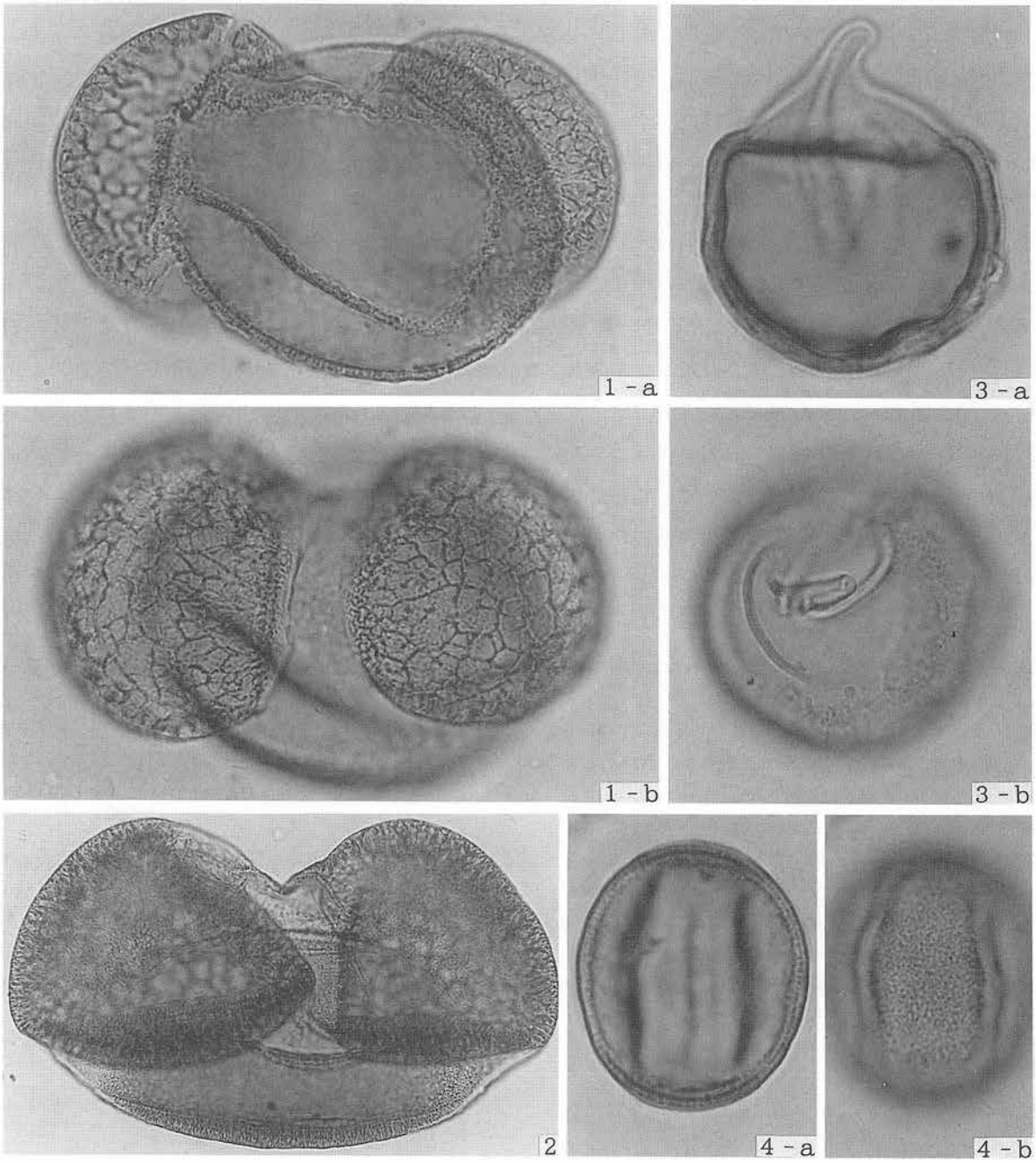
鈴木　茂（1993ａ）大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番１）の花粉化石．鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９　平成４年度発掘調査報告（第２分冊），鎌倉市教育委員会，ｐ.113－124.

鈴木　茂（1993ｂ）鎌倉市佐助ヶ谷遺跡の花粉化石．佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書－第１分冊，佐助ヶ谷遺跡発掘調査団，ｐ.407－430.

鈴木　茂（1996ａ）史跡永福寺跡の花粉化石（平成６年度）．永福寺跡　国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成６年度－，鎌倉市教育委員会，ｐ.40－54.

鈴木　茂（1996ｂ）北条高時邸跡の花粉化石．鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12　平成６年度発掘調査報告（第１分冊），鎌倉市教育委員会，ｐ.90－102.

鈴木　茂（1996ｃ）花粉分析．鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12　平成６年度発掘調査報告（第２分冊），鎌倉市教育委員会，ｐ.261－270.



1：20 μm　　2：50 μm　　3，4：20 μm

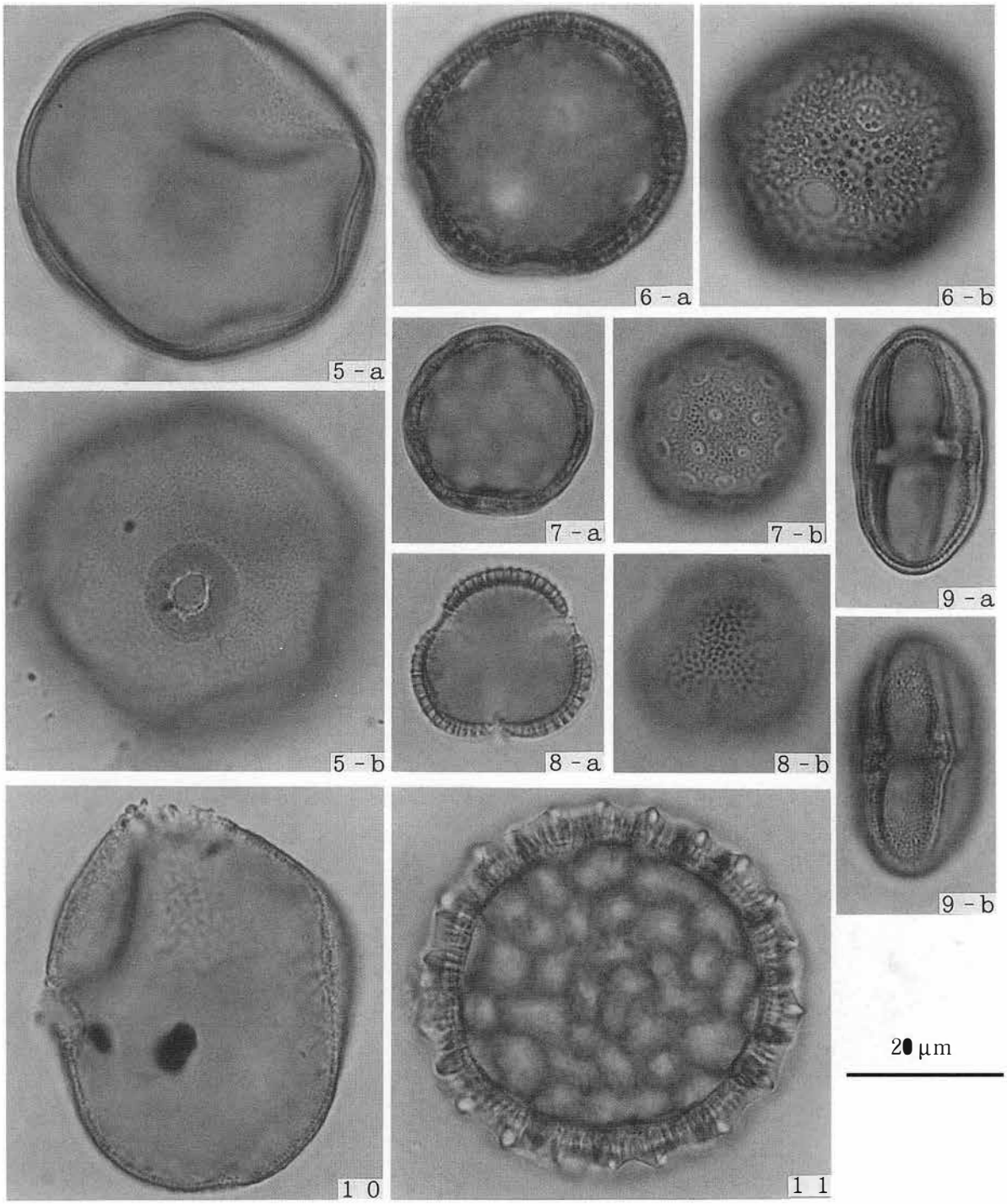
図版1　宇都宮辻子幕府跡遺跡の花粉化石

1：マツ属複維管束亜属　PLC. SS 1805　試料2

2：トウヒ属　PLC. SS 1814　試料7

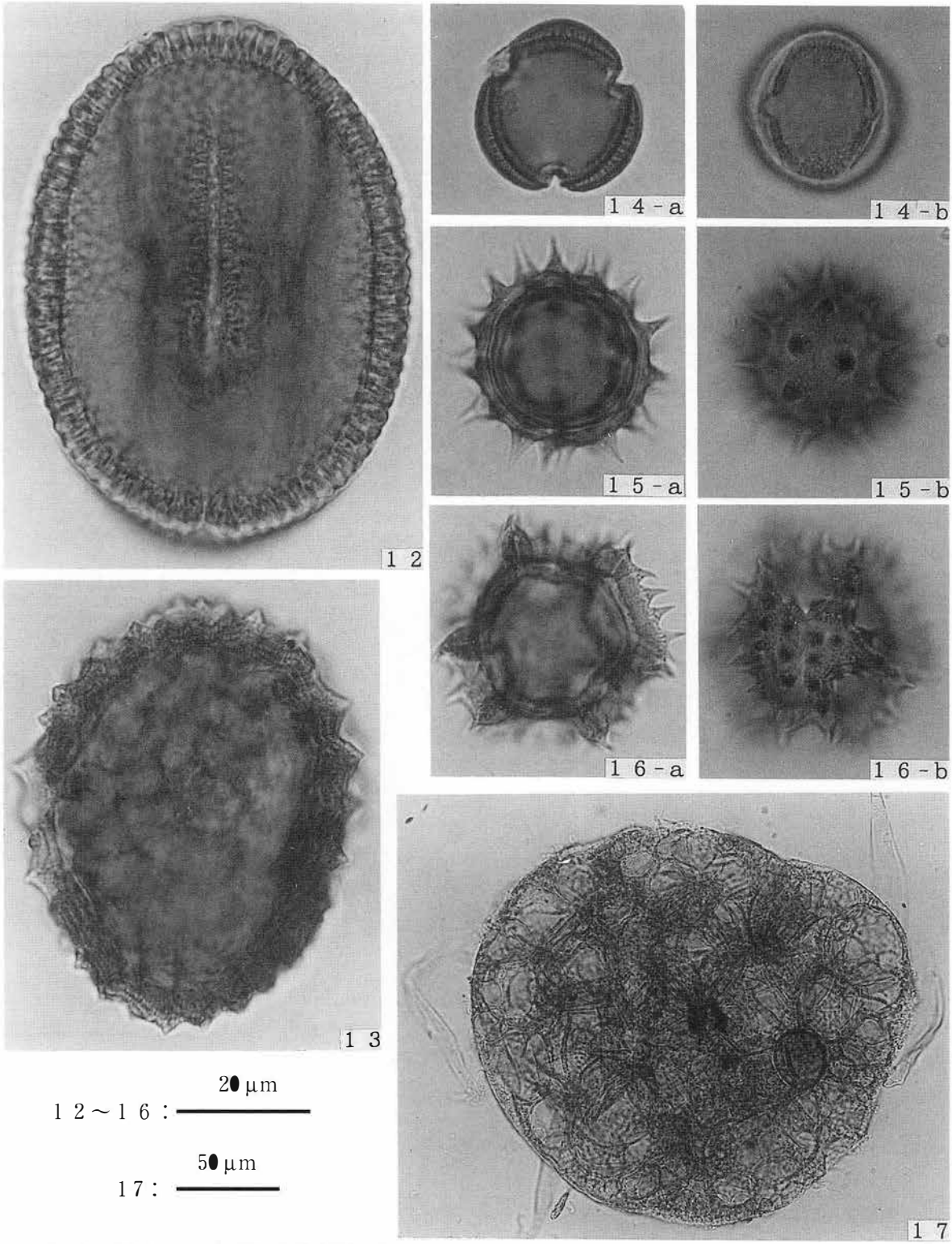
3：スギ属　PLC. SS 1810　試料7

4：コナラ属アカガシ亜属　PLC. SS 1814　試料7



図版２　宇都宮辻子幕府跡遺跡の花粉化石

５：イネ科　PLC. SS 1811　試料７
６：ナデシコ科　PLC. SS 1821　試料11
７：アカザ科－ヒユ科　PLC. SS 1823　試料11
８：アブラナ科　PLC. SS 1815　試料７
９：セリ科　PLC. SS 1816　試料10
１０：カヤツリグサ科　PLC. SS 1824　試料11
１１：サナエタデ節－ウナギツカミ節　PLC. SS 1809　試料７



図版 3　宇都宮辻子幕府跡遺跡の花粉化石

1 2：ソバ属　PLC. SS 1820　試料10

1 3：ベニバナ属近似種　PLC. SS 1822　試料11

1 4：ヨモギ属　PLC. SS 1807　試料 3

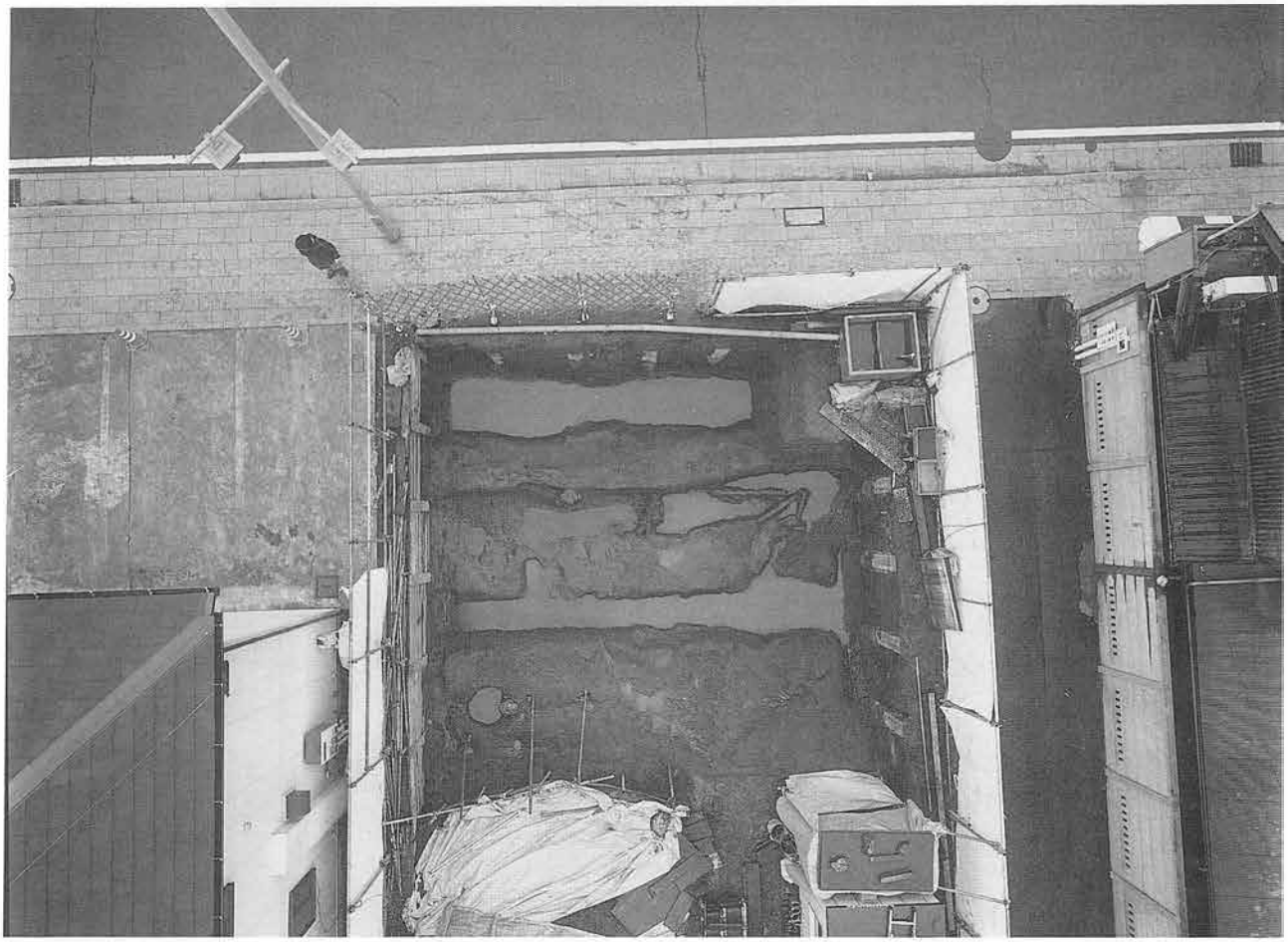
1 5：他のキク亜科　PLC. SS 1817　試料10

1 6：タンポポ亜科　PLC. SS 1812　試料 7

1 7：アカウキクサ属　PLC. SS 1806　試料 3

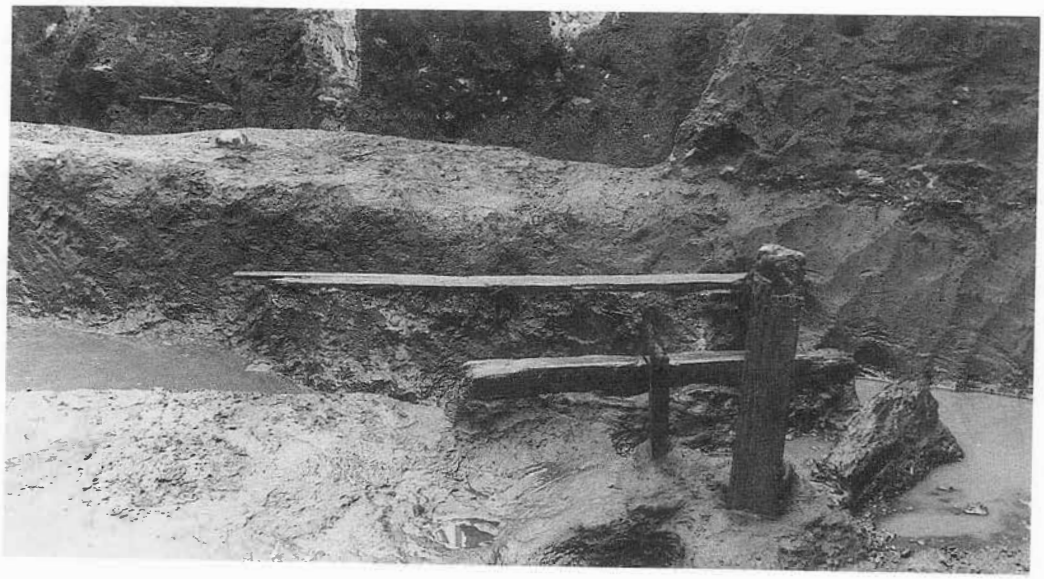
写　真　図　版

▼a　空撮全景



▼b　調査区全景（東から）

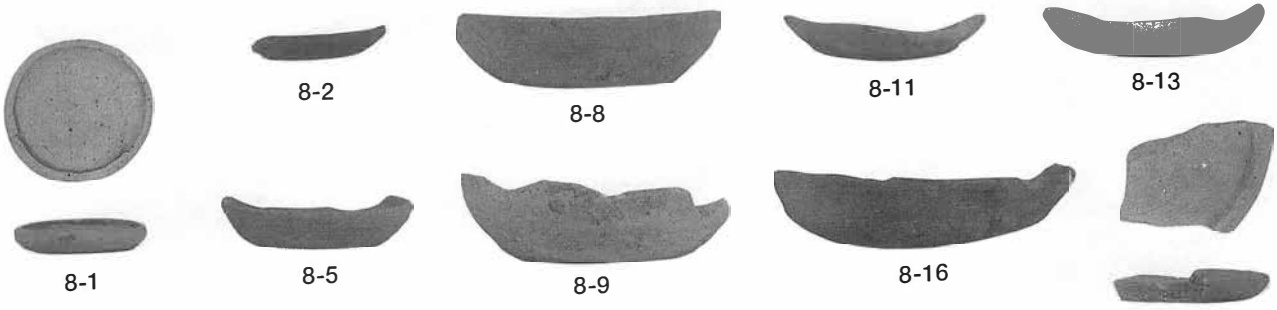
図版2

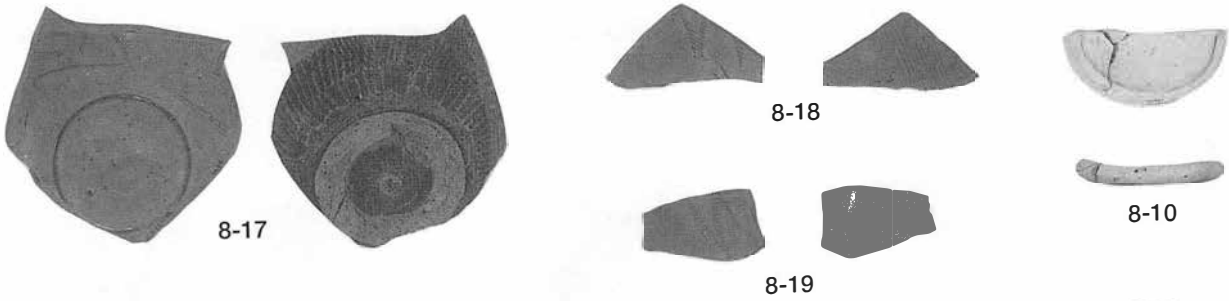


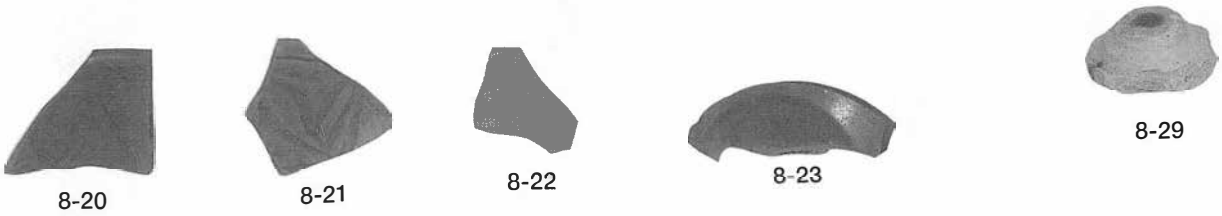
◀a 溝2構築材出土状況（東から）

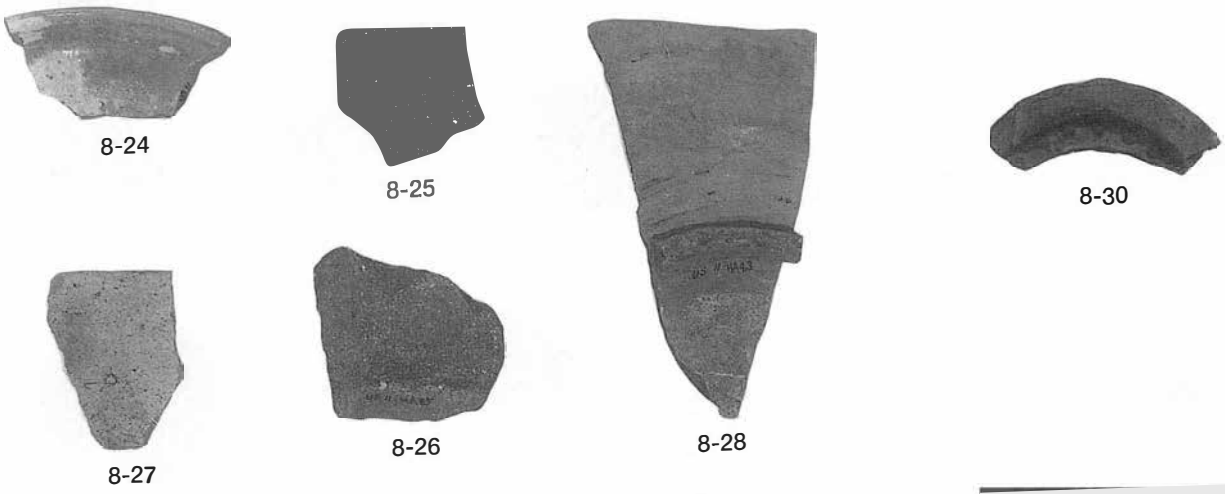
▶b 溝2（北から）

◀c 調査区北壁土層堆積（南から）


8-2
8-8
8-11
8-13
8-1
8-5
8-9
8-16
8-14


8-17
8-18
8-10
8-19

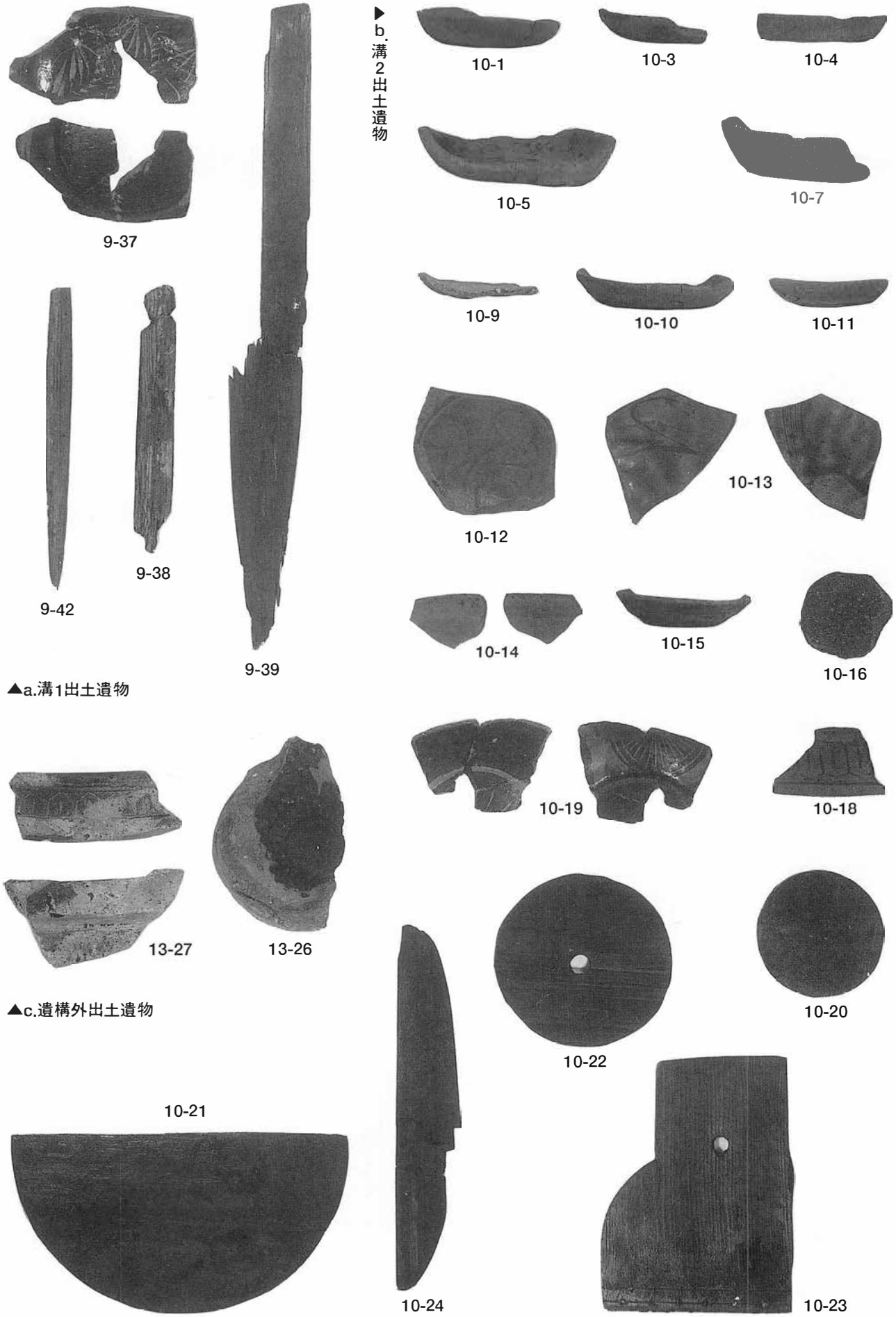

8-29
8-20
8-21
8-22
8-23


8-24
8-25
8-30
8-27
8-26
8-28

8-36
8-34
8-33
8-32

▲a.溝1出土遺物

図版4


9-37
9-42
9-38
9-39
▲a.溝1出土遺物
▶b.溝2出土遺物
10-1
10-3
10-4
10-5
10-7
10-9
10-10
10-11
10-12
10-13
10-14
10-15
10-16
10-19
10-18
13-27
13-26
▲c.遺構外出土遺物
10-20
10-22
10-21
10-24
10-23

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　13（第2分冊）
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　13（第2分冊）
シリーズ番号	13
編著者名	原　廣志
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うつのみやずし ばくふあと 宇都宮辻子幕府跡	かながわけん かまくらしこまち 神奈川県 鎌倉市小町 二丁目361番1	204	239			1996 2．15 ～ 1996 4．04	30	自己用住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇都宮辻子 幕府跡	官衙	鎌倉時代 ～ 室町時代 ・ 江戸時代	中世 土壙　10 溝　3 柱穴列　1 柱穴　10 近世 井戸　1 畦土留め　1	中世 かわらけ 常滑窯製品 瀬戸窯製品 渥美窯製品 青磁　白磁 土製品　木製品 銅製品　鉄製品等 近世 肥前窯系製品 瀬戸窯製品 木製品等	近世以降の削平が著しいが、調査区西側で現若宮大路に平行した中世大路東側溝を発見した。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　13

平成８年度　発掘調査報告（第２分冊）

発 行 日　平成９年３月

編　　集
発　　行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　朝日オフセット印刷株式会社